
IS -インフィニット・ストラトス- 恋夢交響曲

キキョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトスー 恋夢交響曲

【Nコード】

N6201S

【作者名】

キキヨウ

【あらすじ】

少年と少女の夢、成長した二人はその夢をかなえるためにひたすら進んでいたはずだった・・・

ISの二次創作作品です。

小説初挑戦、なおかつ処女作、しかも独自解釈したうえでの設定などもりこんでますので、見苦しかったりしますが読んでいただけると嬉しいです。

プロローグ

「ねえ、君の夢ってなに？」

どんな経緯だったか忘れたけど、彼女がこう質問してきたのは覚えている。

「えっ・・・？」

その当時俺はまだ年端もいかない子供で、それでも「プロ野球選手になりたい！」とか「宇宙飛行士になる！」とか子供のうちにしか言えないような大層な夢も持っていなかった。

あれこれ悩んでるうちに彼女はどんどん不機嫌になっていき、「まだ考えてなかったの！？信じられない！！」と怒鳴りつけられてしまった。

今思えばなんで怒られなきゃいけなかったんだろうと思ったけど、彼女にとってはとても大切なことだったと思う。

「じゃあお前にはあるのかよ？」

「もちろんあるよ」

自慢げに胸をはる彼女の夢、その夢は当時の女の子なら大抵思いつくし、憧れる夢。

「世界一のIS操縦者になるの！」

というなんとも子供らしい夢だった。それでも何も夢がなかった俺にはとてもすごい夢だと思えてしまうほど彼女は輝いて見えたんだ。

IS・・・正式名称インフィニット・ストラトス、女性にしか使用できないマルチフォーム・スーツ。今の女尊男卑の世の中を生み出したともいえる兵器であり、男の俺にはまるで無縁の存在。

「じゃあ俺はどうしようかな・・・」

俺にはISの操縦者というのは無理な話だ、あらためていろいろ考えた。その時は集中してたから気付かなかったけどたぶん彼女はじれったかったんだと思う。しびれを切らしたのであろう彼女はとんでもないことを言い出した。

「じゃあ君の夢は私が決める！」

理不尽で自己中心的な彼女の発言、でも

「君は私に世界一のISを作って、で私がそのISで世界一の操縦者になるの！」

彼女の考えた俺の夢、その言葉がこのままだと平凡で終わったであろう俺の人生を、そして平和であったであろう俺の運命をも変えたんだ。

「プロローグ」(後書き)

読んでくださってありがとうございます

一応設定とか作ってはあるんですが主人公の名前が決まってません
(笑)

とりあえず一話までに考えなければ・・・

指摘、感想等あればよろしくお願いします

第1話　「変わってしまった生活」と「変わらない夢」

『・・・で、引越しのほうは終わったのかい？』

電話からきつめの声が聞こえてくる。ここ数年間いやというほど聞いてきた声、中学校の頃から専門の道へ進み始め、そこで知り合ったI Sの設計、開発を研究しているマリア・レイン博士の声である。

「はい、幼馴染にも手伝ってもらってますし、もうすぐ終わります」

『まあ、こんなことになったのも何かの縁だろうし・・・しっかりやんなよ』

「わかってますよ」

少し苦笑いしながら意思表示、確かにこうなったのは何かの運命なんだろう。正直その運命とやらは理不尽ではあるが。

『じゃあ私は次の開発計画についてのプレゼンやらで忙しいからそろそろ切るぞ』

「はい、先生もがんばってください」

『ほう、言うようになったじゃないか・・・またな』

電話が切れたのを確認し携帯を置く。先生も一応心配はしてくれてるんだなあ。

「電話終わったんでしょ、いつまで私一人に引越し作業やらせて

んのよ」

このぐちぐち文句をたれる女の子、幼馴染の塚乃旭つかのあさひに突っ込まれ、
そういえばまだ引越しの作業が中途半端だったことを思い出した。

「あゝ、悪い」

先生の気づかいをかみしめる暇もないまま、幼馴染の文句がいい加減うるさくなりそうなので本来は自分自身でやらなければならない作業に戻る。

「で、なんでIS学園に入ることになったわけ？」

旭の質問はもっともすぎる質問。本来、IS学園はISの操縦技術、知識を学ぶために女の子しか通えない、いわゆる女子校である。そんな男には無縁の花園に今期から俺、天加瀬奏羅あまかせそうらは入学することになってしまったのだ。

「奏君はISの設計者目指してるのは知ってるけどわざわざ全寮制のIS学園に入るとか私が奏君だったら3日でギブアップだよ」

「まあ・・・大変だろうなあ・・・」

女子校に男子が入る、簡単にいえば言葉が通じる異国に放り出されるようなものである。ストレスとかすっごい溜まって発狂しないだろうか・・・

「いや、男から見たらたぶん天国だから前向きに考えよう」

こういうときは前向きに考えるべきだ。前に入学した時のことを予

想してみたことがあるけど心が折れそうになった。

「大体そういうところに男子一人が放り込まれるんだからね、周りの女の子は『なにあいつ男子なのに女子校に一人混ざっちゃってんの、超きもい』っていわれるんじゃない？」

「いきなり現実味のある未来予想図をありがとう・・・」

どうやらこいつも俺と同じ予想である。

「お前が入ってくれば楽なんだけどなあ」

「私は私で進路希望してるんだから無理だよ」

こいつは女性であるのにまるでISに興味を示さない。一回理由を聞いてみたが「こういうのはレディがやるようなことじゃないの!」と言っていた。正直こいつをIS学園に放り込んだら大変なことになるだろう。

そうこうしてる間に旭は学園から送られてきた資料をあさり、時間割を引っ張り出していた。

「へー、やっぱIS関係の授業がメインなんだねえ・・・そういえば奏君は実技のほうには出るの？」

「いや、でれるわけないだろうが」

「ですよー」

嘘だ。俺は男だけどISを使うことができる、だからIS学園にわざわざ入学させられるのである。

いや、この言い方も正しくないのかもしれない。だって俺はある事件が起こるまで、ISを使うことができなかったのだから。

その事件は公式には発表されていない、いわゆるなかったことにされた事件。

俺とあの子の運命を変えた、あまり思い出さなくてもない事件。

俺が開発助手見習い、あの子がテストパイロットとして選ばれたあの計画があった。

『GV計画』

次世代型のISを研究する計画で、人の思念や脳波をエネルギーに換え、ISの動力として運用しようという計画である。

その適性検査にあの子が選ばれ、彼女のたつての願いで俺が開発助手見習いとしてこのチームに参加することになった。理論上は可能装置も完成に至り、実験も最終段階に移行、これが成功すれば、この計画、そして俺と彼女の夢の第一歩がはじまる。はずだった。

突如システムは暴走、彼女をシステムから切り離そうとするが間に合わず、実験室は光に包まれた。

研究所はくずれ、気付いた時には俺は瓦礫の隙間に挟まって何とか生きていた。でも自分のことはどうだって良かった。彼女の安否を確認しなければ。不思議と痛みは感じることはなく、今まで実験室だった場所へと進む。

そこに彼女はいなかった。

死体もなく、何も残されてはいない。あるのは実験の間彼女が使っていたISだけ。

言葉が出なかった。さっきまで手の届いていたものが急にどこかに行ってしまったのだから。追い打ちをかけるように運命は、そこから俺に悲しむ間も与えてくれなかった。研究所の崩壊が始まったのである。

俺は死を覚悟した。せめて死ぬなら彼女がいた場所で、そう思い彼女の I S に手を触れた。

彼女の声が聞こえた。

同時に I S が動き始める。俺は I S を装着し、無我夢中で外へと飛び出したんだ。

そこからのことは覚えてない。気がついたらどこかの病院のベッドの上だった。いろんな人がやってきて、いろんなことを俺に伝えた。助かったのは俺一人ということ、俺が I S を動かしたこと、国が俺を保護・監視の目的で I S 学園に入学させること、この事件を政府は発表しないこと、そして彼女の遺体だけ見つかっていないこと。

「どうしたの、難しい顔して？」

旭がニヤニヤしながら覗き込んできた。幼馴染だからだろう、こんな顔でも心配してくれてるのがわかる。

「いや、これから風呂とかトイレとかどうするんだろうなって」

「そんなどうでもいいことで悩まないでよね・・・」

少し呆れたように、そして少し安心したように旭がつっこむ。

「こう見えても前向きに生きてますから」

「まったく、能天気だよねえ・・・」

「最高のほめ言葉どうもありがとう・・・」

世の中はまもなく受験シーズンまっさかり、そろそろセンター試験や高校受験もはじまる頃。みんなが自分の夢のために前へ進む季節

「引越し祝いになんか食べに行くか」

「じゃあ奏君のおごりだからね」

「へいへい」

『夢をあきらめないで、私と君の夢』

彼女が言った言葉を胸に俺は夢に向かって歩いていこうと思う。

数ヵ月後、テレビでニュースを見てとてつもなく驚き、なおかつこれからの生活に少しだけ安堵するとは思ってなかったけど。

第1話 〽「変わってしまった生活」と「変わらない夢」〽（後書き）

読んでくださってありがとうございます

自分で書いてはなんですが

一話なのに最終回っぽい

まあ気のせいですよねぇ・・・

ご意見感想などいただけたらありがたいです

第2話 くイレギュラーとしてく

『天加瀬奏羅』これが俺の名前である。正直、自分でも珍しい名前だと思うし、事実そう言われる。

この15年間生きてきて、この名前を好きだったわけではないが、嫌いと思ったこともなかった。

しかし、

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします」

このときだけは、

「えっと、出席番号順で」

自分の名前、特に名字を恨めしいと思ったことはなかった。

IS学園、今日から俺が通い始める学校である。

ISとは現在、人間が使用できるおおよその物の中で上位に、大げさにいえば頂点に立つであろう存在。

そのISについてを学ぶため、未来を志すものが集まっているのがここ、IS学園である。

生まれてからつい今さっきに至るまで、こういったクラスで行う自己紹介は苦手というわけでもなく、まあ人並みに喋れていた。

そんな俺がなぜこんなにまで焦っているのか、答えは簡単。

この教室には男は二人しかいないのだから。

ISの定義として『女性にしか動かせない』という特徴がある。

それは理由もわかってなければ説明もされていないし、たぶん開発者から発表されることもないだろう。

だけど俺はある一軒以来、ISを動かせるようになってしまった。その数奇な運命に導かれ、ここIS学園という『女子校』に無理矢理に等しい形で入学させられたのである。

「じゃあ天加瀬奏羅君、自己紹介をおねがいできますか？」

名字が『あ』からはじまる俺は当然早い段階で自己紹介をしなければならなかった。

正直、今までにない状況なので何を言えいいのか迷ってしまう。平凡なことを言えがいいのであるが、状況が稀である。下手なことは言えない。

（ええい、ままよっ!!）

「えー、天加瀬奏羅です」

とりあえず自己紹介のテンプレートだけは伝えておかねば。そう思った瞬間に気づいてしまった。

周りが何かの期待を持ったまなざしで見つめていることに。

（うっ・・・なんてプレッシャー・・・）

しかしその『お前何かやれよ』という視線に答えることは正直できない。

「えっと、中学時代はISの設計・開発の道に進もうと専門学校に通っていました。ここでもっと深い知識を学べたらいいと思います。えっと・・・これから・・・よろしく・・・お願いします・・・」

「なんだテンプレかよ」と言わんばかりの視線に語尾のほうが小さくなってしまった。

そこまで期待されても俺は芸人ではないし、クラスに一人のお調子者のように目立ちたがりな性格なわけでもないのだが。

「ありがとうございます、これからよろしくお願いしますね」

少し気の弱そうな先生、副担任の山田真耶先生の言葉で俺は自己紹介から解放され、自分の席に着いた。

（はぁ・・・想像とは違ったけど、やっぱりきついなぁ・・・）

入学する前に男が女子校に通うということで、状況の想定をいくつか立てており、『なに女子校に男が入学してるの、きもい』という最悪なパターンではなかったものの、やはり周りが女の子だらけではどうも調子がくるってしまう。

そんなことを考えてるうちに、彼の番がやってきた。

「えー、えっと・・・織斑一夏です。よろしくお願いします」

『織斑一夏』

世界で初めてISを動かした男。

入学するちょっと前、いわゆる受験シーズンの頃、一人の男が女性しか動かせないはずであるISを動かしたとして世界的規模のニュースになった。

実際は俺のほうが先なのだが、そんなに言いふらされても困るし、

必要以上に言いふらすのもどうかと思う。
だが、彼の場合はどうやら状況が違ったらしく、その話は世界中を巻き込んでしまった。

しかしそんな彼も俺と同じ視線の攻撃を受けているらしい。しかも男子一番手の俺がクラスの期待に答えなかったので、彼は俺の時とは比べ物にならない脅威を感じているのだろう。

表情に現れるほど彼は言葉を頭の中で探しているのがわかる。

教室内の空気が固まってから数秒後、どうやら覚悟を決めたのか彼は息を吸い、そして

「以上です」

数人の女子がずっこけてしまった。素晴らしい芸人根性だ。なるほど、これぐらいやらないといけないのか。

しかし彼も彼で俺の自己紹介よりひどいものを繰り出しているのだ。これが漫画なら俺もずっこけていただろう。さらにはみんなの反応に戸惑ったであろう山田先生がすこし涙声になってしまっている。

まずい空気になってきた、そう思ったその時クラスのドアが開いた。

パアアン！

開いたドアから黒いスーツを着た教員が神速のごとく教室に入り、彼の頭を出席簿で叩いていた。

おそろおそろ彼が振り返る。そして

「げえっ！関羽！！」

また叩かれていた。周りが若干引いているのがわかる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

このやり取りは何かを狙っているのだろうか。

わかる人にしかわからないようなやり取りをするイレギュラーの男子生徒と黒スーツの女性教員は少しシュールな光景であった。

『織斑千冬』、それがこの女性の名前である。

元日本代表の彼女は世界最強のIS操者ともいまだ呼び声高い人物である。

実際彼女にあこがれる女性は多く、クラスの大半も半狂乱状態で沸き立っていた。

そして名前からわかるように、彼女は世界で初めてISを使った男、織斑一夏の肉親、どうやら姉らしい。

さらには担任としてこのクラスを受け持つという。

見た目からのきつそうなイメージはどうやら正解のようで、

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体にしみこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

とさながら新兵訓練ブートキャンプのようなことをいっていた。

「席に着け、馬鹿者」

有無をいわさぬその言葉に促され、黒板の前に突っ立っていた織斑一夏は退散するように席についた。

そして黒板の前が開くとともにさっそく一時間目『ISの基礎理論』

の授業が始まる。

どうやら自己紹介はア行で終わりらしい。

これから前途多難かもしれない、そんなことを思いながら俺は教科書を広げた。

第2話 くイレギュラーとしてく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

一応オリジナルの展開を盛り込んでいたりしますが、基本は原作にそって進んでいこうと思います。

ご意見ご感想などお待ちしてます。

第3話 〈ファースト幼馴染〉

S H Rから授業までの嵐のような時間は終わり、今は休憩時間。

『I Sの基礎理論』は専門の勉強をしてきた俺にとっては特に問題のない授業だった。

（さてと、とりあえず織斑一夏に話しかけてみるか）

しつこいようだがここは女子校だ。女友達ばかり作るという選択肢もあるが、やはりこういう境遇の理解者がいてほしいという願いは強い。

いわゆる旅は道連れというやつである。女尊男卑の世の中、しかも今のさらに立場の悪い状況下、味方が一人いてくれるのはとても心強い。

俺は席を立つと周りの女子の視線に気付かないふりをしながら歩を進めた。

遠目から彼の顔を見ると、やはり周りの視線が気になるのであろう。ものすごく切羽詰まった表情だった。

「えっと、織斑一夏……であってるよね？」

俺が話しかけた途端に彼の表情が一変、ものすごく安堵した表情になる。

「おう、あってるぞ。えっと、天加瀬……奏羅だっけ？」

「ああ、あってる」

「いやー、話しかけてくれてありがとな。正直この状況、だいぶキ

ツくてさあ・・・」

苦笑しながらも同意する。ここまで人の、しかも異性の視線を浴びたのは生まれて初めてだし、人の視線をこれほど苦痛に思ったのも生まれて初めてだ。

「改めて自己紹介するよ。俺は天加瀬奏羅、よろしく」

「おう、俺は織斑一夏だ、一夏でいい。男子は俺たち二人だけだし、仲良くやっていこうぜ」

「そういつてくれるのはありがたいな。ああ、俺も奏羅でいいよ」

よかった、これでこれからのことを考えても少しは気が楽になったと、一夏が旅の道連れになったことを喜んでいると、

「・・・ちよつといいか？」

突然、誰かに話しかけられた。振り向くと白いリボンが特徴的なポニーテールの女の子が立っていた。

「・・・箒？」

どうやら一夏の知り合いらしい。教室では話しづらいのか、彼女は「廊下でいいか？」と尋ね、二人で廊下へ出て行った。クラスメイトは彼らが話している内容に興味津々の様子。まったく、女性は噂話が大好きっていうのはどこも同じなんだな。

・・・俺もあいつらが何話してるか聞きたいので文句は言えないが。

しばらくして二人は教室に入ってきた。
とりあえず素直に疑問をぶつけてみる。

「一夏、この子とどんな関係なんだ？」

「あー、こいつは小学校の頃の幼馴染なんだよ」

なるほど、俺でいう旭みたいな存在か。もっとも、目の前の凜とした女の子の性格と俺をからかってニヤつく旭の性格は絶対に似てはいないだろうが。

「えっと・・・」

彼女を見ながらあることを思い出す。SHRでの自己紹介で彼女の番は回っていない。つまり、今俺は彼女の名字がわからず、『箒』という名前しか情報を持っていない。

さすがに初対面で下の名前だけで呼ぶというのも失礼だ。どう呼んでいいかわからず、そこからの言葉に詰まってしまった。

「・・・篠ノ之箒だ」

どうやら俺の意図を汲んでくれたらしい。彼女から自己紹介をしてくれた。

「ありがとう篠ノ之さん。俺は天加瀬奏羅、よろしく」

「ああ、よろしく」

彼女の名前・・・いや気のせいだろう。第一、いきなりそういう質問をして、向こうは俺のことをずうずうしい奴だと思うかもしれない

い。

しかしこれで話せる人が増えた。下手をしたら三年間話せる相手が一夏だけだったかもしれないので、この出会いはラッキーだった。しばらく三人で話しているうちに授業開始の合図になる。いままで騒がしかった教室が静かになっていく。まああんな音を立てる威力の出席簿で頭を叩かれたくはないだろう。

その噂の鬼教官はと言うと

パアアン！

「とっとと席に着け、織斑」

また自分の身内の頭を叩いていた。

第3話 くファースト幼馴染く（後書き）

読んでくださってどうもありがとうございます。

今回は筈との出会いの話なのですが、思ったより短くなってしまいました。

かといって次の話と一緒にするのもどうかと思うのでこのままでもいいかなと。

いつになったらオリジナルのISをだせるのか・・・

一応設定はつくってありますんであとは進行すれば・・・ですね。

ご意見ご感想をおまちしております。

第4話　〈代表候補生、襲来〉

「一夏さあ・・・よく体張ってあんなボケをかまそうと思うよな。なんなの？殴りたいの？」

二時間目が終わり休憩時間、俺は一夏にさっきの授業での出来事につつこみを入れていた。

事の発端は二時間目の授業のこと。

一夏は授業のすべてがわからなかった。まあ、いままで平凡な学生だった一夏が、周りのISについてしっかりと学んできた人たちと違うのはわかる。しかし、問題はそこではなかった。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだのか？」

という鬼教官・織斑千冬先生の質問に一夏は、

「古い電話帳と間違えて捨てました」

と答えたのである。もちろん出席簿で頭を叩かれていた。

「狙ったわけじゃねーよ・・・」

と一夏。俺には確信犯にしか思えないのだが。

「そういえば奏羅ってこういう授業は大体わかるんだよね？」

「まあ一応、ISの設計者目指してるからな」

このくらいわからなかったら専門学校時代の俺は何もやってないことになるだろう。

「じゃあ、俺に勉強を教えてくれよ」

「いいけど・・・俺は理論的なことくらいしか無理だぞ。操縦に関しては素人レベルのお前と同じくらいだ」

「いや、それだけでいい。頼む」

まあ断るのも可哀想な気もするので

「今度なんかおごってくれるなら」

この提案に一夏は同意、交渉は成立した。

「とりあえず寮の部屋はわからないから、まずは何時頃やるかだけど・・・」

と話を進めっていると、

「ちょっと、よろしくて？」

という声がした。

なんとなくデジャヴみたいなものを感じながら声のほうを振り向く。そこには篠ノ之さんとは見た目が正反対の女の子、金髪で縦ロールのいかにも外国のお嬢様といった子が立っていた。

ここIS学園は世界で唯一のISについて学べる学園であるため、多国籍の生徒、いわゆる留学生を受け入れている。実際クラスの生徒の半分ぐらいは日本人で、その他の生徒は外国からの留学生であ

る。

おそらく彼女もその一人なのだろう。

「お二人とも訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど・・・どういう要件だ？」

一夏が答えると彼女はわざとらしく、

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

と言い放ち、俺と一夏は呆気にとられてしまった。

「えっと・・・君ってそんなに偉い人なのか？」

と尋ねてみる。自己紹介で見たような見てないような気がするが、とりあえず覚えてはいなかったし、今回は一夏の知り合いというわけでもないで彼も同じく知らないようだった。

すると彼女はこの問いが気に入らなかったのか馬鹿にしたような口調で、

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

と言ってきた。俺は国が保護・監視目的でこの学園に入れたので入試を受けておらず、どんな入試なのかはまるで知らないのだが、彼女は入試主席ということなので、どうやら学年のなかでは頭一つ出ている存在なのだろう。

「あ、質問いいか？」

と一夏。脈絡がなさすぎるだろうとつつこもう思ったが黙っておく。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生ってなんだ？」

この言葉に聞き耳を立てていたであろう女子数名がずっこけた。まったく、賞賛に値する芸人根性だよ。まあ、この状況でこの質問を出せる一夏も一夏だが。

「あ、あ、あ・・・あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

オルコットさん、今日初めて会った俺でもわかる。こいつはマジだ。

「おう。知らん」

案の定の答えだった。とりあえずドヤ顔をやめろと思ったが、やっぱりつつこむのはやめておく。

「・・・・・・・・」

オルコットさんかというと、怒りを通り越してあきれてしまったらしい。ぶつぶつとなにかつぶやいている。

「奏羅、代表候補生って？」

オルコットさんからの答えが期待できないと思ったのか、一夏は俺に聞いてきた。

「まあ単語通りの意味で、国家代表のIS操縦者ってこと。ま、いわゆるエリート見習いだな」

「そういわれれば・・・なるほど・・・」

どうやら納得してくれたようだ。

「違いますわ! 『エリート』なのですわ!」

会話に復活する代表候補生。俺に向けた人差し指が、鼻にあたりそうだった。

しかも俺の言った『エリート見習い』をしっかりと『エリート』と強調して言い直している。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実を少しは理解していただけの?」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・お前って世渡り下手なのか?」

どう考えても馬鹿にしているような答えに思わずつつこんでしまった。「そんなことねえよ」と一夏は言うが、今朝からのお前を見ているとそんなことないわけはないと思うんだが。

思った通りだが一夏の返事は彼女の気に障ったらしい。

「・・・馬鹿にしていますの？」

とものすごい剣幕で俺たちを睨んでいた。

「だいたい、そちらのあなたはISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。世界で初めてISを使用した男と聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせると思いましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

そこは俺も同意しておこう。俺たちはそんなに万能ではない。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「いや、今までのやり取りはどう考えても一夏に厳しい気がするがなあ」

彼女の矛盾した発言に思わずつつこんでしまう。「しまった・・・！」と思いつつおそろおそろ彼女のほうを見ると、案の定俺をすごい目つきで睨みつけていた。俺も一夏のことを言える立場じゃないな・・・

「あなたも、どうやら過去にISについての専門知識を学んでいたようですが、そんな知識などここ、IS学園では当たり前前の知識ですわ！ あまり調子に乗らないことですわね」

なんかだんだん面倒なことになってきたぞ・・・俺としては3年間トラブル無しで乗り切りたかったんだけどなあ・・・

「あなたがISのことでわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

入試ってそんなことをやったのか・・・てっきりペーパーテストかなにかかと思っていた。

適正なんか見るためだとすると、後々俺も適性テストみたいなものがあるかもしれない。そう考えていると一夏が、

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

と予想外なことを言い出した。これにはオルコットさんも驚いたように、目を見開きながら、

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

と聞き返した。

「女子だけってオチじゃないか？」

ピシッ。という音が聞こえた気がする。いわゆる彼女が石になったってやつだ。

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・？」

「いや、知らないけど」

見た目でわかるくらい彼女は相当焦っていた。

「あ、あなたはなんですか!？」

今度は俺に向かって訪ねてくる。正直に言うと、俺は入試を受けていないのだが、彼女の反応がちょっとおもしろかったので、

「ああ、俺も倒したよ」

と嘘をついた。どうやらこの答えは効果抜群だったらしい。彼女は文字通り、開いた口がふさがっていなかった。

「ほんと!? ほんとなんですの!？」

「うん、まあ。たぶん」

と適当に返しておく。どうやら彼女はだいぶ不安なようで、

「たぶん!? たぶんってどういう意味かしら!？」

と相当焦っていた。

「えーと、落ちつけよ。なっ？」

一夏がなだめに入るが、全然おさまる様子 wasn't。そろそろなにかしなければ。目の前の状況をどうするか、嘘をついてしまった負い目からいろいろ考えていると三時間目がはじまるチャイムに助けられる。

「っ・・・! また後で来ますわ! 逃げないことね! よくって!？」

彼女の剣幕におされうなずいてしまう俺と一夏。正直よくはないのだが。

とりあえず、彼女よりも恐ろしい織斑先生が教室に入ってくる前に席に着かなければ。

しかし次の休み時間のことを考えるとどうも授業に集中できる気がしなかった。

第4話　く代表候補生、襲来く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回の話を書いていて、箒とセシリアの登場シーンが似通ってるの
にいまさらながら気付きました。

要点だけかいつまんで書いているはずなんですが、主人公機の登場
はまだまだ先のようです。

ご意見ご感想をおまちしております。

第5話 〈英国お嬢様VS設計者見習い〉

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

教壇で織斑先生がそういった。今までの授業は、副担任である山田先生が行っていたのだが、今回の授業は織斑先生がメインで行う授業らしい。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

と思い出したように織斑先生が言った。

どうやらクラスの代表者を決め、クラス同士の対抗戦に出場して向上心を高めること。さらにその代表者は、生徒会の開く会議や委員会の出席など、いわゆるクラス委員長の仕事も兼任しているらしい。クラス対抗戦に出るだけでなく、委員長の仕事があるのか・・・さすがにめんどくさいなあ・・・

ざわざわとクラスが騒がしくなる。一夏にいたってはよくわかってないようだった。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

そんな中でクラスの一人が一夏を推薦する。

「では候補者は織斑一夏・・・他に誰かいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

これはまずい雰囲気になってきた・・・一夏が選ばれたのは男子だ

からという面白半分の推薦だ。つまり、

「はいっ。私は天加瀬くんを推薦しまーす！」

案の定俺も推薦される。みんな無責任だなあ・・・

しかし俺もさすがに委員長みたいな仕事はパスだ。なので、

「はい。俺は一夏を推薦します」

推薦されたもの同士なので譲るという意味で一夏を推薦しておく。
こういったときは先手を取っておかなければ。

「お、俺!？」

どうやら俺が推薦するのは予想外だったらしい。一夏は驚いて立ち
上がってしまった。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、二人以外にいないのか？ いな
いなら天加瀬からも推薦されている織斑にやってもらう」

「ちよっ、ちよっと待った！ 俺はそんなのやらない」

そこまで言って一夏は織斑先生に言葉が続けることを許さなかった。

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。
選ばれた以上は覚悟をしろ」

かなり厳しいお言葉である。まあ俺はもう関係ない。

「お前もだ、天加瀬」

どうやら俺も見逃してくれないらしい。誰だよ、最初に推薦したの・
・
そんな中一人の女子が声をあげた。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

勢いよく机を叩き立ち上がるその子は、先ほどの時間でつかかかって来たセシリア・オルコットさんであった。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

どうやら彼女は、俺たちが選ばれて自分が選ばなかったのが気に食わないらしい。まあ俺としては、やってくれるのはありがたいが。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

猿呼ばわりは少しひどい気がするがとりあえず黙っておく。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

どんどん白熱するオルコットさん。それは収まることなくさらにヒートアップしていった。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

そこまで言った時、たぶん我慢できなくなったであろう一夏が、

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

と思わず口にしてしまった。

一夏はしまったという顔をしている。やはり彼の言葉は彼女の琴線に触れたようで、

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

とさらに熱を上げていく。

これはまずい事態になって来た。

「ま、まあまあ落ち着いて。オルコットさんだって俺らの国を馬鹿にしてたんだし、これでおあいこってことでいいだろ、なっ？」

とこれ以上ヒートアップしないように止めに入る。しかし、

「邪魔しないでくださる！？ 大体あなただってこんな国の出身のくせにISの設計者になれるとでも思いなの！？」

とまるで聞く耳を持っていない。

「わかった、わかったから落ち着いて！」

俺はオルコットさんの言葉に少しイラつきながらもなだめようとし

た。

「いつ頃から設計者を目指しているのか知りませんが、無駄な努力ですわ！ 貴方達極東の猿が、そんなこと望むだけ無駄ね！」

しかし、俺の、彼女の夢を否定する言葉を聞いた瞬間、俺の中で綱の様に太かった何かが切れた。

バツン！

音に例えるとそんな音。

「お前にそんなこと言われる筋合いはない！！！」

今まで下手に出ていたせいか、俺がいきなり大声をあげたので彼女を含めたクラスみんなは驚いていた。

「大体こんな後進的な国で暮らすのがいやならこの学園に来なければよかったじゃないか！ イギリスでだってISの技術くらい学べるだろう！ まずい飯でも食べながらISについて先進的な文化の中で学べばいい！」

「い、い、い、言いましたわね！！！」

周りがいぶ引いてるような気がする。先に喧嘩を売った一夏ですら引いていたが今は周りを気にする余裕はない。

「ああ、こんなことでいいなら何でも言ってやるよ！ 大体英国貴族のくせにnobleesse obligeって言葉知らないのか！？ 君からは全然感じられないぞ！」

そして、彼女の怒りは頂点に達したのであろう。机を思いっきり叩いた後、

「決闘ですわ!!」

と言い放った。

「望むところだ! 手袋でも投げつければいいのか!？」

もちろん受けて立つに決まっている。俺の、彼女の夢を馬鹿にされてこのまま引き下がる気は毛頭なかった。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い、いえ、奴隷にしますわよ?」

「大丈夫だ。徹底的にやる気でいるから安心しろ」

そんな心配をされても、あんなこといわれて手を抜く気は最初からない。

「そう? 何にせよちょうどいい機会ですわ。イギリスの代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね!」

にらみ合う俺たち。そんな中、一夏が彼女にこう尋ねた。

「ちょっといいか? ちなみにどれくらいハンデをつけるんだ?」

「あら、それはあなたじゃなくこの方がお願いすることじゃないか

しら？」

「えっ？ いや、奏羅がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

一夏がそういった瞬間、クラスに爆笑が巻き起こった。

まあ予想はしていたが、女尊男卑の世の中である。俺たち男の立場は極端に悪いのだ。女性は潜在的にISを使える時点で立場が強いのだから。

「いや、ハンデはいらない。正々堂々イーブンでやろう」

この俺の言葉に彼女は、

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデをつけなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

と明らかな嘲笑を感じさせる笑みを浮かべていた。

「ねー、天加瀬君。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデをつけてもらったら？」

ちやうど近くにいた女の子が気さくに話しかけてくる。しかし、その表情はあきらかに苦笑のような失笑のような顔で、俺は余計ムキになってしまった。

「いや、構わない。問題はない」

「えー？ 代表候補生を舐めすぎだよ。それとも知らないの？」

「いや、それくらいなら何度も見てきた」

事実、俺は彼女が使うI Sを何度も間近で見してきたし、代表候補生の実力は知っているつもりだ。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、天加瀬、オルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

「ちよっ！ 千冬姉、俺も！？」

と抗議する一夏。しかしその抗議もむなしく、

「授業の邪魔をするな。それに織斑先生だ」

とまた出席簿で頭を叩かれていた。

第5話 〈英国お嬢様VS設計者見習い〉（後書き）

読んでくださりどうもありがとうございます。

今回の文章を書きながら、主人公のキャラがぶれてないか心配になっていました。

しかしセシリアの口調って難しいですね・・・

これからオリジナルの話を書くときにおかしくならないことを祈ります。

ご意見ご感想をおまちしております。

第6話 〈奏羅の災難、一夏の災難〉

「うう・・・」

放課後、一夏は机に突っ伏してうめき声をあげていた。どうやら三時間目以降の授業もあまり理解できなかったらしい。

「い、意味がわからん・・・。どうしてこんなにややこしいんだ・・・」

「ま、まあ、俺も今度手伝ってやるんだからなんとかなるさ」

少なからず一夏にフォローを入れる。結構な専門用語だらけだから前々からやってないと理解はできないだろう。

「しかし・・・」

そう言いながら顔をあげ、周りを見渡す。周りには少し距離を置いた位置で、俺たちを見ながら、何事か小声で喋っている。

「勘弁してほしいよなあ・・・」

俺の言葉の後を一夏が続ける。この状況は放課後だけというわけではなく、授業の合間の休憩時間や、昼休みの間でも続いていた。昼休みはことさらにひどく、あろうことか学食に移動する俺たちの後を、大多数の女子がぞろぞろとついて来て、学食の中では、混んでいるようが、俺と一夏が進むとそこに道ができるという状態だった。歩いていくとさっと人が避け、道ができる事に、少し感動したのは内緒だが。

「ああ、織斑君に天加瀬君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

声のほうを向くと、そこには書類を片手に持った山田先生が教室に入ってきたところだった。

「えっとですね、お二人の寮の部屋が決まりました」

実は、ここIS学園は全寮制で、生徒は全員寮で生活することが義務付けられている。これは、IS操縦者を保護する目的も兼ねているため、休みに入るまでは寮で学校の日々を過ごすのだ。

「俺たちの部屋って決まっていんじゃないかなかったですか？ 前に聞いた話だと、俺の場合は一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

確かに一夏の言うとおりだ。かくいう俺も、一週間は自宅からと聞いていた。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいんです。・・・お二人とも、そのあたりのことって政府から聞いています？」

最後のあたりは俺たち二人にしか聞こえないように尋ねてくる。しかし俺も一夏も心当たりはなく、その処置にしたがうことにした。

「そう言うわけで、政府特例もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。個室一つと、相部屋一つなので、二人で相談して決めてくださいね」

山田先生、そこは耳打ちしなくてもいいと思うのだが。正直言ってなんか息が当たってか、耳がくすぐったい。

「・・・あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが・・・」

我慢できなくなったのか、一夏がつつこむ。さっきから俺たちと山田先生の距離が近かったせいかな、周りの女子達が興味津々の様子だった。

「あっ、いやっ、これはそのっ、別にわざととかではなくてですねっ・・・！」

と少しパニックになっている先生。朝からこの人を見る限り、ドジで天然な所があるのだろう。

「いや、わかってますけど・・・。それで、部屋は分かりましたけど、荷物はいったん帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

と一夏が尋ねる。俺も今日は帰るつもりだったので、荷物を持ち出してはいないし、まとめてもない。

「あ、いえ、お二人の荷物なら」

「織斑の荷物なら私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

山田先生が言い終わる前に、織斑先生が説明をした。あれ、じゃあ俺の荷物は？

「天加瀬の荷物はお前の身内に持ってきてもらった」

おかしい。俺の両親は中学時代に、交通事故で亡くなっている。親の遺してくれたお金で、専門学校を卒業し、今は国の生活保護などの援助を受けながらIS学園に通っている身だ。いったい誰が・・・
と思いながら、織斑先生の方を見やると、

「やっほー」

「げっ・・・旭・・・」

してやったりという顔をしている俺の幼馴染が織斑先生の後ろから出てきていた。

誰あれ？ 天加瀬君の妹？ 彼女？ など女子が噂をし始める。
やめてくれ、あいつは断じて俺の彼女ではない。

「お、お前、なんでここにいる！？ いや、ていいうかなんで入れた
！？」

IS学園には機密事項の塊が多数存在するので、めったに人は入れないはずなのだが。

「お前の荷物をまとめるために一役買ってくれたからな。それにここまで荷物を運ぶのを手伝ってもらった。なに、私の判断だ。問題はない」

と答える織斑先生。その言葉通り、旭の腕には入場許可書ともいえる腕章が巻かれていた。確かにこの人が白と言えば、黒も白に変わる気がする。はぁ・・・なんかもう考えるのがめんどくさくなって

きた。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は6時から7時、寮の一年生用の食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシヤワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間は違いますけど・・・えっと、その、お二人はまだ使えません」

「え、なんでですか？」

相変わらずこいつはどこか抜けているような気がする・・・少し考えればわからないのだろうか。

「お前なあ・・・女子と風呂に入りたいのか？」

と俺がつっこむ。

「あー・・・」

今更ながら気付いたのかよ・・・ここには俺らしか男がいなかったぞ・・・。

そしてそんな一夏の答えに山田先生の想像、いや妄想がだんだん激しくなっていく。「女子と一緒に入りたいんですか!？」と尋ねて、一夏がNOと答えると、今度は「女の子に興味がないんですか!？」と斜め上の方向に進んでいき、周りの女子もそれにつられて、「織斑君、男にしか興味ないのかしら・・・?」やら、「それもそれで・・・いいかも・・・」やら、「織斑君と天加瀬君って・・・もしかして・・・?」とか、さらに変な方向に飛躍していった。

「あははは・・・奏君もいろいろと大変なんだねえ・・・」

俺に至っては、いつもからかわれる旭に同情されていた。なんかだんだんこの場に居たくない気分になってくる。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ。身内の方も、荷物を運び終わったら、できるだけ早く学園から出てくださいね」

山田先生、同じ学園内なのに道草もないと思うんですが・・・
教室から出ていく二人を見送った後、旭を含む俺たちは、寮へと向かった。



「で、この子って天加瀬の兄妹きょうだいなのか？」

寮へと向かう道、一夏は俺と旭の関係について尋ねてきた。

「いや違うぞ。こいつは、」

そこまでいった後、

「一万二千年前から隣に住むことを誓った、永遠の隣人なんだよ」

と旭の根拠などひとつかけらもないたとえで遮られてしまった。

「まあ・・・ようは幼馴染だ」

「なるほど・・・ていうかおもしろいたとえだな」

まあこんな言い回しをするやつは珍しいだろうな。

そんな感じで他愛もないこと話しているうちに、寮の前に着いていた。

「じゃあ私は帰るから、足りないものとかあったら自分で取りに帰ってね」

「お前が荷造りしたんだから、お前が責任とって持ってきてくれよ」

しかしこの言葉に、旭は珍しく困ったような顔をしながら、

「あー・・・ そうしたいのはやまやまなんだけど、私最近忙しくて・・・ 今日は珍しくオフの日だったんだよね」

と答えた。

「まあ、都合が悪いなら仕方ないけど・・・」

旭にも用事があるのはわかるので、追求するのはやめておく。

「じゃあ、奏君も、一夏君も、がんばってね」

いつもの口調で、手をひらひらせながら旭はさっさと帰ってしまった。

旭が帰ったことで、俺は今まで放置していたある問題を会話に取り

上げる。

「さて、一夏。俺たちには一つ問題がある。」

「ああ・・・わかつている」

どうやら一夏も気付いていたらしいこの問題。

「どっちが、女子と、相部屋に、なるかだ」

そしてその決定方法は至極簡単、

「じゃんけんで決めるぞ！」

「いいぜ、奏羅。かかってこい！」

そう、これはこの一カ月の平和を手に入れるための戦い。

「「最初はグー・・・ジャン、ケン、ホイ！」」

結果・・・俺はグー、一夏はチョキ。

「じゃあな、一夏。がんばれよ」

勝者の俺は、放心状態の一夏にむかって『1025』と書かれた鍵を投げ渡し、意気揚々と自分の部屋である、『1026』の部屋へと向かった。



「ここが俺の部屋か・・・」

さっぱりした大きい個室、どうやら二人部屋の大きさなのだが、ベッドが足りないのだろう。横にかなりのスペースが空いていた。ため息混じりの息を吐きながらベッドに座り、荷物を確認する。携帯電話の充電器や、設計のためによく使うパソコンなど、俺の必要なものはあらかた入っていた。

「まったく完璧だな旭のやつ・・・今度なんかおごってやるか・・・」

俺の事を理解してくれている幼馴染に感謝しながら、しばらく荷物を整理していると、隣の、そう一夏の部屋からズドンというものすごい音が聞こえてきた。

「な、なんだ、なんだ？」

予想外の出来事に動揺しながら、隣の部屋の壁をみる。ほどなくして二発目のズドンが聞こえてきた。

これは何か大変なことが起こっていると思い、部屋を出ると、すでに一夏の部屋の前に人だかりができていた。

「・・・箒、箒さん、部屋に入れてください。すぐに。まずいことになるので。というか謝るので。頼みます。頼む。この通り」

とたぶん部屋から閉め出されたのであろう一夏が頭の上で合掌していた。なんかあまり関わっちゃいけないという危機感を感じたので、できるだけ遠目で見ていることにする。一夏の言葉から推測するに、どうやら、ルームメイトは篠ノ之さんらしい。まあなにかやって怒らせてしまったのだろう。

しばらくすると、部屋のドアが開き、剣道着姿の篠ノ之さんが部屋から出てきた。どうやら、一件落着のようだ。

俺は自分の部屋に戻ると、パソコンを開き、メールのチェックなどを行う作業をしながら、今日のことを思い出していた。

「入学初日から、なんか大変な一日だったな・・・一夏に会うし、鬼教官とドジな先生にも会うし、篠ノ之さんにも会うし、旭がここに来るし・・・」

あれ、なんか一つ忘れているような・・・
あっ、思い出した。

「オルコットさんと・・・決闘・・・」

あの時、俺がいくら頭にきてたとは言え、なんで決闘なんか受けたのだろう・・・。できるだけ平穏に暮らしたかった俺の希望とは逆に、どんどん厄介事が増えていく現状。

俺は、自分のこれからの事に軽く絶望しながら、荷物の整理を行うのであった。

しばらくして、一夏の部屋から、爆発音とも打撃音ともいえるような音が聞こえてきたが、もう気にしないことにした。

第6話 〈奏羅の災難、一夏の災難〉（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

主人公の幼馴染の旭ですが、彼女はI S学園に通ってないので、動かすのに結構制限がかかっているのがちょっともどかしいです。まあ自分で作った設定ですし、学園に通わせる気はこれからのないんですけどね。

ご意見・ご感想をおまちしております。

第7話 〈篠ノ之さんの家庭の事情〉

シャワーを浴び、夕食を食べた後、俺は携帯を使って、自分の師でもあるマリア・レイン博士に電話をかけていた。

『で・・・決闘を引き受けてしまったと』

「はい・・・」

俺は先生に今日あった出来事について相談に乗ってもらっている。

『まったく、自分の夢を馬鹿にされたら、目の前が見えなくなるっていう欠点、まだ直してなかったのか・・・』

電話越しにため息が聞こえる。

専門学校時代にも、この欠点で無駄ないざこざを起こすことが多い、先生に戒められることが多かった。

「で、月曜日なんですけど、間に合いますかね？」

『安心しな、突貫作業で進めてやるから、完成は間に合う。後の細かい作業は自分でやれ』

よかった。前々から俺がプランを組んだ装備がどうやら間に合いそうだ。

正直これがないと、万が一も勝てなくなってしまうだろう。

「わかりました、では失礼します」

『ああ。私がお前のプランに依えて開発してやった装備なんだ、いい結果しか聞かないぞ。じゃあな』

通信が切れる。まったく、変なプレッシャーをかけてくれるのだから。

電気を豆電球に切り替え、ベッドの上に寝転んだ。そして右耳についていたイヤリングを外し眺める。

彼女の形見ともいえるIS・『プラチナ』。彼女ならこんなときどうしただろう・・・そんなことを考えながら、意識が遠のいていった。



「・・・・・・・・」

入学の翌日の朝八時、俺は、隣の部屋の住人、織斑一夏と篠ノ之箒の二人と食堂で楽しく朝食を食べて、

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

いなかった。

対面に座る隣部屋の二人は終始無言だった。どうやら、昨日一夏の

部屋から聞こえてきた、謎の爆発音のような打撃音に原因があるのだろう。

「なあ・・・」

「・・・・・・・・」

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

いったいこいつは何をやったのだろうか。よっぽどのことをやらなければ、こんなことにはならないはずである。

「・・・怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

そんなやり取りを対面から見ていた。篠ノ之さんも、もう少し聞く耳を持ってあげてもいいような気がするが、とぼっちは嫌なので黙っておく。

「箒、これうまいな」

「・・・・・・・・」

この二人は同じ和食セットを食べているので、そこから何とか会話を作ろうとした一夏だが、やっぱり相手にしてもらえない。一応、一夏の会話から、進められた物をつまんでいるので、どうやらそこそこ機嫌は元に戻ってきているようである。

ちなみに俺は朝はパンのほうが好きなので、洋食セットを選んだ。

「だから箸」

「な、名前で呼ぶなっ」

「・・・篠ノ之さん」

名前で呼ぶなと言ったはずなのだが、篠ノ之さんは名字で呼ばれるととたんに機嫌が悪くなった。なんか矛盾してる反応に笑いそうになる。

「・・・なんだ、天加瀬」

どうやら俺の表情が崩れそうになってしまっていたのか、こっちを睨んできた。

「いや、なんでもないぞ、篠ノ之さん」

俺は残っていたパンを口の中につっこんでそれ以上何もいわないことにした。でないと、後々怖そうである。

この後、俺と一夏は女子に囲まれてしまい、身動きが取れなくなっただころを、篠ノ之さんがさっさと教室に向かってしまったので、一夏は、休み時間になるまで、彼女と話ができなかったようだ。



「ねえねえ、天加瀬君、今日時間ある？」

「はいはい、天加瀬君質問！」

「今日お昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

先生二人が教室から出ると、昨日とは打って変わって、女の子たちが俺の周りを取り囲んだ。

どうやら一夏も同様なようで、周りの対応に困っていた。

「えっと・・・順番に言ってくれるかな・・・？」

しかし、すでにある一人の女子が有料で整理券を配っていた。おいおい、さすがにそれはぼったくりじゃないだろうか。しかし、そんな損しかないような整理券に、大半の女子がお金を払っていた。この子たちは将来、変なセールスに引かかるんじゃないのか・・・？

「休み時間は終わりだ。散れ」

いつのまにやら織斑先生が教室の中に入りっており、この騒動を言葉一つで鎮圧した。

さすがはみんなの鬼教官である。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

なるほど、いつもより早く来たのは一夏のＩＳについて説明しに来たのか。

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

すごいな、学園が直々に専用機を用意するのか・・・専用機が用意されるという話を聞き、周りもざわめき始める。しかし、当の本人はまるで理解していない様子だった。織斑先生は、そんな一夏にため息をつきながら、

「天加瀬・・・この馬鹿にわかりやすく教えてやれ」

と俺に説明を求めた。

「わかりました・・・一夏、お前にもわかりやすいように簡単に説明するからよく聞けよ」

「お、おう」

俺は一夏の返事を確認し、説明を始めた。

「いいか、ＩＳはいろんな国の人が使ってるのは知ってるよな？
だけど、ＩＳの心臓ともいえるコアの開発する技術は世界中のどの国も知らないんだ。簡単にいえば、ＩＳのコアの設計図がないってことだ。で、世界中にＩＳのコアは４６７個しかない。もちろん、設計図がないから増やすこともできない。しかも、唯一ＩＳコアを開発できる篠ノ之束博士は、これ以上の製作を拒否している。なので、それぞれの国や企業は、その数少ないコアを割り当てられて、

ISの研究をしているんだ。ここまではいいか？」

一夏は俺のここまでの説明を理解したのかうなづく。

「よし、続けるぞ。で、IS専用機っていうのはその数少ないコアを使って開発したISで、企業に雇われたテストパイロットや、国で適性が認められた代表候補生といった人間にしか与えられないんだ。つまり、お前はどの企業にも属してはいないし、代表候補生でもないのに、IS専用機が持てるという、異例の存在なんだ」

ここまでは俺も説明できる。問題は、なぜ、一夏に専用機が用意されるかだが、

「お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

その疑問には織斑先生が説明に補足を入れてくれたので、一夏に専用機が用意される事情がわかった。

どうやら、一夏もわかってくれたらしい。

ここで、一人の女の子が、織斑先生に質問をした。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なのでしょうか・・・？」

それは初日に俺が本人に聞けなかった疑問、『篠ノ之箒は、篠ノ之束の関係者なのか？』

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

織斑先生の言葉に、湧き上がる教室内。確かに俺も、ISの開発者

の妹が自分と同じクラスにいるというのは、予想してたとはいえ、驚きである。

この話題により、昼休みの俺と一夏のように、篠ノ之さんの周りに人だかりが出来ていた。

そして、篠ノ之博士のことや、篠ノ之さんについて質問をし始める。

「あれ？　　そういえば箒って・・・」

そう一夏が呟いた時、突然篠ノ之さんが「あの人は関係ない！」と大声をあげた。

俺と一夏、そして、篠ノ之さんの周りに集まっていた女の子たちは、予想外の出来事に呆気にとられていた。

「・・・大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って、篠ノ之さんは窓の外に顔を向けた。

どうやら、複雑な家庭の事情というやつらしい。

「さて、授業をはじめろぞ。山田先生、号令」

「は、はい」

どうやら、山田先生も気になるようだが、そこは先生としての職務を果たすようだ。

（まあ・・・聞くのは野暮か・・・）

そう思いながら俺は教科書を開いた。

第7話 〈篠ノ之さんの家庭の事情〉（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

やっど、主人公のISの名前だけでした（笑）

他の方の小説を読んだりするのですが、どうやら私はものすごくスローペースで物語を進めているようです。

まあ、『基本原作通りに進む』つもりなので原作に追いつくのもどうかと。

実質今のところ一日一話で進んでいますし・・・

あと、オリジナルキャラの設定やISの説明などもそろそろまとめようと思っています。

ご意見ご感想をおまちしております

第8話　〈特訓と恋心〉（前書き）

なんとなく今回から前書きも書いてみようかと思い、書いてみました。

普段小説は、夜書き始めて、投稿したらパソコンを閉じて布団に入りながら、携帯で読み直すんですが、大抵変な文章とかその時点で見つかってしまいます。

一応、パソコンで何度も読み直しながら書いてるんですが・・・ねえ・・・

起きる気力がないからそのまま寝ちゃってるんで、修正が翌日の夕方くらいに・・・

出来るだけ、投稿する時点で見つける努力をしようと思います。では、本編を。

第8話 〈特訓と恋心〉

授業が終わり、お昼休みのこと。昼ご飯に一夏を誘って、食堂にでも行こうかと考えていると、目の前にずっと金色の何かが立ちふさがった。

「あなた・・・まさかISをお持ちでないということはございませんわよね？」

それは、俺が月曜日に戦う女の子、セシリア・オルコットさんだった。

「大丈夫だ、俺のISはここにある」

俺は、彼女に分かるように、右耳のイヤリングを見せる。

「あなたにも専用のISがあるようで、安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

そう言いながら彼女は、腰に手をあてた。

彼女はよくこのポーズをとるのだが、イギリス貴族の基本姿勢かなのだろうか。

「まあ？ 一応勝負は見えていますけど？ さすがにフェアではありませんものね」

「まあ、予想はしていたけど、やっぱりあるんだな」

「あら？ 庶民の割には鋭いんですね。そう、このわたくし、セ

シリア・オルコットは代表候補生・・・あなたの予想通り、現時点で専用機を持っていますわ」

そう、彼女はなにはともあれイギリスの代表候補生だ。イギリスが開発した専用機を持っていないはずはない。

「へー」

いつの間にか俺の横にいた一夏が、間の抜けた声をあげた。いつからいたんだよ・・・ていうか、ここは俺とオルコットさんが火花を散らすところだぞ。空気読めよ。

「・・・あなた、わたくしを馬鹿にしていますの？」

「いや、すげーなと思ったただけだけど。どうすげーのかはわからないが」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うでしょう!？」

彼女は、バンッ！と俺の机を叩いた。その拍子に、まだしまっていなかった俺の教科書やノートが床に散乱する。なんで一夏が文句を言われているのに、俺がとぼちりを受けるのだろうか。

「・・・こほん。さっき授業の時間でこちらの庶民が説明なさったでしょう。世界でISは467機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類六十億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「世界人口って60億人超だったのか・・・」

「そこは重要ではないでしょう!？」

また俺の机が叩かれる。・・・どうもさっきから、一夏の貧乏くじを引いている気がする。

「そういえば、奏羅って専用機持ってるのか？」

ふと思いついたように、一夏が俺に質問をする。

「ああ、持ってるぞ」

先ほどと同じように、一夏にも俺のISを見せた。

「おお、すげえ!!」

さきほどのオルコットさんの時とは比べ物にならないほどの声をあげる一夏。お前・・・わざとだろ。

「あなた！ わたくしを本当に馬鹿にしていますの!？」

「いやー、お前もすごいぞー」

「だったらなぜわたくしの時だけ棒読みなのかしら・・・？」

大丈夫、あなたの予想は当たってますよ、オルコットさん。

「なんでだろうな、箒」

その言葉に篠ノ之さんは、ものすごい形相で一夏を睨んでいた。まったく、学習しない奴だ。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

次にオルコットさんは、名前が挙がった篠ノ之さんの方に会話の矛先を向けた。

「妹というだけだ」

彼女は、よっぽど篠ノ之博士の話をされるのが嫌なのか、オルコットさんが怯むほどのオーラを出しながら答える。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはこのわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

といい、オルコットさんは髪を手で払い、くるっと方向転換をして立ち去って行った。

・・・いちいちそれっぽい動きをとるのは、やっぱり何か英国貴族の儀礼みたいなことがあるのだろうか。



あの後、俺、一夏、篠ノ之さんの三人は学食にやってきていた。

先ほどの授業で、クラスから浮いてしまっていた篠ノ之さんをなんとかクラスに馴染ませようと、一夏は俺以外にもご飯に誘ったのだが、・・・まあ、ちょっとした夫婦喧嘩があり、蜘蛛の子を散らす

ように居なくなってしまった。

「箒、テーブルどっか空いてないか？」

「・・・・・・」

一夏の問いかけに、篠ノ之さんはダンマリを決め込んでいる。

「箒？」

「・・・・向こうが空いている」

一夏が掴んでいた手を払って、篠ノ之さんはスタスタと空いたテーブルへと歩いていく。

そのあとを俺と一夏がついて行った。

「そーいやさあ」

「・・・・なんだ」

一夏が思い出したように篠ノ之さんに話しかける。ちなみに俺と一夏が並んで座っており、一夏の対面の席に篠ノ之さんが座っている。

「I Sのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

なんか俺のことを言われているような気がする・・・・
どっちかと言うと、本格的に喧嘩を売ったのは俺だったし。

「それをなんとか、頼む」

と一夏が懇願する。しかし、彼女は黙々と自分の食事を続けながら、

「天加瀬に聞いたらどうだ」

と答えた。

「いや、俺はISの関連知識ならあるんだが、操縦に関しては一夏と同じく初心者だ」

「だってよ。だから、俺と天加瀬に操縦について教えてくれないか？」

しかし、一夏の願いは無視され、相変わらず自分の食事を黙々と続けている。

一夏が食い下がろうとした、その時、

「ねえ、君達って噂のコ達でしょ？」

突如、知らない人に話しかけられる。リボンを見る限り、どうやら三年生らしい。

「はあ、たぶん」

あまり自信がなさそうに、一夏が答える。どんな噂か知らないが、まあ有名なのは間違いないだろう。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけど、ほんと？」

「まあ、そうですけど」

嘘をつく意味はないので正直に答えると、ISの起動時間について聞かれた。

稼働時間については、一夏は20分、俺は・・・詳しくは覚えていないが、大体2時間くらいだろう。

「それじゃあ無理よ。ISって稼働時間がものをいうの。その対戦相手、代表候補生なんでしょ？　だったら軽く300時間はやっているわよ」

確かに、代表候補生に選ばれるくらいだ。そのくらいの稼働時間は普通にこえているだろう。

今のところ経験知の差で、オルコットさんが有利なのは明らかだ。

「でさ、私が教えてあげよっか？　ISについて」

と言って、ずずいっと身を寄せてくる。

どうやら一夏は、願ってもないような顔をしている。

「はい、ぜ」

一夏の言葉はここで突然の横やりに遮られた。

「結構です。私が教えることになっていきますので」

その横やりを入れたのは、先ほどまで一夏の提案を無視していた、篠ノ之さんだった。

いつの間に彼女が教えることになったのだろうか？　疑問に思った

がとりあえず、黙っておくことにする。

「あなたも一年生でしょ？ 私のほうがうまく教えられると思うなあ」

「・・・私は、篠ノ之束の妹ですから」

ものすごく言いたくなさそうに、彼女は返答する。

彼女は篠ノ之博士をあまりよく思っていないようだったが、その名前を出すのだから、どうやら何か譲れない理由があるのだろう。

それを聞いた先輩は、ものすごく驚いていた。確かに、世界的有名な博士の妹なのだ。驚くのも無理はない。「そ、そう。それなら仕方ないわね・・・」と、先ほどまでの勢いとは打って変わって、若干引いた様子で去って行った。

一夏は、そんな篠ノ之さんを不思議そうな顔でじっと見ていた。

「なんだ？」

「なんだって・・・ いや、教えてくれるのか？」

「そう言っている」

教えてあげるつもりだったのなら、最初からそういえばよかったのに・・・

この子は、人づきあいがいあまり上手くないのだろうか。

「今日の放課後」

「ん？」

「天加瀬を連れて、剣道場に来い。一度、お前の腕がなまっていな
いか見てやる」

俺も一緒なのか・・・俺は剣道未経験者なのだが。

「いや、俺はISのことを」

「見てやる」

「・・・わかったよ」

有無を言わさない彼女の言葉に、一夏も俺もうなずくほかなかった。



正直、彼女がここまですごいとは思っていなかった。

先ほどから、一夏と篠ノ之さんが剣道で勝負をしていたのだが、一夏はまるでかなわなかった。

俺はというと、竹刀と防具は貸してもらったが、目の前に起こっている出来事に参加しようとは思わないし、思いたくもない。

どうやら、篠ノ之さんの予想よりも、経験者だった一夏の腕は落ちているようで、こっぴどく一夏をしかりつけた後、更衣室へと向かって行った。

「・・・大丈夫か、一夏」

「いや・・・昔とは段違いの強さだったよ。昔は俺の圧勝だったんだけどなあ・・・」

そういうながら、遠い目をする一夏。

しかし、聞こえてくる「織斑くんってさあ・・・結構弱い?」「I Sほんとに動かせるのかなー」の声に現実引き戻されていた。

「・・・トレーニング、再開するか」

何かを決意したようにつぶやく一夏、立ち直ってくれて何よりである。

「奏羅もやるか?」

「・・・初心者ってこと忘れないんだったら付き合ってやるよ」

俺も月曜日に対戦が控えているのは変わらないからな。
そこへ、水を差すように俺の携帯に着信がかかる。

「悪い、ちょっと席をはずすぞ」

そう言って俺は廊下へと出て行った。



「えっ、輸送が遅れる!？」

電話をかけてきたのは、マリア博士の助手のうちの一人で専門学校時代の同期である、リリツィア・ティナーク、通称・リリィからだった。

『いやー、あんた宛の荷物と、他の企業に送る荷物を間違えちゃってさ、届くのが月曜日の午前中になりそうなんだわ』

ごめん!　　と言いながら誤ってくるリリィ。しかし、月曜日の午前中かよ・・・

「で、どこまで設定してある？」

『一応、即時インストールできるくらいやつといたけど、あんたが頼んできた装備、どっちかっていうと装備っていうよりパッケージだから、ISと装備が設定いじらずにマッチングするかはわかんないかな』

午前中でマッチング設定を終わらせることができるのか・・・？
だんだんと不安になってくる。

『あーそうそう。このこと、マリアさんには内緒にしてくれない？
これ聞いたらあの人、絶対に怒り狂うし』

「わかった、しっかりと伝えておく」

「あー、やめろー」とか聞こえてきたが、無視して通話を切る。
まいった・・・どうやら、ぶっつけ本番でやるしかないだろう。
いろいろと試行錯誤しながら対策を考えていると、

「どうかしたのか？」

と着替え終わったであろう篠ノ之さんが尋ねてきた。

「いや・・・まあいろいろあつてさ、月曜日の試合が心配になってきた」

「はぁ・・・まったく、お前はもう少ししっかりしてると思ったんだがな」

今回は俺自身の失敗ではないのだけれど、まあ俺の不備には変わらないだろう。

ふと篠ノ之さんのほうを見ると、さっきから、どこかいつもと違う。なんというか、ボーっとしているような気がする。

「・・・どうしたんだ？」

「いや、少し考え事をしてただけだ」

「・・・一夏のことか？」

「そ、そ、そんなことあるはずがないだろう!!」

一夏的话题を出すと、必死に否定する篠ノ之さん。
そんな彼女の様子に、俺は一つの仮説をたてた。

「もしかして・・・篠ノ之さんって・・・」

「ち、違う！ 誰があいつのことなど好きなものか！」

「そこまでは言っていないんだけど・・・」

「あ・・・」という顔をする篠ノ之さん。どうやら観念したのか、
恥ずかしそうにうつむきながら、

「あいつには・・・黙っておいてくれ・・・」

いつもの篠ノ之さんからは想像できないようなしおらしさで懇願
してくる。

彼女の願いをむげにするほど、俺は鬼ではないので、

「まあ・・・なんだ、俺もそんなことペラペラしゃべる人間じゃない
いな」

と黙っておくことを約束した。

どうやら安心したらしい。篠ノ之さんは「そうか・・・」と安堵し
たように息を吐いた。

「一つ、アドバイスするけどさ」

「・・・なんだ？」

「もうちょっと一夏に優しくしたらどうだ？」

「っ・・・、余計なお世話だ！」

どうやら、自覚しているのだろう。ムキになったように怒鳴り散らす彼女は、なんとなく年頃の女の子に見えた。

「おいおい、何喧嘩してんだ？」

いつの間にか、話題の中心であった一夏が、着替えを終わらせて廊下に出てきていた。

「・・・お前、いつからそこにいた？」

「ついさっき、箒が『余計な御世話だ！』って怒鳴るところから」

どうやら、彼女の胸の内は、一夏に聞かれてはいないようだ。

「それより、腹減ったな。奏羅、箒、さっさと寮に戻ろうぜ」

「はあ・・・お前と言うやつは・・・」

あきれたようにため息を吐く篠ノ之さん。同情するよ、まったく

「じゃあ、とっとと退散するか」

俺の言葉を皮切りに、俺たちは寮へと歩を進める。

どうやら、彼女の思いが伝わるのはまだまだ先な気がする。

一夏と篠ノ之さんに挟まれて歩きながら、俺はそう思った。

第8話 〈特訓と恋心〉（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

次はついに主人公のISがデビュー・・・すると思います。

クラス代表決定戦は上・下に分けて書こうかなと思いつつ、そこまで長い文章になるのか不安だったりします。そもそも戦闘描写が書けるかどうか・・・

ご意見・ご感想をお待ちしております。

キャラ紹介 天加瀬 奏羅 (前書き)

キャラ紹介です。

一応イメージがつかみやすいように絵を描いてみました。
落書き程度なので、過度な期待はしないでください (笑)

キャラ紹介 天加瀬 奏羅

名前…天加瀬 奏羅 あまかせ そうら

外見…少しパーマがかかった髪に、モノクルをかけている。

以下外見イメージ

>i22836—3051<

プロフィール

小学校の頃に出会ったとある女の子と昔約束した夢を叶えるため、中学時代からISの開発・設計についての専門知識を学ぶ学校に通う。

そんななか、その女の子が『GV計画』のテストパイロットに選ばれ、彼女の推薦と、師であるマリア・レイン博士の取り計らいにより、開発助手見習いとして計画に参加することになる。

中学三年生の時、計画の集大成ともいえるIS・『プラチナ』の起動実験時に、暴走事故に巻き込まれ、彼一人だけが生き残った。その時に暴走がおさまった『プラチナ』を使用し脱出に成功したため、日本から監視、保護目的でIS学園に入れられることとなる。

モノクルを付けているのはその事故で右目を負傷し、極端に視力が落ちてしまったためである。

面倒事が嫌いで、あまり争いごとを好まない性格であるが、彼女と約束した自分の夢について馬鹿にされると、周りが見えなくなるという欠点がある。

思いつく出の中の女の子が強く心に残っているので、他人から他人への気持ちには鋭いが、他人から自分に対する気持ちには気付かないと

いうところがある。

作者コメント

一夏と並ぶ、この物語の主人公です。名前の由来は、太陽の英語読み、ソーラーから。名字は、考えているときにあるゲームのキャラが思いついたので、そのキャラの名字を、文字を変えて拝借しました。

イメージ出来るようにと、描いた絵が微妙なので後々描き直すかもしれません（笑）

キャラ紹介　く塚乃　旭く

名前…　塚野　旭　つかの　あさひ

外見…前から見るとロングヘアーに見えるが実際は肩までのセミロング。

以下外見イメージ

>i22835—3051<

プロフィール

奏羅の幼稚園のころからの幼馴染。長い付き合いの中で、彼が自分の夢を叶えようと進み始めた時、彼を自分なりに励まし、応援していこうという気持ちで彼に接しているのだが、奏羅には彼女の性格上、半分はからかわれてるように思われている。

奏羅が自分の夢を持った時、自分の将来について考え始め、ある一つの夢を抱くようになり、奏羅がIS学園に通い始めてからは、本格的にその夢に向けて進みだした。

楽しいことが大好きで、人懐っこい性格からか、友人が多い。冗談を考え付くのが得意で、人をからかったりするのだが、不思議なことに人に恨まれるようなことはない。

もともと彼女には、人を引き付けるなにかしらの魅力があるだが、本人はまるで気付いていない。

作者コメント

この作品のヒロインの一人。ネタばれになるようですが、一夏、奏羅に並ぶという意味でのヒロインなので、誰かとくつつくということは、今のところは考えてありません。多分、くつつくことはないでしょう。

実は、モチーフになったキャラがいる子。せめて髪の色くらいかえればよかったかなと思ったり。外見見て気付いた人は、『あーこいつか』みたいな感じで受け取ってください。名字は変えましたが、名前はそのキャラから拝借しました。

第9話 くクラス代表決定戦・前編く（前書き）

キャラ紹介で絵を描いて以来、挿絵があったら見栄えするなあと思いました。

まあ私は機械とかからつきしなんで描いても日常のような気がします。

では本編をどうぞ。

第9話　くクラス代表決定戦・前編く

あれから大体一週間がたち、ついにクラス代表を決める大一番の日、月曜日がやってきた。

俺たちは、試合が行われる第3アリーナの待合室に待機していた。

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

この一週間で、どうやら二人は仲直りしたらしい。かく言う俺も、篠ノ之さんではなく箒、彼女も、俺のことを天加瀬ではなく奏羅と呼ぶくらいの仲になった。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

一夏と箒の問題は解決されたが、俺たちにはもうひとつ、解決しなければいけない問題があった。

「ISの操縦を教えてくださいる話はどうなったんだ？」

「……」

「目をそらすな」

この一週間、俺と一夏は、箒にみっちり剣道の稽古をつけてもらった。経験者の一夏は深いところまで練習し、未経験の俺は、剣道

と呼べる事が出来るぐらいにはなった。

「し、仕方がないだろう。お前のISがなかったのだから」

「まあ、そうだけど・・・ じゃない！ 実践的な知識とか教えるとか出来ただろう！」

特訓の合間で基本的なことは俺が一夏に教えていたとはいえ、あいつの知識は完璧とはいえるものではない。

「・・・」

「目をそらすな」

さらには、一夏のISは今この時ですら到着していないという始末である。

このままだと、一夏は訓練機でオルコットさんと戦うことになってしまうか、下手したら棄権という可能性もある。そんな中、

「・・・ちょっと、席をはずすぞ」

そう言って俺は携帯を取り出し、ある番号にかけた。

『はいはい、リリツィアです』

先週、俺の装備をどこぞに輸送してしまったリリィの番号である。

「・・・おい」

『・・・ただいま留守にしております』

「ごまかすな。お前、いったい俺の装備をどこに送ったんだ」

そう、一夏と同じく、俺の装備もまだ到着していないのだ。つまり
IS学園男子組は、絶体絶命のピンチに陥っている。

『えっと・・・ブラジル?』

「ウソだろ」

『・・・ごめんなさい』

バレバレの嘘をつくりリイ。日本の裏側なら信じると思ったたら大間
違いだ。

「・・・ほんとに今日届くんだろうか?」

『うん・・・わざわざ一回ラボにまで送り返してもらったし、届く
はずなんだけど・・・』

俺は先週の出来事をきっちりとマリア先生に報告し、フォローして
もらった。その時リイは、マリア先生にとてつもないお仕置きを
食らったらしいが、自業自得だ。ざまあみろ。

「はぁ・・・わかった。ギリギリまで待ってみる」

そう言って電話を切り、一夏の隣へと戻る。

「・・・どうした?」

一夏が話しかけてくる。どんなに鈍い奴でもわかるくらい一夏のテンションは低かった。

「いや・・・頼んでた装備がまだ来ない」

「つまり？」

「俺の勝ち目がなくなったかも・・・」

最後の希望が断たれたような顔をする一夏。悪い、さらにテンションを低くしてしまっ・・・

「・・・・・・・・」

俺たちはもう、喋る気にすらならなかった。

「あ、天加瀬くん、織斑くんっ！」

そんな中、俺たちの沈黙を破るように、山田先生があわてたように走りながら入ってきた。

その姿は何だかすぐに転びそうで、みているこっちが怖くなってくる。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

一夏の言葉に素直に従い、深呼吸をする山田先生。この人は本当に年上なのだろうか？

「はい、そこで止めて」

冗談交じりに一夏が言うど、本当に息を止める山田先生。・・・えっ、本当に止めるの？

「・・・・・・・・」

何も言わない一夏。だんだんと山田先生の顔が赤くなっていくのがわかる。

「ぶはあっ！ ま、まだですかあ？」

とうとう我慢できなくなった先生が、息を吸いながら一夏に尋ねる。この人は本当に、俺たちが頼る事が出来る教師なのだろうか・・・？ そんな疑問を浮かべていると、

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

という言葉とともに、俺たちの頼れる鬼教官が、一夏の頭を叩いていた。

「千冬姉・・・」

パン！という音とともにまた一夏の頭が叩かれる。この人は本当に容赦がないな。

「織斑先生と呼べ。学習しろ、さもなくば死ね」

ものすごい言葉である。ていうか、たびたびこの人が教師なのか本当に怪しくなってくる。

「ふん。教員免許ぐらいなら、後でいくらでも見せてやる」

まったく喋っていないのに、考えを読まれてしまった。俺はどんな成長してもこの人に敵わない、そんな気がする。

「そ、そ、それですっねっ！ 来ました！ 天加瀬くんの装備と、織斑くんの専用IS！」

よかった、間に合った！ 安堵する俺とは対照的に、混乱したような顔をする一夏。

「天加瀬は第一試合だろう。すぐにAピットに向かい、装備をインストールしろ。後、アリーナを使用できる時間は限られている。織斑はISをぶっつけ本番でものにしろ」

「わかりました」

その言葉とともに、俺は行動を開始する。一夏は・・・まあ俺には気にしている時間はなかったので、そのまままっすぐAピットまで向かった。



「大丈夫か？ 天加瀬」

Aピットにて、インストールを終わらせた俺のもとに、織斑先生が現れ、声をかけてきた。一夏、箒、山田先生も一緒だ。

「ええ、インストールは終わりましたが・・・ いかんせん特殊な装備なので、設定をいじらずに展開できるかはわかりませんが」

「その程度、男子たるものの気合いで何とかして見せろ」

と、箒が根性論を説いてくる。

「気合いって・・・ まあ、努力するけどな」

そう答えたあと、俺は右耳に意識を集中させる。

「プラチナ、起動」

その言葉とともに、俺の体は光の粒子に包まれる。各種ハイパーセンサーが俺の意識に接続、モノクルをはずしていた俺の右目の視力が一気に上がり、悪かった視界が通常の状態に戻る。続いてPICが起動し、体が重力から開放されたように浮遊した。

「それが天加瀬くんのISですか？」

驚いたような山田先生。まあ、その反応は予想していた。プラチナは、通常のISとは規格がまるで違う。

ウイングスラスターや、大型の装甲、スカート・アーマーなどは付いておらず、全体的に人間そのものの形に近くなるよう、装甲がついている。

そして、左腕にレーザーなどの光学兵器に対するアンチ・コーティングをした、小型の物理シールド、そして武器として、脚部に接近

戦闘用高振動ナイフ『フェザー・ダガー』を収納しており、銃としても扱える可変型複合剣『ソニック・ブレイズ』を腰部背面に装備している。

まあ、フォルムが通常のISと比べて、全体的に小さいって言うのにはわけがあるのだが。

「どうですか？　かつこいよくないですかね？」

と冗談めかして言うてみるが、実際には結構緊張していた。要は、心に余裕を作ってみようという試みである。

「せ、先生をからかうんじゃないですね！」

と、顔を真っ赤にする先生。いや、そういうことじゃないんだけど・

．．
気をとりなおして、試合のことを考えてみる。とりあえず、当面の問題は装備が展開できるかにかかっている。それが出来なければ、俺の勝率は一気に下がってしまうだろう。

《戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り》

プラチナからアリーナで待っているオルコットさんのISの情報が入ってくる。特殊装備が付いているあたり、簡単には勝てないはずだ。厳しい戦いになるだろう。

ふと、気になったので、一夏と筈のほうを見た。見たといってもハイパーセンサーが起動しているので、顔を向けてはいないが視覚情報として入ってくる。どうやら、二人とも心配してくれているらしい。

「一夏、箒」

顔を二人に向ける。別に向けなくてもいいのだろうが、なんとなくそうすべきだと思った。

「な、なんだ」

不安そうな声を出す箒。一夏も何も言わないが顔は箒と同じように不安げだった。

「行って・・・勝ってくるよ」

「ああ、勝ってこい」

「そのあとは俺と一騎打ちだ」

二人の言葉に強くなずき、俺はピット・ゲートへと進む。
そうだ、俺には応援してくれてる友達がいる。その絆に應えるためにも・・・

「約束、守るからな」

多分、誰にも聞こえていないであろうつぶやき。その決意を胸に、俺はアリーナへと飛び出した。



「あら、逃げずに来ましたのね」

余裕を持ったオルコットさんの言葉。どうやら、相当の経験があるようだ。

彼女の機体、『ブルー・ティアーズ』は特徴的な外見をしており、彼女の手には2メートルほどの銃器、プラチナの検索よりわかったことだが、67口径特殊レーザーライフル『スターライトmk3』が握られていた。

アリーナ・ステージの直径は200M。発射から目標到達までの時間は0.4秒。射撃したと理解してから回避が成功することは万が一にもないだろう。

「最後のチャンスをあげますわ」

そういいながら、人差し指を突き出した状態でこちらに向けてくる。左手の銃は、まだ砲身が下がったままである。どうやら、余裕のつもりらしい。

「チャンス？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言いながら笑う彼女。しかし、プラチナから入ってくる情報、《警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティの口

ック解除を確認《》から、彼女が俺の返答しだいで即座に攻撃するのは明白だった。

「そういうのって、チャンスって言わないんだけどな」

「そう？ 残念ですわ。それなら」

《警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初段エネルギー装填》

その情報が入った瞬間、俺は回避行動へと移る準備をする。

「お別れですわね！」

耳をつんざくような音とともに走った閃光が、俺のさっきまで居た場所を貫いた。

「あぶねえっ！」

回避で崩れた姿勢を、プラチナが自動姿勢制御を行うことでたてなおす。

ダメージを確認、どうやら上手く避けたようだ。

ISバトルは、相手ISのシールドエネルギーを0にすれば勝ちである。しかし、バリアーを貫通し、実態のダメージを受けると、数値化しているシールドエネルギーと違い、破損によって戦闘に支障をきたす。

ちなみに、操縦者が死ぬことのないように、ISには『絶対防御』と呼ばれる機能が必ず備わっている。この機能は、ありとあらゆる攻撃を受け止めるが、シールドエネルギーを大幅に使用する。つま

り、絶対防御が発動する攻撃を受け続けると、すぐに決着がついてしまうということだ。

「なかなかやりますわね。しかし、このわたくしとブルーティアーズからは逃れられませんか！」

言い終わると同時に、雨のように、そして正確にこちらを狙ってくる。動き続けなければ、一瞬でハチの巣にされてしまうのは明らかだった。現に、プラチナのアラートが鳴りっぱなしである。

（くそっ、このままじゃまずい・・・）

俺はプラチナにあの装備をコール、展開を試みた。
高周波の音とともに粒子が放出。

「いけるか・・・？」

しかし、俺の願いも虚しく、粒子は形とならなかった。

《エラー！ 装備を展開することができません》

どうやら、装備とプラチナのマッチングが上手くいってないらしい。
これはまずいな・・・

「ふふっ。理由はわかりませんが、どうやら装備が展開できないようですわね。」

「くそっ！」

装備が展開できないとあれば、今はこの状態で戦うしかない。俺は

腰部背面から、『ソニック・ブレイズ』を抜き、スタンバイモードからライフルモードへと変形させた。

「その銃一丁でわたくしに勝てるのかしら？」

すぐさまオルコットさんの射撃。それを左手のシールドでかろうじて防御する。

「やるしかないのさ」

そういいながら彼女に一発銃弾を放つが回避され、反撃される。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

次々と放たれるレーザーを、当たらないように動き回りながら、俺はプラチナのシステムコンソールとを呼び出す。

「そう、やるしかない」

彼女の隙を窺いながら、俺はキーボードパネルを叩いた。



「まったく・・・ちょこまかと・・・」

開始から大体5分、俺は全力で逃げ回っていた。

彼女は正確無比の射撃をおこなってくる。正確は裏を返せば予測しやすいということ。つまり、ある程度は狙ってくる位置がわかるということだ。さらに、プラチナは普通のISと比べ小型なので、被弾する可能性は少ない。その隙をついて、ISと装備のマッチング設定を行う、それが俺の立てた作戦だった。

「いける・・・これなら！」

『ソニック・ブレイズ』で威嚇射撃を行いながら、システムコンソールに目を通す。

（マッキング率67%、これが8割をきれば・・・）

装備が使える、そう思ったその時だった。

「仕方ありませんわね・・・ブルー・ティアーズ！」

ブルー・ティアーズから何かが射出される。そして、その飛び出した何からレーザーが発射され、

そのうちの一本が俺の左足をかすめた。

《バリアー貫通、ダメージ18。シールドエネルギー残量582。
実体ダメージ、レベル低》

被弾した個所の状況がプラチナから伝えられる。そうか、ブルー・ティアーズの特殊装備は・・・

「ふふっ。あなたも開発者を目指すもののはしくれ。これがどんな兵器かお分かりでしょう」

「自立機動兵器っ・・・！」

「そう、このISの名前にもなった兵器、ブルー・ティアーズBTですわ」

マリア先生の持っていた資料でしか見たことがなかったが、自立機動兵器、いわゆるビット兵器を使いこなすには、相当の技術が必要のはずだ。それを使ってくる彼女は、代表候補者になる際、才能があつたとしても相当な努力をしたに違いない。

そして、ビット兵器を使ってくるのであれば、先ほどの正確な射撃に、変則的な動きが入る。つまり、先ほどまである程度予測できていたものが、予測できなくなってしまった。よって、隙について設定の調整が出来ない。なので、これでは作戦が成り立たない。

「最悪だな・・・」

「では、ファイナール閉幕と参りましょう」

彼女は右腕を横にかざし、ビットに命令。すぐさま、ビットがさまざまな方向から襲いかかってきた。

「くっ・・・！」

俺を挟むようにビットが移動し、レーザーを放つ。それを回避すると、その隙を狙ってライフルで攻撃をしてくる。

「まずいな。パターンに嵌ってしまう・・・」

かろうじて被弾を少なくしているが、いつまでもつかわからない。このままいくとジリ貧で負けてしまう。そうこうしている間にも、だんだんとシールドエネルギーが削られていく。

「冷静になれ・・・冷静に・・・」

こういうときは観察をする、何かの漫画か小説で読んだことがある。俺は、何とかしてビットとオルコットさんの攻撃を防ぎながら、考えを巡らせた。

（彼女は俺を挟んで攻撃している・・・挟む・・・？）

そして俺はある結論に至った。

彼女は俺をビットで囲みながら攻撃し、その隙をライフルで攻撃している。ビットは彼女が命令を下して、はじめて攻撃を行う。そして、彼女のライフルは銃口が長く、近距離を狙えない。ならっ！俺は自分を挟んだビットの攻撃をなんとかして避けた後、彼女のライフルの攻撃をシールドで受け止めながら、一気に距離を詰めた。

「なっ!？」

それは予想外の行動だったらしい。ならば、この機を逃すわけにはいかない。

俺は『ソニック・ブレイズ』を連射しながら、彼女の至近距離へと迫る。

「お前は俺をビットで挟みつつライフルで狙撃している。つまり!」

そして『ソニック・ブレイズ』をブレード・モードに変形させ斬りかかる。

彼女はライフルがブレードに変形すると思っていたらしく、反応が少し遅れたのだろう。攻撃がまともに入った。

「こうして接近すればライフルは使えないし、ビットで俺を狙えば自分を誤射する可能性がある！」

「くっ・・・！」

焦り始める彼女を見て、勝機をつかんだと俺はそう思った。



「何とか勝てそうだな奏羅」

「ああ・・・」

ビットでモニターで戦いを見ていた一夏と箒は、勝負が奏羅のほうに傾き始めたことに安堵する。

その横で、山田真耶も奏羅の健闘に驚いていた。

「あれだけの時間でセシリアさんの弱点をつかむなんて・・・すごいですね、天加瀬くん」

「あいつはあれでも開発者を目指している。ISの特徴をつかむな

ど容易いことだろうな」

「そういえば自己紹介でそんなことを・・・でも織斑先生、自己紹介の時いましたっけ？」

素直な疑問をぶつける真耶に、内心ギクリとする千冬。

「い、いや、入る前に少し聞こえてたからな・・・」

「あつ、もしかして、SHRがはじまったときから廊下で中の様子を聞いてたんじゃ・・・」

そこまで言って真耶の言葉は千冬の突然のヘッドロックに遮られる。

「いたたたたたたたっっ!!」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！ わかりました！ わかりましたから、離してっ
ー」

そんな二人の様子を苦笑しながら見る一夏と箒。

千冬は真耶をヘッドロックしたまま、モニターを見て、

「この調子だと、天加瀬は負けるかもしれんな」

とつぶやいた。

「えっ？ どうしてですか？」

彼女の言った意味がわからないのか、真耶が尋ねる。一夏と箒も理解していないようだった。

「勝機が見えたことで、あいつは油断し始めた。そして、自分にも奥の手があるということは、相手にも奥の手があるということに気づいていないようだからな」

歴戦の戦士ともいえる千冬の言葉。

「奏羅・・・」

その言葉に、一夏と箒は不安そうにモニターに視線を戻した。



（いける！）

攻撃が入ったことにより、距離をとる彼女をビットに命令する隙を与えないように、再びライフルモードに換えた『ソニック・ブレイズ』で追撃、その射撃に合わせて再度距離を詰める。

ライフルは間に合わない。そう思ったその時だった。

「かかりましたわ」

彼女の怪しい笑み。反射的に危険を感じて距離を置こうとするが、彼女の腰部のスカート・アーマーの突起が外れ、動いた。

（しまった、ブルー・ティアーズは・・・）

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

俺の考えを彼女が続ける。

回避が間に合わない。しかもあろうことかこれはレーザービットではなく『^{ミサイル}弾道型』。

その思考が終わった直後、俺は爆発に包まれた。

第9話 くクラス代表決定戦・前編く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ついに主人公のISが初登場ですね。

一応戦闘自体は原作の展開を使いながら、オリジナルで進めてみました。

前回から予定通り、後編に続きます。

さあ、奏羅はセシリアに勝てるのか？

展開がわかってても書くのが二次小説です（笑）

ご意見ご感想をおまちしております。

第10話　くクラス代表決定戦・後編く（前書き）

ここに書くことが何もない・・・だと・・・

それでは本編をどうぞ

第10話 くクラス代表決定戦・後編く

「奏羅っ・・・！」

ミサイルが爆発した瞬間、モニターを見ていた箒は思わず叫んでいた。

千冬と真耶も、爆発の黒煙で埋まった画面を注視している。しかし、一夏だけは別のことに気を取られていた。

（なんだ・・・？ 一瞬だけ、奏羅の近くに女の子が見えたような・・・？）

多分、見間違いだろうか？ 自分の見たものについて考え事をしていた一夏は、千冬の言葉によって現実に戻された。

「・・・どうやら、勝負はまだ終わっていないようだな」

千冬以外の三人が、驚いたようにモニターをみる。黒煙の中にははっきりと、白銀のISが存在していた。

「でもどうやって・・・？」

真耶の問いに、千冬は冷静に返す。

「これは予測だが、あいつは後ろに振り向きつつ、ミサイルに撃ち落とし、そのまま瞬間加速を使い、爆発を逃れたのだろう」
イグニッション・ブースト

「それだけのことをやってのけるなんて、すごいですね・・・天加瀬くん」

驚く真耶と対照的に、千冬は何か引つかかっていた。

（だが、それは並の反射速度では出来ない。あいつの反射神経が卓越しているのか、それとも、あのISになにかあるのか・・・？）

様々な疑問を浮かべながら、千冬はモニターへと目を戻した。



「な・・・何故無事なのです！？ あれは直撃だったはずよ！？」

アリーナで戦っていたセシリアも、目の前のことが信じられないようだった。

（ブルー・ティアーズは命中の判定を出したはず・・・ 一体、何が起こったというの！？）

混乱するセシリア。その時、ブルー・ティアーズから送られてくる情報があつたのだが、彼女は頭に入っていなかった。

《敵ISの操縦者が変更されました。操縦者・天加瀬あまかせ 奏羅そうら、および操縦者・――》



(・・・どうやら、助かったようだな)

正直、俺自身も自分のした行動に驚いていた。

ミサイルが当たる直前、脚部から『フェザー・ダガー』を取り出し、後ろへ向きながら、ハイパーセンサーを頼りにミサイルに命中させ、瞬間加速を使った。
イグニッション・ブースト

今更ながら、よくこれだけのことが出来たよな・・・俺。

「だが、何はともあれ、これはチャンスだ!」

オルコットさんはまだ俺が無事だったことに気を取られている。

俺はシステムコンソールを開くと、マッチング設定を変え始める。

(あと10%・・・)

オルコットさんが我に返り、こちらへと再びビットを差し向けてくる。

左手はコンソールをいじりながら、俺は回避に専念する。

(あと3%・・・)

左右から襲いかかってくるビットに対し、俺は片方のビットへ接近、

そのビットがレーザーを放つよりも速く、逆立ちをするように回転しながら上へと体を移動し、ビットを打ち抜いた。そしてPICを切り、姿勢制御の隙を狙ってきたビットの攻撃を、そのまま慣性と重力に身を任せレーザーを回避、それと同時にPICを再び起動させ、プラチナに姿勢制御を行わせる。

「そんな馬鹿な！」

驚愕したようなオルコットさんの声。まあ、ここら辺の発想は開発者ならではの裏技ってことさ。そして、どうやら時間稼ぎは出来たらしい。

「じゃあ、プラチナの本当の意味での初お披露目だ」

マッチング率92%、完璧な同調率だ。苦労の末、ついに俺はあの装備をコールした。

光の粒子が集まり、一つの大きな塊として形をなす。

「な、なんですの、それは!?!」

彼女が驚くのも無理はない。これは装備と言っても、武器ではないのだから。

「まあ、これがプラチナと他のISとの違いかな」

『GV計画』正式名称『the next Generation Valkyrie project』。次世代型のISを開発するプロジェクトとして、どんな戦況に対しても対応できるという第四世代型ISを目指し開発されたシステムが、この『プラチナ』の特徴。

「ドッキングする。エアリアルフレーム！」

《了解。エアリアルフレーム、ドッキングモードへと移行します》

プラチナから返事が返ってくる。それに伴い、目の前の塊が変形・分裂し、プラチナへとドッキングする。

背部に大型の可変式マルチ・ウイングスラスター、脚部にもバーニアがドッキング。右腕に追加の装甲、左腕に装備が装着する。

プラチナに搭載されているシステムは、戦局に即時対応するため、その場面に合わせた特殊パッケージ『ヴァリユアブル・フレーム』を換装するというもの。そのフレームは武装としてインストールしてあるため、状況に応じてその場でフレームを変えることが出来る。このシステムにより、プラチナはフレームを使用しての運用が前提としているため、他のISよりも一回り小さいのだ。

「くっ・・・ブルーティアーズ！」

オルコットさんがビットを差し向けてくるが、マルチ・ウイングスラスターを装備した今、先ほどとスピードは段違いだ。ビットの攻撃をかわし、銃弾をたたきこむ。ビットの残りはあと二機。

そのまま、彼女の射撃を上方へとかわしながら移動。その間に後ろからビットが襲いかかるが、振り向きざまに片方をシールドでガードし、片方を撃墜する。

「とったっ！」

俺は彼女の頭上へとたどり着き、下方向へとブレード・モードの『ソニック・ブレイズ』を体重をかけられるように構えた。

「くっ・・・しかし！」

残りのビットが俺とオルコットさんの間に入ろうとする。しかしその前に、俺は下方向に今の体制のまま瞬間加速した。

イグニッション・ブースト

本来、瞬間加速は、スラスターが背面についている以上、自分から見ても前方向、つまり前進にしか使えない。しかしこのエアリアルフレームは、空中での三次元的な機動性を重視したフレームであり、このフレームの特徴ともいえる、可変型マルチ・ウイングスラスターは、スラスターの位置変更、変形により、360°の全方向にどんな体制でも瞬間加速できるのだ。

イグニッション・ブースト

俺は発射態勢に入る前だったビットを串刺しにし、オルコットさんへと突撃した。

オルコットさんは慌ててライフルをこちらに向けるが、もう遅い。そのままの勢いで、彼女をアリーナの床へと叩きつける。

「これだけの距離なら、シールド・エネルギーも関係ないだろう」

俺は彼女に向かって左手を向ける。エアリアルフレームの特徴的なもう一つの装備、左の掌に装備された、至近距離用の圧縮エネルギー開放ジェネレータ、『フラッシュ・ドライバ』。

「こういうこと女の子にするようなことじゃないけどさ・・・」

マウントを取った状態でオルコットさんに謝る。相手はいくらISが使えるようが女の子だ、いい気はしない。

「構いませんわ。これは勝負ですもの」

そう言いながら、彼女は微笑んだ。

「悪いな」

その言葉ともに、俺は左手からエネルギーを解放させた。そのエネルギーは、ブルー・ティアーズのシールド・エネルギーを貫通し、彼女の絶対防御を発動させる。

『試合終了。勝者、天加瀬奏羅』

決着をつけるブザーが鳴り響く。

湧き上がる観衆の中、俺はオルコットさんの状態を確認する。どうやら、気絶しているらしい。

「よかった・・・ ってあれ？」

彼女の無事を安堵した瞬間、急に視界がグニヤリと曲がり、俺はその場に倒れこむ。

普段そんなに運動してなかったからさすがに体力の限界か・・・
そんなことを思いながら俺の意識は途絶えた。



気がつくと俺はベッドの上にいた。眼前に広がる天井は俺の部屋ではないので、どうやら保健室のようだ。

「気が付きましたのね」

声のほうを向くと、予想外の人物が俺の横のベッドに座っていた。

「まったく、わたくしに勝った方が、どうしてわたくしより目覚めるのが遅いのかしら」

夕日が反射したきれいな金髪を揺らすその人物は、セシリア・オルコットさん。先ほどの試合での俺の対戦相手だった。

「さあ・・・なんでだろうな」

彼女の言葉に思わず苦笑してしまう。確かに勝った俺が、負けた彼女より目が覚めるってのは恰好がつかない。「まったく・・・」と言って呆れている彼女の様子をみて、俺はあることに気付いた。

「・・・ありがとな」

「なにがですか？」

「俺の目がさめるまで、そこにいたんだろ？」

「な、何を言ってるんですか！ わたくしは今ここに来たばかりですわ！」

そう言っている彼女の姿は、制服の上着を来ておらず、横のハンガーラックに掛けられていた。

さらに言えば、横のベッドは誰かが今まで寝ていたように乱れている。

「そうか、今まで横のベッドで寝てた形跡があるんだが、俺の勘違いか」

「そ、そうよ、あなたの勘違いですわ!」

顔をそらしながら必死にごまかそうとするオルコットさんの姿は、少し可笑しかった。

「まあ、オルコットさんが見舞いに来てくれるとは思わなかったよ」

「しょ、庶民を気遣うのも貴族の礼儀と言うものです! それに」

「・・・それに?」

「わたくしのことはセシリアと、そう呼びください」

彼女の口から、絶対出てくることのないような言葉が出てきたので俺は思わず「えっ?」と聞き返していた。

「ですから、わたくしのことはセシリアと」

突然すぎる彼女の言葉は、俺にはまったく理解が出来ない。

「・・・なんで?」

そんな俺の問いに彼女は少し顔を赤くしながら、

「わたくしに勝ったのですから、あなたの実力を認めて、それくらいは許してあげます!」

と強く言い放った。どうやら、俺と対等に接してくれるということらしい。

「・・・わかったよ、セシリア。じゃあ、俺も下の名前で呼んでくれ。じゃないとなんか不公平だし」

「ええ、もちろんですわ。・・・奏羅さん」

なんとなく気恥ずかしそうには俺の名前を呼ぶセシリア。他人を名前で呼ぶことに慣れていないのか？

「・・・もしかしてさ、セシリアって」

「な、なんですよ」

すこしギクリとしたような反応を見せるセシリア。そんな彼女をみて、なんとなく確信を得た俺は続ける。

「友達いないのか？」

「な、何をおっしゃっているのですか！ そんなことはありません！」

・・・思いつきり否定されてしまった。

「そんなことよりも、もう少し寝てらしたらどうですか？ まだ万全じゃないのでしょうか？」

いきなり話題を変えたセシリアは、俺を無理矢理ベッドへと倒し、上に布団をかける。

行動は乱暴だが、心配してくれているのは本当らしい。

「じゃあ、お言葉に甘えて寝るとするか」

「ええ、奏羅さんがお眠りになるまで、わたくしがちゃんと見守っておいてあげますわ」

何様のつもりだよ、と心の中でつつこみながら、目を閉じる。まあ、横についていてくれるっていいのはなんとなく安心するな・・・彼女の言葉に少し感謝しながら、俺の意識は遠のいて行った。

俺が眠りについてすぐ、一夏と箒、山田先生等がお見舞いにおとずれ、保健室が一気に騒がしくなってしまう、早々目を覚ますことになってしまったのだが。

第10話 くクラス代表決定戦・後編く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

書いているうちに、集中力が切れたせいか、自分で何書いているのかわからなくなっていった気がします（笑）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第11話 く戦い終わってく（前書き）

今回は少しオリジナルが入っております。

では本編をどうぞ。

第11話　く戦い終わってく

翌日、朝のSHR。そこではある人には信じられない事が起きていた。

「じゃあ、一年一組クラス代表は織斑一夏くんで決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

山田先生は嬉々として喋り、クラスの女子也大いに盛り上がっており、暗い顔をしているのは一夏だけだった。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日、一試合もしてないのになぜクラス代表になっているんですか？」

そう、昨日俺とセシリアの試合の後、二人とも医療室送りになってしまったので、結局一夏は誰とも戦わなかったのだ。

「それは私が答えてやろう」

颯爽と一夏の前に現れる織斑先生。さっきまで教室の端っこで話を聞いていたと思ったのだけど・・・。

「昨日の試合は天加瀬の勝利で終わったが、残念ながらあいつには体力がない。試合をやるたびに倒れられても困るのだな。オルコットは天加瀬に負けたのでと辞退したので、不戦勝という理由だがお

前が代表として選ばれた」

「そんな馬鹿な・・・」

一夏が選ばれたのは俺のせいでもあるので、この話を聞くと申し訳なくなってくる。

「わたくしがせっかく譲ったのですからしつかりと代表を努めていただきたいですわ」

立ち上がり、会話に入るセシリア。昨日の件以来、機嫌がいいというか、テンションが高い気がする。

「まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、一夏さんに代表をお任せしたのです。やはり、IS操縦には実践が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの」

ちなみに、これは俺が彼女と一夏の仲を取り持とうと説得した結果である。まあ一夏本人は有難迷惑のようだが、彼女にとっては一番友好的になる手段だと考えたのだろう。この言葉でさらにクラスが沸きあがった。どこからか商売を考えてるような発言があった気がするが気のせいだと思っておこう。

「そ、それですわね。わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間が奏羅さんと貴方に教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ」

そこまで言った時、箒が机を叩き立ち上がった。何とも珍しい光景である。

「あいにくだが、一夏と奏羅の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

『私が』を強調した箒は、ものすごい殺気でセシリアを睨んだ。しかし、セシリアはというと、この前とは別人のように、箒の殺気を正面から受け止め、なおかつどこか誇らしげであった。

「あら、あなたはI SランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用でしょうか？」

「えっ、箒ってCランクなのか・・・？」

意外そうな顔をする一夏。ちなみに俺と一夏は二人してBだった。

「ら、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。ふ、二人がどうしても懇願するからだ！」

確かに頼んだが、懇願というほどではなかった気がする。二人の間になんとなく火花のようなものも見える。

（こいつは特訓にかこつけて、一夏と仲良くしようという魂胆なのだろう。そんなことさせるか！）

（この方は特訓を理由に、奏羅さんと仲良くしようとたくらんでいるに決まっております。そんなことはさせません！）

しかし、この二人は考えているようことが同じ気がするのには気のせいだろうか。

「座れ、馬鹿者」

ヒートアップしている二人を出席簿の一撃で鎮める織斑先生。その気迫に押され、なすすべなく彼女たちは自分の席に戻った。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

さすが元世界最強、発言の重みが違う。セシリアは何か言いたげだったが、結局何も言うことができなかった。

「代表候補生でも一から勉強してもらおうと言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

しっかりと教員としての勤めを果たしているが、一夏いわく、家ではそうでもないらしい。人はみかけによらないということだろうか。そんなことを考えていると、頭をものすごい衝撃が襲った。

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」

初めて食らったが、これは出席簿ではない気がする。もっと別の、ボールのような何かではないのだろうか。

「貴様も、他人のプライベートを言いふらすんじゃない」

一夏にも出席簿の一撃が入る。やっぱりこの人は、人の心が読めるんだと思う。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

一夏を除くクラス全員がはいといい返事をする。とりあえず俺も

しておいた。クラスが団結することはいいことである。まあ、一夏にとってもいいことであれば尚更よかったのが。



「お花見？」

「ああ、もうすぐ桜も終わりそうだしさ、今週の日曜日に行かないか？」

週の終わりの金曜日、一夏が俺に花見をしないかと持ちかけてきた。

「いいけど、あんまり人数がいると、多分どこかの誰かがうるさい気がするぞ」

そのどこかの誰かは言わずともわかると思うが。

「じゃあ俺、奏羅、箒で・・・」

「わたくしもその『お花見』とやらに参加させてくださいな」

いきなり会話に入ってくるセシリア。この子はよく人の会話に入ってくるが、割り込むのが好きなのだろうか。

「まあ、俺たちはいいいけど、約一名が許可してくれるかなあと」

「とりあえず、俺が説得してみる」

といって一夏は箒のところへと向かった。余計なことを言って、また彼女を怒らせる事がなければいいが。

「あ、あの、奏羅さん」

「どうした？」

「よろしければ、わたくしに『お花見』というものについて、教えていただけませんか？」

なるほど、確かにイギリス出身の彼女には無い文化だ。いわゆる外国人が言うエキゾチックジャパンとかいうものに入るのだろうか。

「俺でよければ」

「あ、ありがとうございます！ では、いつごろお部屋にお伺いしましょうか？」

「いや、そんな大それて説明することじゃないよ。大体一分もかからない」

その言葉にあっけにとられるセシリア。一体『お花見』を何だと思っていたのだろうか。

「ど、どうせ、その程度のことだと思っておりましたわ」

セシリアと親しく話すようになってわかったのだが、変にプライドがあるのか、自分が間違っていたことをあまり認めたがらないというところがある。

「まったく……。説明するけど、ようはピクニックだな」

「ピクニック……ですか？」

「ああ、桜の木の下でお弁当とか持ち寄って、桜を見ながら飲んだり食べたりして騒ぐのが現代のお花見かな」

「ピクニック……」とつぶやき、何かを考え込むセシリア。しばらくすると、何かを思いついたように質問してきた。

「その、お弁当というのは自分で用意するものなのですか？」

「最近コンビニとかで買ったりしてる人も多いらしいけどね」

「で、では、奏羅さんのお弁当はわたくしに用意させていただきませんか？」

彼女の口から予想だにしない言葉が出てきた。近所づきあいの多かった旭はまったくもって料理もできなかったし、一人暮らしの時は、家事は出来るだけ自分でやるよう心がけていた。なので、他人の、しかも同年代の女の子に料理を作ってもらえる経験など、まったくもってなかった。

「でも、セシリアの負担が増えるだけだろう？」

「大丈夫です。自分の分を用意するついでですから」

彼女の顔を見ると、真剣な目をしているので、てこでも動きそうにない。

「じゃあ、みんなが多めに用意をして、それを分けて食べるっていうのはどうかな？」

「ま、まあそれでよろしいですわ」

何とか了承してくれたセシリア。そうになったら当日は少し大きめな箱を用意しないとな・・・。

「おい、奏羅」

「おっ、どうだった・・・夏・・・」

俺が一夏のほうに振り返ると、そこには明らかに何かあったような一夏が立っていた。

「箒、来るってよ」

「あ、ああ。そうか・・・」

一夏に何があったのか、なんとなくだが聞く気にはなれなかった。



そして、お花見当日。俺たちは学園で一番きれいだと思う桜の木の下に集まっていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっと、箒さん。どうなさったんですか？」

みんなが集まってからというものの、箒の機嫌が明らかに悪かった。まあ、それは大体予想は付いているのだが。

「・・・・・・・・なぜ私以外、自分の弁当を作ってきているのだ」

そう、俺たちはしっかりと作って持って来たのだが、箒だけ購買の弁当を持っていたのだ。

「おい、一夏。お前箒に弁当作って来いって言わなかったのかよ？」

「いや、あの後俺と口きいてくれなくて……。今日も、朝起きたらすでに剣道場で朝練してて、俺が弁当作り終わっても帰ってこなかったからさあ……」

「そこ、何をこそこそしている！」

威圧のある声に押され、思わず背筋を伸ばしてしまう。そんな顔で睨まないでください。

「と、とりあえず、弁当食べようぜ。箒も、俺らのを食べてさ」

俺が彼女をなだめると、「フン！」と鼻を鳴らし、レジャーシートの上に座り込んだ。どうやら、花見には付き合ってくれるらしい。それぞれが自分の持ってきた弁当を広げる。一夏は、肉と野菜のバランズのいい弁当。箒は、購買で買ったであろう幕の内弁当。セシリアは、スコーンやローストビーフなど、イギリスでも有名な料理が入った弁当。俺は、おにぎりや卵焼きなど、定番のおかずを作ってきた。しかし、ここまでそろえて俺たちはあることに気付いた。

「飲み物がない・・・」

全員が全員、誰か用意するだろうと思っていたらしい。かく言う俺も、言い出しっぺの一夏が持ってくると思っていた。

「うーん、どうするかなあ」

一夏が唸っているのを見て、俺はいいことを思いつき、箒に小聲で話しかけた。

「箒、お前一夏と一緒に飲み物買ってこいよ」

「な、なんで私が・・・」

「お前、昨日喧嘩して一夏と喋ってないんだろ。仲直りするチャンスじゃないか」

「むう・・・」と煮え切らない様子の箒をみて、俺は強硬手段をとることにした。

「一夏、お前が提案者だし、箒連れて飲み物と紙コップ買ってこい

よ」

「えっ・・・俺？」

「なっ・・・！？」

驚く一夏と抗議の声を上げる箒を無視して、俺は無理やり二人を行かせるように追いやる。

「頑張れよ、箒」

小声でエールを送ると、しぶしぶながら箒は了承し、二人は飲み物を買いに購買へと向かった。

「・・・奏羅さんは、篠ノ之さんと仲が良いんですね」

セシリアに言われて彼女のほうを見ると、うつむいてなんだか少し悲しそうに見える。

「あ、ああ。この学園で初めて仲良くなった女の子だしな」

「そう・・・ですか・・・」

しばらく続く沈黙。この前は機嫌がよく見えたんだが、なんで今日になってまたテンションが低いのだろうか？

なんだか空気が重い。そう思い始めた時、この時期には珍しい、心地よい風が通り抜けた。

「・・・セシリア、周り見てみろよ」

その言葉に顔を上げるセシリア。先ほどの悲しそうな顔が、一瞬で正反対の顔に変わる。

「すごいですわ・・・とっても綺麗・・・」

さっきの風に吹かれ、たくさんの桜の花びらが俺たちの周囲に降り注いでいた。

「たくさんの花びらが散って、まるでおとぎ話の世界みたいですよ・・・」

「ふふっ。セシリア、日本ではこういうときは『桜が散る』って言わないんだ」

俺の言葉に不思議そうな顔をするセシリア。

「じゃあ、なんていうんですの?」

「こういうときは・・・」

「こういうときは?」

「こういうときは『桜が舞う』っていうんだ」

これはちよつとした言葉遊びの類なのだけど、言葉ひとつ変えるだけで感じ方が全然違う。それが、言葉の面白いところ。

「『散る』って言葉を『舞う』って言葉に変えるだけで感じ方も全然……って聞いているか？」

「えっ？ き、聞いておりますとも！」

まったく、せっかくいいことを言っているのだから、ボーっとするのはやめてほしい……。

「でも確かに言葉を変えるだけで、感じ方も変わりますわね。……奏羅さんがとても素敵に見えましたわ……」

「俺が……なんて？」

「い、いえ、なんでもありません！」

最後のほうが聞き取れなかったんだが……。まあ、気にしないでおくでしょう。

「おーい、待たせたな」

どうやら一夏と箒が帰って来たらしい。あいつらが歩いてくるのが見える。

「じゃあ、花見を楽しむとするか」

「ええ、そうしましょう」

どうやら、セシリアの機嫌も治ってくれたようだ。

こうして俺たちは花見を満喫したのだが、予期していなかったことが一つだけあった。

「奏羅さん、これ食べてみてください」

「ああ、ありがとう」

そう言って彼女の料理を口に運んだ俺は、

（な、なんだこれ。臭っ！ 生臭っ！！ 何をしたらこんなものが作れるんだ！？）

この世のものとは思えない味を体験していた。

「ど、どうですか・・・」

しかし、彼女の期待のこもったまなざしを見て、正直なことを言うはずもなく、「あ、ああ。なかなか美味しいよ」と答えてしまい、

「お口に合ってよかったですわ。どうぞ、たくさん召し上がってください！」

と、見た目はとてもいいが、味が異次元の食べ物を目の前に差し出され、一気に地獄へと突き落とされたのであった。

第11話　く戦い終わってく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最後の言葉のたとえば結構前からやりたかった話題です。

というか、やりたいがために花見のシーンを加えたというか・・・。

ちなみに今回の話をネットで直に打っていると、操作ミスで書いてた文章を消してしまい、一日くらい落ち込んでおりました（笑）

みなさんも小説を書くときは気を付けてくださいね。

ご意見ご感想をおまちしております。

第12話 く成長する幼馴染と来日する幼馴染（前書き）

今回は挿絵をがんばってみました。

挿絵を描いたからと言って連載が遅れたってわけじゃないんですけどね。

では本編をどうぞ。

第12話　く成長する幼馴染と来日する幼馴染く

「ではこれよりISの基本的な飛行実験をしてもらう。織斑、天加瀬、オルコット。試しに飛んで見せろ」

お花見で見た桜の木もすっかり緑に変わり、四月も終わりに近づいたころ。俺は鬼教官・織斑先生の指導のもと、今日もISの操縦を学んでいた。

「早くしろ。熟練したIS操者は展開まで一秒とかからないぞ」

これ以上待たせると何が起こるか分からないのでさっさと自分のISを展開する。

あの後、一夏も専用機『白式』をフィッティングさせ、一次移行まで済ませていた。ISはフィッティングすると展開していない通常時は、アクセサリーのような形状の『待機状態』という形態になるのだが、一夏の場合ガンレット、いわゆる防具のような形状だった。一夏の体が粒子に包まれ、白式が展開する。横を見ると、セシリアも展開が終わっており、俺との試合で破損したビットも、すでに修復されていた。

「よし、飛べ」

指示通りすぐさま飛び上がる。セシリアは代表候補生だけあってさすがに早い。それに俺、一夏と続いた。ちなみに今回俺はフレームをつけてはいない。

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

織斑先生からお叱りを受ける一夏。この前急上昇、急降下を習ったのだが、一夏はなんとなく感覚をつかめていないようだった。

「一夏さん、所詮イメージはイメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

セシリアが一夏に助言をする。経験の多いセシリアの言葉には、毎度のことが少し感心してしまう。

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

「俺が開発者の観点から説明してやってもいいぞ？」

「・・・長くなりそうなので遠慮しとく」

まあぶっちゃけ説明したらちよつとした講義になってしまいうので冗談ではあったのだが、こういうのは正直操縦する分には知らなくていいことではある。

「ま、『なんで浮いてるんだ？』って思うより『ISだから浮いている』でいいじゃないか」

一夏はなんだか腑に落ちそうにない顔をしていたが、この答えが一番の正解だと思う。あれこれ悩むよりこういうものだと思えば止めておいたほうがいい。

「一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りてこい！」

いきなりどこかで聞いたことがある大声が通信回線から入ってくる。

地上を見ると、箒が山田先生のインカムを奪ってどなっていた。これは想像だが、今の状況が仲間はずれな気がしてイラついているのだろう。

「織斑、天加瀬、オルコットの順に急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地上10センチだ」

「了解。じゃあ先行くぜ」

そう言って地面に向かっていく一夏。結構スピードをだしてるな。

「奏羅さん、よろしければ今度、放課後に指導をして差し上げましょうか？」

突然のセシリアのお誘い。初めて会った時とは別人のように接してくれるのは、余計ないざこざがないのでありがたいが、少し戸惑ってしまうときもある。

「確かに、理論ではわかってても実践はまた違うからなあ。お言葉に甘えようかな」

その言葉に顔を輝かせるセシリア。俺に指導できることがそんなに喜ばしいことなのだろうか？ やっぱり放課後友達と何かしたことないんじゃないかこの子。

「で、では、第三アリーナを貸し切って、ふたりき」

彼女がこれからの予定を話そうとした時、突如大きな音が響いた。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴をあけて

「どうする」

織斑先生の怒声の通り、グラウンドには一夏を中心にぽっかりと大穴があいていた。



「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片づけておけよ」

その言葉に一夏はきょろきょろと周りに助けを求めていた。箒は目があった瞬間にわれ関せずと顔をそらし、セシリアに至ってはすでにいなかった。その後、俺に浴びせられる手伝ってくれよと言わんばかりの視線。

「わかった。そのかわり、今度何か奢れ」

「さすが奏羅！」

しかし、一夏の歓喜もつかの間、

「あ、天加瀬くんは私についてきてくれませんか？ 身内の方からお荷物が届いているんです」

と山田先生の言葉によって一夏は一気に地獄へと突き落とされたのだった。



「これが奏羅くんへの荷物です」

山田先生が一つの包みを俺に差し出してきた。それを受け取るとものすごく興味津々な顔でこちらを見ている。

「一応、安全のため中身を確認させていただいたんですが、それ、私にいただけませんか！」

ものすごく興奮した顔で近づいてくる山田先生。って、顔がものすごく近いんだけど。

「な、なんで俺の荷物を欲しがるんですか！ あと、顔が近いです！」

俺に突っ込まれ、顔を真っ赤にしながらあわてて離れる先生。山田先生がここまで興奮するとは、この中にいったい何が入っているのだろうか。

「す、すいません。あ、後で貸してくれるだけでもいいんです」

「あゝもう、わかりましたから！　とりあえず、部屋に戻りますよ！」

そう言って山田先生から急いで離れた。このまま捕まっていると、周りから変な誤解を受けかねない。

そのまますぐに寮の自分の部屋に戻ると、俺は包みの中身を机の上に広げてみた。

「げっ……これって……」

入っていたのは一つの手紙と、梱包材に包まれたCDだった。なんとなく想像がついたが、とりあえず手紙を広げてみる。

『奏君、元気してる？　あなたの家のお隣さんの旭ちゃんですよ。』

案の定、旭からの手紙。とりあえず続きを読む。

『奏君がIS学園で夢を追いかけている間、私も自分の夢に向かって、一生懸命進んでいました。そして、四月の初めに念願かなって歌手になることができました』

そう、最近になって知ったのだが、俺の幼なじみでもある旭は歌手としてデビューしたのであった。初めて見たとき驚いたが、この学園でもファンが多いことにも驚いたのを覚えている。

『今回、私のファーストアルバムが発売することになったので、レコード会社にお願ひして、本来五月の中ごろに発売するCDを特別に一枚作ってもらったの』

なるほど、これがそのCDか。って、山田先生が貸してほしって言ったってことは、あの人旭のファンなのかよ……。俺は梱包材をあげ、CDのケースを開く。

「ん？　なんだこれ？」

中から一枚の写真が出てきた。いやな予感を感じながらそれを表にすると、

>123656—3051<

『アルバムにつかうジャケットの写真を実際に焼いたので、奏君にあげます。世界に二枚しかないから大事にしてね。写真にキスしてもいいよ』

しない。これは断言できる。しかし、これを送ってくるとか明らかに俺が反応に困るのを想像してたに違いない。

「とりあえず、データをMP3に移して、データで山田先生に貸してあげるか」

さすがに幼なじみが送ってきてくれた品物は大切に扱いたいと思うので、こういう方法をとることにした。今のところ俺の持ってるこれ一つなので、なんかもったいない気もする。

「なんか、先越された気分だなあ……」

幼なじみの活躍に、なんとなく遠くなった間隔を覚えながら、俺は写真を眺めていた。

「奏羅さん、いらっしゃいますか？」

げっ、セシリア。この写真を見られたら変な誤解をされそうだ。俺は急ぎつつ、丁寧に写真やCDをかたづけると、セシリアが待つ扉の前へと何事もなかったかのように向かった。



「ふうん。ここがそうなんだ・・・」

夜、IS学園の正面ゲートに小柄な体に不釣り合いのボストンバックを持った少女が立っていた。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットをあさってくしゃくしゃになった紙を取り出した。

「本校舎、一階総合事務受付・・・って、だからそれどこにあんのよ」

少女は多少いらしながらまた上着のポケットに紙を突っ込んだ。そして、「自分で探せばいいんでしょ、自分で探せば」と呟きながら、足を動かしていた。しかし、最初はイライラしていた思考も、

しばらくして、ある男子のことに変わっていった。

（元氣かな、あいつ）

中国人の彼女が日本に戻ってくる最大の思い出になっているのがその男子だった。

「だから・・・でだな・・・」

ふと声が聞こえる。その声の方向をみると、一人の女子がIS訓練施設から出てくるところだった。

（ちょうどいいや。場所きこつと）

声をかけようと、アリーナのほうへ小走りに向かうと、

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

その声に少女の足が止まる。男の、それもよく知っている声にすごく似ている。たぶん、同一人物。

「いちー」

再会に胸を躍らせながらその男子に声をかけようとした少女は、一人の女子の声を聞いて言葉が止まってしまった。

「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じ所で詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ、『くいっ

て感じ』って」

「・・・くいつて感じだ」

「だからそれがわからないって・・・おい、待てよ箒！」

（誰？ あの女の子。なんで親しそうなの？ っていうかなんで名前で呼んでんの？）

沸きあがる疑問に、先ほどの高鳴りは消え、代わりにひどく冷たい感情と苛立ちが、胸の内を満たしていた。

それからすぐ、少女は総合事務受付を発見する。アリーナのすぐ後ろに本校舎があるからだ。

「ええと、手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、ファン・リン凰鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉も、今の彼女には届いてはいない。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「ああ、噂の子？ 一組よ。凰さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり、織斑先生の弟さんだけあるわね」

鈴音は事務員の姿を冷ややかに見ながら、質問を続ける。

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ ええと・・・聞いてどうするの？」

鈴音の様子を少しおかしく思ったのか、事務員は戸惑いながらきき返した。

「お願いしようかなと思って。代表、あたしに譲ってって―」

第12話 成長する幼馴染と来日する幼馴染（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

挿絵、変じゃなかったですかね（笑）

あのくらいの挿絵ならたまには描いてあげてみようかと思っています。

ご意見ご感想をおまちします。

第13話　く祝い事と悩み事く（前書き）

前回ラストで鈴を出しておきながら、今回一切出てきません。

まあ、区切りがいいのでこの辺で一話と言うことでお願いします。

では本編をどうぞ。

第13話　く祝い事と悩み事く

「というわけでっ！　織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

たくさんのクラッカーが鳴り響き、紙テープが一夏の頭に降り注ぐ。なぜクラッカーなのかというと、一夏のクラス代表決定を祝って、一年一組全員で就任パーティを開くことになったからである。夕食の終わりの自由時間に一組全員が寮の食堂に集まって飲み物片手に騒いでいた。しかし、当の一夏本人はまったくもってテンションが低かった。

周りからは「いや〜クラス代表選が盛り上がるねえ」とか、「ラッキーだったよね〜。同じクラスになれて」とか本人を無視して盛り上がりっており、ちらほらと、というか結構な数の違うクラスの人たちも集まっていた。

「人気者だな、一夏」

「・・・ほんとにそう思うか？」

「ふん」

周りが一夏をもてはやすので、箒はご機嫌斜めのようだ。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

突然の乱入者に盛り上がる一同。一夏もついに新聞デビューのよう

だ。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長をやってます。はいこれ名刺」

一夏が受け取った名刺を横から覗き込む。学校でやっている部活の割にはしっかりとした名刺だ。

「ではズバリ織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと・・・」

ボイスレコーダーを向けられて困った顔の一夏。クラスの初めの自己紹介みたいにならないか内心はらはらする。

「まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

「なんですか、それ・・・」

しまった、つつこんでしまった。案の定、黛先輩は俺にボイスレコーダーを向けて喋り始める。

「君は噂の男子二号の天加瀬君ですね！ 一夏君のコメントは後で適当にねつ造しておくとして、では、相棒が代表になったことについて、一言！」

俺はいつから一夏の相棒になったのだろうか。っていうか、捏造と

か報道者にあるまじき行為ではないのだろうか？　まあとりあえずスルーしておくが。

「えー、体力のない俺の分まで頑張っしてほしいです」

「コメントありがとう。後で捏造しておくね！」

えっ、それじゃあ俺に聞いた意味ないじゃないか。でも初対面かつ先輩にツツコミを入れるわけにはいかないし、さらなるとばっちはごめんなのでやっぱり黙っておく。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

次の獲物はセシリアらしい。しかし苦手という割には結構まんざらでもないような感じではある。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと、それはつまり――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

いいようにはあしらわれるセシリア。っていうか新聞部の副部長なのにこの取材内容はないんじゃないか？　正直まともに仕事してないぞ？

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「なっ、な、ななっ・・・!？」

焦りながらこっちをチラチラと見てくるセシリア。助けてほしいのだろうか？ そんな様子のセシリアをみて黛先輩は「ははあ、なるほど」とか呟いていた。

「先輩、それくらいにしてあげてください。セシリアも困ってますし」

「じゃあ、王子様の言葉に免じて、ここまでにしておこうかな」

王子様の部分が引っ掛かるが、追求するだけ無駄だろう。セシリアに至っては顔が真っ赤になっている。まあ、あれだけ惚れてるだのでっちあげられたら恥ずかしいだろうな。

「元氣出せよ、セシリア」

「誰のせいだと思ってるんですの・・・」

「なんで俺をにらむんだよ・・・」

「自分で考えてください!」

なんで俺がセシリアに怒られているんだろうか。ていうか、元凶は黛先輩なんじゃ・・・。

「だ、大体あなたは―」

「はいはい、とりあえず三人並んでね。写真撮るから」

「えっ？」

「マジで？」

いきなりの言葉にセシリアは意外そうな声をあげ、俺に至っては素の喋り方で聞き返してしまった。

「えっと、私と奏羅さんで・・・？」

「いや、注目の専用機持ち三人の写真を撮ろうかとねー。ツーショットは個人的な話になるから有料だよ」

「そ、そうですか・・・。そう、ですわよね」

なんか残念そうなセシリア。女の子は写真うつりを気にするらしいので、身だしなみをきちんとしてないのだろうか。寝癖とかついているようには見えないんだがなあ。

「あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えてー」

「時間掛かるからダメ。気をつかってあげるからさっさと並ぶ」

黛先輩は俺とセシリアの手を引き、一夏の近くへと並ばせる。並び

順は、黛先輩からみて、左からセシリア、俺、一夏。

「・・・・・・・・」

「どうした、俺の顔になんかついてるか？」

「べ、別になんでもありませんわ」

こっちを見てくるので何かついてるのかと思ったがそうでもないらしい。

「天加瀬君、二人の肩を持ってくれるかな？」

「肩、ですか？」

三人が仲良さそうにしているところを写そうとしているのだろうか？
とりあえず、一夏の肩を持つ。しかし問題はここからだ。

「・・・・・・・・えっと、セシリアさん」

「は、早くしてください！」

ものすごい剣幕に押され、とっさに肩を掴んでしまう。心なしかセシリアの顔がこわばっているような気がするんだが、ほんとにこれでいいんだろうか・・・・？

「じゃあ、撮るよ。35×51÷24は？」

「え？ えっと・・・・・・・・2・・・・？」

「すみません、計算するのめんどくさいです」

「天加瀬君、早々と諦めないでよ。織斑君は不正解。正解は74.375でしたー」

まったく、この人は……。呆れながらも顔を作り、カメラのほうを向いた。パシャツツとシャッターが切れる音がする。

「……なんで全員入ってるんだ？」

一夏の言葉通り、周りには一組の全メンバーが俺たちの周りに集結していた。ちゃっかり一夏の横には箒が陣取っている。お前はそんなことしない子だと思ってたんだがなあ。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

全員の行動に怒り心頭のセシリアだったが、みんなの言葉にだんだんと丸めこまれていき、最終的には何も言い返せなくなっていた。新聞部が去って行ったあとは、みんな飲み物片手に雑談したり、歌を歌ったりしていた。ちなみに選曲は旭の歌がメインだったりする。

「奏羅さん」

「ん？　なんだ？」

そんなみんなの様子を少し遠くで眺めてた俺の所にセシリアがやってきた。

「いえ、なんだか寂しそうな気がして」

セシリアに言われて少しドキツとする。この学園に来て、一夏や、箒、セシリアたちと仲良くなって、旭の曲を聴いて、織斑先生や、山田先生の授業をこなして、毎日を楽しく過ごしてた。だけどやっぱり、そこに彼女はいない。その現実がこのパーティで少し、ちょっとはつきりと浮き彫りになって、なんとなくだけどみんなの中に入りづらかった。

「俺、ここにいらなくてもいいんじゃないのかな？」

「えっ？」

俺の突然の質問に驚くセシリア。確かにこの状況でこんなこと聞かれるとは夢にも思わないだろう。

「なんで、そんなことを？」

「いや、もしここに俺がいなくても、みんななんの問題もなく毎日を過ごすんだろうなって。そう考えたら、なんだか・・・ね」

実際に俺は彼女がいなくても、何の問題もなく生きている。いなくなったら世界が終ってしまいそうなほど、俺の世界は彼女が中心で回っていたのに、やっぱり俺の世界は問題なく続いている。そもそ

も、俺は彼女を差し置いて、一人生きていいんだろうか？　そう考えたら、今この場所で俺がいなくなっても、なんの問題もない。だからいっそのこと……。

ふと我に返ると、セシリアが心配そうな顔で俺を見つめていた。

「あ、悪い。今の忘れてくれ」

変な話をして、余計な心配させてしまった。俺は、後悔しながら居づらくなってしまったセシリアの隣を離れようとした。

「俺、先に部屋に戻るよ。じゃあまた――」

「待ってください！」

彼女の呼びかけに足が止まる。

「わ、わたくしが許可します！」

「へ？」

俺は彼女が言っていることがよくわからなかった。ていうか、何を許可してくれるのだろうか？

「わたくしが、奏羅さんがここにいることを許可しますわ！」

「……」

「だ、だから、あなたは卒業するまでここにいていいんです！　ですから、もう二度とそんなこと――」

「ぷっ・・・」

「な、何がおかしいんですの！ わたくしは心配して・・・」

「いや、ごめんごめん」

なるほど、『許可してやるからここにいろ』か。なんともセシリアらしい慰め方だな。

「・・・ありがとな。セシリア」

「しょ、庶民を気遣うのが貴族の務めですから、当然のことですわ！」

なんか対応が最初の頃の感じに戻ってるが、これは彼女の照れ隠しなんだろう。その証拠に、彼女の顔は真っ赤に染まっていた。

「奏羅さんが感謝してるのであれば、お礼として今度わたくしと一緒に――」

「セシリア、抜け駆けは許さないっていったよねー」

セシリアの言葉がさえぎられる。気がつくとな俺たちの近くにクラスメイト全員が集まっていた。みんな俺たちが何を喋っていたか、ものすごく興味津々な顔でこちらを見ている。

「あ、あなたたちはっ・・・！」

「はいはい、わかったから、みんなで仲良くお話ししようね」

クラスメイトに気圧され、黙り込んでしまうセシリア。それを機に一気に俺にクラスメイトが群がり、特に意味もないような質問を繰り返す。

（・・・セシリアに許可出されるまでもないな、これは）

周りには一夏や、箒、セシリアという友人や、たくさんのクラスメイト。

（どうやら、今の俺の居場所はこころしい）

心の中で、俺は届くかどうか分からない彼女にそう呟いた。

第13話 ㄱ祝い事と悩み事ㄱ (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

最後のほうがまとまってるようでまとまってない気がする・・・
というか、かいてることの意味がわからないような気がする・・・

ご意見ご感想をお待ちしております。

第14話 中華娘台風注意報（前書き）

最近同人活動をやり始めました。

ちなみに文章担当ではなく、イラスト担当ですが
（笑）

では本編をどうぞ。

第14話 中華娘台風注意報

「一夏、転校生の噂を聞いたか？」

「転校生？ 今の時期に？」

朝、クラス中は転校生の噂で持ちきりだった。俺も朝クラスメイトに教えられたので知らなかったこともあり、一夏に話しかけてみたが、この様子だとたぶんこいつも今日初めて聞いたのだろう。しかし、まだ四月の段階で転入生とは、何とも珍しいことである。まあそれにはちゃんとした理由があるのだが。

「なんでも、中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

そういえばうちのクラスにも一人、代表候補生がいたな。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転校かしら」

噂をすればなんとやら、うちのクラスの代表候補生はいつの間にか俺たちの近くにやってきていた。

「このクラスに転入してくるのではないのだろうか？ 騒ぐほどのことでもあるまい」

先ほど自分の席に座るところを見かけた筈も、まるでテレポーターションの様に俺たちのすぐそばに現れていた。この学校の女子は何かの空間転移能力を持っているのだろうか・・・？

「どんなやつなんだろうな」

「代表候補生っていうくらいだから、やっぱり強いんじゃないのか？」

しかし、代表候補生か……。セシリアのイメージが強いからなのか性格に少し難がありそうな気がする。

「気になるのか？」

「気になるんですの？」

女の子二人の声が重なる。

「ん？ ああ、少しは」

「俺は後学のためにどんなISか見てみたいな」

聞かれたことに正直に答えた俺と一夏だったが、この答えに何の不服があるのか、二人とも少し機嫌が悪くなった。女心は秋の空とか何とかいうが、これはさすがにコロコロ変わりすぎではないだろうか？

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？ 来月にはクラス対抗戦があるのに」

「そう！ そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をいたしましょう。ああ、相手ならこのわたくしと、奏羅さんが務めさせていただきますわ。なにせ、一夏さん以外で専用機

を持っているのはまだクラスでわたくしと奏羅さんだけなのですから」

いや、俺まだ手伝うって言ってないんだけどな……。でもまあ、他のクラスメイトだと訓練機の許可申請、機体整備に丸一日費やすので、いつでも専用機が使える俺とセシリアが相手したほうがいいのかもしれない。

「ま、やれるだけやってみるか」

その気になった一夏。その言葉を聞いてか、クラスのみんなが盛り上がる。

「やれるだけでは困りますわ！ わたくしと奏羅さんが協力するからには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑君が勝つとみんなが幸せだよー」

ちなみに、優勝すると学食のデザートの半年フリーパスがクラス全員にももらえるらしい。これ目当ての女子も多いのだろう。

「織斑君、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表は一組と四組だけだから、余裕だよ」

クラスみんなが一夏に多大な期待を寄せていた。当の本人はどうやらプレッシャーがかかっているようだが。

「―その情報、古いよ」

クラスの入り口から声がする。振り向くとそこには一人の女の子が腕を組んで自慢げに壁にもたれかかっていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴・・・？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

また一夏の知り合いか。しかもまた女子。お前いったいどういう交友関係をしているんだ？

「何格好つけてるんだ？　　すげえ似合わないぞ」

「んなっ・・・！？　　なんてこと言うのよ、アンタは！」

せっかくの登場シーンを一夏に思いっきり台無しにされた凰さん。・
・なんだか少しかわいそうに思えてきた。すると、彼女の後ろには文字通りの黒い影が。

「おい」

「なによ！？」

ものすごく痛そうな音が聞こえる。その黒い影、織斑先生の容赦ない出席簿の一撃。まあ、織斑先生にあんな口のきき方をしてしまったのだから叩かれて当然だろう。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すいません・・・」

やはりいくら代表候補生でも、織斑先生にはかなわないのだろう。凰さんはすくすくドアから離れて行った。

「またあとでくるからね！ 逃げないでよ！ 一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

ものすごいスピードで二組のほうへもどっていく凰さん。一夏に登場シーンのこしをおられ、拳句の果てに織斑先生に出席簿で叩かれた彼女には同情してしまう。

「・・・一夏。今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「奏羅さん、あの子って一夏さんの知り合いなんですか・・・」

「？」

セシリアにつかまってしまおう俺。そのほか、一夏へのクラスメイトからの質問の集中砲火。

「ああ、お前ら―」

そんな一夏のつぶやきもむなしく、出席簿の音が響いて行く―って俺までかよ……。

「席に着け、馬鹿ども」

（俺はあんまり関係ないんじゃないや……？）

織斑先生に少し理不尽さを感じながら、今日の一日は始まったのだった。



「一夏のせいだ！」

「奏羅さんのせいですわ！」

昼休み、筈とセシリアは俺と一夏のところに来るなり突然俺たちを

怒鳴りつけた。

「なんでだよ……」

おそらく理由は一つ。午前中だけでこの二人は、山田先生に五回くらい注意を受け、織斑先生に大体三回くらい出席簿で叩かれていた。しかしなぜ俺たちのせいにされなければいけないのか。

「怒るのはいいけど理由を教えてくださいよ」

しかし、俺の願いは受け入れられず、

「いやだ」

「いやですわ」

と瞬時に却下された。まったくもって理不尽である。

（言えるわけないだろう。一夏と転校生のことを考えていたなどと）
（言えるわけないですわ。奏羅さんとどのようにして二人っきりで訓練するか考えていたなどと）

「まあ、話なら飯でも食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそういうのなら、いいだろう」

「そ、そうですわね。言って差し上げないこともなくってよ」

一夏の言葉に同意した二人と俺、そしてクラスメイト数名で学食へと向かった。

学食に着くとすぐに自販機で食券を買う。俺は今日の昼ご飯にカツカレーを選んだ。ちなみに一夏は日替わり定食。日によって違う料理が楽しめるから気に入っていると聞いていたのでこれなのだろう。箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを頼んでいた。よくこの二人とは食事をするのだが、大抵はこれを食べている。よく飽きないよな、この二人。

「待ってたわよ、一夏」

俺たちの前に一人の女の子が立ちふさがる。噂の転校生、凰鈴音さん。

「まあ、とりあえずそこをどいてくれ。食券出せないし、普通に行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

ちなみに彼女の手はすでにお盆を持っており、その上にはラーメンが乗っている。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、あんたを待ってたんでしょ！ なんで早く来ないのよ！」

なんだか騒がしい子だな。そう思いながら俺は食堂のおばさんに食券を渡した。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気をしなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ・・・」

なんかももの凄いことを言ってるような気がする。この子は一夏に恨みでもあるのだろうか？　しかしここまでの話を聞く限り、この子も筈に続く、一夏の幼なじみらしい。

「あー、ゴホンゴホン」

「ンンンッ！　奏羅さん？　注文の品、出来てますわよ？」

つつい一夏と転校生を見ていたら自分の料理が出来ていることに気がつかなかったらしい。セシリアに注意されてしまった。

「向こうのテーブルが空いているな。行こうぜ」

一夏が凰さんを含めた全員に促す。十人くらいの大移動なので正直座れるか不安だったが、すぐにテーブルにつけたのはラッキーだった。

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？　おばさん元気か？　いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうだな。一夏、この子と付き合ってるのか？」

箒よりも親しそうに話している様子をみて、なんとなく質問してみ
る。まあ、箒にとっては恋敵ともいえるのだろう。他のクラスメイ
トも興味津々とばかりに頷いていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ・・・」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだ」

「・・・・・・・・」

「？ 何睨んでるんだ？」

「何でもないわよっ！」

なるほど、そういうことか。この子も箒と同じような子なのだろう。
いわゆる、意地っ張り。

「幼なじみ・・・？」

この言葉に怪訝そうに返す箒。この子のことを知らないとなると、
また違う時期の幼なじみなのだろう。

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだっ
たろ？ 鈴が転校してきたのが小五の頭だよ。で、中二の終わりに
国に帰ったから、会うのは一年ちよつとぶりだな」

結構ややこしいな。しかし、なるほど。だから箒と凰さんは面識がないのか。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼なじみで俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

凰さんはじろじろと箒を見る。箒も対抗心を燃やしているのか、負けじと見返していた。

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

はたから見ると一般的な握手だが、俺には二人の間に火花が散っているように見える。なんというか、一夏を含んだ三角関係の予感がある。

「で、こっちの男子はだれ？」

あー、やっぱり言われるか。出来れば厄介事に巻き込んでほしくなかったのだが。

「こいつは奏羅。この学園に入った時に知ったんだけど、こいつもISを動かせるからって、この学園に入ったらいいんだ」

こんどは俺のほうをじろじろ見てくる凰さん。・・・なんでセシリアがこっちを睨んでくるのだろうか。

「あんたも、これからよろしく」

「あ、ああ」

彼女と握手をするのだが、なんでだろう。ものすごく誰かの視線が刺さっている気がする。気のせいということにしておくが。

「ンンンッ！ わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「・・・誰？」

「なっ！？ わたくしはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？ まさかご存じないの！？」

「うん、あたしほかの国とか興味ないし」

「な、な、なっ・・・！？」

顔が真っ赤に染まっていくセシリア。なんだかセシリアは最近こんなパターンが多いような気がする。

「い、い、言っておきますけど、わたくし貴方の様な方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

自信満々で答える彼女。たぶんこれは素で言っているのだろう。まあ悪気がない分、怒る人はいる。その怒る人は俺の横にいるのだが。

「い、言ってくれますわね・・・」

「まあ、落ち着けセシリア。ご飯が冷めるぞ」

そう言いながら俺は自分のカレーをすくって、それをセシリアの口の中に突っ込んだ。セシリアはさらに赤くなっていったが、口数が少なくなったので落ち着いてくれたのだろう。なぜだか周りからは「いいなー、セシリアだけー」とか「抜け駆けは許さないって言っただよね」とか「後で私たちと対話しようか・・・」とか聞こえてきたが俺には関係ないのでスルーしておく。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん・・・」

そういうと麺がなくなったのか、彼女はどんぶりを持ち上げ、直接スープを飲んでいく。何とも女の子らしくない豪快さだ。普通、レンジとか使うだろうに。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

どんぶりを置いた彼女の口から、一夏にISを教えるという言葉が出てくる。まずいぞ、誰かさんが反応してしまう。

「そりゃ、助かー」

ダンッ！と机が叩かれ、箸が立ち上がる。やっぱり反応してしまっ

たか。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

『私だ』を強調する箒。やれやれ、どうやらまた喧嘩が始まるようだ。予想通り、ぎゃあぎゃあど騒ぎ始める箒と凰さん。まったく、もう少し周りを気にすればいいのに……。途中からどうでもよくなってきたので、しばらく話を聞いていなかったが、最後のほうで、どうやら今日の放課後に第三アリーナで訓練をするとかどうとかという話になっていた。

「じゃあ、特訓が終わったら行くから。空けいてね。じゃあね、一夏！」

ラーメンのスープを飲み干すと、彼女は一夏の答えを聞かずに食堂を飛び出していった。なんというか、台風みたいな子だったな。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

箒に釘を刺される一夏。対抗心を燃やすのはいいが、もうちょっと考えようがあるんじゃないだろうか。

「セシリア、俺たちも参加するか？」

ちょうどいい機会なので、俺も特訓に参加させてもらおうと思い、前に約束していたセシリアを誘ってみる。しかし、セシリアは無反応だった。というか、俺がカレーを口に突っ込んだ時と同じポーズの様な気がする。

「セシリアー？」

彼女の顔の前で、手を振ってやっと反応を返してくれた。

「あ、えっと、なんででしょう？」

「いや、俺たちも放課後に特訓しないかと……。まあボーっとしてるみたいだし、疲れてるならー」

「や、やらせていただきます！」

「いや、元気無いなら無理しなくてもー」

「大丈夫ですわ！ わたくしはこんなにも元気ですわ！」

「あ、ああ……。そう……」

自分は元気だというアピールをするセシリアを見て、俺はなんだか放課後が不安に感じてきたのだった。

第14話 中華娘台風注意報（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

そろそろ原作一巻も終わりに近づいてきました。

とりあえず一巻と二巻の間に何らかのオリジナルのお話を入れられたいかなと思っています。

そういえば、何か質問とかあれば、可能な限りネタばれをしない程度に応えるので、そういった類のものもあれば、どんどん質問してください。

ご意見ご感想をおまちしております。

第15話 くすれ違う二人く（前書き）

二足のわらじというのはなかなか厳しいですね・・・
今回は短めです。

では本編をどうぞ。

第15話　くすれ違う二人く

放課後の第三アリーナ、約束通り俺、一夏、セシリアで特訓しようとしていたが、そこに思わぬ参入者が現れた。

「な、なんだその顔は……。おかしいか？」

「いや、その、おかしいというか」

「予想外というか……」

「篠ノ之さん！？　どうしてここにいますの！？」

そう、俺たちの前には量産型のIS『打鉄』を装着、展開していた。ちなみに打鉄は日本国産のISで安定した性能で防御能力に優れる、訓練機として優秀な機体でもある。以上、俺の開発者としての知識。

「近接格闘戦の訓練が足りていないだろう。私の出番だな」

打鉄は日本生産ということもあり刀型近接戦ブレードが付いており、格闘戦は得意ともいえる機体ではある。しかも見た目は剣道をやっている筈には似合っていると思うし。

「はぁ……。一夏さんだけでなく篠ノ之さんまで。いつになったら二人つきりで……」

「どうした、ぶつぶつなにか呟いて。やっぱり具合でも悪いのか？」

「い、いいえ、では早速訓練をしましょう！」

本当に大丈夫なのだろうか？ 本人ことは本人が一番わかるっていうし、口を出さないようにしようか。

「とりあえず、二組に分かれるか。じゃあどう組むかだけど・・・」

「では、わたくしと奏羅さんで射撃訓練、一夏さんと篠ノ之さんで格闘訓練をするのはいかかでしょうか？」

なるほど、確かにな。一夏の白式は近接格闘特化、というか近接格闘しかできないからな。長所を伸ばす形でいいだろう。

「ならセシリアの提案通り、その組み合わせで特訓するか」

一夏と箒もその提案に同意し、今日の特訓が始まったのであった。



「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「し、死ぬ・・・」

二、三時間ほどの訓練を終え、俺の体力は限界を乗り越していた。俺の当面の問題はこの体力のなさを何とかするところではないだろ

うか。セシリアはというと、俺と同じような運動量なのに俺のようにバテていないところを見ると、さすがは代表候補生ということだろう。

「とりあえず、ピットに戻りましょう」

「そ、そうだな」

どうやら一夏たちもピットに戻るようだ。同じピットに入って行った箒をみて、頑張ってるなあと思ってしまう。

「・・・あれで、もう少し素直だったらいいんだけどなあ」

「なにがですか？」

「いや、こっちの話。俺たちもピットに戻ろうか」

ピットに戻ると、ISの展開を解く。ISの補助が消え、一気に重力と体への負担がのしかかってくる。・・・女の子はよくこんなものを平気で動かすよな、まったく。

「奏羅さんは体力がなさすぎるのが問題ですわね……。スジは悪くないのですが・・・」

「はは、それは自覚してる」

自覚してるだけになんとかしようと考えているのだが、ISのグラウンドを一周するというのはさすがにハードルが高い気がする。

「日曜日あたり、早朝ランニングでもするかな・・・」

「仕方ないですわね、わたくしも一緒にさせていただきますわ」

「いや、セシリアは別にしなくてもいいんじゃないか？」

「わたくしもダイエットのためです。それに、一人より二人ですわ」

別にそんなに太っていないと思うんだけどな、かなりスタイルもいいし。でもセシリアの言うとおり、一人で走るのは確かに味気ない気がする。

「じゃあ、その時になったらまた伝えるよ」

「はい！」

部屋に帰ったら近場のランニングコースとか探してみるか。いや、まずはシャワーかな。

「じゃあ、またあとで」

「ええ、では夕食の時にまた」

そう言って俺たちは更衣室へと向かっていった。



「うーん、こことかどうかなあ」

部屋に戻ってシャワーを浴びた後、俺は先ほど話題にも取り上げた近場のランニングコースについて調べていた。学園から少し離れるが、川沿いのランニングコースが一番近いだろう。大体長さは3キロくらいで、体力づくりをはじめするにはうってつけだろう。

「ジャージとかあったかな・・・？」

持ってきた荷物を確認しようとする、突然電話が鳴り響いた。着信画面を見ると、前回俺の装備をどこぞへと送るという失態を犯したりリイからだった。

「もしもし」

『もしもし、元気してる？』

「ああ、おかげさまでな」

『奏羅がこの前送って来た戦闘データをマリア先生と見たけど、結構頑張ってたじゃない』

「いや、お前が送り間違えなければあんなに頑張らなくてよかったんだけどな」

ああは、と苦笑する声が受話器から聞こえる。とりあえず俺に電話してきた理由を教えてほしいんだが。

『あ、そうそう。奏羅が考えた新しい二つのフレームのことだけど』

「どれくらいかかる？」

『とりあえず片方はもうすぐ完成かな。もうひとつはまだかかるけど』

「わかった。今回はまったく急いでないから確実に頼む」

その時、いきなりバァンという大きな音が響いた。たぶん発信源は隣の部屋。

『な、何、今の？』

電話越しにも聞こえたのか、リリィがかなり驚いていた。

「わるい、とりあえず切るぞ」

電話を切ると、一夏の部屋へと急いだ。一応女の子の箒もいるので、とりあえずノックをして部屋に入る。

「いったいどうしたんだ？」

「・・・いや、鈴を怒らせちゃって」

まったく、こいつはまた余計なことを言ったのか……。一夏から理由を聞くと、どうやら凰さんとの約束を忘れていたり、気にしていることを言ってしまったらしい。

「一夏」

「お、おう、なんだ箒」

「馬に蹴られて死ね」

箒の痛烈な一言に落ち込む一夏。当然だ、これはお前が悪い。

「とりあえずもう寝たほうがいい。明日も早いぞ」

俺は二人にそう告げると自分の部屋に戻るとランニングルートの探索に使っていたパソコンの電源を落とし、ベッドの上に寝転んだ。

「幼なじみにもいろいろいるんだな・・・」

そういえば俺と旭はあまり喧嘩しなかったな。喧嘩したとしてもすぐに仲直りしてたし。でもすぐ仲直りしてたのはやっぱり旭の人柄もあったからだろう。しかし一夏と凰さんは違う。一夏はそういうことにものすごく鈍いし、凰さんも自分から仲直りするとは思えないほどの意地っ張り。

「なんとかしてやらないとな・・・」

出来れば俺が介入しなくても仲直りしてほしい。そう願いながら俺は眠りに着く。翌日、生徒玄関前廊下に張り出された紙、『クラス対抗戦日程表』には一夏の一回戦目の相手は凰さんと書かれているとはその時はまだ夢にも思っていなかった。

第15話　くすれ違う二人く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

もう少し書けばよかった気がしないでもないです。

ご意見ご感想や質問等をお待ちします。

第16話 く深まる溝く（前書き）

前のが短い気がしたのではやめに掲載しました。

では本編をどうぞ。

第16話　く深まる溝く

一夏と凰さんの騒動から大体三週間。それだけたっても二人の中は修復されてはおらず、それどころか日増しに悪くなっている。一夏と廊下や食堂でばったり会ったとしても、顔をそむけて一向に歩み寄ろうとはしない。俺もそれとなく一夏に促したりはするのだが、向こうは一夏を避けているので、まるで効果がなかった。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

放課後、いつものメンバーで特訓のため第三アリーナへと向かう。入学から一カ月がたち、女子たちからの質問攻めも無くなったが、以前話題の対象であることには変わりなく、俺たちが訓練を行うアリーナでは常に客席が満員だった。

「IS操縦もようやく様になって来たな。今度こそ――」

「まあ、わたくしと奏羅さんが訓練に付き合っているんですもの。これくらいは出来て当然、出来ないほうが不自然というものですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。第一、一夏のISには射撃要素がない」

言葉を中断されたせいか、やや不機嫌の筈。しかし、彼女が言っていることは正しく、一夏の白式には射撃装備が一切ない。刀型近接ブレードの雪片式型だけだ。

通常、ISというのは機体ごとに専用装備を持っている。しかし、その『初期装備』プリセットだけでは不十分なので、不安な部分を『後付装備』イコライザ

で補っている。セシリアの装備で言うと、初期装備はBT、後付装備にライフルと近接ナイフという感じだ。ISにはこの後付装備のために『拡張領域』^{バスロット}が設けられており、装備できる量は機体のスペックによるが、平均的には二つほど後付けできるのが一般的ISだ。しかし、これはあくまで一般的なISの話。俺のプラチナと一夏の白式はイレギュラーなISなのだ。

一夏のISには拡張領域がゼロ。しかも初期装備は書き換えることはできないので結局の所、近接ブレード一本のみ。

俺のISは初期装備が他のISと比べかなり少なく、その代り、このISの最大の特徴ともいえるフレームシステムを後付装備として設定している。つまりプラチナは、本来初期装備と言えるフレームを後付装備として逆に登録しているのだ。

「それを言うなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょう。ISを使用しない訓練なんて、時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！ 剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか。見とはすべての基本において――」

「奏羅さん、一夏さん、今日は昨日の無反動旋回からおさらいを始めましょう」
ゼロリアクト・ターン

「ええいっ！ このっ――聞け、一夏！」

「俺は聞いてるって！」

三人の怒鳴りあいになすこし呆れながらアリーナへと入ろうとすると、山田先生に突然呼びとめられた。

「天加瀬くん、少しいいですか？」

「なんででしょうか？」

「天加瀬くんが所属している研究所から装備が届いています。一緒に第五格納庫まで来ていただけますか？」

この調子の三人を放置しているのは少し心配だが、すぐに取りに行かないと織斑先生も怒るだろう。

「わかりました。悪いみんな、先に訓練を始めといってくれ」

みんなに一言謝ると、俺は山田先生の後について第五格納庫へと向かった。



「これが今回送られてきた荷物です」

山田先生が指差す先には確かにプラチナの新しいフレームがあった。

「先方からの伝言ですが、『もうひとつはロールアウトしているけど、今回のフレームの戦闘データを得てから改めて送る』そうです」

なるほど、マリア先生らしいな。とりあえず装備して、各部のチェ

ツクを行おうと思ったんだが、山田先生の視線が気になってしまう。

「えっと、何か用ですか？」

「あ、えっと、今回は旭ちゃんのCDとかついてないのかなって」

山田先生はこの前俺宛にとどいた旭のCDのコピーしたデータを譲ったことに味をしめたのだろうか。いったい俺の荷物に何を期待してるんだ？

「先生、今回は送り主が違います」

「あ、そうですよね。ごめんなさい」

まったくこの人は……。呆れながらも俺はプラチナを展開、今回送られてきた『シューティングフレーム』の点検を行う。今回はさすがにしっかりとマッチング設定までされており、シューティングフレームを展開、ドッキングを行った。

シューティングフレームの大きな特徴として、ソニック・ブレイズをライフルモードで固定、長距離射撃用の折りたたみ式ロングバレルを装着。シールドの役目も果たす大型ウイングスラスターに加え、腰部左右に可動式レールガンを装備している。そしてハイパーセンサーに、狙撃用のスコープモードが追加された。

ドッキングが終わると、俺の様子を横で見ていた山田先生が「ふあゝ」と何とも間拔けな、感嘆したような声をあげた。

「それって天加瀬くんが設計したって聞いてるんですけど、本当なんでしょうか？」

「ええ、一応は。それでも向こうの主任にはボロクソに言われてい

くらか修正されてるんですがね」

マリア先生は極端な機体や、癖のある装備を作るのが大好きなのだが、俺が提案したプランはとことん修正される。何なんだあの人は。

「でも、やっぱり凄いですよ、天加瀬くん」

「そ、そうですか？　ありがとうございます」

山田先生は俺の手を握っているので少し照れてしまう。気まづくなつてなんとなく周りを見渡すと、格納庫には山田先生と二人つきりだということに気付き、さらに緊張してきた。山田先生もそれに気付いたのか手を離し、顔を赤くして少し気まずそうだった。

「なにをしているんですの？」

突然格納庫に響くセシリアの声。その声に現実に戻された。

「せ、セシリア、どうした？」

「いいえ、奏羅さんが遅いからと様子を見に来ただけですが……。心配して損しましたわね」

どうやら山田先生とのことで怒っているのだろう。先生とのこんな感じになるのは確かにまずいが、なんでここまで怒っているのだろうか。そこまで言い放ったセシリアは「ふん！」とそっぽを向くと、すたすたと廊下を歩いて行った。

「ちょ、ちょっと、セシリア！　すいません山田先生、ありがとうございます」

俺まで一夏のようなのはまずいと思い、山田先生に一言礼を言う、プラチナを待機状態に戻し、セシリアの後を追いかけた。

「待ってくれ、セシリア」

俺はセシリアの肩を掴んで引きとめた。

「確かに自分の担任とああいふ雰囲気になるのはいけないと思うが、なんで君がそんなに怒るんだよ！」

「そ、それは……。とにかく、奏羅さんが悪いんです！」

「わかったよ、謝る。この通りだ」

手を合わせて頭を下げる。さすがに一夏と凰さんの二の舞はごめんだ。

「・・・今夜の夕食、奏羅さんのお部屋で一緒にさせていただけなら」

「そんなことでいいのか？」

「こ、これでも優しいほうです！」

厳しかったらいったい何をするんだろうか。しかし、セシリアは機嫌を直してくれたらしい。さっきからずっとこころなしに楽しそうだった。

「さて、遅れた分頑張らないとな」

「ええ」

第三アリーナに到着した俺たちはピットのドアが開く。それと同時にドカアアアンと大きな音が響いた。何事かと急いで中に入ると、そこには右腕だけISを装着した凰さんがいた。

「言ったわね……。言っではならないことを、言ったわね！」

まずい、なんだかわからないが一触即発の状態だ。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？ 今の『も』よ！ いつだってあんたが悪いのよ！」

彼女の物言いは一夏の反論を許していない。一夏は何も言い返せないでいる。というか、またこいつは余計なことを言ったのか……。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で、叩きのめしてあげる」

そう言い残すと、凰さんはピットを出て行った。彼女の居た場所の壁を見ると、直径三十センチほどのクレーターが出来ている。

「かなりのパワーだな。おそらくは一夏と同じ、近接格闘型……」

しかし、俺の言葉は一夏の耳に届いていないようだった。どうやら、凰さんを怒らせてしまったことを後悔しているらしい。

（あそこまで怒っていると、尚更修復が難しいぞ、これは・・
・）

一夏と彼女が戦うまで、あと数日。今わかるのは最悪の状態で試合を迎えることになるということだけだった。

第16話 〱深まる溝〱（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

次はいよいよクラス対抗戦ですね。

前回の戦闘シーンよりもっとうまく書けるように頑張りたいです。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第17話　く対抗戦と侵入者く（前書き）

文章がものすごく長くなりました・・・

これも前後編にわけたほうが読みやすかったかな・・・

それでは本編をどうぞ。

第17話　く対抗戦と侵入者く

ついに試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と凰さん。噂の新入生同士の対決とあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされており、会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。

（いよいよ始まるのか・・・）

一夏はすでにアリーナで白式を展開しており、俺、箒、セシリアはピットでリアルタイムモニターを見ていた。

（あれが凰さんのIS、『甲龍』か）

モニターに映し出されている甲龍。ブルーティアーズにも用いられている特徴的な非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}、肩の横に浮いた棘つき装甲^{スパイク・アーマー}を見るに、何とも攻撃的な印象を受ける。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

どうやら時間のようだ。アナウンスに促され、二人は空中で向かいあう。

『それでは両者、試合を開始してください』

鳴り響くブザー。それが鳴り終わる瞬間に二人が動く。武器がぶつかり合う音がし、それとともに一夏が弾き飛ばされる。

（大きいな。すごく大味な武器だな、あれ・・・）

凰さんは手にしている大型の青龍刀の刃の部分が二つくっついたものをバトンのように振り回し、一夏に突撃する。武器というより刃そのものといったほうがいいそれを、さまざまな角度から切り込んでいき、雪片式型でなんとか防いでいる一夏を追い詰めていく。

（まずいな、あれは。一夏は距離をとるしかない）

一夏は俺の考えと同じだったようで、凰さんからいったん距離を置こうと移動した、その時だった。

彼女の肩のアーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、一夏が吹き飛ばされた。

「なんだあれは・・・？」

リアルタイムモニターを見ていた箒がつぶやく。それに答えたのは、同じくモニターを見つめるセシリアだった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

しかし、箒は一夏が心配なのか、最後のほうをよく聞いていないようだった。

「奏羅、一夏は大丈夫なのか・・・？」

「わからない。衝撃砲自体、砲身も砲弾も見えない分、かわすのは相当難しい。しかも――」

モニターに目をやると、凰さんは上や下、真後ろに移動する一夏に向かって、向きを変えずに衝撃砲を放っている。

「どうやら射撃角度に制限はないらしい。彼女の技量も相当のものだ」

「じゃあどうやったら勝てるんだ!？」

俺の言葉を聞いて不安になった筈が怒鳴ってくる。

「方法はないわけじゃない。見たところ衝撃砲は直線に砲撃を放つ、いわば点での攻撃。とりあえず今のところは動きまわれば直撃はしないだろうな。後は隙について『零落白夜』を叩き込めれば勝機はある」

『零落白夜』。一夏のISに装備されている雪片の特殊能力。相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる能力。これにより、ほぼ強制的に相手のISの絶対防御が発動し、大幅にシールドエネルギーをそぐことができる。織斑先生の話によると、先生が世界一の座にいたのもこの能力によるところが大きいらしい。

しかし、強力な武器には何かしらの欠点がある。この武器の欠点は自分のシールドエネルギーを消費し、攻撃のエネルギーに転化しているのだ、シールドエネルギーの消費が通常のISよりも激しい。さらには、雪片のために拡張領域をすべて使用しており、近接格闘しかできない、いわば欠陥機なのだ。

(長引くと不利になる。速攻で決めろよ、一夏……)

俺の思いが通じたのか、加速体制に入った凰さんの隙をつき、一夏が瞬間加速、それと同時に零落白夜を発動した。おそらく、この奇襲が通じるのは一回きり。

「いけっ！ 一夏！」

雪片の刃が凰さんに届きそうになったその時――

ズドオオオオオオオン！

突然大きな衝撃がアリーナ全体を襲う。

「な、なにがおこったんですの！？」

俺たちがモニターを覗き込むと、アリーナ中央にはもくもくと煙を上げている。しかし、問題はそこではない。

「アリーナの遮断シールドを貫くほどの攻撃だと・・・？」

アリーナには安全のため、天井には攻撃を遮断するシールドがあるのだが、この衝撃波はそれを貫通して入ってきている。

「あ、あれは・・・なんだ・・・？」

箒がモニターに向かって指をさす。そこには――

「I・・・S・・・？」

ステージ中央には異形な形をしたISがたたずんでいる。深い灰色をしたそれは、手が異様に長く、つま先よりも下に伸びていた。し

かも首と呼べるものがなく、頭と肩が一体化している。そして何より『全身装甲』^{フル・スキン}。

通常ISは部分的にしか装甲を展開する必要がない。その理由として、防御はシールドエネルギーによって行われるからであり、防御特化ISで大型の物理シールドを装備することがあるが、肌を全く出していないISは今まで聞いたことがない。

しかも二メートルはある巨体。その巨大な体を支える多くのスラスター口に、頭部はむき出しのセンサーレンズが不規則に並びんでいる。腕部にはおそらくシールドを破壊したであろう、ビーム砲口が左右合計四つ。

（あれは誰かが操縦しているのか・・・？ いや、あの形状じゃ人があの中に入っているはずがない。ならあれは、人が操縦してない・・・？）

今までISの設計者としてマリア先生の下で学んでいたが、ISは無人機など作られない。コアに限りがある以上、自国の専用機としての開発のために使うはずだ。大体、ISには人が乗らないと絶対に動かないという定義がある。だが、それは今大きな問題じゃない。問題はアレがシールドを容易に破壊するほどの攻撃力を持っていることだ。

ふとモニターを見ると、一夏と凰さんはあのISと戦闘を行うようだ。まずいぞ、これは・・・。

「箒はそこで待っていてくれ！ セシリア、織斑先生のところに！」

俺は二人に指示すると、ピットの扉を開け、織斑先生のところへと急いだ。



「先生！ わたくしにI Sの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

先生達がいる部屋に入るなり、セシリアが叫ぶ。声を聞く限り、相当焦っている。

「そうしたいところだが、これを見ろ」

織斑先生がブック型端末を数回操作、情報呼び出し俺たちに差し出した。それは第二アリーナのステータスチェック画面。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・？ しかも、扉がロックされて——あのI Sの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

落ち着いたように話す織斑先生だが、よく見るとイラついたように画面を叩いていた。

「で、でしたら！ 緊急事態として政府に助成を——」

「やっている。これから三年の精鋭がシステムクラックを実行する。」

遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

「はああ……。結局、待っていることしかできないのですね……」

「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

「お前のISは一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことはありませんわ! このわたくしが邪魔だなど――」

「では連携訓練はしたか? その時のお前の役割は? ビットをどういう風に使う? 味方の構成は? 敵はどのレベルを想定している? 連続稼働時間――」

「わ、わかりました! もう結構です!」

「ふん、わかればいい」

放っておいたら一時間くらい続きそうな先生の指導を、セシリアは降参したように止めた。

「先生、ここから一番近いゲートを教えてください」

「なんだ、天加瀬。お前も突入部隊に加わるというのか?」

「いえ、それは場合によりますが、俺もクラック作業を手伝います。プラチナのコンソールを接続して処理させれば、他のところよりは

早く終わるはずです」

「なるほど……。お前も開発者のはしくれだったな。いいだろう、やってみろ」

その言葉に頷くと同時に、俺は廊下に飛びだした。

「奏羅さん、わたくしも手伝います！」

どうやらセシリアもついて来たらしいが、クラック作業で彼女に手伝えるようなことはない。なら、織斑先生の命令違反になるが――

「じゃあ、もしもの時のためにすぐにも狙撃できるように準備を頼む」

「はい！」

ゲートに到着すると、プラチナを展開。開閉システムの基部にプラチナのコンソールをつないでいく。

「準備は出来た……。あとはっ！」

プラチナのコンソールに開閉システムのプログラムが表示されると、俺はクラック作業を開始した。



「くっ・・・！」

一撃必殺の間合い。しかし、一夏の斬撃は簡単にかわされてしまう。

「一夏っ！ 馬鹿！ ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

一夏は普通なら反応できない速度と角度で攻撃しているのだが、敵ISはいとも簡単にかわしている。その理由は全身についているスラストーの尋常じゃない出力のおかげだった。

しかも、どれほど鈴が引きつけようとも、一夏の突撃には必ず反応し、回避行動を優先する。そうこうしているうちに二人のエネルギーは確実に少なくなっていく。

「・・・鈴、あとエネルギーはどれくらい残ってる？」

「180ってところね・・・」

しかし、これは攻撃分を考えていないエネルギーであり、実質耐久力として考えた場合である。これに攻撃に使うエネルギーを考えた場合さらに値は低くなってしまう。

「――で、どうすんの？」

「逃げたけりゃ逃げてもいいぜ」

「なっ!?! 馬鹿にしないでくれる!?! あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ」

「そうか。じゃあ、お前の背中くらいは守ってみせる」

「え? あ。う、うん。ありが――」

しかし、言い終わる前に鈴の横をビームが通り抜ける。二人は戦闘中だと改めて認識し、集中力を高めた。

「なあ、鈴。あいつの動きってなんか変じゃないか?」

ふと一夏が疑問に思ったことを口に出す。

「変って……。どういうことよ?」

「いや、なんつーか……。機械じみてないか?」

「ISは機械よ」

「そういうんじゃないでな。えーと……。あれって本当に人が乗ってるのか?」

「は? 人が乗らなきゃISは動かな――」

そこまで言って鈴の言葉が止まる。

「そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いているよな……」

彼女は今までの戦闘を振り返る。確かに、会話をしているときに敵の攻撃頻度は極端に落ちている――

『二人とも、大丈夫か!?!』

「奏羅!?!」

突然、奏羅から二人にプライベートチャネルから通信が入る。

『増援にはもう少し時間がかかる! それまで何としてでも持ちこたえろ!』

「奏羅、あいつなんかおかしいんだ、なんだか人が操縦してないような感覚なんだよ」

『・・・なんでお前はそういうところは鋭いんだよ。俺もまだ予測でしかないが、あれは無人機だと思ってる』

「まったく、あんたたちは・・・。じゃあ、そんなこと絶対あり得ないけど、アレが無人機だと仮定して攻めましょうか」

「じゃあ、容赦なく全力で攻撃できるな」

「全力も何も、その攻撃事態が当たらないじゃない」

「次は当てる」

断言する一夏。その様子に何か彼に策があると気づいた彼女は、不敵ににやりと笑った。

「一夏、どうしたらいい？」

「俺が合図したらあいつに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力で」

「？ いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても」

——考えがあるから。一夏は心の中でそう続けた。

『まったく、あんまり無茶するなよ』

「わかってるって。じゃあ早速——」

一夏が突撃姿勢に入ろうとした瞬間、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「一夏あつ！」

ハウリングが尾を引くほどの大声。その声の主は、篠ノ之箒だった。

「男なら・・・男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

またしても響くハウリング音。しかし、その行動がまずい展開へと導く。敵ISは、その発信者に興味を持ったようにセンサーレンズを向けていた。

「まずい！ 鈴、やれ！」

「わ、わかったわよ！」

敵の行動に焦った一夏はすぐさま突撃姿勢へと移行し、瞬時に加速すると、鈴に衝撃砲の発射を促した。

最大出力での砲撃を行うため、甲龍の補佐用力場展開翼が後部へと広がる。それを確認した一夏は、その射線上へと躍り出た。

「ちょ、ちよつと馬鹿！ 何してんのよ！？ どきなさいよ！」

「いいから撃て！」

「ああ、もうっ・・・！ どうなっても知らないわよ！」

高エネルギー反応を背中に受け、一夏は瞬時加速を作動させる。瞬時加速の原理は、後部スラスター翼からエネルギーを放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発に加速させるというもの。

このエネルギーは外部からのエネルギーでも代用可能なので、一夏は衝撃砲のエネルギーを使用して加速したのだ。さらに瞬間加速の速度は使用するエネルギー量に比例する。

巨大なエネルギーを背中に受けるのを感じ、みしみを体がきしむ音を聞きながら、一夏は加速した。

「——オオオオッ！」

右手の雪片式型が強く光を放ち、一回り大きいエネルギー状の刃を形成する。

——零落白夜を使用可能。エネルギー転換率九十%オーバー。

（俺は・・・千冬姉を、箒を、鈴を、関わる人たちすべてを——守る！）

敵ISと交差した瞬間、彼の必殺の一撃は、敵ISの右腕を斬り落とした。

しかし、その反撃で一夏は左拳の一撃をまともに受ける。さらには接触面から熱源反応、ゼロ距離で、アリーナのシールドを壊素ほどの威力をもったビームの発射態勢に入る。

「「一夏っ！」」

箒と鈴の叫び声が響く。しかし、一夏は不敵だった。

『またせたな、一夏』

「遅いぜ、奏羅……。狙いは？」

『完璧ですわ！』

刹那、客席からブルーティアーズの四機同時狙撃が敵ISを打ち抜いた。



「なんとか、間に合ったな・・・」

どうやら奇跡に近いタイミングでクラック作業が終了したようだ。扉が開いた瞬間、一夏が敵の右腕を切り落として反撃を受ける手前だった。

「ギリギリのタイミングでしたわ」

「俺はセシリアを信頼してたからな」

「そ、そうですよ・・・。とっ、当然ですわね！ 何せわたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生なのですから！」

一度戦ったからわかる。セシリアの狙撃の腕は確かだ。しかし、褒められるとは思ってなかったのか、ひどく狼狽した状態で言葉が帰ってきた。

「しかし、みんな無事でなによ——」

俺は目を疑った。ブルーティアーズの四機同時射撃を受けたはずのアイツが動いているのだ。まだ一夏と凰さんは気づいていない——

「一夏っ！ 凰さんっ！ よけろっ！」

俺はプラチナを展開すると即座にエアリアルフレームを呼び出し、ドッキングを行う。

（間に合えっ！）

ドッキングが終了すると、すぐさま瞬間加速を行う。敵の片方だけ残った左腕が最大出力モードに変形し、一夏を狙う。それを見た一夏は、鈴さんをかばうためにためらいなく前に出た。

「俺の友達にっ！」

——フラッシュドライブ起動、エネルギー最大出力

「手を出すなっ！」

間一髪、一夏の前に躍り出ると、俺は左腕のフラッシュドライブでビームを受け止める。二つのエネルギーは左手のひらで相殺され、爆発を起こした。

「まだだっ！ シューティングフレーム！」

俺はすぐさま損傷を受けたエアリアルフレームをパージすると、シューティングフレームとドッキング。腰部レールガンとソニック・ブレイズを連射し、敵ISに銃弾を叩き込んだ。

しかし、ボロボロになった状態の敵ISはなおかつ俺に左腕を向ける。俺はソニック・ブレイズの長距離射撃用に変形させ、ハイパーセンサーを狙撃モードへと移行する。

「悪いな——」

その言葉とともに左腕のビーム発射口を狙い撃つ。それがとどめの一撃となり、敵ISは爆発した。

「終わったか……」

なんとか勝てたらしい。しかし、俺の中で一つの疑念が残る。

「なんで、俺は・・・」

——ここまでISを使うことができるのか。だが、その考えも一夏の声によって中断された。

「やったな、奏羅！」

振り向くと、一夏と凰さんが近づいてきている。怪我はしてるが、どうやら無事らしい。

（よかった・・・あのときみたいに失わずに済んだ・・・）

「お前ほど無茶はしてないよ、一・・・夏・・・」

またか・・・自分の体にうんざりしながら、俺の意識はまたもや途切れてしまった。



「奏羅さん・・・無事でしたのね・・・」

一部始終を見ていたセシリアは、倒れてしまったとはいえ、奏羅の

無事を安堵していた。しかし、まだ彼女の胸の内には一つだけ疑問があった。

（あの時……。奏羅さんが飛び出して行った時、彼の横には女性の方がおられたような……。）

すぐに消えてしまったが、あれはいったい何だったのか。セシリアは奏羅とその女の子のことを考えると、何とも言えない不安に駆られるのだった。

第17話　く対抗戦と侵入者く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

なんか奏羅が無駄に強いような気もするんですが、今のところは火事場の馬鹿力とか主人公補正だと思ってみてくださいください（笑）

ご意見ご感想をお待ちしております

第18話　く予想は確信にく（前書き）

これにて一巻も最後です

では本編をどうぞ。

第18話　く予想は確信にく

「ここ・・・どこだ・・・？」

気づいたら俺は花畑のど真ん中にいた。最初は何が起こったのか分からず啞然としていたが、よくよく考えると俺は侵入してきたISと戦って意識を失ったことを思い出し、これが夢だと理解した。

「なんか、まるで天国みたいだな・・・」

夢の中で夢と理解することは珍しいが、周り一面ヒマワリの咲き誇る花畑という幻想的な風景を見ていると、ああ、やっぱり夢なんだなと思ってしまう。

なんとなく周りを見渡すと、俺は遠くに人影を見つけた。

「女・・・の子・・・？」

白いワンピースを着た女の子がヒマワリの花束を持っている。後姿だけしかわからないが、その女の子は、どこか懐かしい感じがした。

「まさか・・・」

彼女はこちらに気付いたのか振り返り、ほほ笑むと、その場から去っていく。

「ま、待ってくれ！」

呼びかけるが彼女は気にもせず進んでいく。俺はあの子を知っている。絶対に間違えるはずもない。

「未来——」^{みく}

俺はその子の名前を叫ぶ。俺の呼びかけに反応した彼女はこちらに振りかえると

「——」

俺に向かって何かをつぶやいた。

「うっ・・・」

目を覚ますと保健室。なぜここにいいのか疑問に思ったが、侵入してきたISと戦って、あの後倒れたということを思い出した。

（またISを動かして倒れるなんて、格好悪いよなあ、俺）

自分の体の弱さにあきれながら、前にも一回見たことがある天井を眺めていると、言い知れない焦燥感に襲われた。

（そういえば、俺夢をみてなかったか？）

眠っている間、なんらかの夢を見たことがうつすらと記憶に残っている。なんだろう、思い出したいのに思い出せない。とても大事な夢だったような気がする。

「・・・人間ってのは不便だよな」

どうでもいい夢は覚えていくせに、何か大切な夢はまったく覚えていない。思い出せないことにもどかしさを覚えながら、諦めて体を起こした。

「起きたか、天加瀬」

シャツとカーテンがあき、織斑先生が現れる。その顔は無表情に近いが、一応お見舞いに来てくれたようだ。

「先生、一夏や、凰さんは・・・？」

「二人とも無事だ。一夏のほうは全身に軽い打撲はあるがな」

一夏がアイツと戦っているときを思い出す。そういえば、衝撃砲をエネルギーとして瞬間加速していたような気がする。

「先生、あのISはどうなったんですか？」

「お前の攻撃により完全に機能を停止した。分析しようにも機能中枢が焼き切れて修復は困難だ」

「そうですか・・・」

しかし、織斑先生の言葉により、自分の中にあった疑問が結論へと

変わる。

「『完全に機能を停止した』ってことはやっぱりあれは……」

「ああ、お前の想像通り、あれは無人機だ」

やっぱり、俺の予想は当たっていたようだ。そしてこの疑問が解決したことにより、新たな予測が立った。

「今の話からの予想ですが、あのISのコアは世界政府にも登録されて……いないコアだったんでしょう？」

その言葉に織斑先生はにやりと笑う。

「フン。伊達にISの開発者を目指しているわけではないようだな。そうだ、あれは未登録のISコアを使用している」

これでもう一つの予測も核心へと変わる。ISは人が操縦しないと動かないという定義を捻じ曲げ、なおかつ、登録されていないコアを搭載して作られた無人機のIS。これを作ったのは――

「制作者は篠ノ之 東博士……」

「だろうな。送り込んできたのがアイツかは定かではないが、アレを作ったのは間違いなく奴だ」

しかし、送り込んだ理由がわからない。何のためにあれがこの学園にやってきたのか。ISのデータ収集？ いや、これはあり得ない。篠ノ之博士くらいになれば、データを収集するよりも自分で考えたほうが早いだろう。テロリスト目的も考えられるが、彼女が得られ

る利益がわからない。

「まさかあれは――」

「ここまでにしよう。この出来事は学園関係者全員に緘口令がしかれている」

俺の言葉は織斑先生によってさえぎられる。少し不満だったが、こは織斑先生の言うこと聞いておくことにした。目が覚めてすぐには出席簿で殴られたくはない。

「それに」

「それに？」

「やかましい連中が見舞いに来たようだからな」

その言葉とともに保健室のドアが勢い良く開く。

「奏羅さん！　目が覚めたのですか！？」

「奏羅、生きてるか？」

「ふん、お前よりは無事だろう」

「アンタは他人の心配よりも自分の心配をしなさいよ」

ぞろぞろと入ってくるクラスメイトともう一人を見て、みんなの無事を安堵したことで、病人として扱われてないようなみんなの態度に呆れてしまったことで、俺は微妙な表情を作ってしまうのだった。

「やっぱり自分の部屋が一番だな・・・」

保健室から寮に戻ると、自分の使い慣れたベッドに寝転ぶ。保健室とは違う、いつもの感覚に安らぎを感じる。すぐに睡魔に襲われ、うとうととしていると、突然部屋のドアがノックされた。

「あのー、天加瀬くん、いますかー？」

この聞き覚えのあるとぼけた声に起こされ、俺はドアを開ける。そこには我らが副担任、山田先生が立っていた。

「どうしました、先生？」

「あ、はい。お引っ越しです」

「引っ越し？」

主語がないのでよくわからない。俺が引っ越せばいいのか、山田先生が引っ越してくるのか。

「えっと、何かやらかして職員寮を追い出されたんですか？」

「ち、違います！ 天加瀬くんがお引越です！ 部屋の調整がついたので、織斑君の部屋にお引越してもらうことになりました」

ああ、そういうことか。しかし、せっかくこの部屋に慣れたのにここを離れるのは少し寂しいな。しかし、山田先生も一生懸命調整をしてくれたようなので何も言うまい。

「えっと、私もお手伝いしますから、すぐにやっちゃいましょう」

「・・・変なところいじらないでくださいね」

「な、なにを言ってるんですか！ いじりませんよ！」

目を離したらCD1枚くらい消えそうな気がするんだがなあ・・・。
山田先生が大のファンでもある俺の幼なじみ、塚乃旭のCDは売れ行きが大好調なようで、一般の音楽ショップなどでは常に売切れらしい。しかし、幼なじみのよしみなのか、CDが出るたびに発売前に旭が送ってくるので俺は自動的に手に入れることができるのだ。そのことを知っている山田先生に、CDが手に入らなかつと泣きつかれたことがあるので、少し警戒しておかないと持ってかれそうである。

「ふわあ、これ限定版のプロマイドじゃないですかあ・・・。通常盤しか手に入らなかつたんですよね・・・」

「や、山田先生！？ よだれたれてますよ！？」

何回かこんな調子の山田先生だったが、準備は一応きっちりとして

くれたので、予定より少し遅いくらいで引越しの準備が終わった。

「あとは自分で運びます。山田先生、ありがとうございました」

「いえいえ、転ばないように気を付けてくださいね」

そう言って去っていく山田先生。隣に移動するだけなのに転ぶことは万が一じゃないとないんじゃないだろうか。

俺は荷物を持つと隣の部屋の前へと移動し、ドアを開ける。

「おい一夏、荷物入れるの手伝って——」

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……。わ、私が優勝したら——つ、付き合ってもらおう!」

「……はい?」

「……へ?」

間の抜けた一夏と俺の声。軋むような動きをしながら顔をこちらへと向ける筈。その顔は絵の具で塗ったような赤。

時が止まった気がした。

第18話　く予想は確信にく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今回はオリジナルの話と二巻の最初のほうを混ぜております。

ご意見ご感想をおまちしております。

第19話　く旭、五反田食堂にてく（前書き）

オリジナルのようなオリジナルでないようなオリジナルな話です（笑）

では本編をどうぞ

第19話　　旭、五反田食堂にて

「ちょっと早く来すぎたかな・・・」

日曜日、俺は駅前の噴水前で人を待っていた。その待ち人は、正直厄介な人物。はあっ、とため息をついて周りを見渡すが、それっぽい人物はやってきていない。

「もうそろそろなんだが」

俺は時計を確認する、確か昼前の11時に噴水前だったはずなんだが・・・。そんなことを考えていると、急に視界が真っ暗になった。

「だーれだ」

聞きなれた声。こんな古典的なことを平気でやるやつは一人しかない。

「このっ、あさ——」

「わわっ、大声あげちゃだめだってば！」

俺の口をふさいでくるこいつは、俺の幼なじみで、今話題沸騰中のアイドル、塚野旭。

「す、すまん！」

あわてて周りを見渡すが、どうやら誰も気づいていないらしい。ホッと胸をなでおろすと、改めて旭の姿を見る。

「仕方ないんだろうけど……。なんて格好だよおい」

旭の恰好は、上は最近の子が来ているようなブラウスに、下はホットパンツとニーソックスというまともな格好なのだが、顔には一昔前の刑事ドラマで使われそうなサングラスに、大きな麦わら帽子と逆に人の目を引きそうな格好だった。

「しょうがないよ、囲まれて歩けなくなることもあるんだし」

こんな話を聞くと改めてこいつは俺とは違う世界の住人なんじゃないかと思ってしまう。

「で、どこいくんだ、あさ……。えーつと」

「あーちゃんってよんで」

「な、なんでそう呼ばなきゃいけないんだよ！ お前の名前大声で叫ぶぞ！」

今回はこいつが有名人ということで俺が有利だ。ここで押せば俺の意見は通るはず……。

「いいけど、週刊誌沙汰になって、私の熱狂的ファンから自宅にカミソリ届いても知らないよ」

「……勘弁してください」

女尊男卑はこんなところまではびこっているらしい。くそう、厄介な奴になったもんだ。

「じゃあ、名前の端っこのほうをとって『つかさ』でいいか？」

「うーん……。ま、それで勘弁してあげるよ」

いたずらが成功したように微笑む旭。その姿は、俺の昔から知っている旭の顔。

「・・・変わらないな、お前」

「何か言った？」

「いや、なんでもない。で、どこいくんだ、つかさ？」

「じゃあちよっとこの辺を散歩がてらウロウロしてみようっか」

「わかったよ」

旭と出かけると大体ぶらついて終わる。でも俺は、その変わり映えない、いつも通りの行動にんだか少し安心した。



「ほんとに何も買わないよなあ」

「こういうのは買わないからいいんだよ、奏君」

歩き始めて大体一時間。旭は店に興味を持って入ったりするのだが、まったく何も買わない。俺は冷やかしているようで申しわけなく思うのだが、旭は昔と変わらず、そんなことを気にもせず店をでる。

「しかし、さすがにいい時間だし、どこかで何か食べないか？」

時計は12時をさして大体10分くらいたっている。おなかもすいてくる時間帯だ。

「いいよ、奏君のおごりね」

「お前のほうがお金持ってるんじゃないのか？」

「こういうときは女の子におごるのが男の子ってもんだよ」

それを言われるとそんな気もする。しかし、この辺よく知らないんだよね……。

「おっ、奏羅じゃないか！」

そんなとき、聞いたことある男の声。

「げっ、一夏……」

あろうことか旭と一緒にいるときに一夏に遭遇するとは……。一夏は前に一回旭を見ているので、変装しているが声とかでばれてしまいうんじゃないだろうか。しかし、当の本人は俺の隣にいる旭を全

く気にしていない様子で、

「奇遇だな。友達と遊んでんのか？」

と話しかけてきた。

「これほどお前の鈍さに感謝したことはなかった」

「なんのことだ？」

「いやなんでもない」

たぶんこの調子だと、俺の横にいるのが天下のアイドル様だとまったくもって気づかないだろう。ていうか、塚乃旭ってアイドルの存在自体知らないんじゃないだろうか。

「ねえねえ、このあたりで飲食店知らない？」

「えっと、君は？」

「前に合ったじゃない、つか――」

「こいつの名前は、つかさっていうんだ」

本名を名乗ろうとした旭の言葉をあわててさえぎる。ふと見ると旭はこの状況を楽しんでいるようで、俺のほうを見てにやにやしていた。確信犯かよ、こいつ。

「つかさって呼び捨てでいいよー」

「わかった。よろしくな、つかさ」

ありがとう、神様。こいつを鈍感に作ってくれて。

「えっと、飲食店だっけ？　ちょうど俺も知り合いの店に行こうとしてたんだよ」

「そこ美味しい？」

「おう、なかなかうまいと思うぞ」

「じゃあ、奏君。そこにしよう！」

「はぁ……。わかったよ、もう……」

俺は意気揚々と歩を進める旭を見て、いつものことだがやっぱり旭のペースに巻き込まれてるなと思うながら二人の後について行くのだった。



「ついたぞ」

一夏の指差す先には、いかにもな個人経営の飲食店。

「ご……はん……だ食堂？」

「違う違う。五反田食堂ごたんだっていうんだ」

珍しい名前なので読み方がわからなかった旭に一夏が説明を入れる。
俺は『ごはんだ食堂』って読んでも、味があっという気がする。

「じゃあ、中に入ろうぜ」

一夏が扉をあけると、いらっしやいませと、俺たちと年齢が同じく
らいの赤い髪の男子が奥からやって来た。

「お、弾だ」

「あれ！？ 一夏じゃん！」

なるほど、この男子が一夏の知り合いなのか。

「今日は友達連れなのか？」

「ああ、こっちは前に言ったIS学園で一緒の男子。こっちはこいつの友達だ」

「へえ……。俺は五反田弾ごたんだん。一夏とは中学からの付き合いだ。弾でいいぜ」

「俺は天加瀬奏羅。こっちは、俺の幼なじみのつかさっていうんだ」

「よろしくね」

旭を見てなんとも微妙な顔をする弾。それもそのはず、こいつの顔ははでかいサングラスにおおわれ、頭には季節外れの麦わら帽子。この姿を動じないやつなんていないだろう。一夏はどうじてなかったけど。

「じゃあ、注文が決まったら呼んでくれ」

弾に案内され、店の真ん中のほうのテーブルへと座る。テーブルに合ったメニューを開くと、食堂という言うにはふさわしくさまざまな料理が並んでいた。

「一夏君、お勧めは？」

「魚系かなあ……。カレイの煮付けとか美味しいぞ」

「じゃあ、業火野菜炒め定食にしようかな」

「お前聞いといてそれはないんじゃないか……。？」

そんな漫才を繰り広げながら、注文を決める。一夏は魚のフライ定食、旭は業火野菜炒め定食、俺は一夏のお勧めの煮付け定食を頼んだ。

「おう、一夏じゃねえか」

ぬつとでてきた男の人に少しびっくりする。料理服を着ているが、腕まくりをしており、その腕は筋肉隆々。まるで漫画の中に出てきそうな料理人がたっている。

「巖さん、お久しぶりです」

「今日は友達も一緒か。おい弾、ちょうどいい。せっかく友達が来てんだからお前もついでに昼を食っとけ」

大声で奥のほうに叫ぶと、「へいへい」と声がし、弾が出てくる。どうやら弾の親族の方なのだろう。一夏に聞くと、どうやら祖父で、あれでも70歳らしい。

「蘭、飯だぞ！ 降りてこい！」

巖さんはさらに奥のほうに向かって叫ぶと、「わかったー」と声がし、階段を下りてくる音が聞こえた。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いつ、一夏・・・さん!？」

降りてきたのは弾によく似た髪の色をした女の子。今まで家でくつろいでいましたとわかるような、ラフな格好だった。

「い、いやっ、あのっ、来てたんですか・・・？ 全寮制の学園に通ってるって聞きましたけど・・・」

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子を見に来たついでに寄ってみた」

「そ、そうですか・・・」

そういった後、後ずさりをしながら店の奥へと消えていった。

「しかし、あれだな。蘭とは三年間の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれないのかねえ」

「は？」

信じられないという声を上げる弾。一夏のことなのでなんとなく予想がついてしまう。

「いや、ほら、だってよそよそしいだろ。今もさっさと部屋から出て行ったし」

「一夏君ってさ」

「おう、なんだつかさ」

「わざとやってるの？」

「なにをだ？」

だめだ、やっぱりまるでわかってない。旭もサングラス越しだが信じられないという顔をしているのがわかる。

「お待たせしました」

先ほどの女の子の声がし、声のほうを向く。そこには、先ほどとは違ってかわってどこかに出かけるようなおしゃれをした女の子が立っていた。



全員の料理がでそうとうと、旭が元気よく手を合わせた。

「じゃあ、いただきますーす」

「ちょっと待ちな」

料理に手を付けようとした旭は、巖さんに呼び止められた。

「お嬢ちゃん、帽子とサングラスをしたままご飯を食べるってのは
いただけねえな」

ゴゴゴという効果音がしそうなほどの威圧感を放っている。あーや
ばいなこの状況。

「つかさ、悪いけど巖さんってマナーに巖しいんだ。とったほうが
いいぞ」

「そうなんだ・・・」

一夏に言われ、周りを見渡す旭。確かに今は時間帯も外れ、食堂に
は誰もいないから問題はない・・・はず・・・たぶん。

「じゃあ、外しますね」

「ば、ばか！」

しかし、俺の制止も聞かずに旭は帽子をはずし、サングラスをとった。

「じゃあ、食べようか」

特に気にしていないような様子のニコニコ顔の旭に、頭を抱える俺。何もわかってないような一夏と厳さんに、声が出てこない様子の五反田兄妹。

「っ、っ、つつっ、っ」

「っ?」

「「塚乃旭iiiiiiiiiii!」」

「な、なにおどろいてるんだ、二人とも?」

「い、一夏さん知らないんですか!」?

「なにを?」

やっぱり知らなかったんだな、こいつ。

「一夏。お前、まじかよ・・・」

「こ、この人は、今日日本で一番有名なアイドルなんですよ!」?

「・・・まじで？」

ビッ！っとテレビを指差す弾。それにつられてテレビを見ると、『徹！OH！の部屋』が流れており、そこには俺の幼なじみが写っていた。

「あー、あれ先週の火曜日に収録した奴だ」

のんきな旭の言葉に、もうどうにでもなれと匙を投げてしまった俺。この後、ひと騒動があったのは言うまでもなかった。



「あー、楽しかった」

五反田食堂を後にし、一夏と別れ、俺たちは帰路へとついた。あのあと五反田一家と旭が仲良く写真を撮っており、旭はニコニコしながら眺めていた。

「いやー、ファンとの交流も大事だよね」

「俺は心配で胃が死にそうになったよ」

旭はごめんごめんと謝るが、その顔はやっぱり笑っており、それを

見て俺は盛大にため息をはいた。

「ああ、そうそう。奏君にお願いがあるんだった」

そう言ってごそごそと自分のカバンをあさる旭。はいとおれに渡してきたのは、数枚にわたる計画書だった。

「お前・・・これ!？」

「これ、奏君に設計してもらおうかなーって」

「いや、設計できないこともないけど・・・って、これお前が考えたのか!？」

「そうだよ、今度から私が使う、私だけのライブステージ」

いつもと違う声色の旭。その顔はにやけた顔ではなく、真剣な顔。

「これなら持ち運びもできるし、いつでも、どこでも歌える」

「確かにそうだけど・・・。俺が考えていいのか?」

「うん、こういうのも設計したほうが奏君の将来のためになるって。それに」

「みんなに歌を届けるのが、私の夢だから」

まっすぐな旭の瞳。自分の夢を追いかける決意が伝わる。そこまでの覚悟がわかってしまった以上、俺の思いは一つだ。

「わかった、なんとかするよ」

「ありがとう、奏君」

俺の答えに旭はいつものにやけた顔じゃない、本当にうれしそうに笑った。

第19話　く旭、五反田食堂にてく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

次回はいよいよ二巻の本編です。

ご意見ご感想お待ちしております。

第20話　く二人の転校生く（前書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。
おかげさまでPVが5万を突破しました。

記念に何かしらのことをしようと思っておりますが、詳しくはあと
がきで。

それでは本編をどうぞ。

第20話　二人の転校生

「奏羅、朝飯に行こうぜ」

「おう、ちよっと待ってくれ」

俺と一夏が同じ部屋になって数日。俺と一夏は朝は毎日一緒に食事をとっている。ルームメイトかつクラスメイトということもあるのだろうが、やっぱり男同士っていうのは変に意識しないので落ち着くっていう理由が一番だろう。

「一夏、いる？」

「おう」

廊下から聞いたことがある声が聞こえる。一夏がドアを開けると、そこには凰さんが立っていた。

「い、いきなり開けないでよ！　びっくりするでしょうが」

「何の用があるんだ、鈴？　俺と奏羅は今から朝飯食べに行くんだが」

「ふふん。まさにそうじゃないだろうかと思って誘いに来てあげたのよ。・・・奏羅がいることは誤算だったけど」

あの一件の後、一夏と鈴の仲は元通りに戻っていた。まさに雨降って地固まるだ。雨といわず土砂降りだったような気がするが。ちなみに、あの一件以来俺も『鈴』と呼んでもいいといわれた。俺

はまだそこまで親しくないような気がしたんだが、彼女いわく、

「あ、あんたがあの時『友達』って叫んだんでしょうが！」

らしい。そういえば、俺の友達に手を出すなどか言ったような言わなかったような。

「そりゃあどうも。じゃあ食堂に行こうぜ」

「ええ」

三人で並んで歩きだす。朝ということもあり、ところどころドアが開いており、中から制服姿の寮生が出てきていた。

「お。織斑君と天加瀬君だ。やっほー」

一人のほほんとした子が、俺たちに手を振っている。確か名前は、のほとけほんね布仏本音・・・だったかな？ 普段一夏がのほほんさんと呼んでいるので、いまいち名前があってるか不安になる。

「やー、おりむーにまかせー」

「その愛称は決定なのか？」

独特のあだ名に一夏が突っ込む。まかせーって俺のことだろうか？

「決定なのだよー。それよりさあ、私と一緒に朝ご飯しようよー」

まるで構ってほしい子犬のように接近してくる彼女。昔ペットシヨップでこんな犬を見たことがある気がする。

「残念、一夏はあたしと朝ご飯するの」

「わー、りんりんだー。勇気が出そうだねー」

「そ、その呼び方はやめてよ！」

鈴は声を荒げるが、布仏さんはまるでのれんに腕押し、ぬかに釘と
いったようすだ。こんなところは旭に似てるな。

「まあ、鈴。落ち着けて。別に四人で食べてもいいだろ？」

「よくないけど・・・いいわよ」

よくないのかいいのかはつきりしない返事を返す鈴。まあ彼女にと
っては俺と布仏さんはお邪魔虫といったところか。

「あー、一夏。俺は布仏さんと朝飯食べるわ」

「どうしてだ？ みんなで食べたほうがおいしいぞ？」

「いや、ほら。朝の食堂は人が多いし、別れたほうが座りやすいだろ
う」

「んー。確かにそうだな」

よし、もうひと押しだ。

「あー、あと俺部屋に忘れ物したからとりに行ってくる。先行つと
いてくれ」

「そ、それはしょうがないわね！　じゃあ一夏、先に行きましようか！」

俺の意図に気付いたのか、鈴も援護射撃。

「そうか。じゃあ、またあとでな」

「ああ、行け行け」

俺が促すと二人が並んで歩きだした。

『鈴。これで貸し一つな』

『・・・夕飯おごるってことでいい？』

『わかった』

プライベート・チャネルで薄暗い取引が行われていたのは内緒である。



食堂に着くと、俺たちは食券を買い、食堂のおばさんから食事を受

け取る。俺は和風定食をえらび、布仏さんは・・・何かいろいろトッピングを頼んでいたのは覚えてる。

適当にあいている席に着くと、なんだか周りの女子が噂話をしているようだった。

「女の子って噂話好きだよな」

「そーかなー。私はそうでもないけどなー」

確かに布仏さんはそういうことに疎そうな気がする。普段の行動も普通の人より遅いし。

「まあ、それはおいといて・・・。それ、なに？」

先ほどから布仏さんがすごい音を立てて食べているもの。彼女が持っているどんぶりの中にはご飯が入ってた気がするが、明らかにご飯を食べている音ではない。

「ふっふっふ。これは本音スペシャル・朝ご飯バージョンなのだよ」

彼女の話聞く限り、ご飯の上に複数頼んだトッピングを乗せ、テーブルの上にある調味料で味付けして、かき混ぜたものらしい。

「まかせーも一口食べるー？」

テーブルの上に常備してあるレンゲでその本音スペシャルを一口分すくうと、俺の前に差し出してくる。先ほどからどんぶりの中を見るのが怖くて覗いてなかったが、案の定レンゲの上には何かよくわからない物体が乗っていた。

（これ、ほんとに食べれるのか・・・？）

もし食べなかった時の彼女の落胆した顔。捨てられた、子犬のような顔。それを想像しただけでも俺の良心は傷んでしまう。

（ええい、ままよー）

俺は意を決してそれを口に入れた。

「・・・おいしい」

「でしょー。これは自信作だからねー」

さつきと同じようにおいしそうに食べている彼女。なるほど、見た目はどうであれ、美味しいかどうかは食べてみないとわからないということか。

「まかせー、茶碗蒸しひとくちちょうだい」

「ああ、いいよ。具とかほしいのある？」

「じゃあ銀杏ー」

他に色々あるだろうに銀杏を欲しがるのか。やっぱりどこか変わってるな、この子。俺は埋まってる銀杏を探し当てると、茶碗蒸しと一緒にスプーンに乗つけて差し出した。

「はい、あーん」

「あーん」

パクリとおいしそうに口に含む様子を見ると、小動物に餌付けしている気分になってなんだか楽しくなってくる。

「うん、うまい」

「それはよかった」

「そ、奏羅さん!？」

俺が布仏さんの餌付けを楽しんでると、後ろから洋風定食を持ったセシリアに話しかけられた。

「な、何をしていらっしやるんですか!」

「いや、えっと・・・」

さすがに餌付けしてたとはいえないよなあ・・・。

「お互いの朝ご飯を交換してたんだよー」

おお、布仏さんナイス。そうそう、そういうことにしておこう。

「で、では、わたくしとも朝ご飯を交換させてください」

そう言いながら俺の隣の席へと座る彼女。

「えっ、別にいいけど・・・。何が欲しいんだ?」

「さっきそちらの方に差し上げたものと同じものを」

銀杏か・・・？ でもこれって結構好き嫌いが分かれるものなんだけだな。

「おー、銀杏をチョイスするとはせっしーも通だねー」

「せ、せっしー？」

「愛称だよ愛称。じゃあセシリア、あーん」

俺は先ほどと同じように銀杏と茶碗蒸しをスプーンに載せ、セシリアに差し出した。

「あ、あーん」

パクリと一口。口を動かすにつれて、セシリアの表情が微妙なものへと変わっていく。

「な、なんですの、これ・・・」

「やっぱり食べたことなかったか。好き嫌いが分かれる食べ物だけど、セシリアは嫌いみたいだな」

「じゃあ、次は本音スペシャルをあげるー」

布仏さんが例の物体をセシリアの前に差し出した。

「あ、あなた・・・。こんなものをわたくしに食べさせるつもりですの・・・！？」

「まかせーはおいしいって言ってくれたよー」

「そうそう、だまされたと思って食べてみるよ。おいしいからさ、な？」

俺と布仏さんでレンゲを近づけていく。セシリアの口まであと一センチ。

「ちょ、ちよつと……。い、いやあああああああ！！」

朝の食堂にセシリアの悲鳴が響き渡った。



「まったく、ふざけるのもいいかげんにしてください！」

「まあ、おいしかったんだからいいだろ、別に」

「そ、それは……。とにかく、あんな悪ふざけはもうやめてください！」

あの後結局一口食べたセシリアは、味には納得したようなのだが、どうも機嫌を損ねてしまったようだ。教室に着いてからずっと、俺に文句を言っている。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます!」

気がつくのと、休み時間も残り少なくなっており、織斑先生と山田先生が教室に入ってきていた。しかし、織斑先生が現れただけで今まで騒がしかった教室の空気が一変、クラス全員が軍隊のように礼儀正しくなるのは、この一カ月足らずで先生の怖さを思い知ったからだろう。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わないだろう」

いや、構うと思うんですが。たぶんこの考えは大半の女子と同じ考えだろう。さすがに俺と一夏がいるので下着はまずいんじゃないだろうか。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ!」

連絡事項を言い終えた織斑先生は山田先生にバトンタッチする。ちようど眼鏡を拭いていたようで、あわてたように返事をした。

「ええとですね、今日は何と転校生を紹介します! しかも二名です!」

「え
・
・
・
・
・
・
」

[illegible]

山田先生のまさかの発言。うわさ好きの女子たちの情報網をかいくぐって、ふたりも転校生が現れたのだからそれは驚くに決まっている。

（なんで二人ともこのクラスなんだろうか？ 一人は三組とか、四組でいいと思うのに）

そんなことを考えているとクラスの扉が開く。

「失礼します」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

クラスに入って来た二人の転校生を見て、ざわめきが止まる。それ
もそのはず、入って来た転校生の一人が男子だったのだから。



「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不

慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」
転校生の一人である男子がにこやかな顔で自己紹介する。その姿にあっけにとられたのは俺だけではないはずだ。

「お、男・・・？」

クラスの誰かがそうつぶやく。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

「ぎゃ・・・」

「はい？」

「きゃあああああああああああああああつ！」

まるで共振するかのようにクラスの中から発生した歓喜の叫びは一瞬で教室の隅から隅までに伝播する。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~~！！」

いやはや、うちのクラスは今日も元気だ。いきなりこんな反応をさ

れる転校生君も災難だろう。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうにぼやく織斑先生。今日もお仕事お疲れ様です。

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介がおわってませんからー！」

男子が転校していたということで注目がそれていたが、もう片方の転校生。デュノアを『貴公子』と例えるなら、彼女は『軍人』といった感じだ。与える印象も対照的で、彼の温和な印象に対し、彼女は冷徹な印象を受ける。

「・・・・・・・・」

しかし、当の本人はいまだに口を開かず、腕組みをした状態で教室の様子をくだらなそうに見ていた。しかし、それもわずかなこと。今は織斑先生にだけ視線を向けている。

「・・・挨拶をしろ。ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生の言葉にすぐさま反応し、佇まいを直して返事をする彼女をみていると、本当に軍人なんじゃないだろうか。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えると彼女は見事な敬礼を織斑先生に向けた。一夏から聞いた話だが、織斑先生はドイツで軍隊教官として勤めていたことがあったらしい。つまり彼女はドイツ出身の軍人なのだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・」

クラスメイトたちの沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしただけで彼女はまた口を閉ざしたままだった。

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなった山田先生が精一杯の笑顔でボーデヴィツヒさんに話しかけるが、一蹴されてしまう。あつ、泣きそうになつてゐる・・・・。

（なんだか、いろんな意味で厄介な転校生達が入って来たな・・・）

いつもの癖で、これから先のことを考えていると急にものすごい音がし、我に返る。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

どうやら今のはボーデヴィツヒさんが一夏をたたいた音らしいが・・・。二人に何かあったのだろうか？

（でも今の言葉を聞く限り、どうやら彼女が一方的に怒っているようなんだけどな）

クラス中の視線を集めていることに気付いているのかいないのか、彼女はそのままあいている席に座ると、そのまま腕組みをして微動だにしなくなった。

「あー・・・ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

織斑先生が皆を促すように手をたたく。いろいろ考えていたことがあったが、とりあえず移動しなければ女子がここで着替え始めてしまう。

「織斑と天加瀬はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

確かにそうなるな。このまま取り残していくとどうなるか分からない。

「君たちがIS学園にいる男の子なんだね。初めまして。僕は――」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始める」

一夏が説明すると同時に動き出す。よくわかってないような彼を置いていかないように、俺はシャルルの手をとるとそのまま教室をでた。

「とりあえず男子は空いてるアリーナの更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、はやめに慣れてくれ。奏羅、今日は

どこがあいてるんだっけ？」

「今日は第二アリーナだ」

しかし、彼は先ほどと違って、なんだか落ち着かなそうだった。

「悪いな、転校早々こんな感じになって」

「えっ？ ああ、大丈夫だよ」

「そうか、まだ序の口なんだけどなっ！」

とりあえず階段を下って一階に下りる。しかし俺も一夏もスピードを落とさない。なぜなら――

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも織斑君と天加瀬君も一緒！」

そう、HRが終わったのだ。各学年から情報収集のために選抜されたプロフェッショナルがかけだしてきている。これに捕まれば質問攻めの挙句遅刻し、鬼教官からの特別カリキュラムという地獄のフルコースだ。絶対に逃げ切らなければ。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会え！」

まるで時代劇の様なセリフの後、続々と追跡者の人数が増えていく。

「な、なに？　なんでみんな騒いでるの？」

状況が飲み込めないのか、デュノアは困惑顔で聞いてくる。

「そりゃ男子が俺たちだけだからさ」

「・・・・・・？」

「いや、どう考えても珍しいだろ。ISが操縦できる男って、今のところ俺たちしかないんだろ？」

「あっ！　ああ、うん。そうだね」

ほんとに大丈夫かな、この子。

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は天加瀬奏羅。奏羅って呼んでくれ」

「俺は織斑一夏。俺も一夏って呼んでくれ」

「うん。よろしく奏羅、一夏。僕のことシャルルでいいよ」

「わかった。シャルル」

しかし、今にも後ろの集団は俺たちに追いついてきそうだ。

「一夏、いい作戦がある。この状況を最小限の被害で抜け出せる、最善の策だ」

「さすが奏羅！　で、その作戦って？」

「おう、それはな」

俺はスピードを上げて一夏を追い越すと、一夏の足を引っ掛けて転ばせた。

「んなっ!？」

「おとり作戦だ。悪いな一夏」

「う、うわああああああああああっ!」

「えっと・・・」

「ああ、一夏なら大丈夫。アイツおとりになるのがうまいんだ」

俺は茫然としているシャルルの手を引き、また走り出す。一夏は非常に残念ながら逃げ切れず、後ろの大波にのみこまれていった。



「っ、ついた・・・」

更衣室に着くころには逆に俺はシャルルに引っ張られるような形で

走っていた。

「大丈夫、奏羅・・・？」

「あ、ああ、問題ない問題ない、早く着替えよう・・・」

ぜえぜえ言いながら制服のボタンを上だけ外し、Tシャツと同じ要領で脱ぎ捨てる。

「わあっ！　ちょ、ちょっと待って」

「ど、どうした？」

「あ、えっと、着替えるときは、あっち向いてて・・・・・・・・ね？」

「いや、別にじろじろ見ないけどき・・・」

なんだそんなことか。まあ、男同士でも見られたら恥ずかしいもんな。そう思いながら服を脱いでいく。

「シャルル」

「えっ？　な、何かな？」

「俺のほう見てない？」

「み、見てないよ！」

そうか、ならいいんだが。じゃあ先ほど感じた視線は気のせいだったのだろう。

「あ、ISスーツ着てたんだ・・・」

「えっ？ 普通だろう、これくらい」

「あ、そ、そうだね。普通だよね」

そして沈黙。・・・なんだかさっきの声が残念そうに聞こえたんだが、もしかしてシャルルってそっちのほうの人なのか・・・？

「え、えーっと。そ、そのスーツ動きやすそうだな。どこのやつ？」

なんだか変なことを考えてしまいそうなので、適当に思いついた話題を口に出す。

「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフランクスだけど、ほとんどフルオーダー製」

「デュノアって、そういうシャルルの名字もデュノアだったな。もしかして――」

「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいIS関係の企業だと思う」

なるほど、現在第二世代機として有名なリヴァイヴを生み出したあのデュノア社か。そういえば昔、一回だけだけどマリア先生の研究所で企業の人にあつたことがある。

「なるほど、なんか気品とかに満ちてると思ったけど、いいところの育ちってやつだったのか」

「いいところ・・・ね」

その言葉にシャルルが視線をそらす。何か事情があるのだろうか？

「あ、悪い。聞いちゃいけないことだったかな？」

「あ、ううん。そういうことじゃないんだ。だから気にしないで」

その時突然ドアが開く。そこにはあの大波から命からがら逃げ切ったであろう一夏の姿があった。

「い、一夏、大丈夫？」

「お、おう、シャルル。なんとかな・・・。奏羅、お前俺を殺す気か？」

「は、ははは。悪かったよ・・・」

後日、一夏に昼飯を奢ることになったのは言うまでもなかった。

第20話　く二人の転校生く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

前書きで書いたPV5万記念なのですが、何をするかに悩んでおります。

絵を描いてもいいし、簡単な小説を描いてもいいかなと考えたりしております。

しかし、こんなことをやってほしいなど、みなさんに何かいい案があれば採用させていただきますので、気軽に提案お願いします。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第21話　く食べてみないとわからないく（前書き）

>i24814—3051<

PV五万記念といことで一枚

頭痛だったのでかなり適当ですが（笑）

第21話 く食べてみないとわからないく

「遅い！」

第二グラウンドに無事到着したのだが、やっぱり時間には間に合わず、鬼教官に怒られてしまった。これ以上怒られるわけにはいかないので、急いで一組整列の端に並ぶ。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね。スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「道が混んでたんだよ」

冗談混じりに一夏が答える。実際俺たちの通る廊下は大渋滞してたしな。

「ウソおっしゃい。いつもは間に合うくせに」

「おい、お前らその辺にしとけて」

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？　そうでないと二月続けて女性からはたかれたりしませんわよね？」

俺の制止も聞かずに一夏をなじるセシリア。彼女は一夏に何か恨みでもあるのだろうか？

「なに？　アンタまた何かやったの？」

後ろの列から声が聞こえる。後ろの列は二組の列なので、声の主を特定するのは簡単だった。

「鈴、お前も参加するなって・・・」

「なによ、あたしには関係ないってわけ？」

いや、そういう意味じゃなくてだなあ・・・。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？　一夏、アンタなんでそうバカなの！？」

「安心しろ。馬鹿は私の目の前にも二人いる」

案の定、鬼教官が登場。だからやめとけっていったのに。今日も朝から出席簿があいも変らぬ音で響き渡るのだった。



「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を行う」

「はい！」

今日から本格的な実践訓練ということもあって、みんなの返事にもどこか気合いが入っている。

さっきから主に俺の横のほうと後ろのほうから気合いが入っているとは言い難い文句が聞こえるが、気のせいだと思っておく。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちよつと活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰！ オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!?!」

まあさっきの雑談が主な原因だろうな。だからやめとけって言ったのに。

「専用機もちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが・・・」

「一夏のせいなのになんであたしが・・・」

「まったく・・・。お前ら少しはやる気をだせ。――あいつらにいいところを見せられるぞ?」

最後のほうは聞き取れなかったのだが、その言葉を聞いた瞬間、二人は妙に生き生きとしてきた。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね! 専用機もちの!」

さっきとは打って変わってすごい気迫だな。一体織斑先生に何を言われたんだ？

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こちらのセリフ。返り討ちよ」

「あわてるな馬鹿ども。対戦相手は――」

織斑先生が対戦相手の名を告げようとした時、どこからかISの飛来する音とともに、

「ああああああっ！ ど、どいてくださいっ！」

と山田先生の叫び声が聞こえた。見ると、こちらのほうに向かって一直線に向かってきている。

「あゝ、一夏。頼んだ」

とりあえず山田先生を止める役目を一夏に押し付けようと、先生の進行方向上に一夏を押し出した。

「って、ええっ!？」

と、思ったら俺の体まで一夏の方角について行く。あろうことか、一夏が俺の手をすんでのところでつかんだらしい。

「さっきの二の舞はくわないぜっ！ お前も道連れだ、奏羅！」

「バ、バカっ！」

ドカーン！

俺たちは山田先生の突進を受け、数メートル後ろに吹っ飛ばされた後、ゴロゴロと地面を転がった。

「い、一夏……、生きてるか……？」

「なんとかな……。白式の展開が間に合わなかったらどうなったか……」

ふにゅっ。

「「ん？」」

一夏と俺の声がはもる。左手にに伝わる柔らかい感触。いままでなんか触ったことあるようなないようなそんな不思議な感触が掌に伝わっている。

「あ、あのう、織斑くん、天加瀬くん……ひゃん！」

山田先生の声が聞こえる、俺の左のほうから。おそろおそろ自分の左手のほうに目をやると、そこには、俺の左手と一夏の右手が並んでいた。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。しかも三人でだなんて……。いえ！ 場所だけじゃなくてですね！ 私と織斑くんと天加瀬くんは仮にも教師と生徒ですね！ そ、それに貴方達二人がいくら仲がいいからといっても二人とも私とだなん

て……。ああ、でもそれはそれで……」

どうやら地面に三人一緒に仲良くゴロゴロところがあった結果、俺の左手は山田先生の左の山田を、一夏の右手は山田先生の右の山田を無意識のうちに鷲掴みにしていた。

「う、うわっ！ す、すいませー」

刹那、ハイパーセンサーから送られてくる敵ISが射撃体勢に入るという情報。反射的に体を動かすと先ほどまで顔があった場所をレーザーが通り抜けた。

「ホホホホホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ」

怒ってる、ものすごく怒ってる。実際には見えないがいわゆる『怒りの四つ角』ってやつが、セシリアのおでこに浮いているのがわかる。

「……………」

ガシーンとなにかを組み合わせる音が響く。見ると、鈴が双天牙月を連結させていた。そういえば鈴があれを組み合わせると投擲もできるって――

「死ねっ！」

ためらいもなく一夏に向けてそれを投げる鈴。ってか、このコースだと俺も巻き添えじゃないですかっ!？

「うおおおおっ！」

なんとか身をかがめてよけた俺と一夏だったが、鈴が投げたそれはブーメランのように戻ってくる。まずい、これは死んだ。

「はっ！」

短く二発分だけ火薬のはじける音がし、双天牙月はその軌道を変える。どうやら、誰かが銃弾を放って助けてくれたらしい。

俺たちはピンチを救ってくれた射手に目を向けると、驚いたことにそれは山田先生だった。

倒れたままの状態から、わずかに上体だけ起こしての射撃であれだけの命中精度。その様子は普段のあわてっぷりからは全然想像もつかない姿だった。

「・・・・・・・・」

どうやら、驚いたのは俺たちだけでなく、セシリアと鈴はもちろん、普段の山田先生を知っている他の女子たちもだった。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生どまりでしたし・・・」

ぱっといつもの雰囲気に戻る山田先生。織斑先生の言葉に照れているのか、ほほが少し赤かった。

「山田先生って代表候補生だったんですか・・・」

「え、ええ。さっきも言った通り、代表候補生どまりでしたけどね」

俺の質問に、恥ずかしそうに答える先生。うーん、やっぱりいつもの山田先生からは想像もつかないな。

「つまり、山田先生は本音スペシャル・朝ご飯バージョンということか・・・」

「えっ？　ど、どういうことなんですか？」

「あー・・・。いえ、なんでもないです」

見た目はあれだが、中身はおいしい。それが本音スペシャル。山田先生もつまりはそういうことだろう。

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？　あの、二対一で・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

負ける、という言葉が気に障ったのか、セシリアと鈴は再びその瞳に闘志をみなぎらせる。

「では、はじめ！」

織斑先生の号令と共に空中へと飛び出す二人。それに続いて山田先生も飛翔する。

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あ、はい」

空中での戦闘をみながら、シャルルが山田先生のISについて解説を始めた。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発再後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で正式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性マルチ役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能です、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。・・・終わるぞ」

シャルルの見事な説明に聞き入って忘れていたが、セシリア、鈴、山田先生で戦闘が行われているんだった。改めて空を見上げると、山田先生の射撃にいいようにセシリアが誘導され、鈴と激突したところにグレネードを投擲。爆発が起こり、二つの影が地面へと落下した。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが・・・」

「あ、アンタねえ・・・何面白いように回避先読まれてんのよ・・・」

」

「り、鈴さんこそ！ 無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちのセリフよ！ なんですぐにビットを出すのよ！ しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐぐぐぐぐつ・・・！」

「ぎぎぎぎぎぎぎぎぎっ・・・！」

なんというか、両者の主張はそこそこあってるのでなんだか余計にみつともなく見えてくる。そんな二人の様子に一組、二組の女子からくすくす笑いまで起こっていた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

いつも通り手を叩いて、織斑先生がみんなの意識を授業に戻した。

「専用機もちは天加瀬、織斑、オルコット、デュノア、凰、ボーデヴィッツヒだな。では七人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれろ」

その言葉とともに、二クラス分の女子が俺、一夏、シャルルのところに集まってくる。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えて」

「天加瀬君、わたしたちがついてるよ！」

「倒れてもちゃんと介抱してあげるからね！」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループに入れて！」

集まってくるまでは予想通りだったのだが、思っていたよりも人数がいるので、俺たちはどうしていいか分からず呆然と立ち尽くしてしまう。その状況を見かねたのか、あるいは自分の浅慮に嫌気がさしたのか、織斑先生は面倒くさそうに低い声で告げる。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

この一言にそれまでわらわらと群がっていた女子たちは、蜘蛛の子を散らすように移動して、それぞれの専用機もちのグループはすぐに出来上がった。



「では午前の実習はここまでだ。午後は今日つかった訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

全員が起動テストを終えた俺たちの班は、格納庫にISを移してから再びグラウンドへ。なんとかスムーズに出来るようにみんなが協力してくれたおかげで、俺たちの班は少し早く終わったのだが、一夏の班は本当に時間ギリギリだった。

「あー……。あんなに重いとは……」

「お疲れさま、一夏」

一夏の班は一夏一人で結構な重量のあるISを運んでいたの、だ**い**ぶ疲れているようだった。ちなみに俺の班はみんなが一緒に手伝ってくれたので問題はなかったが。

「まあ、いいや。奏羅、シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室に行かないといけないしよ」

「え、ええっと……僕は機体の微調整をしていくから、先に行って着替えててよ。時間掛かるかもしれないから、待ってなくていいからね」

「ん？ いや、別に待ってても平気だぞ、な、奏羅？」

「ああ、それに微調整するなら俺も手伝うよ」

「い、いいからいいから！ 僕が平気じゃないから！ ね？ 先に

教室に戻ってて、ね？」

「お、おう。わかった」

妙な気迫に押され、俺と一夏は頷いてしまう。そういえばさっきの更衣室の出来事と言い、なにか着替えたりする時に不都合でもあるのだろうか？

とりあえず本人もああ言っていることだし、待っていても仕方ないので、俺たちはさっさと更衣室へと向かった。

第21話 く食べてみないとわからないく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

記念小説は書くかどうかまだ考えておりますが、書くとしてもどんなネタがいいか・・・。

ご意見ご感想をおまちしております。

PV5万ヒット記念番外編 こいゆめ！（前書き）

記念小説としてコメディー的なものをあげておきました。
パロディなので少々時間軸が本編とずれております。

普通の小説と違って、おもにキャラの会話のみで構成、原作キャラ崩壊、もしくはフルボッコにされているので、そういったものが苦手な方はブラウザバックしてください。

では前置きはこの辺にして、番外編をどうぞ

PV5万ヒット記念番外編 こいゆめ!

夜、IS学園寮――

奏羅「あー、疲れた……。マリア先生は自分の計画書は無茶するくせに、俺の計画書に関してはほんとに実用的な理論しかとりいれないんだから……」

一夏「いつも大変そうだな、奏羅」

奏羅「まあ、自分の夢だしな。手を抜くつもりはないよ」

一夏（うーん、俺も友達として、奏羅の力になってやれないかな……。・）

奏羅「一夏、明日も早いし、もう寝ようぜ」

一夏「あ、ああ。そうだな」



???「おい、起きろ」

一夏「ん……。なんだ……。って、サンタ!? しかも女の子の!?」

サンタ「おう、そうじゃ。お前さんの強い願いを感じ取ってやってきたご都合主義的なサンタじゃ」

一夏（な、なんでこのサンタヤクザ口調なんだよ……）

サンタ「お前、友人の力になりたいんじゃない？」

一夏「あ、ああ。でも、奏羅はこういうことで俺に相談とかしてこないし、俺から持ちかけても断られるだけだしなあ……」

サンタ「ふむ。ではこれを渡してやろう」

一夏「白い……粉……」

一夏（ヤクザ口調と白い粉……。この二つの符号が示すものは一つ……）

サンタ「大丈夫大丈夫。全然そんなじゃないよ」

一夏「なんで普通の口調なんだよ！ 余計怪しいよ！」

サンタ「まあ聞け。それはな、願いをかなえる手助けをする粉なんじゃ」

一夏「そりゃ、これを売れば買いたいものとか買えるかもしれないけどさ……」

サンタ「そんなんじゃないっつとろーが！　まあ、いい。實際使
ってみちやる」

ばらばらばら・・・

一夏「おお・・・。空中で消えた」

サンタ「これで、お前の『友人を助けたい』　っちゅー願いはそれな
りになうはずじゃ」

一夏「・・・それなり？」

サンタ「いくらサンタつつても万能じゃない。お前が努力しなけ
ればな。まあ、それでもニアピンすることもあるが」

一夏「結構いい加減なんだな。まあいいや、ありがとう」

サンタ「じゃあ、わしは帰るからの。いいクリスマスをな」

一夏「・・・まだ夏前くらいなんだけど」

サンタ「うっさい、南半球は夏にクリスマスじゃろーが！　ま、が
んばれよ」

一夏「ほんとに窓から出てった・・・。ま、どうせこれは夢だし。
寝よ寝よ・・・」

??? 「いつまでまたせんだよ！」

サンタ 「お前もうっさいわ！ トナカイの分際ではざくな！」

◇

翌日――

一夏 「しかし、昨日はリアルな夢をみたなあ……。白い粉で願いがかなうとか、そんなことあったらみんな幸せだよな」

奏羅 「お、一夏。いいところに」

一夏 「どうした、奏羅？ 俺になんか用か？」

奏羅 「ああ、今新しい計画書を作ってるんだが、どうもしっくりこなくてさ。みんなを集めて、意見貰おうかなって思ってる」

一夏 「・・・へ？」

奏羅 「いつものメンバーには声掛けてあるから、お前も頼むよ」

一夏「お、おう。いいとも」

奏羅「じゃ、今度の日曜日の特訓の後で発表ってことだから、それまでに設計図っぽいものを用意しといてくれ。じゃあ、また」

一夏「ああ、またな」

一夏（あれ、夢じゃなかったのか・・・？）

◇

日曜日、寮の一夏・奏羅の部屋――

奏羅「じゃあ、みんなが考えてくれた計画案を順番に見せてくれるか？」

鈴「はいはい、じゃああたしから！」

奏羅「じゃあ、鈴」

鈴「あたしが考えたのは、この超大型近接武器と、超大型衝撃砲で、相手を完膚なきまでに叩きのめす超攻撃型ISよー！」

奏羅「・・・没」

鈴「な、なんでよ!？」

奏羅「でかいにもほどがある。こんな大型武器を持ってたら正直邪魔だろう。さらに言えば、腕部にかかる負担が大きいからISが戦うたびに悲鳴を上げるぞ。このバカでかい衝撃砲も、裏を返せば的になるだけだ。第一、PICで浮かせるにしてもこれだけでかいと相当重量があるから――」

鈴「わ、わかったわよ、もう」

ラウラ「では、次は私だな」

奏羅「じゃあ、ラウラ」

ラウラ「私が考えたのは、なるべく音を少なくし、武器もナイフや、設置型爆弾など、敵基地などに潜入するときに優れた――」

奏羅「没」

ラウラ「なっ、なぜだ!？ 戦場まで想定して完璧に対応できるように考えたのに!？」

奏羅「いや、ISで戦争してるわけじゃないだろう……。しかもこれ、対ISじゃなくて、対人間じゃないか。軍人みたいな考えじゃなくて、もう少し今のIS事情に合った案をだな――」

ラウラ「うつ……。わ、わかった。次にいってくれ……」

一夏「じゃあ、次は俺だな」

奏羅「おう、一夏。頼むぜ」

一夏「俺が考えたのは、大型スラスタを六つ使って、即時加速とかのスピードを上げた高機動型のISだ。近接ブレードとかの近接武器と、荷電粒子砲とかの射撃武器、さらにはエネルギーシールドまで――」

奏羅「没だな」

一夏「なあっ!？」

奏羅「別に大型スラスタ増やせば速くなるってもんじゃない。鈴の時にも言ったが、機体重量を考えると逆に遅くなるし、排熱量も考えないとスラスタがすぐにダメになる。それに武器も多すぎる。永久機関がないと一瞬でエネルギー切れを起こすぞ。大体、お前の白式がいい例だろうが」

一夏「うつ・・・確かに・・・」

箒「まったく、貴様らは……。次は私が発表しよう」

奏羅「頼むぜ、箒」

箒「うむ。私が考えたのは、近接特化したISだ。武器は刀型近接ブレードと、短い間合いでも使える脇差のような近接ナイフ。間合いを一瞬で詰めるため、瞬時加速の速度が上がるよう出力も――」

奏羅「没」

箒「なぜだ!？ 前の奴らのような失敗はしていないぞ!」

奏羅「お前、これ劣化した白式じゃないか。あれは『零落白夜』があつて初めてなりたつてゐるISだし、第一、織斑先生だつてあれは欠陥品つて言つてたじゃないか。近接武器だけでどうやって射撃主体のISに立ち向かうんだよ?」

箒「剣を極めれば射撃武器など不要になるし、これを扱う剣の達人は弾丸など簡単に見切るだろう! 実際、この世には弾丸を斬ることが出来る人だつてゐる!」

奏羅「それは剣の達人の話だろう。その域に達してない人がこれを使つてまともに戦えるのか? そもそも、あの歴史上の人物、坂本竜馬だつて北辰一刀流免許皆伝、なおかつ銃を使つてたじゃないか。つまり、歴史上の剣豪だつて銃を認めたことに――」

箒「くうっ……。もういい……。次にいつてくれ……」

シャル「じゃあ、次は僕だね」

奏羅「シャルか、なら大丈夫そうだな……」

シャル「僕が考えたのは、物理シールドと、エネルギーシールドを初期装備に置いた防御型のISだよ。拡張領域もそれなりに作つておけば、格闘戦や、射撃戦にも対応できるし、特化させれば射撃特化、格闘特化にもできるんだ」

奏羅「おお、さすがデュノア社の令嬢。いい案だと思うよ」

シャル「えへへ、ありがと奏羅」

奏羅「でも没」

シャル「な、なんで!？」

奏羅「いや、すごく無難なんだが、正直打鉄とラファール・リヴァイヴのいいところだし、最後に言ったこのISの特徴なんてましまりヴァイヴとおんなじだし、なんていうか個性がシールドのみと言うか、もっとはっきり言うと言産機っぽいというか――」

シャル「う、うう……。も、もういいよ、次いつて……」

セシリア「ふふん、皆様だらしないですわね。ここはわたくしがばっちり決めさせていただきますわ!」

奏羅「頼むぞ、セシリア。お前がラストだ」

セシリア「わたくしが考えたのはこれですわ! わたくしのブルーティアーズを参考にした――」

奏羅「すごいな、セシリア!」

セシリア「えっ……。そ、そうですわよね! わたくしの完璧な設計図なら説明する意味も――」

奏羅「これなにを表してるんだ? でも、お前の芸術作品こんなところで発表しなくても――」

セシリア「そ、奏羅さん……。なにを言っているんですの……?」

奏羅「いや、これって、ピカソ的な芸術作品だろ？ でも、設計図じゃなくて自分の作品持つてくるなんて、案外セシリアもうっかり——」

セシリア「ち、違いますわ！ これが設計図です！」

奏羅「えっ、これ！？ ちょ、ちょっと、どこがどうなってるのか俺に説明してくれよ！？」

セシリア「なっ、なんでわからないのですか！？ ちょっと貸してください！」

奏羅「この、はんぺんみたいななに？」

セシリア「それは射撃用のビットですわ！」

奏羅「じゃあ、このちくわみたいなのは？」

セシリア「それはライフルです！」

奏羅「じゃあ、この宇宙人は・・・？」

セシリア「それは操縦者です！」

奏羅「じゃあこれは？」

セシリア「それは装甲！」

奏羅「じゃあ——」

セシリア「それは――」

サンタ「おー、願いがかなったみたいじゃのー。じゃあ、わしらは帰るか宗次朗」

トナカイ「珊、あれって願いがかなったって言えるのか？」

サンタ「あの少年の願いは『友人の力になりたい』だったじゃろう？　だから、あやつの友人が普段してこない相談をしてきた。その時点で願いはかなったようなもんじゃ。そっから先はあやつらの努力次第じゃ」

トナカイ「そんなもんでいいのかよ、サンタって・・・」

サント「なんか言ったか？」

トナカイ「いいえ、何にも」

こうして、今日もIS学園での夜が終わったのだった、ちゃんちゃん。

PV5万ヒット記念番外編 こいゆめ！（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

あとがきを読んでもくださっているということは、このノリについてこれた強者ですね（笑）

これでこの小説が嫌いになった、と言う方がいないように願っております、マジで。

最初にも言った通り、本編と時間軸をずらしているので、ラウラとシャルもメンバーの中に入っております。

劇中に出てきたサンタとトナカイは、私の所属している同人サークル（笑）で、現在製作中のゲームのキャラです。ようはゲストですね。

気になる方は、わたくしのマイページの活動記録にて、サークルのブログHPのURLが載っているので、ぜひぜひ訪れてください。そうです。要はあとがきという名の宣伝です。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第22話 く偽りの姿く（前書き）

テスト前の勉強と、製作中のゲームの立ち絵の締め切りでヒイヒイ言いながら書きあげました（笑）

では本編をどうぞ

第22話 く偽りの姿く

「奏羅、なんだこの計画書は？　こんなものここで作れってのかい？」

奏羅の師、マリア・レイン博士は自分の弟子から送られてきた計画書について直接電話で問い詰めていた。

『いや、幼なじみに頼まれまして……。なんとか作っていただけませんかね……。？』

「頼まれたって、なんでこんなものを……。第一、一番必要なものはどうするんだい？　研究所のやつは絶対に出さないよ？」

『それは俺が持つてる物を使います。費用は全部あいつが出してくれるようですし……。』

「どんな金持ちだい、その幼なじみは？」

『いや、今こっちで流行りのアイドルです……。』

「はあ？」

その言葉に驚くマリア。それもそのはず、自分の弟子が今をときめくアイドルの知り合いで、なおかつそのアイドルがこんな企画書を作ったのだ。当然の反応だろう。

「なるほど、だからこんな企画書なわけ、か……。」

『無理・・・ですかね?』

「いや、興味が沸いてきた。ISの研究所に自分のステージ開発を持ちかけるアイドルに」

『へ?』

「おい、これお前が設計図描いたのか?」

『ええ、まあ・・・』

「このステージに私の研究所の最先端をすべてつぎ込む。だからと
ころどころ改変するわ」

『え・・・いや・・・あの?』

「そうと決まれば明日からさっそくとりかかる。あんたにも意見聞くから覚悟しとけ」

いい具合に暴走し始めている彼女、マリア・レインは面白いと思ったものに全身をかける人間であり、決めた道に猪突猛進で突き進むので、周りの人間は多々置いてきぼりになることがある。これは彼女から技術を教わった人間も例外ではない。

「で、学校のほうはどうなんだい? うまくいってるのか?」

『一応は。でもまた面倒なことが起きそうで・・・。代表候補生としてフランスとドイツから転校生が。ドイツの子は現役の軍人、フランスの子はデュノア社の御曹司です』

「御曹司ってことは男なのか。まあ、お前と織斑一夏の例があるから珍しいとは思えなくなってきたがな。ま、せいぜいがんばりなよ」

『はい。じゃあ、さっきの件よろしくお願いしますよ』

「わーってるよ」

そういつて弟子との電話を切ったマリアだが、一つだけ気になっていることがあった。

（デュノア社の社長の息子ねえ……。あれ、あそこの社長に息子なんていたっけか？）



「じゃあ、改めてこれからよろしく」

「うん。よろしく、奏羅」

夕食を終えて俺とシャルルは自分の部屋へと戻っていた。三人目の男子ということなので、部屋をどう分けるかという話になった時、一夏が「奏羅は移動してきたばかりだし、俺が移動するよ」と言ってくれたので、今度は一夏が一人部屋になったのだった。正直、また荷物を移動させるのが面倒だったので一夏の申し出はありがた

かった。

「それにしても、奏羅の本棚にはいろんなISの資料があるんだね」

「ああ、これか？　一応俺は将来ISの設計者目指してるからな」

このISの資料は、研究所から持って来たものであったり、荷物として向こうから届くものであったりする。結構な量があるのだが、今のところは本棚のキャパシティをオーバーしていいのでよしとしよう。

「ちゃんと将来のことを考えてるなんて、奏羅ってすごいね」

「そ、そうでもないと思うけどなあ」

シャルルが素直にほめてくれたのと、中性的な顔立ちのせいかな、女性の様な笑顔を向けられ、なんだか少し照れてしまう。・・・いや、まてまて。俺は決して男に興味があるとかじゃないはずだ、うん。

「え、えーっと。シャワーとか順番決めとこうか？　先に使いたいかある？」

「特にないけど、僕が後でいいよ。奏羅が先に使って」

「そうはいつでも・・・。実習終わりとか、暑くていつもより汗かいたからとかでシャワー先に浴びたくならないのか？」

「大丈夫。僕って汗をかかない方だから、すぐにシャワーを浴びなくてもそんなに気にならないし」

「そうか。まあ、そこまで言ってくれるんだったらお言葉に甘えようかな。でも、転校してきたばっかだからとか考えて遠慮しなくていいからな」

「うん、ありがとう奏羅」

うーん、やっぱりなれない。笑顔が自然だから、そう感じてしまうんだろうか。

「さっきの話だけど、奏羅は研究者目指してるんでしょ？ わざわざIS学園に来てまで操縦者の授業とか受けてるのはどうしてなのかな？」

確かに、男の俺がここに来てまで開発者の勉強をするのか疑問に思うのは当然だろうな。実際操縦者目指してないんだし。

「あー、これにはいろいろあってだな……。まず、俺がISを動かせるってことは研究者になるにあたっているいい経験になる。ちよつと意味は違うけど百聞は一見に如かずってやつさ。それに俺の使ってる専用機、これって俺が装備を考えてるんだ。俺が考えた計画書を渡して、それを研究所の人に作ってもらうんだけど、当然コストがかかってしまう。その費用と引き換えに、テストパイロットをやってプラチナのデータを集めてるんだ」

「そうなんだ……。だったら、僕も協力できないかな？」

「どういうことだ？」

「奏羅達って、放課後に模擬戦やってるんでしょ？ そこに僕も加わるよ。専用機もあるし、何かの役には立てると思うんだ」

これは願ってもない申し出だ。シャルルの専用機についてはまだよくわからないが、いろいろな相手と戦うのはいい経験になるとともにさまざまなデータが取れる。

「本当か？　じゃあお願いするよ」

「うん、まかせて」

どうやら、頼もしい味方が仲間になったようだな。一夏にはない安心感を感じる。学園に入ってからの一夏の僥倖に、俺は寝る前に信じてもない神様にお礼を言ってお寝たのだった。



「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応わかってるつもりだったんだが・・・」

二人の代表候補者が転校してきてから5日がたち、今日は土曜日。土曜日は午後から自由時間、なおかつアリーナが完全解放されているのでほとんどの生徒が実習に使う。それは俺たちも同じで、今日もこうしてみんなで元気に特訓を行っていた。今は一夏とシャルル

の模擬戦の復習の時間。

「シャルルって教えるの上手だよなあ・・・」

シャルルが俺たちの特訓に付き合うようになってから、模擬戦後の反省の質が大幅に上昇した。今まで俺たちに教えてくれていた人たちは、

『こう、ずばーっとやってから、がきんっ！ どかんっ！ という感じだ』

『なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。・・・はあ？ なんてわからないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方に五度傾けて、回避の時は後方へ二十度回転ですわ』

といった感じだった。一夏は本当にありがたがっているようで、熱心にシャルルの説明を聞いていた。

「奏羅さんも、わたくしの説明はご不満でしたの？」

今のつぶやきが聞かれていたようで、セシリアが俺の横にやってくる。なんだか、いやな予感がする。

「い、いや、そんなことはないんだけど、なんていうか詳しくすぎて逆に分かりづらいつて言うか・・・」

「そうですか、なら今度はさらに詳しく教えて差し上げますわね」

・ スターライトMK-3を構えるセシリア。えっ、ちょっと待って・

「では模擬戦を始めましょう！」

その言葉とともに俺に向かってレーザーを放ってくる。俺はその場でしゃがんで、なんとかレーザーをよけたが、プラチナをまだ展開していない。展開している間にもう一発とセシリアがライフフルで狙いを定める。人生が終わっただろ、これ。

「・・・？」

当たる覚悟はできていたのだが、いつまでたってもレーザーが飛んでこない。おそろおそろ見てみると、なんとシャルルが専用機『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』のシールドを展開してレーザーを止めてくれたようだ。

「駄目だよオルコットさん。奏羅はまだISを展開してないんだから」

顔は笑顔だが、声がわらってない。冷静になったのか、セシリアはやりすぎた事の後悔と、シャルルの笑顔の威圧でばつが悪そうにぶつぶつ文句を言っていた。

「大丈夫、奏羅？」

「ああ、どうやら命は助かったみたいだな・・・」

シャルルが差し伸べる手を取って立ち上がる。しかし、危機が去った安堵からか、足がふらついてしまい、

「あっ・・・」

「お・・・っと、悪い」

シャルルにもたれかかるような形に。すぐさま離れたのだが、シャルルの顔を見るとなんと真っ赤になっていた。

「あ、え、う・・・」

「・・・えっと、シャルルさん、どうしたんですか？」

「え・・・。あ、いや、なんでもないよ。うん、なんでもないよ」

居心地が悪いのか、一夏のほうへさっきの続きを説明しに行ってしまった。まさか不可抗力とはいえ男子に抱きついて照れられるとは思わなかった。フランスではハグの習慣とかなかったっけな・・・？　そういえば更衣室の時もこっちをみてたような気がしたし、やっぱりそっちの人なんじゃ・・・？　フランスでは法律で同性でも結婚できるということなので、もしかしたらっていうこともありうる。そういえば男子にしてはいいにおいがしたような・・・。

「やましいこと考えていらっしやるようですわね。奏羅さん、そっちの人でしたの？」

なんだか幻滅したように話しかけてきたセシリア。そ、その目はやめてくれ・・・。

「い、いや、なんでそうなるんだよ？」

「鼻の下のびてますわよ」

「えっ？」

思わず鼻の下を触ってしまう。・・・しまったな、これは。

「どうやら凶星の様ですわね」

「だから違うっての！」

しかしセシリアは「フン！」といってそっぽを向いてしまった。・・・まあ、いつも通りの距離で接してくれてるだけましかな。しかし、周りはさっきの一件を見ていたようで、「天加瀬君とデュノア君ってそういう関係・・・？」とか「部屋が一緒だし、夜な夜なプロレスごっこしてるんじゃない・・・」だの変な妄言が飛び交っている。

（なんだか、入学当初のノリだなあ・・・）

いやな懐かしさを感じながら、一夏とシャルルの特訓風景を見る。どうやら、サブマシンガンアンロックの使用許可して使わせているようだ。シャルルのIS、『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』は、名前の通りリヴァイヴをカスタムした機体である。リヴァイヴの推進翼を改良し、機動性と加速性を強化。アーマー部分も全体的にスマートになっており、スカート部分にはマルチ・ウェポンラックがついている。そして何より違うのは肩部分のアーマーで、本来ついている四枚のシールドはなく、左腕にシールドと一体化した腕部装甲、右腕は射撃しやすいようにスキナーマームのみという使用だった。

（そういえば、基本装備を外した代わりに拡張領域を増やしてあるとか言ってたっけ。そこら辺は俺のプラチナと一緒だな）

プラチナは拡張領域に多数のフレームを組み込むため、基本装備は可変型銃複合剣『ソニック・ブレイズ』と近接ナイフ『フェザーダガー』に左腕部のシールドだけにしてある。しかし、話によればリヴァイヴ・カスタムには武装が20も登録されているらしく、その数は通常のISの大体3〜4倍である。そこまで管理できるのは彼に何かしらの技能があるということだろうか。

「ねえ、ちよつとあれ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代機だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いたけど・・・」

周りがざわざわし始める。その注目の的はドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。さっきから一夏とにらみ合ってるが、声は聞こえてこない。どうやらプライベート・チャネルで会話しているようだ。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成しえただろうということは容易に想像できる。だから、私は貴様を、貴様の存在を認めない」

彼女がプライベート・チャネルではなく口で一夏に告げる、それほど大事なこと。しかし、俺の中では彼女の言い放った『存在を認めない』が引っ掛かっていた。

（いやな予感がする。あの言葉は冗談で言ってない。本気だ）

しかし、一夏はどうやら気づいていない。念のためにプラチナを展

開する。それと同時に入ってくる彼女の I S が戦闘状態へと移行したという情報――

ゴガギンッ！

銃弾が近距離で何かにぶつかる音が聞こえた。俺が飛び込む前にシャルルがシールドで銃弾をはじき、銃をボーデヴィツヒさんに向けている。どうやら、俺が飛び込む前に対処したようだ。

「・・・こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな？」

「貴様・・・」

あー、まずい。シャルルのやつが火に油を注いってしまったようで、一難去ってまた一難みたいだ。

「フランスの第二世代型アンテイクごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「いまだに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルーキーよりかは動けるだろうからね」

「二人とも、そこまでだ。騒ぎになって、鬼教官からグラウンド 10 周とか授かるぞ」

今にも戦いの火ぶたを切りそうな二人の間に割って入る。シャルルもさっきは俺とセシリアを冷静に止めたのに今回はなんでノリノリなんだよ。

「・・・ふん、今日は引こう」

どうやら興がそがれたようで、あっさりとゲートへと去っていく。
どうやら面倒事にはならなかったようだ。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ、助かったよ」

先ほどのまでの雰囲気を一変させ、いつものシャルルに戻る。どうやら、普段優しい人は怒らせると怖いという理屈が当てはまるような奴なんだろう。

「みんな、もうあがろうぜ。もうそろそろ閉館時間だ」

気づくとアリーナ閉館時間である4時になっていた。あんなことがあったとはいえ、時間を守らないと誰かのお姉さんがうるさそうだ。

「おう、そうだな。シャルル、今日は銃サンキュ。いろいろ参考になった」

「それならよかった」

「・・・」

「・・・」

「・・・えっと、先に着替えて戻ってて」

これはいつものパターン。初めて一緒に授業を受けた時から、シャ

ルルは俺たちと一緒に着替えようとしな。まあ、本人が嫌がってるのだから強制はしないけど――

「たまには一緒に着替えようぜ」

「イヤ」

こいつは……。前から嫌がってんだから無理強いしなくても……。

「そんなこと言わ――むぐ!？」

「じゃあ、シャルル。先に行ってるぞ」

「うん、ありがとう奏羅」

俺はしつこい一夏の口をふさいで更衣室へと引っ張って行った。



「お前さ、嫌がってるんだから無理強いするのはやめろよ」

「いや、でもたまには一緒に着替えたいじゃないか」

口をとがらせて訴える一夏。たぶんそんな気はないと思うんだが、その発言はなんだかアレっぽいぞ。

「よし、着替え終わり。奏羅、今日は早めに飯行こうぜ」

「ああ、そうだなー」

「あのー。天加瀬くんはいますかー？」

「あ、はい。いますけど」

ドア越しに聞こえてくる山田先生の声。なんとまあ、ちょうど着替え終わったタイミングである。

「入っても大丈夫ですかー？」

「ええ、大丈夫ですよ」

俺の返答を聞いて入ってくる山田先生。大体どんなようかは想像がつく。

「天加瀬くん、第4格納庫に研究所から荷物が届いています。いっしょに取りに来ていただけますか？」

想像通りこのパターン。まあ、そろそろだと思っていたんだが。

「というわけだ一夏。悪いけど先に行ってくれ」

「そうか、残念だな」

山田先生に会釈した後「また明日な」といつて出ていく一夏。まあ、あいつは箒や鈴という一緒に食べる相手がいるんだから大丈夫だろう。

「あ、そういえば山田先生。六月の終わりに塚乃旭のサードシングルのがでるらしいんで、そろそろ予約が始まると思いますよ」

「えっ!? そうなんですか!? ありがとうございます、天加瀬くん!」

「いや、喜んでいただけて何よりですよ」

嬉しそうに俺の手を握ってくる山田先生。まてよ、山田先生と手をつないで二人つきり。どこかでこんな展開があった気がする。そのあとよくないことがあったような・・・。

「・・・奏羅、何してるの?」

その声にドキッとして振り向くとそこにはシャルルがいた。なぜだかわからないが、起こっている気がする。

「まだ更衣室にいたんだ。それで、先生ととても仲よさそうだけど何してるの?」

「あ、いや、なんでもない」

握っていた手をぱっと離す。山田先生も言われて恥ずかしくなったのか、後ろを向いてしまった。

「あー、えっと、今から俺第4格納庫に研究所の荷物取りに行くか

ら、先に帰ってシャワー浴びといてくれ」

「うん。わかった」

「じゃあ、またあとでな」

俺はそう言い残すと山田先生とともに第四格納庫へと向かった。



「……。はぁ……」

ドアを閉め、自分ひとりだけの空間になった所でシャルルは大きなため息を吐いた。

（何イライラしてるんだろ……）

先ほどの更衣室での奏羅への態度が、今になって恥ずかしくなってきた。奏羅も驚いていたに違いない。

（……シャワーでも浴びて気分を変えよう）

シャルルは自分の着替えを取り出すとシャワールームへと向かう。脱衣所で服を脱ぎ、シャワールームへと入った。シャワーを浴び、

いざ体を洗おうとしたら石鹸の類が見当たらない。

（そういえば、昨日僕が使って無くなったから捨てたんだけ・・・）

シャルルは新品のボディソープがクローゼットの中においてあった事を思い出し、シャワールームを出ると、脱衣所に合ったタオルで体を隠しながらクローゼットへと向かった。



「あ、そういえば」

俺は格納庫に向かう途中、あることを思い出した。マリア先生に旭の計画書を渡した後、すぐに改正案が送られてきた。その改正案をまとめた報告書を山田先生に頼んで送ってもらおうと考えていたのだ。

「すみません、先に格納庫に行ってももらえますか？　俺、研究所に送らなきゃならない資料があるんで取ってきます」

「そうですか？　じゃあ、先に行ってますね」

「はい！」

俺は自分の部屋に向かって一直線に駆けだす。あまり山田先生を待たせるのも悪い。幸い、ここから寮の自分の部屋まで5分もかからない。俺はいつも使ってる階段を下り、寮の入口へと入る。

（そういや、シャルルがシャワー浴びてるかもしれないな・・・）

シャルルは自分の肌を見られるのが嫌いなのか脱衣所からしつかり服を着て出てくる。風呂上がりで暑くないのか気になって聞いたことがあるが、そうでもないらしい。

（ま、シャワールームに入るわけじゃないんだし関係ないかな）

いろいろ考えている間に自分の部屋の前へ。ドアを開けた。

「えーっと、あの資料・・・は・・・」

部屋の中を見た俺の思考が止まる。クローゼットの前に金髪の女の子がタオル一枚で立っていた。これはいくらなんでも想定外。

（部屋を間違えた・・・？）

しかしその考えもその女の子から発せられた声でかき消された。

「奏・・・羅・・・？」

どこかで聞いたことがある、茫然としたその子の声。そして我に返ったようにシャワールームの中へと逃げ込んだ彼女は今日まで同じ部屋で暮らしていた人物。

「シャ、シャルル・・・？」

フランスからの転校生、シャルル・デュノアだった。

第22話 く偽りの姿く（後書き）

なんというか書いててアツい気分になってました（笑）

とりあえず、今ラウラをどうするかで悩んでおります。

一夏にフラグか、奏羅にフラグか。

とりあえず、早めに考えないと二巻も終わってしまいますしね。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第23話　く友達く（前書き）

逆転検事をいまさらながら人に借りてプレイしておりました。

影響されて本文にも少しくらいそれっぽい文があるような、ないような（笑）

では本編をどうぞ

第23話　く友達く

「・・・・・・・・」

「・・・・で、どういうことか説明してくれないか？」

とりあえず研究所からの荷物を受け取った後、後回しにしていた問題についてシャルルに言及していた。

「なんで、女の子なのに男として偽っていたんだ？」

「・・・・そ、それは」

俺の質問になかなか答えようとしてくれないシャルル。偽って転校してきた以上、言いづらいのはわかるのだが。

「とりあえず、何か飲むか？」

「う、うん、もらおうかな」

話をするきっかけを作ろうと考え、飲み物を飲んだらどうだろうかと考えた。どうやら向こうも同意見のようだ。しかし、こんな時に限って備え付けの冷蔵庫には気のきいた飲み物が入っていない。

「・・・・水でいい？」

「いいよ、大丈夫」

こんなことになるんだったら普段から何かしら用意しておくべきだ

った。後悔しながら水道の蛇口からコップに水をついでシャルルに渡し、向かい側に座る。

「話してくれるか？ 男装してた理由について」

シャルルは水を一口飲むと、口を開いた。

「それは、その・・・実家のほうからそうしろって言われて・・・」

「実家って、デュノア社か？」

「そう。社長の、僕の父からの直接の命令なんだよ」

しかし妙だ。シャルルは家族の話になると顔が曇り始める。転校初日の更衣室でもそうだった。

「・・・家族の話になると気まずそうにするのはどうしてなんだ？」

「それはね、僕が父の愛人の娘だからだよ」

一瞬、言葉を失ってしまった。テレビのドラマではよくある話だが実際に出会ってしまうとは思ってなかった。しかし、これで彼女が家族について話したがない理由がわかった。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね。父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする過程でIS適性が高いことが分かって、非公式ではあるけど、デュノア社でテストパイロットをすることになってね」

今の話を聞いて、当時の彼女の気持ちがなんとなくだがわかる。さ

ぞかし混乱し、不安に駆られたはずだ。

「父に会ったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あのときはひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

その言葉の後に、あははと愛想笑いをするシャルル。しかし、声が笑っていない。第一、これは笑いごとではない。

「それから少したって、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「フランスは『イグニッション・プラン』から外されているんだっ
たっけな」

『イグニッション・プラン』とは、欧州連合が計画した次期量産型IS開発プラン。欧州連合がそれぞれの国ごとにISを次期主力機を選定するためトライアルに提出し、次期量産型ISを決定する。それがこのプラン・・・だったはず。詳しくは覚えていないが。

「うん。だから第三世代機の開発は急務だったんだけど、もともと遅れての第二世代最後発だからね。圧倒的にデータも時間も足らずに、なかなか形にならなかった。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、そのうえでIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「なるほど、話は大体わかった。今の話からの推測だが、男装には広告塔って意味があったんだろうな」

「うん、それに同じ男子なら日本で発生した特異ケースと接触しやすい。可能ならその使用機体と本人のデータもとれるだろう、ってね」

「なるほど、スパイとしての役目もあったってわけか・・・」

「そう、白式のデータを盗んで来いっていわれてるんだよ、僕は。もう一人の男子、奏羅がいるのは予想外だったけどね」

一夏の場合はニュースになったが、俺の場合は事故が起こった延長線上で発覚した事実だ。事故を隠すために報道されなかったから、外国には伝わっていなかったのだろう。

「とまあ、そんなところかな。でも奏羅にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ・・・潰れるか他の企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕には関係ないことかな」

関係ない、か。たぶん、自分の父親を赤の他人と、心の底から思ってるんだろうな。

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それに、いままでウソをついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルル。でも、彼女の話に一つだけ、気になる点があった。

「・・・君のお父さん、なんで君の所に部下をよこしたんだろうな」

「えっ？」

「だって、今さらだろう。シャルルの記憶に父親のことが残ってないってことは、君が生まれる前、もしくは生まれてすぐの頃から一度も会っていないってことになる。じゃあ、どうしていまさらになつて君の所に部下をよこしたんだ？」

「・・・わからないよ、そんなこと」

「俺は、シャルルのお父さんが、お母さんが死んで、一人ぼっちになったシャルルを心配したから部下をよこしたんじゃないかって思うんだ」

「えっ・・・？」

俺の言葉に驚くシャルル。それもそのはずだ。彼女は自分の父親を赤の他人と思っているのだから。

「シャルルがテストパイロットとしてデュノア社に勤めるようになったのも、立場の弱い君を守るため。別邸に住まわせているのも、本妻の娘じゃないという名目上、本邸に住まわせるわけにはいかない。だけど自分の目が届くところに置いておきたいから。俺にはそう考えられる」

「そんなの、奏羅の勝手な推測でしょ？」

「ああ、推測さ。俺は当事者じゃないし、シャルルからの話は聞けても、君のお父さんからの話は聞けてない。だから今は推測するしかない」

「だったら――」

「思っただけどき、シャルルはお父さんのことわかってもらおうとしてあげた？ シャルルは自分のことわかってもらおうとした？」

「それは・・・」

「さっき、ISの話したよな」

「それが・・・なんの関係があるの？」

「『第三世代機を開発するのに圧倒的にデータも時間も足りない』、それと同じさ。相手の事を時間^{データ}をかけて理解して、初めて人は人とわかりあえるんだ。シャルルはお父さんと出会ってまだ二年、シャルルが生まれたと仮定すると二歳だ。しかも話を聞く限りじゃ二回しか会ってない。つまり、まだ君とお父さんの関係は始まったばかりなんだよ」

俺の話を聞いてうつむくシャルル。しばらくして顔をあげた彼女は、なんだかふっきれたような顔をしていた。

「ふふっ、人間関係をISの開発に例えるなんて、奏羅らしいよね」

「お褒めに預かり光栄ですよ」

俺の冗談にまたほほ笑むシャルル。どうやら、このことに関しては一件落着のようだ。

「で、どうするんだ、これから？」

「どうって、時間の問題じゃないかな。フランス政府も事の真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生をおろされて、よくて牢屋じゃないかな」

確かに、彼女にはスパイ容疑と性別偽装していたという現実がある。後者はまだいいとして、前者は圧倒的に不利な現実だ。

「それでいいのか？」

「良いも悪いもないよ。僕には選ぶ権利もないから、仕方ないよ」

彼女の表情はまた曇ってしまった。こんなとき、一夏なら友人を助けようと必死になるだろう。・・・あいつのことなら簡単に予想がついてしまうな。

「フランスに帰ったら捕まるんだろう？　だったら帰らなければいいんじゃないか？」

「えっ？」

「特記事項第21。本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

一夏とあのタウンページの様な特記事項を勉強した時に、一夏がぶつぶつ呟いていた特記事項。まさか、こんなところで役に立つとは思わなかったが。

「つまり、この学園にいる間はシャルルはどここの国の人物でもないってことだ。本人の同意がない限り、命令できないってこと。つま

りシャルルはここにいれば選択できるんだよ、自分の意思で」

「自分の・・・意思・・・」

もちろん、穴もある。学園にいる間なので期限は三年間。その間に問題を解決しなければならない。

「ふふっ、よく覚えられたね。特記事項って55個もあるのに」

「友達のおかげだよ」

「そっか、いい友達だね。その人」

なんだか寂しそうな、羨ましそうな表情。そうか、シャルルは自分は一人だと思ってるんだろうな。

「シャルル、お前も友達だよ。だから、もうちょっと俺を、俺たちを頼ってもいいんだぞ」

「えっ？」

「嫌なのか？　なんか傷つくぞ、それ」

「嫌、じゃないけど・・・いいの？　僕、君達のことを調べるスパイなんだよ？」

「わかった。じゃあこうしよう」

俺は納得しないシャルルの前に右手を差し出した。

「スパイのシャルル・デュノアさん、俺と友達になってくれませんか？」

びっくりしたような彼女の顔。しかしすぐにそれは明るい表情へと変わっていく。

「こちらこそ、僕と友達になってください」

俺の言葉に『ふふっ』っとほほ笑んだシャルル。そのとき、やっと彼女が本当に笑った気がした。

「やっぱり、笑ったほうが可愛いぞ」

「ええっ!？」

俺の言葉に大いに驚くシャルル。率直な意見を言っただけなのだが、さすがに率直すぎたのだろうか。

「あ、すまん。変なこと言ったな」

「い、いや、そんなことないよ。・・・嬉しかったし」

照れながら答えるシャルル。その様子を見てると、自分の言った言葉を改めて思い出してだんだん恥ずかしくなってきた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙が続き、さすがに気まづくなってきたとき

コンコン

ノックの音が響き渡った。

「奏羅さん、いらっしゃいます？ 夕食をまだとられていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのノックとセシリアの声。この状況は非常にまずい。

「奏羅さん？ 入りますわよ？」

今入ってこられるのはまずい。なんせ横には『女の子』のシャルルがいるのだ。どう説明しても彼女が男だと言い訳できない。

「ど、どうしよう？」

「と、とりあえず隠れろ」

顔を近づけ小声でやり取りする。早く隠れなければセシリアが入ってくる。

「わ、わかったよ。とりあえず身を潜めて――」

「なんでクローゼットに！？ 布団の中でいいだろ！」

「あ、ああつ、そっか！」

バタバタと動き回る俺とシャルル。その時、ドアが開く音が響いた。

「せ、セシリア！　どうした、何か用かな？」

「・・・何をしていますの？」

うつぶせのシャルルに俺が馬乗りでのっかっている状態。布団をかぶせようとしたのだが失敗して横にずれてしまい、慌てた俺はシャルルの上に乗っちゃってしまった。

「い、いや、護身術の組み手を練習しててだな・・・」

「・・・それにしても不思議な格好ですわね」

「え、えーと、そういや夕飯だったな。じゃあいつしよに行くか」

そういつてセシリアと一緒に部屋を出ようとすと、セシリアに呼び止められた。

「デユノアさんは何をしていらっしゃるんですの？」

同じ部屋の住人が夕飯へ行こうというのに、ベッドにうつ伏せになったまま動かないシャルル。まあ、明らかにおかしいよな。

「あ、えーっと、シャルルは護身術の途中で腰を痛めてな、今は動けないんだ」

「そ、そうそう」

うつぶせの状態から声を出すシャルル。もう少しつらそうな声を出してほしかったのだが・・・。

「あ、あら、そうですね？　では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ、珍しい偶然もあったものです」

どうやら信じてもらえたのか、俺と二人で夕食をとることになった。シャルルには後で何かしら食べるものを用意しておこう。

「デュノアさん、お大事に。さあ奏羅さん、参りましょうか」

ずっと自然な動きで俺の腕をとると、いきなり体を密着させる。旭がよくやってくるので慣れてはいるが、正直困る。しかし、話をこじらせてここで時間を消費するのも何なので、文句も言わずに部屋をでた。

「お前ら仲いいなあ」

後ろからかけられるのんきな声。振り向くと、そこには一夏と箒が立っていた。

「あら、お二人さん。これからわたくしたち一緒に夕食ですよ」

自慢するように語るセシリアだが、俺と一緒に夕食を食べても自慢にはならないと思うのだが。ふと箒のほうをみると、目から鱗みたいな顔をしている。

「い、一夏。私たちも食堂に行きましょう」

「えっ？　もともとそのつもりだっただろ・・・って、なんで腕をからませるんだよ」

どうやら、セシリアがやっていることを真似したくなっただろう。しかし、告白の件があつて二人とも喋りづらいたろうと思つていたのだが、どうやらそうでもないみたいだな。

「ああつ、いいなあ・・・」

「ちょうど一組づつだし・・・」

「幼なじみつてずるい」

「専用機持ちつてずるい」

後ろから怨むような羨むような声が聞こえるが、正直歩きにくいだけだと思ふのだが。

「・・・あまり動じませんのね」

「ん？ 何か言つたか？」

「いいえ、なんにも言つてませんわ」

しかし、少し恥ずかしい気はするな。旭はこれといって胸もなかったが、セシリアはなんというか、感触があるのですこし気まずい。

（奏羅さんは、シャルルさんとただならぬ関係を築きつつあるようですし、道を踏み外さないよう、わたくしがしっかりと矯正してあげなくては・・・）

さつきからセシリアの視線が怖いのだが、気のせいだと思いたい。



「ただいま」

「あ、奏羅おかえり」

「お腹すいてるだろう？ 焼き魚定食を貰って来たんだが、食べられるか？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

しかし、テーブルにトレイを置くとともに、だんだんと表情が固まっていく。

「どうした？」

「え、えーっと・・・」

「あー、焼き魚苦手だったか？」

「え、ううん、大丈夫。じゃあ、いただきます」

どこかぎこちない笑みを浮かべるシャルル。その表情の原因はすぐにわかった。

「あっ・・・」

ぼろぼろとおかずをこぼしてしまうシャルル。どうやら箸に慣れていないようだ。まあ、日本に来て間もないので無理もないのだが。

「あー、悪い。箸苦手なのか」

「う、うん。練習してるんだけど、なかなか・・・あっ」

しまった、これは俺のミスだな。もう少し良く考えて食事を貰うべきだった。

「・・・いまからスプーンか何かを設計する」

「ちょ、ちょっと、現実逃避しないでよ!？」

「しかし、その調子だと時間かかるんじゃないか？」

「で、でも・・・」

「さっき言っただろ、俺たちは友達なんだからもう少し頼ってもいいんだよ」

「奏羅・・・」

しばらく迷っていた様子だったが、やっぱり食事が進まないと思ったのか、決心したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの・・・え、えっとね、奏羅が食べさせて」

予想外の言葉に唾然としてしまう。しかし、頼ってくれといった以上、断るわけにもいかない。

「わかった、俺でよければ」

「う、うん」

さきほどシャルルがこぼしていたおかずを適当につまむと、シャルルの前にさしだす。

「じゃあ、その・・・あーん」

「あ、あーん」

やはり、少し恥ずかしいのか顔が赤いシャルル。

「お、おいしいか？」

「うん、おいしいよ」

この状況になんとなくデジャヴを感じる。前にも一回こんなことがあったような・・・。

（そうだ、布仏さんに餌付けした時とおんなじ感覚だっ・・・）

「じゃ、じゃあ次は、ご飯がいいな・・・」

「わ、わかった」

シャルルの注文を聞いて口の中に入れていくうちにだんだん楽しくなってきた。ひな鳥に餌をあたえる母鳥の気分だ。

「奏羅・・・」

「おう、次は魚か？」

「楽しんでない？」

「そ、そんなことはないぞ」



あの後結局最後までシャルルに俺が食べさせることになってしまった。まあ、楽しかったからいいのだが。
食事が終わると、話もそこそこに二人ともベッドに入った。今日はいろんなことが起こって色々と疲れてしまった。

「奏羅・・・」

「どうした？」

布団に入ったと思ったシャルがいつの間にか起きていて、俺のベッドに腰かけた。

「僕、考えてみるよ。自分のこと、父のこと。それから、自分自身で選択するんだ、これからのことを」

「そうか、頑張れよ」

「・・・もうひとつ、奏羅に頼っていいかな？」

「ああ、いいぞ。なんだ？」

「少しだけ、泣いていいかな」

「・・・ああ、いいよ」

「ありがと・・・」

そういつて、俺に抱きつくシャルル。抱きついてくる腕の力は強く、泣き声をあげず、すすり泣いている。

（なんというか、いろんなものでいっぱいだったんだな）

父親との確執、スパイ行為の罪悪感、自分の居場所がないこと。もしかしたらもっとあるかもしれない。

（まあ、今だけなら痛いのかくらい我慢するか）



「Z Z Z Z」

シャルルは泣き疲れたのか俺の布団で寝てしまった。

「ね、寝るなら自分の布団にしてほしかったんだけど」

抱きつかれたまま寝られたので、いつもより窮屈な思いをしながら眠りについたのであった。

第23話　く友達く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

なんだか奏羅の年齢が高く思える気が・・・いや、そんなことはなかった（笑）

あと、書いてて思ったんですがシャルのターンですね、二巻って。次はラウラのターン・・・になるのでしょうか？

ご意見ご感想をお待ちしております。

第24話 く軍人VS設計師見習いく(前書き)

最近ターンAガンダムを見てますが、面白いですねこれ。

では本編をどうぞ。

第24話　く軍人VS設計師見習いく

「そ、それは本当ですよ!?!」

「う、ウソついてないでしょうね!?!」

月曜日の朝、俺、一夏、シャルルで教室に向かっている途中の廊下で大声を聞き、目をしばたたかせた。

「なんだ?」

「さあ?」

一夏はシャルルに疑問を投げかけるが、答えられなかった。俺にもわからないしな。

「本当だってば! この噂、学園中で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君や天加瀬君と交際でき――」

「俺達がどうしたって?」

「「きゃああっ!?!」」

一夏が話しかけた途端、女子たちは大声を張り上げた。俺の聞き間違いでなければ、一夏や俺がどうか・・・。

「で、何の話だったんだ? 俺たちの名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん? そうだったけ?」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアはあははうふふと言いながら話をそらそうとする。しかし、今の話だけではいまいち想像ができないな……。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！　わたくしも自分の席につきまさんと」

そそくさとその場を離れていく二人。その流れに乗ったのか、他に集まっていた女子たちも自分の席、クラスへと帰っていく。

「シャルル、なんか知ってるか？」

「えっ、ああ、僕にもわからないよ」

「そうか……」

この前の出来事から俺に対するシャルルの態度が少しおかしい。嫌われてるようではないみたいだけど、少しよそよそしいというか……。まああんなことを話した後だし、本当に仲良くなるにはまだ時間がかかるといことだろうな。

「なぜこのようなことに……」

「どうした筈？」

唸るような声を上げる筈が気になって話しかけた。

「い、いや、なんでもないぞ、うん」

・・・あやしい。

「お前、何か知ってるんじゃないのか？」

「な、何を言っている！ 噂のことは私も知らないぞ！」

「・・・俺はまだ噂のことは口に出してないんだが」

俺の言葉に焦ったような筈の様子をみて思うんだが、こいつってなんてわかりやすい奴なんだろうか。

「つまり、噂の真相を知ってるんだな」

「・・・知っている。ちよっとこっちに来い」

強引に腕を引っ張っていく彼女に逆らえず、廊下に引きずり出された。

「な、なんなんだよ・・・」

「あまり聞かれたくないのでな・・・。特に一夏には」

「どういことだよ」

「お前、引っ越しの時のことを覚えているか？」

俺が一夏の部屋に引っ越した時のことか。確か筈が一夏に告白してたんだっけ。

「あれが他の部屋にも聞こえてたみたいだな……。いつの間にかこのさまだ」

「なるほど、そういうことか……。じゃあ、なんで俺の名前が？」

「さあな。広まるついでに尾ひれでも付いたんじゃないのか？」

「じゃ、じゃあ誰が優勝するか分からないが、下手したら一夏じゃなくて俺が選ばれる可能性もあるのか……？」

「……………」

沈黙された。それにしてもなんとというとばつちりだろうか。

「まあ、噂だし気にしないでおくか……」

とりあえず、誰が来てもいいように御断りのセリフを数パターン考えておこう……。



「はー、行ったり来たりが面倒くさいよなあ……」

この学園に入学してから、更衣室に行くにしても、トイレに行くにしてもどうしても長距離の移動が苦になってしまう。ちなみに今回は戦闘データを研究所に送るため、放課後にわざわざ職員室まで出向いていた。

（それにしてもシャルルは女の子なのに男子の施設を使わなきゃならないんだから大変だよなあ・・・）

そんな考え事していると曲がり角の先から声が聞こえ、身を隠した。普通なら身を隠すことはしないのだが、話している内容を聞くと堂々と出ていくことが出来なかった。

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ・・・」

聞いたことがある声になり影から覗いてみると、どうやら織斑先生とドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒさんだった。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

あのボーデヴィツヒさんが声を荒げているとは相当なことなのだろう。話の内容はどうやら織斑先生の現在の仕事についての不満を本人にぶつけているようだった。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここでは貴方の能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません
ん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違
いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれ
るなど――」

「――そこまでしておけよ、小娘」

「っ・・・！」

突然声の調子が変わる。威圧するような声に、さすがのボーデヴィ
ッヒさんもすくんでしまったらしい。言葉が途切れたままで続きが
出てこない。かくいう俺も自分に向けられてないとはいえ、少し焦
ってしまった。

「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取り
とは恐れ入る」

「わ、私は・・・」

彼女の声が震えているのがわかる。圧倒的な存在を前にした恐怖と、
かけがえのない相手から嫌われるという恐怖。

「さて、私は仕事がある。さっさと貴様らも寮へと帰るがいい」

「・・・・・・・・」

ぱっと声色を戻し、織斑先生が去っていく。貴様らということはどうやら俺のこともばれてたらしい。ボーデヴィツヒさんもそれに合わせて・・・・ってやばい。

「くっ・・・・。なんだ貴様は！」

「わ、わるい・・・」

出会いが知らに彼女とぶつかってしまった。やっぱり、言い合いを見た時に引き返しておくべきだった。

「貴様・・・天加瀬奏羅か」

「えーっと、ラウラ・ボーデヴィツヒさんだっけ・・・？」

しまった、捕まってしまった。これはまた面倒なことに・・・。

「貴様、聞いていたな？」

「何のことかな？」

「とぼけるな！」

彼女の平手打ちが飛んでくるのをすんでのところで顔を引いてかわしたが、そのまま後ろに尻もちをついてしまう。・・・格好がつかねえ。

「ふん、反射だけはいいいようだがそれに伴う身体能力はないようだ

な」

「・・・お褒めの言葉どうも」

嫌味を言われてしまった。まあ自業自得なんだけどさ。

「そんなことでは学年別トーナメントの結果も見えたものだ」

「・・・ボーデヴィツヒさんは優勝を狙っているのか？」

「ふん、狙っているのではない。決まっているのだ」

なるほど、大した自信だな。いい機会だ、少し話してみるか。

「まだだれが優勝するかわからないぞ？」

「ふつ、私はこのような場所でぬるま湯につかっていた奴らとは違う」

「なるほどね、ほんとうに軍人一筋なんだな」

「・・・なにが言いたい？」

「もう少し他のことに興味を持ってみたらどうだ？」

「何に興味を持てというのだ？」

「いや、ほら。この年の女の子になるとやっぱり恋愛ごととかさ」

「私がそんなことに興味を持つとでも？」

「わからないぞ？ 今回のトーナメントで優勝すれば織斑一夏と交際できるらしいしな」

俺の名前はしっかりと伏せておく。まあ、加えたとしても万が一にもそんなことはないだろうが。

「っ・・・！ 誰があんな奴と！」

「冗談だ、だから胸倉をつかむのをやめてくれ」

苦しくて思わず彼女の手を握ってしまう。その時に気付いた、彼女の手が冷たいことに。

「私に触れるな！」

「あ、ああ。悪い」

俺の手を振りほどくと、彼女はその場から歩き去ろうとする。

「・・・ボーデヴィツヒさんには夢とかないのか？」

「そんなものはないっ・・・！ 私は、からっぽなのだから・・・」

最後のほうは声が小さかったが、しっかりと聞き取れた。ボーデヴィツヒさんが去っていくのを見ながら、その言葉と彼女の手の温度がしばらく頭から離れなかった。



「あ」

「あ」

ふたりそろって間の抜けた声を出してしまう。放課後、場所は第三アリーナ。声の人物はセシリアと鈴だった。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

二人の間に見えない火花が散る。二人とも狙っているのは優勝のようだ。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはつきりさせとくってのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではつきりとさせましょうではありませんか」

その言葉とともに二人ともメインウェポンを呼び出し、それを構えて対峙した。

「では――」

ふたりが動き出そうとした瞬間、それを遮って一つの砲撃が飛来する。

「なっ!？」

「なんですの!？」

緊急回避の後、鈴とセシリアはそろって砲撃の飛んできた方向を見る。そこには漆黒の機体がたたずんでいた。二人のISは同じ情報を搭乗者へと告げる。

――機体名『シュヴァルツエア・レーゲン』、登録操縦者、

「ラウラ・ボーデヴィツヒ・・・」

セシリアの表情がこわばる。その表情には欧州連合のトライアル相手以上のものが含まれていた。

「・・・どういうつもり？ いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

鈴も突然の砲撃に怒りをあらわにしている。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か・・・ふん。データで見たときのほうがまだ強そうではあったがな」

いきなりの挑発的な物言いに、二人は口元をひきつらせた。

「何？ やるの？ わざわざドイツくんたりからやってきてボコられたいなんてたいしたマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ？ 犬だってまだワンといいますのに」

「はっ……。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

彼女たちの態度にも以前様子を変えることもなく、ラウラはあざ笑うかのように言い放った。

「ああ、ああ、わかった。わかったわよ。スクラップがお望みなわけね。――セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが――」

「はっ！ 二人がかりで来たらどうだ？ 一足す一は所詮二にしかならん。くだらん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

この言葉に二人の堪忍袋の緒が同時に切れた。

「――今何て言った？ あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど」

「場にはいない人間の侮辱までするとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわ。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

自分の武器を強く握りしめる二人。その様子を冷ややかな視線で流すと、ラウラはわずかに両手を広げて、自分側に振る。

「とっとと来い」

「上等！」

「泣かせて差し上げますわ！」



「まかせ」

職員室からの帰り道、俺はのほほんさん——本名、布仏本音さんに遭遇した。

「ああ、布仏さん。どうした？」

「学年別トーナメント、私と組もうよ。一回戦か二回戦目で負けて、そのあとのんびりするってのはどうかな」

なるほど、それだと余計に戦わなくていいし、俺の体力も持つだろう。そのあと涼しいところで試合見ながらのんびりする。

「それ、いいかもな」

「でしょでしょ」

「じゃあ、一緒に出場するか」

「しよしよ」

交渉成立、当日はのんびりできそうだ。

「じゃ、またね」

「ああ、また今度な」

布仏さんを見送ると、突然後ろから一夏に話しかけられる。

「おい、奏羅！」

振り向くと、一夏の隣にはシャルルが。どうやら二人で探していたらしい。

「どこいったんだよ、放課後の特訓に誘おうとしてたのに」

「悪い、研究所に提出しないといけないものがあったからな。職員室に行ってた」

「そうだったのか。じゃあ人数がそろったことだし、早速特訓だな。えーっと、今日使えるのは・・・」

「第三アリーナだ」

「「わあっ!」」

廊下で並んでいた俺たちは、いきなりの声に揃って声をあげた。

「ほ、箒か・・・」

「・・・そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが」

礼儀正しく謝るシャルルに、さすがの箒も氣勢をそがれてしまったようだ。謝らせてしまったことを申し訳なく思うかのように咳払いをすると話を変えた。

「ともかく、だ。第三アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間があいていれば模擬戦もできるだろう」

ISの実力は稼働時間に正比例するので、模擬戦というのは実力を高めるのに最適なのだ。要は習うより慣れろということだろう。

「奏羅・・・」

「どうしたシャルル？」

「さっきの子と仲良いの？」

「さっきの・・・？ ああ、布仏さんか。まあそこそこって感じかな」

「ふーん・・・」

なんだかシャルルの機嫌が悪い。この前は妙によそよそしかったり、何かあるのだろうか？

しばらく歩いていると、急に周りがあわただしくなる。さっきから廊下を走っている生徒も多い。どうやら原因は第三アリーナのようだ。

「なんだ？」

「何かあったのかな？ こっちで様子を見ていく？」

驚いたような一夏に、シャルルは観客席へのゲートを指す。確かにピットに入るよりも早く様子を見ることができると思い、俺たちは頷いた。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。でもそれにしては様子が――」
ドゴオンッ！

突然の爆発。その煙を切り裂くように二つの影が飛び出してくる。

「鈴！ セシリア！」

一夏が叫ぶ。特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージからこちらに爆発が及ぶことはないが、同時にこちら側からの声も聞こえない。

二人は苦い表情のまま、爆発の中心部へと視線を向ける。そこにいたのは漆黒のIS――

（ラウラ・・・ボーデヴィツヒ・・・）

先ほどであった彼女はいつもと違い眼帯を外しており、眼帯の下目は金色に輝いていた。二人のほうに目を向けるとセシリアと鈴のISはかなり損傷を受けており、ところどころが損傷し、装甲の一部は完全に失われている。ボーデヴィツヒさんも無傷までとはいかないが、二人と比較してかなり軽微な損傷だ。

「何をしているんだ？ ――お、おい！」

一夏の叫びもむなしく、二人はボーデヴィツヒさんへと向かっている。どうやら二対一の模擬戦のようだが、追い込まれているのは二人のほうだった。

「くらえっ!!！」

鈴のIS『甲龍』の良型が開き、衝撃砲『龍砲』が放たれる――が、その砲撃はボーデヴィツヒさんには届かなかった。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

「くっ！ まさかこうまで相性が悪いだなんて・・・」

何かはわからないがボーデヴィツヒさんは右手を突き出しただけで衝撃砲を完全に無力化し、すぐさま攻撃へと転じる。

シュヴァルツェア・レーゲンの肩に搭載されていた刃が左右一対で射出、鈴のISへとむかう。それは刃の部分がワイヤーで接続されているためか、複雑な軌道を描きながら迎撃射撃を潜り抜け、鈴の右足を捕えた。

「そうそう何度もさせるものですかっ！」

鈴の援護のためにセシリアが射撃と同時にビットを射出する。

「ふん……。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアの精密な狙撃とビットによる視覚外攻撃をかわしながら、さっきと同様に左右同時に腕をつきだす。交差させた腕の先で、何かに捕まえられたようにビットが動きを止める。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアの狙い澄まされた狙撃はラウラの大型カノンによる砲撃で相殺される。すぐさま連続射撃の状態に移行しようとしたセシリアを、先ほどワイヤーで捕まえた鈴をぶつけて阻害する。

「きゃあああっ！」

ぶつかり、空中で体勢を崩した二人へとラウラが突撃を仕掛ける。

「『瞬時加速』——！」

一夏が驚愕の声を上げる。それは一夏の十八番、格闘特化の技能だからだ。

だが、鈴は近接型のISである。彼女の双天牙月による攻撃に分がある、そう思われたがシュヴァルツェア・レーゲンの腕部からプラズマ刃が展開され、左右同時に襲いかかる。

「このっ・・・！」

プラズマ刃をしのいでいる鈴だが、その攻撃に合わせて先ほどのワイヤーブレードが襲いかかってくる。今回は肩の二つではなく、腰部に備え付けられた四つも加わり、それらが三次元的な躍動をしながら鈴へと向かう。いくら格闘線に慣れているといってもこれら全てを捌くのは難しい。不利に思った鈴は衝撃砲を再度展開し、エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況で発射時間ウエイトのある空間圧兵器を使うとはな」

その言葉通り、衝撃砲はその弾丸を発射する前に実弾砲撃により爆散する。

「もらった」

肩のアーマーを吹き飛ばされ、大きく体勢を崩した鈴に、ボーデヴィツヒさんがプラズマ手刀を懐へと突き刺す。

「させませんわ！」

間一髪、その間に割り込んだセシリアは、『スターライトmk?』を盾に使ってその一撃をそらす。同時にミサイル・ビットをボーデヴィツヒさんへと射出した。

自殺行為ですらある接近戦でのミサイル攻撃は、鈴とセシリアを巻き込み床へと叩きつけた。

「無茶するわね、アンタ・・・」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

セシリアの言葉が止まる。煙がはれ、そこにたたずんでいるボーデヴィツヒさんは、至近距離での大爆発ですらダメージをほとんどなかったように浮いていた。

「終わりか？　ならば――私の番だ」

言うと同時に『瞬時加速』で地上へと移動し、鈴を蹴り飛ばすと、セシリアに近距離からの砲撃を当てる。ボーデヴィツヒさんはワイヤブレードを射出し、鈴とセシリアを捕縛すると自分のもとに手繰り寄せると、一方的に二人を殴り始めた。

「あああああっ！」

二人の体に容赦なく拳を叩き込み始める。シールドエネルギーはあっという間に機体維持警告領域から操縦者生命危険領域へ。これ以上ダメージを受け、ISが解除されることがあれば冗談じゃ済まされなくなる。しかし、ボーデヴィツヒさんは攻撃をやめない。あろうことか無表情から恍惚の表情へと変わっていく。

「まずい！　一夏、『零落白夜』でアリーナのシールドを――」

「うおおおおおおおっ！」

俺が言うより早く、一夏が白式を展開、同時に『零落白夜』を発動しアリーナを囲んでいるバリアーへと叩きつけた。

ありとあらゆるエネルギーを消失させる『零落白夜』によって切り裂かれたバリアーの隙間からアリーナへと侵入する。

「あのバカっ！」

俺は一夏の援護へと向かうためにプラチナを展開、エアリアルフレームとドッキングするとあいつの後を追った。

「その手を離せっ！」

一夏は鈴とセシリアを掴んでいるボーデヴィツヒさんへと刀を振り下ろす。

「ふん……。感動的で直線的、絵にかいたような愚図だな」

一夏の発動させた『零落白夜』は届く寸前で一夏は動きを止める。先ほどセシリアのビットを止めたシステムだろう。

「一夏！ やめろ、ボーデヴィツヒさん！」

俺は彼女に向けて突っ込もうとしたが、その前に体の動きが止まる。

「くっ……」

まるで目に見えない手に掴まれているかのように体が動かない。な

んだ、これは？

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様らは有象無象の一つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、俺たちへと銃口を向ける。ま
ずいぞ、これは・・・！

「奏羅、一夏っ、離れて！」

シャルルからのプライベート・チャンネルでの連絡と同時にボーデヴィッヒさんに向かって銃弾の雨が降り注ぐ。

「ちっ、雑魚が・・・」

それまで体を拘束していた何かから解放されると、俺と一夏は彼女が離れた二人の元へと飛び込み抱きかかえた。

「一夏！ 鈴は！？」

「大丈夫だ！ なんとか捕まえた！」

俺はセシリアを抱えたまま、ボーデヴィッヒさんの射程から瞬時加
速を使い離脱する。一夏も同様に離脱したようだ。

「奏羅、一夏！ 二人は！？」

カバーにシャルルが入り、質問しながらも牽制射撃を続ける。高速
武装切り替えにより弾切れした銃を入れ替え、ボーデヴィッヒさん
の接近を許さない。

「う……。一夏……」

「そ、奏羅さん、無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな。……シャルル、大丈夫だ。二人とも何とか意識はある」

「よかった」

一夏の答えにわずかに安堵したようなシャルルだが、その手はいまだ休まることはない。

「面白い。世代差というものを見せつけてやろう」

銃弾を防御、回避、さらには例の見えない力で止めていたボーデヴィツヒさんが反撃に転じようと体を低くかがめる。おそらく瞬時加速――

「危ない、シャルル！」

俺はシャルルの後ろから上へと飛び上がると準備体勢に入っている彼女に向かって『ソニック・ブレイズ』から数発叩き込む。

「ちっ……」

一瞬で体勢を防御へと変えたボーデヴィツヒさんに向かって瞬時加速をかけ、剣で突き刺すように突撃する。

「甘いな」

「どっちがかな？」

見えない何かによって止められるが、その瞬間に『ソニック・ブレイズ』をブレードモードからライフルモードへと変形させ銃弾を放った。

「なにっ!？」

変形するとは思っていなかったのだろう、俺の拘束をすぐさま解くと防御へと転じる。その隙にもう一度瞬時加速をかけて一気に距離を詰めた。

——『フラッシュ・ドライバ』のエネルギー充填50%完了

「50で十分だっ・・・」

左手のエネルギー解放ジェネレータ、『フラッシュ・ドライバ』をボーデヴィツヒさんに向ける。

「まだだっ!」

すんでのところで左腕を止められる。しかし、俺の狙いはこれじゃない。

「かかったな!」

左腕部フレイムの装甲をパージすると今度は右腕の『ソニック・ブレイズ』で斬りかかった。

「くうっ・・・!」

一撃与えられたことにより焦ったのか、彼女は距離を置くとワイヤーブレードを射出する。その間を縫いながらなんとかそれを避けていく。

（このままだとジリ貧だぞ・・・）

飛行性能で今のところ回避できているが長く続くとは限らない。なんとかしたいが今の状況は力づくじゃないと難しい。しかし今の武装で一番威力がある左腕の『フラッシュ・ドライバ』は、いわばエネルギー版のパイルバンカー。彼女相手にさっきのように接近することはもう出来ないだろう。

（さっきからみていると、腕をこちらに向けた瞬間に見えない何かに動きを止められている・・・。ならっ！）

俺は彼女に向かって即時加速を使わず一直線に突撃する。

「血迷ったか！」

ボーデヴィツヒさんはワイヤーブレードすべてを俺の突進方向に合わせて射出。それを上へと宙返りするように回避し、さらに突撃を続けた。

「二度と同じ手は食わない、終わりだ！」

彼女が両腕を俺に向けるより早く、その直線状に、セシリアとの戦いで初めてフレームを展開した時と同じように、シューティングフレームを待機状態で展開する。最近は時間短縮のためにフレームはプラチナを展開すると同時にドッキングできるようにパーツごとに

して展開するのだが、本来は一つの塊、待機状態として展開する。
今回はその方法でフレームを呼び出した。

「なに!？」

腕から射出した見えない何かをシューティング・フレームを盾にか
わす。そして隙について即時加速で一気に詰めよった。

「これでっ!」

「舐めるなっ!」

俺が『ソニック・ブレイズ』で斬りかかるのを、彼女がプラズマ刃
で受けとめようとしたその時――

ガギンッ!

俺の剣とボーデヴィツヒさんのプラズマ刃は鏝迫り合いをすること
なく別の何かに止められた。

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!？」

一夏の驚いたような声が響く。それもそのはず、俺とボーデヴィツ
ヒさんの戦いを止めたのは我らが担任織斑先生。

(それにしてもこの人、化け物だな・・・)

織斑先生はいつものスーツ姿で自分の身長よりも大きな二本のIS

用ブレードをISの補助なしで軽々と扱い、俺と彼女を止めていた。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るのなら」

先生の言葉に素直に頷くと、ボーデヴィツヒさんはISの装着状態を解除した。

「天加瀬、お前もそれでいいな？」

「構いません、というか止めてくれてありがとうございます」

その言葉を聞いて、先生は改めてアリーナ内の全生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

いつもよりも強くたたいた手は、まるで銃声のようだった。

第24話 〽軍人VS設計師見習い〽（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

そろそろ二巻も終了に近づいてまいりました。
がんばって書いて行こうと思ってます。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第25話 く気付いた気持ちく（前書き）

気付いたらユニークも1万突破しておりました。

1万人もの方に見られているのは嬉しいような恥ずかしいような気分です。

では本編をどうぞ。

第25話　く気付いた気持ちく

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

場所は保健室。第三アリーナの出来事から大体一時間が経過していた。ベッドの上には打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむくれた顔で視線をどこかへと向けていた。

「別に助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続けてれば勝っていましたわ」

あのまま放っておいたらどうなった事やら。生命の危険性が出てきていた状態だったのに『割って入るな』とは呆れてしまう。

「お前らなあ・・・・・・・・でもまあ、怪我が大したことなくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな——いたたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味——つううつ！」

二人は強がって無理に起きようとするが、体のほうは正直に悲鳴を上げていた。

「はぁ……。そんな体で動いたら治るもんも治らないぞバカ。も

もう少し自分の心配をしろよ」

「バカってなによ、バカって！」

「奏羅さんこそ大バカですわ！」

せっかく心配をしてやったのにコレだ。何に意地を張っているんだか。

「好きな人に格好悪いところを見られたから恥ずかしいんだよ」

シャルルが飲み物を買って部屋に入って来た。二人がぎゃあぎゃあうるさかったのっでいまいち聞き取れなかったが、二人は聞き取れたように顔を真っ赤にして怒り始めた。

「なななな、何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！　こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！　そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

二人とも考えがばれた恥ずかしさと怒りでさらに顔が真っ赤になっている。よっぽどのことを言われたのだろうか？

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたましようっ！」

二人は渡された飲み物をひったくるように奪うと、自棄になったように一気飲みをした。まったく、騒ぐ元気は有り余ってるんだな。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」

そこまでシャルルが言った時、廊下の方から雪崩のような音が響いてくる。

「な、なんだ？ 何の音だ？」

この音に驚く一夏。それはだんだんとこっちへ近づいてくるのがわかる。そして音が最大限になった瞬間、保健室のドアがはじけ飛ぶような音を立てて開いた。

「織斑君！」

「天加瀬君！」

「デュノア君！」

その音の正体は数十名の女子だった。しかも大所帯なのにどうでもいいといわんばかりに保健室へと入ってくる。そしてあっという間に俺、一夏、シャルルを取り囲むと、まるで壁から手が生えてくるかのようにこちらに向けて手を伸ばしていた。

「な、なんだなんだ？」

「ちよっ、狭い……」

「ど、どうしたのみんな、ちょっと落ち着いて」

「「「「これ！」「」「」」

驚いている俺たちに女子生徒一同が突出してきたのは、学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「な、なにになに・・・？」

一夏がその紙を受け取ると、その内容を読み上げ始めた。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、二人組ででの参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者には抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――」

「ああ、そこまでいいから！　とにかくっ！」

そしてまた俺たちに伸びてくる手。あー、なんとなくわかってしまった。

「私と組もう、織斑君！」

「私と出よう、天加瀬君！」

「私と組んで、デュノア君！」

ともかく、今こうしてやってきているのはリボンを見る限り全員一年生の女子だ。学園内に三人しかいない男子ともかく組もうと、迫っているのだろう。

「え、えつと・・・」

そう、シャルルは実は女子なのだ。誰かと組むということは、それだけ正体がばれる可能性が上がる。シャルルも不安なのか、困ったような顔でこちらを見ている。たぶん助けを求めてるんだろう。

（そうだな、頼れって言ったのは俺なんだし）

俺は心の中で苦笑すると、大騒ぎをする女子全員に聞こえる声を出せるように、大きく息を吸うと宣言した。

「悪いけど、俺シャー——」

「まって、まって」

突然の声に言葉が止まってしまう。周りの女子もその声の持ち主の方へと注目する。そこには一人のろのろとやって来た女の子がいた。

「はゝ、やっとおいついたよゝ・・・」

「のほほんさん？」

そう、そこには一夏の言葉通り、布仏さんが立っていた。彼女は他の女の子をかき分け俺のところにやってくる。

「まかせゝは私と出るんだよゝ」

「あ」

そういえばそうだった。ていうか、第三アリーナに行く前に約束してたな……。

「なんだぁ……」

「でもまあ、他の女子ならともかく本音ならいっつかぁ……」

他の女子じゃまずくて布仏さんならいいっていう匙加減がわからない。しかし、問題はそこじゃない。

「……………」

横にはジト目で見てくるシャルル。悪い、約束があるので俺とは組めそうにない。

（シャルルは俺と組めない……。ならっ！）

「あー、そういえば一夏とシャルルが組むって言ってたよなあ、な？」

俺は一夏に目配せをしながら喋る。一夏は俺の意図はわかってなさそうだったが、同意はしてくれたようで、

「あー、ああ。そうなんだよ」

と言ってくれた。その言葉にどうやら女子たちは納得してくれたよううで、

「まあ、そういうことなら……」

「男同士ってのも絵になるし・・・ゴホンゴホン」

と言って、一人また一人と保健室を去って行った。

「一夏っ！」

「奏羅さんっ！」

しかし、一難去ってまた一難。鈴とセシリアがものすごい勢いでベツドから飛び出してきた。

「一夏、あたしと組みなさいよ！ 幼なじみでしょうが！」

「奏羅さん、クラスメイトとしてはここはわたくしと！」

俺たちを締め上げるような勢いの怪我人ふたりは、さっきの女子生徒とは違って説得なんか聞いてもくれなさそうだ。

「駄目ですよ」

いったいどうしたものかと考えていると突然山田先生が現れた。びっくりしたのは俺だけではなく、その場にいた全員が目をぱちくりさせていた。

「おふたりのISの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

その言葉に悔しそうな顔をする二人。ISは戦闘経験を含むすべて

の経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させるが、その経験には損傷時の稼働も含まれる。ISのダメージがレベルCを超えた状態で起動させると、不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまうため、それらは逆に平時での稼働に悪影響を及ぼすことがある。なので、今ISを発動するのは適切ではないということだ。大体、代表候補生なので、専用機のISは国の威信がかかっている。自分のわがままで起動は出来ないだろう。

「うつ、ぐっ……。わ、わかりました……」

「不本意ですが・・・非常に、非常にっ！ 不本意ですが！ トーナメント参加は辞退します……」

「わかってくれて先生うれしいです。ISに無理をさせるとそのツケはいつか自分が支払うことになりますからね。肝心なところでチャンスを失うのは、とても残念なことです。あなたたちにはそうやってほしくありません」

「はい……」

「わかっていますわ……」

しかしこの中でただ一人わかってないような一夏。

「一夏、後でIS基礎理論の蓄積経験についての注意事項を教科書かなんかで確認しとけ」

「あ、ああ、わかった。しかし――」

ここで一夏が今まで疑問に思っていたであろうことを鈴とセシリア

に質問した。

「なんだってラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは・・・」

「ま、まあ、なんと言いますか……。女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

「？　ふうん？」

言いにくそうにしている二人だが、何かしらの挑発でも受けたのだろうか？

「ああ、もしかして一夏と奏羅の――」

「あああっ！　デュノアは一言多いわねえ！」

「そ、そうですわ！　まったくです！　おほほほほほ！」

二人は何かをひらめいたシャルルをものすごい勢いで取り押さえる。おいおい、あまり無理するなって・・・。

「こらこら、やめろって。シャルルが困ってるだろうが。それにさつきから怪我人のくせにか仇を動かしすぎだぞ、ホレ」

一夏が騒いでいる二人の肩をつつくと、『ぴぐっ！』という奇声とともにその場から動かなくなってしまった。

「あ・・・すまん。そんなに痛いとは思わなかった。悪い」

「い、いちかあ・・・あんたねえ・・・」

「あ、あと、で・・・おぼえてらっしゃい・・・」

二人は怨みがましい目で一夏を見ると、必死に体を動かしながらベツドへと戻って行った。



「・・・・・・」

「・・・・・・」

夕食後、部屋に戻ったが、それまでにシャルルと会話が一切なかった。まあ、なんとなく理由はわかってるんだが。

「・・・シャルル、いいかげん何かしゃべってくれないと気まずいんだが」

「・・・・・・」

「いや、でもあれは先に布仏さんと約束してたからさあ・・・あの場面では一夏と組むっていうしかなかったんだって。それにほら、

一夏って鈍いから万が一でもないと言った女の子って気付かないよ。・・・
たぶん」

必死に苦しい言い訳を試みるが、シャルルの機嫌は治らない。そりゃあそうだろうな・・・。

「一緒に組めないけどサポートはするからさ、機嫌直してくれないか？」

「ぷっ・・・」

「へ？」

いきなり噴き出すシャルルに、俺は何が起こったのか分からず啞然としてしまう。

「あはははは、奏羅ったら必死なんだから・・・。大丈夫、怒ってないよ」

いたずらが成功して楽しそうなシャルルに安堵しつつも、今まで必死こいて謝っていた自分を思い出して苦笑してしまう。

「だけど罰として、一つだけ言うことを聞いてもらおうよ」

「あ、ああ、いいよ。俺に出来ることなら」

これは約束を守れなかった俺に非があるから仕方ないだろうな。甘んじて受けよう。

「あとさ、助けようとしてくれたことにはちゃんと感謝してるよ」

「俺もアリーナで助けられたしな。おあいこだよ」

「ふふっ、それもそうだね」

ほほ笑むシャルルをみて、俺はふと思いついたことがあった。

「そういえば、俺と一緒にいるときくらいは普通の口調に戻したらどうだ？」

「う、うん。僕——私もそう思うんだけど、ここに来る前に『正体がばれないように』って、徹底的に男子のしぐさや言葉づかいを覚えさせられたから、すぐには治らないかも」

「なるほど……。じゃあ、話しやすいほうで話したら？」

しかし、俺の言葉にシャルルはなんだか納得していない様子だった。

「で、でも、その……。やっぱり女の子っぽくない、かな？」

「うーん、一人称は特に気にならないかなあ……。シャルルがどんな口調でしゃべろうとも、俺はシャルルは女の子だと思うよ」

「でもでも、やっぱり可愛くない……。よね……。？」

「いや、シャルルは十分可愛いと思うよ」

「か、可愛い……。？　僕が？　ほ、本当に？　ウソついてない？」

急に落ち着きがなくなったシャルルがしきりに俺に聞いてくる。や

っぱり男っぽい所が不安だったんだろうか。

「ついてないよ。彼女に欲しいくらい可愛いさ」

「か、彼女……。も、もう、奏羅ったら口がうまいんだから！」

褒められてうれしいのか照れてるのか、ニコニコしながら俺をペしペしと叩いてくるシャルル。やっぱりこういう所が女の子だよな。

「そろそろ着替えるか。なんだかんだで制服のままだったし。俺外に出てから、シャルル先に着替えていいぞ」

「い、いいよ、奏羅に悪いし……。それに……。僕は気にしないから……」

「そう言われてもなあ……。じゃあ、洗面所でも——」

「だ、だからそんなに気を遣わなくていいってば！　ほら、普通にして。奏羅も着替えなきゃいけないんでしょ？」

どうしてこう一生懸命俺を引きとめるかは解らないが、シャルルは変なところで頑固なんだからいったん言いだしたら説得に苦勞するんだよなあ。

「……。わかったよ、ここで着替える」

「うん、そうして」

シャルルの言葉に促され、自分の着替えを出す。そろそろ暑くなってきたので一旦家に帰って半袖とか出しとくべきだな。

「・・・・・・・・」

「どうした、こっちばっか見てじっとして」

「い、いや、なんでもないよ、うん」

今までボーっとしていたシャルルはいそいそと自分の着替えを探し始める。まったく、なにやってるんだか。

「俺、後ろ向いとくから」

「う、うん。じゃあ着替えるね」

しばらくの静寂の後、布がこすれる音がする。なんだろう、静かすぎる中に響くせいか、なんだか緊張する。

「そ、奏羅、着替えないの？」

「あ、ああ、そうだな。じゃあ着替えようか」

いきなり話しかけられドキッとしたが、すぐに自分の行動に移る。とりあえず上着を脱いでつと。

「・・・・・・・・」

気のせいだろうか、いつぞやの更衣室で感じた視線と同じ視線を感じる。さらには布がこすれる音もしていないことに気付いた。

「シャルル？」

「ふぁっ!？　な、なにかな!？」

ものすごく驚いた声が聞こえて、こっちまでびっくりしてしまう。
なんだか動揺しているのがわかる。

「俺の勘違いかもしれないけど、こっちみてないよな？」

「そ、そんなことはないよ」

「ならいいけど・・・」

全力で否定されたので俺の気のせいだろう。さて次はズボンを――

「ゴ、ゴクリ・・・」

「やっぱり見てない？」

「ふえっ!？　い、いや、僕はその――きゃんっ!」

焦ったような声が悲鳴に変わる。それと同時にどんっという音が聞こえて、反射的にシャルルのほうを見てしまった。

「だ、大丈夫かシャル・・・ル・・・」

「いたた・・・。足が引っ掛かっちゃっ・・・」

俺の視線の先には、シャルルがズボンを引っ掛けて床に転んでいた。よりにもよって、上は何も着ておらず、パンツと足に引っ掛かったズボンだけというあられもない姿で。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「そ、奏羅・・・」

「オイシャルル、オレハモウキガエタゾ。オマエモハヤクキガエロヨ」

「げ、現実逃避しないでよ！　僕が恥ずかしいだけになるから！」



「で、なんでこうなってるんだ？」

いざ、寝ようと部屋の電気を消した時、シャルルが先ほどの『一つだけ言うことを聞く』という条件を出してきた。そしてその命令とは『一緒に布団で寝る』という、なんだかよくわからない命令だった。

「僕の着替えを覗いた罰だよ」

「いや、あれは不可抗力だって・・・。ていうか、いったいどんな

罰なんだ、これ」

「そ、それは……。ほら、僕が恥ずかしい思いをしたんだから、奏羅も恥ずかしい思いをするべきなんだよ、うん」

恥ずかしいって……。俺の変な寝言でも聞く気なんだろうか？

「まあ、明日も早いしさっさと寝よう。俺、昨日提出用のレポート書いててあんまり眠れてないんだよなあ」

「そういや、奏羅の所属してる研究所のレポート書いてたよね。じゃあ、疲れてるだろうし、僕に気にせず寝ちゃっていいよ」

「悪いな、なんか話したかったりするんじゃないのか？」

「ううん、大丈夫だよ。じゃあ、おやすみ奏羅」

「ああ、おやすみシャルル」



奏羅におやすみといった後、しばらくシャルルは考え事をしていた。

（なんで一緒に寝ようなんて言っちゃったんだろ……）

シャルルは、あのときは恥ずかしさのあまり勢いがあったので思わず口走ってしまったが、自分がなんでそんなことを言ったのか、いまいち理解できていなかった。

（今日の奏羅にする対応だってそうだよ。話しかけられるたびにドキッてしたり、奏羅が他の女の子としゃべってただけでモヤモヤしたり……。着替えの時に見られるのも嫌じゃなかったし、それに今だって……。）

そこまで考えたとき、シャルルは自分の気付いていないなにかに突き動かされ、行動に移していた。

「奏羅、起きてる……。？」

返事がない。それもそのはず、奏羅はとっくの昔に夢の中だ。

（あれ、僕はなにやってるんだろう……。）

シャルルは奏羅が寝ているのを確認すると、奏羅の顔を覗き込んだ。見つめる距離は近く、規則正しい寝息すら聞こえるほどである。

（そっか、僕は奏羅のことが――）

そこまで考えたシャルルは奏羅の言った言葉を思い出して苦笑してしまう。

（でも、奏羅は僕のこと『友達』としか思っていないんだろうなあ……。）

あの時の奏羅が言ってくれた言葉がよみがえる。シャルルは、いままでこの世の中にはどこにも自分の居場所がないと思っていた。でも、彼は言った。『俺と友達になろう』——それはスパイ目的で来ていたシャルルのことを知っててなお言ってくれた言葉。こんな自分を受け入れてくれた、居場所を作ってくれた。

「ありがとう、奏羅……。好きだよ……」

そう言って眠っている奏羅のほほにキスをすると、背を向けて布団にくるまった。

（でも、ライバル多そうだよね……。布仏さんはなついてるだけかもしれないけど、セシリアはそうなんだろうね……）

もしかしたらまだまだ増えるかもしれない。しばらく自分の恋敵のことを考えると、シャルルはもう一度奏羅の顔を見るために寝がえりをうった。

「ねえ、奏羅、君は今どんな夢をみてるの……。？　その中に僕はいるのかな……。？」

第25話　く気付いた気持ちく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

しばらくシャルルのターンが続いておりますね（笑）

個人的には鈴のターンを作りたい気がするんですが、この流れでどうしろと言うのかっ！

そういえば前書きでも言った通りにユニークが1万を超えたので何かしらやろうかなと思うんですが、前みたいなキャラ崩壊上等のギャグ話でいいですかねえ……。
こんなのやってほしいっていうのがあれば意見を出してみてください。
い。

もしかしたら採用される……かも。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第26話 く学年別トーナメントく（前書き）

二巻も終わりに向けてラストスパートですね。

では本編をどうぞ。

第26話　〈学年別トーナメント〉

六月も最終週に入り、I S学園は月曜日から学年別トーナメント一色に変わる。その慌ただしさは遙かにすぐく、今こうして第一回戦が始まる直前まで、全生徒が雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。それらからやっと開放された生徒たちは急いで各アリーナの更衣室に走る。ちなみに男子組は例によって広い更衣室を三人で使っている。おそらく、反対の更衣室では本来の倍の女子生徒を収容して、大変なことになっているだろう。

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

一夏の言うとおり、更衣室のモニターから見える観客席は、各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会している。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果を確認にそれぞれ人が来ているからね。一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

さすがのシャルルの解説。一夏は他人行儀だが、しかし今回は少なからず俺たちに注目している企業や研究所もいるはずだ。

「ま、一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだな」

「まあ、な」

鈴とセシリアはやはりトーナメント参加の許可が下りず、今回は辞退せざるを得ない状態だ。二人は国家代表候補生であるのに、トーナメントで結果を出すどころか参加できないのは非常にまずい状況だろう。

「自分の力を試せないっていうのは、正直つらいだろう」

一夏が悔しそうに左手を握りしめていた。なんとまあ、お前が怒っても仕方ないだろうに。

「感情的にならないでね。彼女は、おそらく一年の中では現時点での最強だと思う」

「ああ、わかってる」

ペアを組むと決まってから、一夏とシャルルはかなり息が合うようになっていく。シャルルが一夏の気持ちをくんで気を利かせたり、一夏もシャルルのことがなんとなくわかるようになって、コンビとしてはかなりのものになっている。

「どうしたの、なんだか遠い目をしてるけど」

「いや、お前らしいコンビになったってさ」

「・・・あ、そう」

褒めたはずなのになんだかシャルルの機嫌が悪くなってしまった。

（ほんととは奏羅と組みたかったのになあ・・・）

なんか、無意識に悪い言い方をしてしまったのだろうか・・・？

「さて、こっちの準備はできたぞ」

「おう、わかった」

この二人は一回戦一組目からなので、ISスーツの着替えは済んでおり、それぞれ、自分のISスーツの最終確認をしていた。ちなみに俺は激励というやつだ。

「そろそろ対戦表がきまるはずだよね」

当初、ペア対戦は予定されていなかったせいとか、従来まで使っていたシステムが正しく使えなかったらしく、本来なら前日には出来るはずの対戦表も、今朝から生徒たちが手作りの抽選くじで作っていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて、運がいいよな」

「え？ どうして？」

「待ち時間にいろいろ考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たところ勝負、思い切りの良さでいきたいだろ？」

「まったく、一夏らしいな」

「ふふっ、そうだね。僕だったら一番最初に手の内をさらすことになるから、ちょっと考えがマイナスに入っていたかも」

なんというか、対照的な二人だな。しかし、対照的だからこそコンビとして成り立ってるのだろう。

「おっ、対戦相手が決まったみたいだな」

モニターがトーナメント表へと切り替わった。そしてそこに表示される文字を見つめる。

「――えっ？」

「――なっ？」

「――はっ？」

でてきた文字を見て、俺たちは同時にぽかんとした声をあげる。一夏、シャルルの一回戦の対戦相手はボーデヴィツヒさん、そして箒のなんとも異色のペアだった。



「まかせ、こっちこっち」

「ああ、いたいた」

場所は変わってアリーナの観客席。二人の激励に行っていた俺の代わりに、布仏さんが席をとっていてくれる手はずになっていた。

「わるかったな、こんなことさせちゃって」

「謝らなくていいよお。私たちはパートナーだからね」

ちなみに、一夏とシャルル、俺と布仏さんで一回模擬戦をしたことがあったが、コンビとしては息が合っている方だと自分では思っている。布仏さんの遅さが、相手のテンポを崩すことが多々あり、そこを俺が隙をつくというコンビネーションで立ちまわるのが、俺たちの戦術パターン。

「はい、飲み物だよ。オレンジジュースでよかった？」

「ありがとう、気がきくな」

布仏さんから飲み物を貰って口にそれを流し込むと、俺の周りに影が差した。

「なにいちゃついてるんだ、奏羅？」

・・・聞いたことがある声が聞こえる。おもに、最近電話越しでよく聞く声だ。

「・・・なんでここにいるんだよ、リリイ」

そう、俺の中学の同期で同じ研究所に所属している女の子、リリイ・ティアークの声だ。

「うちの研究所だってスカウトくらいしにくるわよ。それに、一回は日本に來なきゃいけなかったし」

「マリア先生は來てないのか？」

「マリア先生なら向こうの方で企業の人と一緒に座ってる」

そういうながら俺の隣に座るリリィ。お前、こんなところで俺に絡んでいいのかよ・・・？

「で、その子とはどんな関係なんだ？」

「そんな興味津々に聞かれても、今回組んだパートナーとしか・・・」

「ほんとか？　じゃあじゃあ、あんたは奏羅のことどう思ってるの？」

今度は布仏さんに絡み始めるリリィ。年相応の女の子というか、なんでこんなに恋愛ごとには反応するんだろうか？

「なにが？」

「いや、奏羅のこと好き？　それとも嫌い？」

・・・どっちの答えも聞きたくないな、それ。

「うんとね、大好き」

「・・・えっ？」

「ほほう？」

なるほど、好きでもなく嫌いでもなく、大好き——って、ええええええええええっ？

「それにおりむくも大好きかなあ。それと——」

一夏の名前を挙げた後、自分の友達の名前を挙げていく布仏さん。
つまりはloveではなくlikeということだよな、うん。

「なんだ、つまんないなあ」

「・・・お前なあ」

なにを期待してるんだよ、こいつは。そんな会話を繰り返しているうちに、アリーナの真ん中には、一夏とシャルル、ボーデヴィツヒさんと箒のコンビが定位置についていた。

「あれが、かの有名な織斑一夏君か・・・」

「ああ、そうだな」

「隣も男の子なのね。名前は？」

「・・・シャルル・デュノア」

「へー、じゃあデュノア社の」

「ああ、御子息ってことだな」

「でも、あそこの社長に息子がいたなんて聞いたこと・・・むぐっ！」

「・・・そろそろ試合が始まるから、お前はもう黙れ」

危なかった、こいつ言っではいけないことを言うところだった。俺の安堵のため息とともに、試合のブザーが鳴り響いた。

「おう、いきなり即時加速とは。一夏君って結構せっかち？」

「いや、あれには理由があるんだけどな」

一夏がボーデヴィツヒさんに向かって一直線に突き進むが、予想通り途中で止まってしまう。

「あれ？途中で止まっちゃったんだけど？」

「ああ、あの黒いIS、シュヴァルツェア・レーゲンにはアクティブ・イナーシャル・キャンセラーAICが搭載されてるからな」

「あれか・・・。ていうか、実戦であれを使おうだなんて、ドイツはよっぽど操縦者の反射神経に自信があるのね」

「AICって慣性停止能力のこと？」

「ああ、あってるよ」

まさか布仏さんがこの単語を喋るとは思ってなかった。まあそれは置いて、AICは物質に力が加えられるときに必ず発生する慣

性力を停止させる作用がある。要は、見えない紐で縛られて動けなくなるっていうことだ。

「あれじゃ、攻撃が直撃だね。あっけないなあ・・・」

「いや、そうでもないよ」

一夏にレールガンを放とうとするボーデヴィツヒさんにシャルルが一夏の後ろから頭の上を飛び越えてアサルトカノンを放つ。それにより砲撃は空を切り、さらにシャルルの追撃でボーデヴィツヒさんは間合いをとる。

「これはタッグマッチだからな」

「・・・奏羅が勝ちほこってどうするのよ」

痛いところをつかれてしまった。そして布仏さん、憐みを持った目で俺の頭をなでないでください。

（しかし、シャルルはよく動くよな。こりゃ作戦がうまくいくかな）

二人の作戦は『箒を先に倒そう』作戦。シュヴァルツエア・レーゲンの得意なのは一对多数、なおかつボーデヴィツヒさんの性格上、箒を助けることはしないはず。なので、ボーデヴィツヒさんに目をつけられている一夏をおとりにし、シャルルが速攻で箒を撃破。そのあと一対二の状況でたたみかけるというものだ。この作戦の肝は『一夏がいかにして生き残るか』、それが課題だったのだが、シャルルが箒と戦いながら一夏をうまくカバーするので、その点では作戦が成功しそうだった。

（問題は箒を倒した後だ。シュヴァルツェア・レーゲンが一対多に特化している以上、二対一だろうと不利なのは変わらない）

アリーナでは、一夏がボーデヴィツヒさんに距離を詰めて近接戦闘を行っている。しかし、A I Cにより動きを止められ、ワイヤブレードにより装甲の三分の一ほどの破損とともに、床へと叩きつけられた。

「あいたたた……。こりゃ一夏君まずいんじゃないの？」

「おりむ……。…」

リリィと布仏さんが心配そうな声をあげる。確かにこの状況、追撃により一夏がやられてしまう。

「何度言わせるんだ？　これは――」

一夏にレールガンの砲撃が襲いかかる。しかし、それは一夏に届くことはなかった。

「タッグマッチだよ」

一夏とボーデヴィツヒさんの間には、箒を倒し、盾を構えた俺のルームメイト、シャルル・デュノアがいた。



「これで決めるっ！」

零落白夜を発動させた一夏は、ラウラへと直進する。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが、それなら当たらなければいい」

A I Cによる見えない拘束攻撃が連続で一夏に襲いかかるが、それを一夏は急停止や転身、急加速で回避する。それを見たラウラは、ワイヤーブレードでの攻撃を絡めて一夏へと攻勢を仕掛けた。

「一夏！ 前方二時の方向に突破！」

「わかった！」

それを後ろで見ていたシャルルが、一夏へと回避方向の指示をしなからラウラを牽制し、一夏への防御を行う。

「ちっ・・・小癪な！」

ワイヤーブレードをかわした一夏が突きの構えでラウラへと突進を仕掛ける。これはA I Cで捕まえるには、線よりも点のほうが圧倒的に難しいと考えたからだ。

「無駄なことを！ 腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止められれば――」

「ああ、なんだ。忘れているのか？ それとも知らないのか？ 俺たちは二人組なんだぜ？」

慌てたラウラが視線を動かすが、ゼロ距離に接近したシャルルが、ショットガンの六連射を叩き込む。その瞬間、ラウラの大型レールカノンは轟音とともに爆散した。

「くっ・・・！」

二人はA I Cの致命的な弱点を予想していた。それは『停止させる対象物に意識を集中させていないと効果を維持できない』。その予想はこの攻撃によって現実へと変わっていた。

「一夏！」

「おう！」

再度、零落白夜を発動させた一夏だったが、ここで予期せぬ出来事が起こってしまった。

「なっ！？ エネルギー切れかよ！」

蓄積されたダメージが大きかったのか、零落白夜のエネルギー刃は音とともに小さくしぼみ、消えてしまった。

「残念だったな。 限界までエネルギーシールドを消耗してはもう戦えまい！ あと一撃でも入れば私の勝ちだ！」

ラウラは腕のプラズマ刃を展開すると一夏へと飛び込む。ラウラの

猛攻を、一夏は必死にこらえていた。

「やらせないよ！」

「邪魔だ！」

ラウラは一夏への攻撃の手を休めないまま、援護に入ろうとしたシャルルをワイヤーブレードで牽制する。

「うあっ！」

「シャルル！ くっ——」

「次は貴様だ！ 堕ちろっ！」

被弾したシャルルに氣をとられた一夏の隙をつき、ラウラは正確に攻撃を叩き込む。

「ぐあっ・・・！」

白式から力が消え、一夏が床へと落下する。

「は、ははっ！ 私の勝ちだ！」

「まだ終わっていないよ」

勝利宣言をするラウラに即時加速によりシャルルが突撃する。

「なっ・・・！ 『即時加速』だと!？」

ラウラの顔が驚愕の表情へと変わる。事前データにはシャルルは即時加速を使えるとは書いていなかったのだ。

「今はじめて使ったからね」

「ふっ……。だが、私の停止決壊の前では無力！」

そう言ったラウラがA I C発動体制へと変わる。しかし、動きが止まったのはラウラだった。

ドンッ！

「!？」

下方向からの射撃、それはシャルルが捨てた残弾ありのアサルトライフルを構える一夏からの攻撃。これは、事前にシャルルが一夏のI Sに使用許可を出していた武器だった。

「これならA I Cは使えまい！」

「それがどうした！ 第二世代の攻撃力では、このシュヴァルツェア・レーゲンを墮とすことなど——」

そこまで言ったラウラにある武器が頭に浮かぶ。それは、単純な攻撃力なら第二世代最強と謳われた装備——

「この距離なら外さないよ」

「『盾殺し』……!」
シールド・ピアース

リヴァイヴ・カスタムの盾の装甲がはじけ飛び、中から六九口径パイルバンカー『グレー！スケール灰色の鱗殻』が姿を現した。

「おおおおっ！」

ズガンッ！

ラウラの腹部にパイルバンカーが続けざまに三発撃ちこまれる。それとともにISに紫電が走り、強制解除の兆候を見せた。

◇

（こんな・・・こんなところで負けるのか、私は・・・！）

相手の力量を見誤った、それは間違えようのないミス。しかし――

（私は負けられない！ 負けるわけにはいかない・・・！）

ラウラ・ボーデヴィツヒ、それが私のなまえ識別上の記号。人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。

（ただ、戦いのために作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた）

軍のために、あらゆる攻撃方法、戦術、兵器の操縦方法を体得した。

ISも例外ではなく、その適合性向上のために行われた処置『ヴォーダン・オージェ』によって異変が生まれた。

疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれは、脳への視覚信号の爆発的な速度向上と、超速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処置。その処置を施した目のことをヴォーダン・オージェ『越界の瞳』と呼ぶ。

（しかし、この処置によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできない制御不能へと陥った）

その副作用により、トップの座から転落。そしていつしか押された、『出来そこない』の烙印。しかし、そんな中出会った、あの人——織斑千冬のおかげで、もう一度私は頂点へと返り咲けた。

（あの方は、堂々として、凛々しくて、強かった。なのに——）

優しいような、気はずかそうな表情に教官を変えてしまう弟、それが認められなかった。だから——

（力が、欲しい）

ラウラの奥底で何かがうごめく。

『——願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？』

言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など、空っぽの私など——

『もう少し他のことに興味を持ってみたらどうだ？』

いつか聞いた言葉がラウラの頭によみがえる。それは、いつか自分にぶつかって来た男子の言葉。

「（貴様の言葉など関係ない、何もないのが私なのだから。だから――）」

力を・・・比類なき最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！



「――ら、奏羅！」

リリイの言葉にはっとする。周りを見ると、心配そうなりリイと布仏さん。

「まかせー、大丈夫？」

「試合終わった瞬間に頭を抱え出すんだもの。びっくりしたじゃない」

シャルルがボーデヴィツヒさんに『灰色の鱗殻』を直撃させ、シュヴァルツェア・レーゲンに紫電が走った時、急に俺の頭に何かが流れ込んできた。あれは、間違いなく――

「ラウラ・・・ボーデヴィツヒの・・・声・・・？」

プライベート・チャンネルは使用していない。しかし確かに聞こえた、彼女の暗い過去。

「ボーデヴィツヒさんは！？」

俺は立ち上がってアリーナを見た。そこにはシュヴァルツエア・レーゲンをまとったボーデヴィツヒさんの姿はなかった。

「なに・・・あれ・・・？」

リリイがつぶやく。そこには、黒い全身装甲のIS。ボディラインはラウラのそれを表面化し、最小限のアーマーにフルフェイスの装甲。そしてその手には、かつて織斑先生がふるっていた『雪片』が握られていた。

（あの声が本物なら、あれはボーデヴィツヒさんの望んだ姿。あんなものが・・・）

彼女は言っていた『自分はからっぽ』だと。そして空っぽの彼女が望んだのが今のあの姿なら――

「そんなのって・・・悲しすぎるだろ！」

「そ、奏羅！？」

俺はリリイの声を無視し、頭で考えるよりも早くアリーナへと走り出していた。

第26話 〈学年別トーナメント〉（後書き）

次の話でラウラフラグがたつ・・・のか？

ユニークが一万突破したと思ったら、PVも10万突破しました
（笑）

読者の皆様にはこんな小説を読んでもうさって感謝の限りです。

特別番外編のネタは、異様にリアルなIS学園か鈴メインの本編と
まるで関係のない話のどちらかで迷ってます。

まあ、どちらもいずれあげそうな気がするんですが・・・

ご意見ご感想をお待ちしております。

第27話　く君は君でく（前書き）

二巻が・・・終わるっ・・・！

では本編をどうぞ。

第27話　君は君で

「一体なんだってのよ!？」

ピットへと向かう途中に俺の後をついてきたリリイがさけぶ。布仏さんは・・・あの足の遅さだとしてきたとしてもだいぶ後ろの方だろう。

「わからないけど、非常にまずそうな事態なのは確かだ!」

「それくらいわかるわよ!　あんたがあそこに向かう理由がわからないの!」

俺があそこへ向かう理由――本当にプライベート・チャネルから聞こえてきたのかは解らないが、ボーデヴィツヒさんの声が聞こえたからだ。そのことを走りながら説明するとリリイの呆れた声が聞こえた。

「あんた・・・そんな確証のないものを確かめるために危険なことをするわけ?」

「確かに確証はないけど・・・気になるんだよ。第一、あそこには俺の友達がいるからな」

「・・・あんたって、めんどくさがりの割にはいろいろと首を突っ込むわね」

リリイの皮肉に苦笑しながら、ピットへと到着、ドアを開ける。その時、緊急学内放送が部屋に響いた。

『非常事態発令！ トーナメントの全試合は中止！ 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返す——』

・・・鎮圧のために教師部隊を突入させる！？ それなら確かに状況は打破できるけど、あの時間こえた言葉が本当だとしたら、ボーデヴィツヒさんはまた同じことを繰り返してしまう。力で鎮圧するんじゃない、言葉で彼女を止めないと——

「リリィ、頼みがあるんだ」

「・・・なによ？」

「俺が出て行ったあとに、ピットのコンピュータからシステムに侵入して教師部隊が出れないようにしてくれ」

「な、なんであたしがそんなこと！？」

「頼むよ、一生のお願いだ」

リリィに向かって深々と頭を下げる。正直、自分でもここまで必死になっているのに驚いているくらいだ。

「~~~~~！ あ〜もう、わかった！ その代わり、今度何か奢ってよ！」

「俺の払える分でよければな！」

リリィは自前のブック型デバイスを開いてピットのコンピュータと

接続すると同時に、俺はプラチナを起動させるとアリーナ内部へのゲートを開いた。

『奏羅！ あれと話をするにしても相当な覚悟がいるわよ！』

「わかってるよ！ ストライクフレームを使う！」

ストライクフレームを展開し、プラチナとドッキングさせる。ストライクフレームは近距離戦闘用フレームで、被弾面積を減らすための小型ウイングスラスタ、回避性能を上げるためにスカートにも姿勢制御スラスタを装備している。左手にはワイヤーアンカーが発射出来るシールド、ソニック・ブレイズは大型物理ブレードとして使えるように大型の刃が接続され、射程は短いが一度に発射できる弾の多いショットガンが腰部ウェポンラックに収納されている。

「システム・オールグリーン、カタパルト接続。射出タイミングを天加瀬奏羅に譲渡します！」

「・・・カタパルトねえよ」

「いや、はは。一回言ってみたくて。・・・ちゃんと帰ってきなさいよ」

「わかってるよ。お前こそ、足止め頼むぞ」

「あたしを誰だと思ってるんだ？ 中学時代にハッキングでテスト問題手に入れてたりリイちゃんだぜ？」

「はは、そうだったな」

頼もしい同僚に後押しされ、俺はアリーナへと飛び出した。



「ぐっ！ 一体何が・・・？ ー！？」

「なっ！？」

アリーナで変化を見ていた一夏とシャルルは目を疑った。視線の先でシュヴァルツェア・レーゲンが変形、正しくは変体していたのだから。

「なんだよ、あれは・・・」

一夏は無意識につぶやく。ISはその原則として変形をしない。というか、出来ないのだ。形状を変えるのは『ファーストアップ・フィッティング初期操縦者適応』と『フォームシフト形態移行』の二つだけである。装甲をパージするなどで多少変わるものがあっても基礎的な形状が変化することはないのだ。しかし、二人の目の前では、粘土細工のようにシュヴァルツェア・レーゲンの装甲が変形し、ラウラの全身をつつみこむと、ゆっくりと地面へと降り立った。そこには全身装甲のISに似た『何か』。そしてその手の武器は――

「雪片・・・！」

かつて、織斑千冬がふるっていた刀、それに酷似しているのが一夏には理解できた。一夏は無意識に雪片二型を握りしめ、中段に構える。その瞬間、目の前の黒いISが懷に飛び込み一閃。それは紛れもなく織斑千冬の太刀筋――

「ぐうっ！」

構えていた雪片二型がはじかれ、そのまま敵は上段から縦一直線の斬撃。瞬間的に一夏は後方へと回避するが、すでにシールドエネルギーが底をついていた白式の最後の力だったのか、光とともに一夏の全身から消えた。

「……がどうした……」

しかし、今の一夏にそれはどうでもよかった。

「それがどうしたああっ！」

激しい怒りに突き動かされ、にぎりしめた拳を武器として黒いISへと突撃する。しかし、白式を展開していない状態のそれは敵にとっては格好の的だった。一夏の一撃を軽々と回避すると、刀を再び上段へと構える。

「く……くそっ!!」

やられる！ そう思った一夏だったが、横から突撃してきた何かに弾き飛ばされた。

「一夏、逃げて!!」

それは物理シールドを構えたシャルルだった。しかし、そのシールドも敵の連撃によって瞬く間にボロボロになっていく。

「シールドが持たない・・・！？ このままじゃ・・・！」

『大丈夫だ、困ってるときは助けてやるって言っただろ？』

シャルルのプライベート・チャンネルに通信が入る。その通信の声の主はシャルルの顔が綻んだ。

「奏羅！！」

奏羅は瞬時加速で突撃しながらシールドからワイヤーアンカーを放つ。それに敵ISが気を取られた瞬間、シャルルは即座にマシンガンを展開して黒いISに撃ち込んだ。敵がマシンガンでひるむと同時にワイヤーアンカーに捕えられ、奏羅のもとへと引っ張られる。

「悪い、今はこうするしかないんだ・・・」

奏羅はラウラに向かって一言謝ると、黒いISに向かって至近距離でショットガンを数発撃ちこむと、ワイヤーを思い切り回して遠心力を使って投げ飛ばした。

「大丈夫か、シャルル？」

「ありがと・・・奏羅・・・」

奏羅はシャルルの無事を確認すると、二人で一夏のもとへと向かった。

「一夏、ISも展開せずにあいつに立ち向かうなんて死に行くつもりか!？」

奏羅が一夏の短慮に怒鳴るが、一夏はまるで話を聞いていなかった。

「・・・うるさい! あいつをブツ飛ばさないと気が済まないんだ!」

「おい、一夏——」

「どけよ、二人とも! 邪魔するならお前らも——」

バシーン!

大きな音とともに一夏の体が横向きに転ぶ。彼を吹き飛ばすほどに頬を叩いたのは、奏羅でもシャルルでもなく、ラウラと組んでいた筈だった。

「いい加減にしろ! なんだというのだ! わかるように説明しろ!」

筈の一撃により、一夏は顔面に感じる痛みに限界まで達していた怒りの頂点が折られ、冷静になって話し始めた。

「あいつ・・・あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを・・・くそっ!」

「お前は・・・いつも千冬さん千冬さんだな」

「それだけじゃねえよ。あんな、わけわかんねえ力に振り回されてるラウラも気にいらねえ。ISとラウラ、どっちも一発ぶったたいてやらねえと気が済まねえ」

「なるほど。で、天加瀬はなぜここにいる？」

次に箒は乱入者でもある奏羅に質問を投げかける。

「友達を助けに来た・・・といたいんだけど、それよりも気になることがあったからさ」

「気になること？」

「ああ。だから、ボーデヴィツヒさんと話しに来た」

「話って・・・あの状態でできるのか？」

箒の疑問に奏羅は首を振った。

「わからない。けど、やってみるよ」

「おい待てよ、俺はあいつを殴らなきゃいけないんだぜ？」

「わかってるよ。お前が織斑先生のコピーを壊して、俺が彼女と話をする。で、正気に戻った後好きだけ殴るといい」

「しかし、教師部隊が来るのだろう？　なら――」

「悪いな箒。教師陣はまだこれないよ。足止めしてるからな」

「なに!？」

「さっき俺の優秀な友人からプライベート・チャンネルで連絡が入った。突然のシステム不良により、しばらくはでてこれないってな」

「ははっ! そりゃいいや!」

奏羅の言葉に一夏が笑う。奏羅もそれにつられてほほ笑んだ。

「ええい! たたかうにしても、白式のエネルギーはどうするのだ!？」

「ないなら他から持ってくればいい。でしょ?」

「シャルル・・・」

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か!？ だったら頼む! 早速やってくれ!」

「けど、約束して。奏羅が彼女と話すまで絶対に負けないって」

一夏の言葉にピシッと指をさして言った。その言葉は強く、有無を言わせぬものがあった。

「もちろんだ。ここまで啖呵切って飛び出すんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から二人は女子の制服で通ってね」

「俺もかよ・・・」

「うっ・・・！ い、いいぜ？ なにせ俺と奏羅は負けないからな！」

軽いジョークを交えた会話に一夏はいつの間にか血が上っていた頭が適度な状態になっていた。

「じゃあ、はじめるよ。・・・リヴァイヴのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可。一夏、白式のモードを一極限定にして。それで零落白夜がつかえるようになるはずだから」

「おう、わかった」

リヴァイヴからのびたケーブルが白式に繋がれ、そこからエネルギーが流れ込むのを、一夏は不思議な気分を感じていた。

「・・・さっきの友達から連絡が入った。あと5分で足止めが終わるらしい。引き延ばしても6分が限度だ」

「大丈夫だよ、もう終わるから・・・。完了。リヴァイヴの残りエネルギーを全部渡したよ」

その言葉通り、シャルルの体からリヴァイヴが粒子となって消える。それに合わせて白式が一極限定で再構成を始めた。

「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

「充分さ」

「い、一夏っ！」

それまで傍観していた箒がはじかれたかのように口を開く。その目はまっすぐ一夏を見つめていた。

「死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「何を心配してるんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！ 私はお前が――」

「信じろ」

「えっ？」

「俺を信じろよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」

「・・・なにやってんだか、あの二人」

ふたりの様子を少し離れてみていた奏羅が呆れたように苦笑した。

「ほんと、物語のワンシーンみたいだね」

同意したようにシャルルもほほ笑む。

「さて、箒が安心できるように俺も気合いをいれないとな」

「ふふっ、そうだね。・・・僕も、奏羅のこと信じて待ってるよ」

「それは心強いな。じゃ、行ってくるよ」

奏羅はシャルルのもとを離れ一夏の横へと並ぶ。そして一夏はまがい物の敵へ、奏羅はラウラへと顔を向けた。

「行くぜ、偽物野郎」

「行くぞ、ボーデヴィツヒさん」

合図はなかった。しかし、二人は同時に黒いISへと突撃した。



「一夏！」

「おう！」

ただ名前を呼ぶだけ。しかし、一夏は俺の考えがわかったように行動する。アイツは攻撃に反応して反撃する。ならば作戦は簡単、時間差で攻撃することだ。

「うおおおおおっ！」

一夏が刀を腰に当て、居合いの構えで突進する。その後ろに重なるように俺は一夏の後を追いかけた。

「・・・・・・・・」

黒いISが一夏の突進に反応して刀を振り下ろす。それを見切った一夏が横に避けるとともに、視界に現れた黒いISに向かって俺はショットガンを再び至近距離で叩き込んだ。

「まだだっ！」

怯んだところを一夏が雪片二型を腰から抜き放って一閃、相手の刀をはじき腹部へと蹴りを入れ吹き飛ばす。それに合わせて俺はシールドからワイヤーアンカーを射出し、相手を捕まえると思いつき引きよせた。

「これでっ！」

一夏が零落白夜を発動させる。

「終わりだっ！」

俺は大型物理ブレードと化したソニック・ブレイズを抜く。そして二人同時に縦に、横に、相手を断ち切った。

「ボーデヴィツヒさんっ！」

顔の装甲が割れ、彼女の目が現れる。あの時間こえた言葉の通り、金色に輝く左目。

「しっかりしろ！」

彼女の体を捕まえて必死に叫ぶ。しかし、その目はうつろで反応がない。

（ダメなのか・・・？ 彼女に何もできないまま終わるのか・・・？）

諦めるしかないのか？ そう思った時だった――

『諦めちゃ、だめ』

懐かしい声が聞こえた。昔、いつも当たり前のように聞いていた彼女の声。

（そうだ・・・。あいつは夢に向かって努力してた、一度もあきらめずに！）

いつだってそうだった。彼女はいつだって諦めなかった。俺はそんな子の夢を継いでるんだ。こんな所で――

「・・・プラチナ。お前が思いを力に変えるISなら」

諦めてたまるか！！

「思いを・・・伝えてみせろっ！」

——操縦者が変更されました。操縦者の変更に伴い、唯一使用の特
殊才能を開放します。ワンオフ・アビリティ発動——



見渡す限り、周りには一面のヒマワリ。いつだったか忘れたが、この景色を見たことがある気がする。

「貴様は、天加瀬・・・奏羅・・・？」

「ラウラ・・・ボーデヴィツヒ・・・さん？」

その幻想的な光景の中に予想外の人物。それは先ほどまで話をしようと思っていた、ラウラ・ボーデヴィツヒさんだった。

「ここは・・・どこなんだ・・・？」

「さあ。わからないな」

周りを見渡す彼女は、この不思議な場所になんとか惚けたような、魅入っている顔をしており、眼帯をつけていない左目はその光景を眺めていた。

「綺麗だよな、ここ」

「・・・わからない」

「えっ？」

「この感情がわからない・・・。私はからっぽのはずなのに、心など、ないはずなのに・・・」

「それは、人工的に作られた存在だから？」

俺の言葉にボーデヴィツヒさんがはっとする。

「・・・なぜ知っている？」

「悪い、なぜか知らないけど聞こえたんだ。アリーナで、君が負けたときに」

「・・・・・・」

あの時のことが聞かれていたことが恥ずかしいのか、彼女は黙り込んでしまった。

「あのさ、『私はからっぽだから』って決めつけるの、よくないと思うよ」

「なに・・・？」

「からっぽだからって決めつけて諦めるんじゃない、からっぽだから、何かを見つけようとしないとだめなんだと思う」

俺の言葉に彼女はしばらく考え込んだ後、口を開いた。

「私は、教官になりたかったんだ」

「織斑先生のこと？」

「ああ。でも、教官のような強さを望んでも、教官のようにはなれなかった。貴様らに、負けてしまった」

そうつぶやいた後、彼女は顔を伏せた。

「私は・・・どうしたらいい・・・。憧れた教官にはなれない、私は何になればいい・・・？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒになればいいんじゃないのかな？」

「えっ・・・？」

「世界中に君はたった一人だ。同じ人間なんていない。だから、織斑先生にならなくてもいいんだよ。君は、君になればいい」

「私になる・・・」

「そう。その途中で、自分がからっぽじゃなくなる、何かが見つかる」

るんだよ」

「どこから・・・見つかるんだ？」

「たぶん、なんでもないような日常だと思うよ。俺がそうだったし」

俺も大切が人がいなくなって、どこかに穴があいたような感じだった。でも、それを満たしてくれたのは、旭と一夏、箒やセシリアとの絆だった。

「それでも見つからなかったらどうするんだ？」

「その時は、俺も手伝うよ。だから――」

俺は彼女に向かって右手を差し出す。

「一つだけ聞いていいか？」

「何？」

「どうして教官は、織斑一夏は、お前は、そんなにも強いんだ・・・？」

「人は、大切なもののために戦う、だから強くなれるんだ。織斑先生は一夏のため、一夏はみんなを守るため、かな？」

「じゃあ、お前は・・・？」

「俺は夢のため。それに」

「それに？」

「今日のは誰かさんの声を聞いたから、俺に出来ることなら何かしてあげたかった。それだけだよ」

「なっ・・・！？」

自分の告白を知らないうちに聞かれていたのが今更ながら恥ずかしくなったのか、彼女の顔が赤くなる。なんだ、この子こんな顔もできるんだな・・・。

「大丈夫、今日聞いたことはなかったことにするからさ」

「・・・いや、なかったことにしないでくれ」

「いいのか？ ボーデヴィツヒさんも忘れてほしいんじゃない・・・」

「この不思議な気持ち、なかったことにしたくない・・・。それに――」

「それに？」

「私のことはラウラでいいぞ、奏羅」

俺の右手をとってほほ笑む彼女。今度は冷たくない、警戒も緊張もしていない、温かい手。

「ああ、よろしくな。ラウラ」

思わぬ新しい友人に、俺もつられてほほ笑んでしまった。



気がついたら彼女は俺の腕の中で眠っていた。なんだか、長い夢を見ていた気分だ。

「奏羅、大丈夫か？」

後ろから一夏がやってくる。そういやこいつ、ラウラを一発殴りたがってたっけ。

「悪いな一夏、殴りたかったんだろ？」

「・・・いや、その顔見てたら殴る気失せちゃったよ」

眠っているラウラの顔を見ながら一夏がつぶやいた。ラウラの寝顔は、どこか安心したような顔で眠っていた。

第27話 君は君で (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

一夏と奏羅のコンビネーション攻撃は前々から考えていたんですが、ここで出してしまいました。

とりあえず二巻が終わったくらいでPV10万&ユニーク1万記念のネタ小説でもあげようかなと考えております。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第28話　く新しいはじまりく（前書き）

おお、二巻が終わった。

次の話は閑話、そして番外編と続きます。

では本編をどうぞ。

第28話　く新しいはじまりく

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、すべての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上――』

場所は食堂。学年別トーナメントの中止を告げる校内放送が流れる中、俺と一夏とシャルルは食堂でご飯を食べていた。

「ふむ。シャルルの予想通りになったな」

海鮮ラーメンを食べながら一夏がつぶやく。

「そうだねえ。あ、奏羅、七味とって」

「どうぞ」

「ありがとう」

騒動の当事者でありながらのんびりしている俺たちだが、先ほどまで教師陣から事情聴取されていたのだ。ちなみにハッキングして足止めたことはばれておらず、俺が何か言う前にリリィはそそくさと退散したようで、その事情聴取の時にはすでに学校内にいなかった。もちろん、食堂には話を聞きたそうな女子もいたが、時間ぎりぎりなので食事を優先させてもらった。

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまくて幸せだ。……ん？」

一夏がふと周りを見渡したあと、不思議そうな声をあげる。つられて見てみると、先ほどまで俺たちの食事が終わるのを心待ちにしていた女子たちがひどく落胆している。

「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」

「交際・・・無効・・・」

「・・・うわあああああんっ！」

バタバタと凄い音を立てながら数十人が泣きながら走り去って行った。

「どうしたんだろうね？」

「さあ・・・？」

一夏とシャルルはわかっていないようだが、俺は理由を知っている。これでよかったような、よくなかったような変な気分だ。

「・・・」

女子たちが走り去った後に一人茫然と立ち尽くしている女の子がいた。口から魂が抜けているかのような姿の女の子は、女の子たちの噂を作った張本人の箒だった。

「そういえば箒。先月の約束だが――」

「ぴくっ」

少し反応した。死んではいないみたいだな。

「付き合ってもいいぞ」

「――。――、なに？」

「・・・へ？」

一夏の予想外の一言に魂が口に入る筈とあっけにとられた俺。

「だから、付き合ってもいいって・・・おわっ!？」

「ほ、ほ、本当、か？ 本当に、本当に、本当なのだな!？」

突然の返答に一夏を締め上げる筈。慎重さが大分あるのによく持ち上げられるな・・・。

「お、おう」

「な、なぜだ？ り、理由を聞こうではないか・・・」

「そりゃ幼なじみだからな。付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「・・・」

おいおい、こいつマジかよ。今の一言で筈の顔が一瞬でこわばる。

なんというか、今回は一夏じゃなく箒に合掌だな・・・。

「・・・だろうと・・・」

「お、おう？」

「そんな事だろうと思ったわ！」

「ぐはあっ！」

武道初心者の俺が見ても見事な正拳が一夏にクリーンヒットした。

「ふんっ！」

追撃の蹴りが鳩尾に刺さる。そのまま一夏はその場へと崩れ落ちてしまった。

「ねえ、奏羅。一夏ってわざとやってるんじゃないって思うときがあるんだけど・・・」

「ああ、俺もそう思う」



「あ、天加瀬君に織斑君にデュノア君。ここでしたか。さっきはお疲れさまでした」

寮に帰る途中、ぼったりと先ほどの騒動の残務処理をしていたであろう山田先生と出くわした。

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な活動が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と胸を張る山田先生。やっぱり、この人はこういう子供じみたところがあるよなあと思い、思わず微笑んでしまった。

「・・・奏羅のスケベ」

「へっ？ な、なんで!？」

「自分で考えたら？」

なぜかいきなり機嫌が悪くなるシャルル。一体俺が何したというんだ？

「？ どうかしました？」

「い、いえいえ。なんでもないです」

「そうですか。それよりも朗報です!」

ぐっとガッツポーズをとる山田先生。何かいいことでもあったのだ

ろうか？

「なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！ そうなんですか！？ てっきりもう来月からになるものとばかり」

大いに喜ぶ一夏。それもそのはず、前々から大浴場でのんびり風呂に入りたいと言っていたからな。

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、もと生徒たちが使えない日なんです。でも点検自体はもう終わったので、それなら男子達に使ってもらおうって計らいなんですよ！」

「ありがとうございます、山田先生！」

感動のあまりか、一夏は山田先生の手を握りしめる。そのせいでまた山田先生の妄想が大爆発していたが、俺とシャルルはそれどころではなかった。

「えーっと、シャルルはどうする・・・？」

「え・・・えっと・・・」

「どうしたんですか、お二人さん？ ほらほら、早く着替えをとりに行ってください。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますね。じゃあ」

そういつて山田先生はすたすたと歩いて行ってしまった。

「大浴場かぁ。楽しみだな！」

「あ、ああ」

「そ、そうだね」

知らぬが仏。テンションの高い一夏とは別に、俺たちはこれからのことを小声で話していた。

「・・・シャルル」

「う、うん。困った・・・ね。どうしよう。と、とりあえず、着替えを取りに部屋に戻ろうか」

「・・・何かしらの名案が思いつくさ・・・たぶん」

しかし、部屋に戻っても着替えを取り出しえいる間も何も浮かぶこともなく、風呂の準備だけ進んだ。そして、

「遅いですよ、二人とも。織斑君もう入っちゃってますよ？」

「そ、そうですか・・・」

テンション高めの山田先生に見送られ、『ごゆっくり』という言葉葉とともに脱衣場のドアが閉まった。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

しばらくの沈黙。聞こえてくるのは、大浴場からの機嫌がいい一夏の鼻歌だけだった。

「えーっと、シャルル？」

「は、はいっ!？」

なぜ敬語になるのだろうか。まあ、気を取り直して。

「一夏や用意してくれた山田先生には悪いけど、俺たちは自分の部屋でシャワーを浴びるか」

「えっ？ 奏羅までシャワー浴びなくていいって。大浴場を使っ
きなよ」

「いや、シャルルだけ部屋に戻るってのもかわいそうだし……。ほら、旅は道連れっていうじゃないか。それに、中に一夏がいなかったとしても、一緒に入るってわけにはいかなかないだろうし、どっちにしろ俺がシャワー使うのは変わらないしさ」

「い、いいよ、奏羅は入ってきて。その……。僕ってそんなにお風呂は好きじゃないから」

ああ。この調子だとシャルルはたぶん梃子でも動かないな。ここで時間を無駄にしてもしょうがない。お言葉に甘えとするか。

「じゃあ……。悪いなシャルル。また部屋でな」

「……。うん、ごゆっくり」

脱衣所から出ていくシャルルを見送った後、手早く服を脱ぐと浴場のドアを開けた。

「わはははははは！ 波っ！ ……あっ」

ぴしゃり

思わずドアを閉めてしまった。今なかで一夏がはしゃいで気がする。しかも、何かしらの気功を手から放とうとしていた時に目があったような……。いや、気のせいだ。さっきはまだ俺はドアを開いていなかったんだ。意を決してもう一度浴場のドアを開ける。

「……よう、奏羅。遅かったな」

「お、おう、一夏。もう入ってたんだな」

扉をあけると、大型の湯船に平然と浸かっている一夏がいた。やっぱりあれは気のせいだったのだろう。

「……あらかた終わったのか？」

「あ、ああ。体も髪もさっぱり綺麗になったぜ」

「そうか」

脱衣所の時とはまた違う気まずさをもった沈黙。いたたまれなくなったので、俺は思わず口を開いた。

「……いや、やっちゃうよね。俺も昔、漫画に影響されて、手か

ら気功波を――」

「う、うわあああああああああああああああああ
っ！」

ものすごい嬌声のあと、一夏はものすごい勢いで大浴場から飛び出していった。・・・走ったら危ないぞ。

「・・・体でも洗うか」

触れちゃいなかった所に触れてしまったことを軽く後悔しながら、体をお湯で流し、体を洗い始める。普段家などではあまり気にしないのだが、IS学園の大浴場はさすがに公共の設備なので、最低限のマナーくらいは守らなくては。

「さて、どこにつかうかな・・・」

ここには先ほど一夏が入っていた大型の湯船に、ジェットとバブルのついた中型の湯船、檜風呂に加えて全方位シャワーである。まさに風呂好きにはよりどりみどり。

「そういえば檜風呂なんて入ったこともなかったよな・・・よし」

人生初の檜風呂へと入ってみる。まさか、こんな場所に入れるとは思ってもみなかった。

「はああああああ」

やっぱりシャワーとは違い、体中が芯まであったまる気がする。湯加減もちょうどよく、実に最高の気分だ。

「一夏がはしゃぎたくなるのもわかる気がするな・・・」

そういえば風呂に入ることにより、新陳代謝が上がって、血流の流れがよくなって疲れが・・・やばい、だんだん眠たくなってきた。

カラカラカラ

（一夏か・・・？ 入り足りなくて戻ってきたかな・・・？）

しかし普段入り慣れてるから気づかなかったが、風呂とはこんなにもいいものだったとは・・・。三ヶ月間シャワーでも別にどうとも思ってたが、今日を境に風呂が恋しく――

「お、お邪魔します・・・」

「へっ!？」

半分眠りかけていた意識が覚醒する。湯気の向こうから現れたのは、一糸まとわぬ、いや、薄手のスポーツタオルで隠してるからまとはいるが、とにかく生まれたままの姿に近いシャルルだった。

「な、な、なんでっ!？」

即座にシャルルに背を向ける。正直、今何が起きているのかあまり理解できていない。

「ど、どうしてここに!？ そ、そうだ、一夏はどうしたんだ？」

「えっとね、僕が部屋に戻る途中にものすごい勢いで僕を追い抜か

して行っただ」

「そ、そうか……。いや、だからってなんでここに来たんだよ！？」

「ぼ、僕が一緒じゃ、嫌……。？」

「い、いや、嫌とかそういうんじゃないかな……。？」

ま、まで、落ち着け。女の子と二人で風呂に入るっていうシチュエーションは昔に旭と同じことをやったはずだ……。幼稚園くらいだったけど。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。——め、迷惑なら上がるよ？」

「い、いやいやいや、俺が先に上がるよ。もう大体は済ませたからさ」

「ま、待って！」

急いで湯船を出ようとしたところを呼び止められた。立ち上がりかけてた姿勢をゆっくりと元に戻す。

「そ、その、話があるんだ。大事なことから、奏羅にも聞いてほしい……。」

「だ、大事な話……。？」

大事な話と言われたら、さすがに聞かなければまずいのだが、さす

がにまっすぐ見るわけにもいけないので、背中を向けたままシャルルの言葉を聞いた。

「その・・・前に行ったこと、なんだけどね。僕ね、ここにいうと思う。それが僕の、僕自身が決めた選択。それに・・・」

「それに？」

「・・・・・・」

しばらくの沈黙の後、シャルルは俺の思ってもみなかった行動に出た。

「へっ？ えっ？」

いきなり後ろから抱き締められる。予想外の行動に俺の心臓が口から飛び出してしまうほど跳ね上がった。

「ここには、僕の友達がいるからね。こんな僕でも友達になってくれた、奏羅がいるから僕はここにいたいと思えるんだ」

「そ、そうか」

「それに、もうひとつ決めたことがあるんだけど」

「そ、それは？」

「一つ約束してくれる？」

「約束？」

「僕のこと、シャルロットって呼んでくれる？ 二人きりの時だけでいいから」

「それが本名・・・？」

「うん、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「わかったよ、シャルロット。で、もう一つって？」

「ふふっ、内緒だよ」

「な、なんで？」

「僕は内容を教えてあげるとは一言も言っていないよ」

シャルロットの言葉を思い出す。たしかに、約束してとは言ったが、それを守るからといって教えてくれるとは言っていない。

「・・・これはやられたな」

「奏羅は口がうまいからね。真似してみただけだよ」

シャルロットの嬉しそうな声。顔は見えないが、たぶん笑っているのだろう。彼女と話しているうちに、俺の頭も冷静さを取り戻してきた。

「あー、いいかげん離れてくれると気まずくなくていいんだけど」

「あ、ああっ、うんっ！ そうだねっ！ ぼ、僕、先に体と髪を洗

「っちゃうね！」

やっと自分の状態を自覚したのか、慌てて俺から離れると、湯船を上がる。

「それにしてもシャルロットって、見られたい願望とかあるのか？何かあるごとに俺と一緒に着替えたりとか、今も風呂に入ってきたりとか——」

「な、ななっ、なに言ってるの奏羅！？ そそっ、そんなことないよ！？」

・・・本当なんだろうか？



翌日、朝のホームルームにシャルロットの姿はなかった。『先に行ってた』と言われて食堂で別れたのだが、何かあったのだろうか？ちなみにラウラもないが、彼女の場合は体がまだ本調子ではないのだろう。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

よれよれの状態で教室に入ってくる山田先生。朝っぱらから何があ

ったのだろうか？

「今日は、ですね・・・みなさんに転校生を紹介します。転校生と
いいですか、すでに紹介は済んでいるといえますか、ええと・・・」
て、転校生？　　というか、今みんな知ってるって、まさか・・・。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

あ、この声の主は・・・。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願
いします」

ぺこりとスカート姿のシャルロットが一礼。啞然とする俺を除くク
ラス一同。

「ええと、デュノア君はデュノアさんということでした。というこ
とです。はああ・・・また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始ま
ります・・・」

・・・俺のあるかどうかわからない第六感、そんな感じなものが危
機を告げている。このままじゃやばい。

「え？　デュノア君って女・・・？」

「って、天加瀬君、同室だからって知らないってことは――」

「ちょっと待って！ 昨日って確か、男子が大浴場を使ったわよね！？」

教室が喧騒に包まれ、あっというまにあふれかえる。・・・まずい、逃げなければ。

バシーン！

教室のドアが蹴破られたかのように開く。

「一夏あっ！！」

隣のクラスから、今の話が聞こえたのか鈴が登場。っていうか、よく聞こえたなお前。

「どういことか説明してもらおうか・・・？」

日本刀を腰に構えて立ち上がる筈。後ろには、鬼が見える気がする。

「い、いや、俺は昨日シャル・・・ロットと一緒に風呂なんて入って・・・」

「問答無用！」

説明を求めているおきながら、一夏に斬りかかる筈。その一撃をなんとかかわすが、もう一人が黙っていないかった。

「死ねっ！！」

鈴がISアーマーを展開し、両肩の衝撃砲がフルパワーで開放され

る。

（悪い、一夏。変な濡れ衣着せて・・・）

ズドドドドドオンッ！

「ふっー、ふっー、ふっー！」

怒りのあまり肩で息をしている鈴。そして、肉片になってしまった一夏——はその場におらず、ちゃんと原形をとどめていた。そして二人の間に割って入ったのは、なんとあのラウラだった。

「助かったぜ・・・。サンキュ」

「貴様には謝らなければならない。すまなかった」

「お、おう？　なにかわからんが別に大丈夫だぞ？」

「そうか・・・」

ラウラは少し安堵したようにつぶやくと、今度は俺の前までやってきた。

「私が今こうしてここにいるのはお前のおかげだ・・・。ありがとう」

「礼を言われるようなことじゃないよ。ただの気まぐれさ」

「・・・貴様に言われた通り、私は色々考えて、私が私になるために一つの目標を立てることにした」

「そうか・・・頑張れよ、って――むぐっ!？」

いきなり、だ。いきなり胸倉を掴まれたと思ったら、ラウラに引き寄せられ、キスをされた。

「・・・な、なぜ？」

「お、お前は私の嫁にする！　それが私の目標、決定事項だ！　異論は認めん！」

「よ、嫁？　婿じゃなくて？」

なぜか無駄に冷静な俺の頭は、もつとつっこむところがあるのだろうが、まるで見当違いのところにツツコミを入れてしまった。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

そ、それって、一部のジャンルの人たちだけなんじゃ・・・。

「まてまてまて、それじゃ俺の自由意思が――」

瞬間、俺の目の前をレーザーが通り過ぎる。俺はおそろおそろそちらへと顔を向けた。

「ああら、奏羅さん？　わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほほ・・・」

セシリアの手には『スターライトmk3』が。背中には今まさにビ
ットが形成されている途中だった。って、なんでこんなことになっ
てるんですか？

(と、とりあえずこの場から逃げないと！)

ぼすっ

「お・・・っと？」

逃げようとしたところに誰かとぶつかる。その相手は――

「シャルロット・・・？」

「にこっ」

「え、えっと・・・」

顔は天使の笑顔。しかし、ここまでの笑顔だと逆にあやしすぎる。
というか、たぶん怒ってる。

「奏羅って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりし
たなあ」

「えっと、俺はしたわけじゃなく、されたんであってですね。てい
うか、なんで怒ってるんですかシャルロットさん？　なんでISを
展開してるんですか！？」

「なんでだろうね」

光の粒子が形成し終わるとともに現れる左腕。軽く炸薬のはじける音がした後、現れるシャルルの武器の中で最強の武器。

「いや、こういうのって、一夏の役なんじゃ・・・」

ドカアアアアアアアンツ！

その日のホームルームは様々な爆音と轟音、さらにはものすごい衝撃で光の中へと消えていった。

第28話　く新しいはじまりく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

二巻を読み返して思ったんですが、ラストで一夏死んでるんじゃないかな
いっすかね、これ（笑）

ご意見ご感想をお待ちしております。

A n o t h e r s i d e s t o r y C a p t e r 1 (前書き)

三巻へのつなぎです。

では本編をどうぞ。

Another side story Chapter 1

「んー・・・暇、暇あ」

そこは奇妙な部屋だった。部屋のいたるところには機械の備品がちりばめられ、ケーブルがまるで樹海のように広がっている。そしてその上を、不要な部品を識別、その構成素材を分解して吸収、別の形状へと再構成する機械仕掛けのリスが歩いていた。そう、ここは篠ノ乃束の秘密ラボである。

ぱらりろぱらりらぺろゝ

携帯電話から着信音が流れる。

「こ、この着信音はあ！ トウツ！」

携帯電話へと向けて大ジャンプ。そこにあった物がさらに散らかるが、束にとってはどうでもよかった。

「も、もすもす？ ひねもす 終日？」

『・・・・・・・・』

ブツリと電話が切れる。どうやら相手の癪に障ったらしい。

「わー、待って待って！」

願いが通じたのかはわからないが、もう一度携帯電話が鳴り響いた。

「はい、みんなのアイドル・篠ノ乃東ここに——待って待ってえ！
ちーちゃん！」

「その名で呼ぶな」

「おっけい、ちーちゃん！」

「・・・はあ。まあいい。今日は聞きたいことがある」

「何かしらん？」

「お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？」

「今回、今回——はて？」

東は首をひねる。とぼけているのではなく、本当に心当たらない。

「VTシステムだ」

「ああ、あれ？ うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？ 私は完璧にして十全な篠ノ乃東だよ？ すなわち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」

「・・・・・・・・」

「ていうか忘れてたけど、つい二時間ほど前にあれを作った研究所は地上から消えてもらったよ。・・・ああ、言わなくてもわかってると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるより簡単——ていうかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？ 私だけ？ あれ、おかしいなあ」

「・・・そうか。では、邪魔したな」

「いやいや、邪魔だなんてとんでもない。私の時間はちーちゃんのためならいつでもどこでも二十四時間フルオープン、コンビニなんか目じゃないね。5060喜んで！」

「・・・では、またな」

ぶつと電話が切れる。今度はもう一度かかってくるということはない。束は名残惜しそうだったが、二秒後にはケロリと電話を放り出していた。

「やあ、久しぶりに声を聞けて束さんは嬉しかったねえ。ちーちゃんは相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうには行かないでね」

うんうんとうなずきながら腕組みをする束。

「しかし、ちーちゃんは何で引退したんだろーね」

束と千冬は長年の付き合いであるが、束には彼女が引退した理由がわからなかった。人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議。天才ですらその深さのすべてを知ることができない。だからこそ知りたい。世界で三人だけの興味の対象なのだから。

ちゃららーちゃららー

再び携帯の着信音が鳴り響く。しかし、その音色は先ほどとはまったく違う。その着信音に束はものすごい反応を見せた。なにせ、この着信音になるのは初めてのことだからだ。相手は、出る前からわ

かっている。

「やあやあやあ！ 久しぶりだねえ！ ずっとず～～～～～～
～～～～～～～～～～と待ってたよ！」

「・・・姉さん」

「うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？ 君だけの
オンリーワン、オルタナティブ・ゼロ代用無き者、ハイエンド箒の専用機が。もちろん用意してある
よ。最高性能にして規格外仕様。オーバースペックそして、白と並び立つもの。その
機体の名前は『あかつばき紅椿』——」



「そろそろなんだけど・・・」

場所はマリア・レインが所属するミッド・ガルズ研究所の日本支部。
その玄関前で、リリツィア・ティナークは一人の客人を待っていた。

「あ、あれかな・・・？」

研究所の前へ、一台の車がやってくる。その車が停車し、中からは
一人の女の子が出てきた。

「えっと、はじめまして。あなたが今日くる予定になっていた――」

「はい、塚乃旭です」

その女の子は奏羅の幼馴染、塚乃旭だった。

「じゃあ、とりあえず中に入って。まず責任者と顔合わせをして、それから頼まれてたものの説明するから」

「はい」

二人は研究所に入ると、たわいもない話をしながら責任者、マリア・レインのいる部屋へと向かった。

「へー、じゃあ同い年なんだ？」

「うん、リリツィアさんも奏君と同期なんでしょ？」

「あー、リリィでいいよ。そうだね、なんだかんだで腐れ縁みたいな関係だけどね」

同年代ということだからか、旭の人懐っこさのおかげか、二人はすぐに仲良くなり、マリアの部屋に着くまでにずいぶんと親しくしゃべるようになっていた。

「失礼します。マリア博士、例のお客様が到着しました」

「おっ、あんたが奏羅の幼馴染でアイドルの――」

「はい、はじめまして。塚乃旭です」

旭はぺこりと丁寧にお辞儀をしたあと、マリアと軽く握手をした。

「じゃあ、格納庫までついておいで。あんたのステージ見せてあげるからさ」

マリアはそう言うのと、旭とリリツィアを連れ立って格納庫へと向かい始める。

「どれくらいできてるんですか？」

「いや、もう完成している。完璧とはいかないけどね」

「完成してるのに、完璧じゃないんですか？」

「ああ、もともと不完全なシロモノだからね。完璧とはいかないさ。第一、ものを作る人間自体が不完全な存在なんだ。その人間が完璧にして十全の物を絶対に作れはしない」

「・・・なんか、わかるような気がします。それ」

「ほう、なかなか見込みがあるじゃないか——さあ、ついたよ」

そう言って格納庫のセキュリティに認証キーを読み込ませ、格納庫の嚴重な扉を開いた。

「これが・・・」

「ああ、あんたの計画書に奏羅やここにいるリリィ、さらには私のアイデアを組み込み、私の研究所の最先端技術をつぎ込んでやった、

あんなだけのオンリーワン、オルタナティブ・ゼロ代用無き者さ」

そこには、旭が夢にまで見た、彼女の望んだ、彼女だけのステージの姿があった。

「名前は決めてるの？」

リリツイアが旭にたずねると、旭は笑顔でうなずいた。

「うん、奏君と一緒に考えたの」

「で、その名前は？」

「アイドルはみんなの光になって、いろんな人に元気を与える存在だからそれにちなんで、プリリアント・アイリス『七色の輝き』——」

A n o t h e r s i d e s t o r y C a p t e r 1 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

閑話では基本裏設定とか、物語の補足とか、次へのつながりとか、そこらへんをちょいちょい出していくところとしていこうかなと考えております。

パソコンを変えて引越し作業で忙しいので、本来今日掲載する予定だった番外編を急遽、明日か明後日に掲載することになりました。今回もキャラ崩壊ネタなので、いやな人は見ない、ノリノリの人は生暖かい目で見てやってください。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

PV10万&ユニーク1万HIT記念番外編　こいゆめ!!（前書き）

タイトルどおりの番外編です。

日ごろから呼んでくださってる方々には感謝しております。

どうぞこれからもよろしくお願いします。

さて、今回の番外編ですが、前と同じく主に会話文構成となっております。読みづらいとか、こういった構成が嫌いな方はブラウザバックをするといいでしよう。

さらに各キャラが超絶キャラ崩壊に加え、無駄にリアルな表現を使ってるので、そういったのが苦手な方、キャラ崩壊とかありえないんですけどな方は、ブラウザバックをお願いします。

それ以外の猛者は、一応覚悟を決めてお読みください。

（心の準備の為の間）

では本編をどうぞ。

（鈴の場合）

鈴「まったく、シャルロットもドジよねえ」

シャル「うう……。奏羅に変なもの見られちゃった……」

鈴「そもそも、一夏や奏羅がいる時点でIS学園は女の子だけの空間じゃないんだから、そういったものの管理はちゃんとしとくべきなのよ。鞆の奥底に潜めておくとか、ちゃんとした配慮をしないと、あたしはあんたと違って、そういったものの管理はしっかりしてるけどね」

奏羅「……。鈴、ひとついいか？」

鈴「なによ？」

奏羅「女の子は男の前で顔の無駄毛の処理をするものなのか？」

鈴「……………」

奏羅「……………あ、一夏」

一夏「お、奏羅にシャルに鈴の三人が集まってるなんて珍しいな。鈴、鏡使って何してるんだ？」

鈴「い、一夏!?　べ、別に何もしてないわよ!!」

一夏「何をそんなに必死になってるんだ？」

鈴「う、うるさいわね!　あんたには関係ないでしょ!」

一夏「な、何なんだ一体・・・？」

〽セシリアの場合〽

〽夜、IS学園寮、セシリアの部屋〽

セシリア「はあ、自分を綺麗にする努力は大変ですわね・・・でも、これも奏羅さんに常に美しいわたくしを見せるため!　そのためならどんなことだろうと惜しみませんわ!!」

セシリアのルームメイト（以下ルームメイト）「・・・・・・・・」

コンコン

セシリア「あゝ、もう!　誰ですの、こんな時間に!」

ルームメイト「私が出てくるよ」

セシリア「お願いしますわ」

（数十秒後）

ルームメイト「セシリア、お客さんだよ。話だけだけど用事があるんだって。通していい？」

セシリア「・・・まあ、よろしいですわ。まったく・・・、こんな時間に一体誰が・・・？」

奏羅「セシリア、今日の模擬戦の戦闘データなんだけど――」

セシリア「そ、奏羅さん!？」

奏羅「・・・悪い、またくる」

ガチャ、パタン

セシリア「い、いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああつ!!」

ルームメイト（顔にはパックに腕や足には除毛ムース。あと見えな
いところもいろいろとやってるフルアーマー状態だから当然よね・
・）

（箒の場合）

箒「うう・・・」

一夏「どうした箒？ 普段の元気がないじゃないか、どうしたんだ？」

箒「お、お前には関係ない・・・」

一夏「強がるなよ、明らかに顔色が悪いじゃないか」

箒「ほ、ほっといてくれ・・・」

一夏「そんな状態でほっとけるかよ。どこか痛いのか？」

箒「・・・頭が痛くて、胸が張って、下腹部が痛い。これでわかっただろう」

一夏「なんだそれ！？ ものすごい病気が何かなのか！？」

箒「っ・・・！ お前というやつはっ・・・！」

一夏「とにかく、保健室に――痛っ！？」

奏羅「箒、俺がこいつを代わりに殴っとくから。さっさと部屋に戻っつけ」

箒「す、すまん・・・」

一夏「な、何なんだよ、奏羅？」

奏羅「お前は保険の教科書を最初から読み直してこい」

「一夏の場合」

一夏「・・・大体わかった」

奏羅「よろしい。今度からは触れてやるなよ」

一夏「だけど、奏羅は何でこんなに詳しいんだ？ 男の俺たちには無縁の話だろ？」

奏羅「・・・・・・・・」



旭「奏君・・・」

奏羅「どうした、旭？」

旭「えっとね、頭が痛くて、胸が張って、下腹部が痛い」

奏羅「な、なんだそりゃ!？ 何かの病気か!？」

旭「えっとね、お母さんから聞いたんだけどさあ――」



奏羅「・・・いろいろあったからな」

一夏「そ、そうか。それは大変だったんだな・・・」

一夏（・・・あまり触れないで置いてやろう）

くラウラの場合く

ラウラ「まったく、箒も鍛錬が足りないな。頭痛と腹痛、胸が張っている位で根を上げるとは」

奏羅「・・・ラウラって同じ症状出たことないのか？」

ラウラ「ないぞ。それがどうかしたか？」

奏羅「いや、個人差があるらしいからどうもしないけど……。結構遅いような……」

ラウラ「何が遅いんだ？」

奏羅「あ、いや。なんでもない」

〽数日後の日曜日〽

ラウラ「そ、奏羅……」

奏羅「どうしたんだ、よろよろじゃないか!？」

ラウラ「頭が痛くて、胸が張って、下腹部が痛い……」

奏羅「えっ? それって――」

ラウラ「な、何とかしてくれ……。お前は私の嫁だろう……。?」

奏羅「なんとかって……。とりあえず、保健室行って薬もらおうか」

ラウラ「薬で治るのか？」

奏羅「俺は男だから縁がないからわからないけど……。多分治らんじゃないかな?」

ラウラ「じゃあ、それで治らなかったら痛みが引くまで私の腹をなでてくれないか……?」

奏羅「・・・考えとく」

～奏羅の場合～

奏羅「・・・はっ!？ ゆ、夢か・・・。なんかリアルすぎて嫌な夢だったな・・・」

コンコン

奏羅「どうぞ・・・って、シャルか」

シャル「おはよう、奏羅。一緒に朝ご飯でもどうかなって?」

奏羅「わかった。ちょっと待っててくれ」

～I S 学園廊下～

奏羅「じゃあ、行くか」

シャル「うん」

奏羅「そういや、リアルすぎる夢をみたんだよ」

シャル「リアル・・・? どんな夢なの?」

奏羅「・・・あまりいえるような夢じゃない」

シャル「そ、そうなんだ・・・。あ、そうそう。奏羅は朝ごはん何食べる？」

奏羅「うーん、食堂に着いてから決めようと思ってるんだけどー」
ぱさっ

奏羅「あ、シャル、ポケットから何か落ちたぞ」

おわり

※最初に戻ると永遠に楽しめます。

PV10万&ユニーク1万HIT記念番外編 こいゆめ!! (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

さあ、途中で心折れた方が何人いたのか・・・。
ていうか、こんなの書いてよかったのか、俺・・・。

大丈夫だよね、やりすぎてないよね!?

さて、いよいよ次は三巻の内容に入っていきたいと思います。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第29話 く朝、目が覚めるとく（前書き）

虫になっていた。わけではありません（笑）

では本編をどうぞ。

第29話　朝、目が覚めると

「悪いなシャルロット、こんなことにつき合わせてさ」

「ううん、気にしないで」

放課後の奏羅の部屋。シャルロットは奏羅に頼まれ、彼の所属する研究所への提出用レポートの作成を手伝っていた。

「でも、本当に僕でよかったの？　こういう射撃に関するデータとかはセシリアに手伝ってもらったらよかったんじゃないかな？」

「いや、そのさ、シャルロットに手伝って欲しかったんだ」

「えっ？」

「えっと、やっぱりこういう共同作業は好きな人とやりたいから、さ」

照れくさそうに奏羅は横を向く。その顔は夕日に染まって赤かったが、それだけではないように見えた。

「奏羅・・・」

「シャルロット・・・」

自然と見つめあう二人、そして徐々に二人の顔が近づいていき、シャルロットは自然と目を閉じた。

(・・・あれ?)

しかし、いつまでたっても望んだ事が起こらない。

(ふふっ、奏羅ったら照れ屋なんだから)

こうなったらこっちから。そう思ってシャルロットは目を開けた。

「――あれ？」

目前に広がるのは自室の天井。ボーっとした頭で少し考え、シャルロットは現状を把握した。

「夢・・・」

はぁ・・・とため息をつき、夢の内容を改めて頭の中で再生する。

「・・・えへへへへ」

夢の中で奏羅に言われたことを思い出し、思わずにやけてしまうが、意識がはつきりするにつれ、シャルロットはだんだん恥ずかしくなってきた。

(奏羅の部屋で二人っきり、か・・・)

前までは奏羅と同じ部屋だったが、本来の性別に戻った以上シャルル・デュノアもとい、シャルロット・デュノアは、今別の人と相部屋になっている。

(部屋が一緒のときは何度か奏羅と一緒にベッドに寝たことあった

つけ……。もう少し大胆に行動しても——って、僕は何を考えるんだろ……。)

ふと、そこに奏羅は居ないとわかっていても隣のベッドを見る。

「……。あれ？」

隣のベッドにルームメイトの姿がない。それも、起きてどこかに行ったわけでもなく、ベッドを使った形跡もない。

「……。まあ、いいや」

それよりも今眠りにつけば、もしかしたら夢の続きが見られるかもしれない。そんな期待を抱きながら、シャルロットは再び目を閉じた。

(でも、せっかく夢なら、もうちょっと深い内容でもよかったのになあ。たとえば、奏羅が変なものを設計して、それを使って僕を——)

そこまで考えて冷静になる。

「な、何を考えてるんだろうね、僕はっ」

誰もいないので見られることはないのだが、赤くなった顔を布団で覆い隠すと、ドキドキと高鳴る胸を押さえながら再び眠ろうとがんばるシャルロットだった。



「ん・・・」

月曜日、窓の外からの光で目を覚ます。どうやら、いつもの習慣で朝7時に目覚めてしまったようだ。先月の一見以来、ルームメイトのシャルルことシャルロットはいなくなり、なぜか一夏と一緒の部屋ではなく、それぞれ一人部屋という状況になっていた。

（くそ、昨日というか今日の4時に寝たから昼まではおきないと思っただけどなあ・・・）

まったく、習慣というものは恐ろしい。IS学園に入学してから、先生兼、我が友の偉大なる姉のおかげで授業に遅刻するのはご法度なので、規則正しく朝の7時には目を覚ますように目覚ましをかけていた。今回は早朝4時に寝てしまったということもあり、目覚ましをセットしてなかったのだが、いやはや、この通り目が覚めてしまった。

（もう一回寝よう・・・）

覚醒しているようでしていない頭でそう考え、寝返りを打つと、左手にふにふにした何かの感触があった。

（なんだこれ・・・。よくわからないけど、ほどよく柔らいし、さわり心地もいいし、抱き枕に最適だな・・・）

そう思っと思いつきそれを抱き寄せると、なんとなく撫で回した。

「ん……」

女の子の声に先ほどまで眠たくて仕方なかった頭が少し覚醒する。

（……気のせいかな）

そう思ってやわらかい何かの下のほうへと手を伸ばした。

「あん……」

……待て、これ俺の目の前の物体から聞こえるんだけど。

何かしらの危機感を感じて、俺は飛び起きるとともに布団をめくる。するとそこには――

「ら、ららららら、ラウラ!?」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。先月転校してきて……まあ、いろいろあった。

しかし、問題はそこじゃない。問題は、なぜ彼女は何も着ていないとうこと。いや、身につけてはいる。眼帯と待機状態のIS――右太もものレッグバンドのみだが。

「ん……。なんだ、朝か……?」

「ちょ、ちょっとくらい隠してくれ!」

「おかしなことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと言いたぞ」

「それはまた別の話だろう……。とにかく、服を着ろって」

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれるもの同志の定番だと」

「・・・それをお前に吹き込んだ奴をつれてこいよ。一発殴るから」

「しかし、効果はてきめんのようだな」

「なにが？」

「目は覚めただろう」

「・・・・・・・・」

これで目を覚まさない奴は絶対にいないと思う。まあ、一夏はどうかは知らないが。

「しかし、朝食までにはまだ時間がある」

シーツを身にまとい一度軽く束ねた後ろ髪をふあさつと散らす。それはかなり様になっていた。

（それにしても、先月のトーナメントの終わりからこいつはちよくちよくこういうことをするようになったよなあ・・・）

食事中の同席は当たり前。入浴中にも現れ、その前は更衣室にまで。このまま放っておくと、一体何をするのやら。

（こいつに変な知識を植え付けてる奴を何とかしないとなあ・・・。
しかし、そうは言っても俺はその人を知らないわけだし・・・）

古典的なやり方だが、一度痛い目を見せる必要があるのだろうか？

「どうした？・・・あ、あまりそう見つめるな。私とて恥じらい
はある」

恥じらいがあるなら最初からするな。

「おまえなあ・・・。女の子は控えめのほうがいいって言う話があ
るぞ」

「ほう。しかし、それは世間の話だろう？」

「ああ、そうだけど——」

「私は私だ」

しっかりとした意思を秘めた瞳にまっすぐ見つめられる。

「・・・・・・」

「しかし、お前も大胆な奴だな。私の体を撫で回すとは。まあ、少
し気持ちよかったが・・・」

「なっ・・・、あの時お前おきてたのか!？」

「半分はな。まあ、お前がまた撫でたいというのなら触らせてやつ
ても——」

「バ、バカ！ やめろ！」

シーツを緩めたラウラを何とかして隠させようとするのだが、さすがの軍人、ひらりとかわされてしまう。ドタンボタンとベッドの上で暴れまわっている時刻は現在朝7時。上下左右のお隣さん、ごめんない。

「このっ・・・！」

なんとかラウラの動きを取り押さえたのだが、足払いをされ逆に倒されてしまった。

「お前はもう少し組み技の訓練をすべきだな」

なんだか言い方が織斑先生に似てるな。さすが教え子だ。

「し、しかし、お前が寝技の練習をしたいというのなら、私が相手になってやらないでもないが・・・」

「寝技って・・・。お前、先月俺にキスしたのにまだ何かするつもりなのか・・・？」

「あ、あれか。わ、私の・・・初めてだったのだぞ？」

「うっ・・・」

急に頬を赤らめて恥ずかしそうにするラウラに文句が言えなくなってしまう。『女の子にここまでさせて——』とかいう言葉があるが、まさにそれだ。何も言い返せない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

とりあえず何か飲もう、そうしよう。

そう思って立ち上がりかけた俺を、ラウラが再びベッドの上へと押しやった。

「な、なぜ・・・？」

「も、もう一度キスをする！」

「は・・・？」

もはや意味がわからない。脈絡がなさ過ぎる。

「お前の反応が薄いからだ！　も、もう少し嬉しがってくれてもいいではないか！」

「そ、そういわれても・・・って、ちょっと待て！」

頬を赤くした全裸のラウラがだんだんと俺に覆いかぶさってくる。

（まったく、できれば使いたくなかったけど、最終手段だ）

俺は迫ってくるラウラを逆に引き寄せると、しっかりと抱きついて布団をかぶった。

「なっ・・・！？　そ、奏羅・・・？」

まさかの反撃に素っ頓狂な声を上げるラウラ。抵抗するかと思ったが、案外すんなりと胸の中へと収まった。

「一緒に二度寝しないか？ 俺まだ眠いし」

「・・・お、お前がそういうのなら、してやらないでも・・・ないぞ」

「そうか、じゃあ寝ようか」

ラウラをぎゅっと抱きしめたまま眠る体制に入る。さすがに午前4時に寝たおかげか、すぐに睡魔に襲われた。

「・・・ああ、ラウラ。ひとつ言っておかないといけないことがあったんだが」

「な、なんだ？」

「俺ってさ、昨日研究所に提出するレポートを急遽作らなくちゃいけなかったから、朝の4時に眠りについたんだ」

「そういえば、そうだったな。お前が寝入るまで外で待つのは大変だったんだぞ」

「で、今日は何曜日だったっけ？」

「月曜日だな」

「授業がある日だよな」

度をして、寮の食堂ではなく学園内の食堂にお昼を食べに来たところをシャルロットにばったり出くわした。話をする、どうやら遅刻したらしいのだが、なぜか俺のせいにされてしまった。ラウラならわかるのだが、なぜシャルロットに文句を言われるのかわからない。ちなみにラウラは何とか間に合ったらしい。

「しかし、いつも時間にしっかりしてると思ったんだが、珍しいこともあるんだな」

「……」

しかし、さっきからなんだかシャルロットの様子が変だ。なんだかソワソワして落ち着かないというか……。

「そ、奏羅？　ずっと僕のほうを見てるけど、どうかした？　どこか変かな？」

どこか変じゃなくて、全体的に挙動不審で変なんだが……。

「えっ、あー、ほら、前まで男子の制服だったからさ、改めて女子の格好をしてるのを見てただけだよ」

本当のことを言ったら殺されそうな気がするので適当にはぐらかしておく。

「に、似合っていないかな？」

「いや、可愛いと思うぞ」

「……夢じゃ僕を女の子の服を着た男の子として扱ってたくせに」

「ん？　なんか言ったか？」

「えっ、な、なんでもないっ！　なんでもないよっ！？」

やっぱりどこか変だ。まあ、遅刻したことにあまり触れて欲しくないのだろう。

「・・・そういえば、もうすぐ臨海学校だったな。シャルロットは準備できたのか？」

「うん、大体はね。奏羅は？」

「最近忙しかったからな。まだひとつも手をつけてないんだよなあ・・・」

実際昨日もレポートに追われてたしな。

「それって何も準備してないってこと？」

「ああ。まだ買出しに行かないとないものだってあるしな。水着とか、携帯用のシャンプーとか」

「そうなんだ。それっていつごろ行くのかな？」

「今週の日曜日あたりかなあ。ちょうど町へ出る予定があるし」

なぜだか知らないが、旭に買い物に付き合っといわれたのでちやうどそのときに買い物済ませようと考えていた。

「ぼ、僕もついて行っていていい？」

「い、いや、それは……。その日って、昔の友達とあうからさ」

旭は気にしないだろうが、シャルロットが来るのはまずい。勘のいいシャルロットのことだ、アイドルの旭が変装したとしても、それを見抜いて正体がばれてしまう可能性がある。それが周りの人に漏れるとあつという間に人だかり。それだけは避けたい。

「そうなんだ……」

一気にテンションが下がるシャルロット。まあ、こちら辺にきてそんなに時間もたってないし、一人だと心細いのもかもしれない。

「悪いな。また今度用事があったら誘うよ」

「……ひとつ聞いていい？」

「どうした？」

「昔の友達って、男の子？ それとも女の子？」

「あー、女の子だな」

「……へー、そうなんだ」

「どうした？ 気になるのか？」

旭のことを気になれるのは非常にまずいんだが……。

「いや、なんでもないよ。日曜日、楽しんできてね」

俺の問いに笑顔で答えるシャルロットだったが、なんとなく俺はその笑顔にいやな予感を感じていた。

第29話　く朝、目が覚めるとく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

来たるべき7月7日に、うちの同人サークルが作ったゲームの体験版のようなベータ版のようなものが発表されます。

本来は選択肢で三人の女の子から選べるのですが、今回は体験版のようなもので、一人の女の子のシナリオのみ公開しております。前にもいったことがあると思いますが、私は文章のほうではなくイラスト担当です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第30話　く奏羅追跡隊く（前書き）

私のサークルが作ったゲームが今日公開される・・・予定だったのですが、いかんせんスケジュールがあわずに明日の夜となってしまいました。

気になる方はぜひ一度訪れてみてください。

URLはあとがきに乗せようと思います。

では本編をどうぞ。

第30話 〱奏羅追跡隊〱

「暑い・・・」

先日の出来事から数日たった日曜日、俺は旭の買い物に付き合うついでに自分の買い物も済ませるため、駅前の噴水の前でボーっと突っ立っていた。

天気は快晴。いかんせんモヤシ人間の俺には、この天候は少々つらい。

「えっと、あと5分で待ち合わせの時間だよな・・・」

携帯の時計をみて確認する。毎度のことでもう慣れてしまったが、遅刻したら旭に何をおごらせられるかわかったもんじゃない。

「この前は後ろから目隠しされたが、今日は後ろには街路樹だ。もう同じ手は食わな——」

ゴン！

突如俺の上から何かが落ちてきて脳天にクリーンヒットした。その場にうずくまった俺の耳に、してやったりといった声が聞こえる。

「ざくんねん、今日は上からでした」

「お、お前、いつか殴る・・・」

木の上からひらりと降りてくる旭。俺の脳天を直撃したのは、あいつのかばんだった。

「奏君もまだまだだね。それじゃあISのパイロットとしてやってけないよ?」

「あんな不意打ち、よけるかよ・・・」

一通り文句を言ってみるが、旭はいたずらが成功したのが嬉しいのかニヤニヤして上機嫌。まあ、いつものことなのでもう慣れてしまったが。

「しかし、また今日もものすごい格好をしてるよな」

前のときは服装は普通だが、麦藁帽子に顔にあってない大き目のサングラスだった。今日は、白いハンチングに小さめのサングラス、半そでのシャツにスカート、ニーソックスというよくわからない格好だった。

「ふふん、どう、わたしのファッションセンス?」

くるりとその場で一回転。さすが、アイドルをやっているだけあって様になっている。

「それが素だったら相当ひどいな」

「ひどいよ奏君、これがわたしの素のファッションなのにい」

「嘘つくな」

「あ、ばれた?」

はあ、やっぱり昔からこいつはこいつだな・・・。

「じゃ、いこっか」

「そうだな」

あらかた漫才が終わると、二人並んで歩き出す。

「そういや奏君、彼女できた？」

「っ・・・！？ 何でそんな話になるんだよ！？」

「いやあ、学校は女の子だらけだし、そういった間違いが起きてるんじゃないかってね」

「あんな、起きるわけないだろ？」

「わかんないよ。女子校に通ってたメイクさんが言ってたけど、女子校に通ってると比較対象がないからだんだん目腐れしてきて、ありえないことも起こったりするって話らしいし」

「・・・お前、俺を遠まわしにけなしてないか？」

「さあ、どうかな？」

ふふん、という旭の顔を見る。サングラス越しだが、こいつがこんな顔をするときは大抵俺をからかっているときだ。

「じゃあ、今日は——」

ずっと旭が俺の腕を取る。

「私のステージを作ってくれたお礼もあるし、彼女が居ない奏君を私が慰めてあげよっか」

「はぁ・・・好きにしてくれ」

少し強引な旭に手を引かれ、俺たちはいろんな店が集まっている大通りへと進んでいった。



「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

大通りへと進んでいく奏羅と旭を、物陰から見ている人物が二人。二人が一定距離を進むと、さっと物陰から飛び出す二人の髪はきれいなブロンド。

「・・・なんでシャルロットさんがついてきていらっしやるのかしら?」

「・・・セシリアこそ、奏羅の後をつけて何をしてるのかな?」

それは先日、奏羅に買い物についていくことを断られたシャルロットと、同じく奏羅との買い物断られたセシリアだった。

「そ、それはシャルロットさんが奏羅さんのプライベートを侵害しようとしていらっしゃるから・・・」

「・・・セシリアだって奏羅の後をつけてたでしょ」

「そ、それは奏羅さんとたまたま同じ道を進んでただけで——って、あああああっ!？」

突然大声を上げるセシリア。その視線の先には、手をつなぐ奏羅と旭の姿が。

「て、ててて、手をつないで・・・」

「ま、まだ僕つないだこともないのに・・・」

二人は悲しそうな、羨ましそうな顔でその光景を見つめていたが、しっかりと足は動いており、奏羅の大体15メートル後ろを進んでいた。

「それにしても、お相手の方はものすごい格好ですわね・・・」

「そうだよね・・・。結構奇抜な格好だし・・・」

「ま、まさか奏羅さん、あんな格好してる女の子が好きなのかしら・・・?」

「え、ええ〜？ まさかそんな……。で、でも……」

ちらりと横をみると、そこには露店でサングラスが売られている。
ひとつ、大体2500円。

「あ、あゝ、今日はいい天気だし日差しがまぶしいね」

「そ、そうですね。こんな日はサングラスでもかけないと目に毒ですわね」

お互いわざとらしく話をしながら、露店のサングラスを買い、すぐさまそれをかけた。

「ま、まったく、セシリアったらまた似合わないサングラス買ったやつて」

「シャルロットさんこそ、それ大きすぎですわ」

「あははははは」

「うふふふふ」

「ほう、楽しそうだな。では私も交ぜるがいい」

「「!」?」

いきなり背後から声をかけられ、二人は驚いて振り返る。そこには眼帯をつけた銀髪の少女、ラウラ・ボーデヴィツヒが立っていた。

「なっ、なんでラウラがここに……?」

「私は奏羅を追ってきた。しかし、ここでゆっくりしている暇はないようだ。見失わない前に私は失礼するでしょう」

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

「そ、そうですわ！ 追って何をしようといひますの！？」

「決まっているだろう、私も交ざる。それだけだ」

あっさりといわれて、あっけに取られる二人。こうまでストレートだと、逆にすごいとまで思ってしまう。

「ま、待ってよ。ここは一旦情報収集したほうがいいよ。ほら、僕たちの知らない相手なんだしさ」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡の後、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね」

「なるほどな。では、そうしよう」

そういつて、ラウラは自分もサングラスを買うと、それを顔にかけた。

「な、なんでラウラまでサングラスを・・・？」

「む？ われわれは今からチームなのだから、何かしらの共通点をつけるべきだろう」

「ラウラさん、あなた眼帯をつけていらっしやるのでは・・・」

こうして、奏羅を追跡するおかしなトリオが結成されたのであった。



「奏君、ここのスパゲッティおいしいんだよ」

「へー、じゃあそれ頼むか」

「ひとつでいいかな？」

「二つ頼めバカ」

「もう、奏君のいけず」

「なにがだよ」



「見て見て奏君、このアクセサリーわたしに似合うかな？」

「そうか？ どっちかっていうとこっちじゃないか？」

「うーん、じゃあ奏君がそういうならそっちにしようかな」



「やったー、またわたしの勝ちだね！」

「いや、俺はダーツ初心者なんだけど・・・」

「それにしても0勝23敗はないとおもうけどなあ・・・」



「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

追跡を始めて数時間、三人の行動は奏羅にいまだばれてはいないが、テンションはすでに最低ラインにまで下がっていた。

（あ、あれでは確実に恋人のようですわ・・・）

（うう・・・、奏羅もあの子も凄く楽しそう・・・）

（少しくらいの浮気なら許してやろうと思っていたが、あれでもう・・・）

はあ・・・。と三人いっぺんにため息を吐いてしまう。

「・・・なにやってんのよ、あんたたち」

「お、セシリアにシャルロットにラウラじゃないか。どうしたんだ、こんなところまで？」

そんな三人の前に、一夏と鈴が現れる。二人も買い物をするため町に出てきていたのだ。

「あれ、あそこに居るの奏羅じゃない？」

鈴が指を差す先には、今まさにデパートに入ろうとする奏羅と旭の

姿があった。

「横に居るのって彼女かしら・・・？　って、まさかあんたたち！？」

「いや、そのですね・・・」

「あ、あはははは・・・」

「む、むう・・・」

三人とも鈴の指摘に言葉を濁してしまう。その様子を見て、鈴も少しあきれてしまった。

「まったく、もうちょっと奏羅のプライベートを考えてあげなさいよね・・・」

「で、でも、鈴だって一夏がああいう状態だったら後をつけるでしよ？」

「そ、それはまあ・・・って何言わせるのよ！」

ぱっと一夏のほうをみるが、一夏には聞かれていないようだった。

「あれ？　あの横に居るのつかさじゃないかな・・・？」

一夏の言葉に、セシリア、シャルロット、ラウラが反応する。

「あ、あの横に居る方を知っていらっしゃるのですか！？」

「あ、ああ。春頃に街に用事があって出たとき、ばったりあの二人と出くわして、一緒に行動したんだ」

「そ、そんなに前からの付き合いだったんだ・・・」

「ああ、幼馴染とか言ってたな」

「「お、幼馴染!？」」

セシリアとシャルロットが大声を上げる。二人がそうぞうしていたよりも長い付き合いだったのは予想外だったらしい。

（幼馴染っていうことは、一夏さんと箒さんや鈴さんみたいな関係ですわよね・・・）

（厳しいなあ・・・。どれくらい長いんだろ・・・）

しかし、そんな二人をよそにラウラだけは何かを決意した様子だった。

「・・・二人とも遅れるな。まだ敵の視察は終わってないのだぞ？」

「ラウラ・・・？」

「私の今の目的は、あいつを私の嫁にすることだ。少し障害が増えたところでその思いは変わりはない」

その言葉にセシリアとシャルロットの二人は顔を見合わせると、力強くうなずいた。

「いこうか、セシリア」

「ええ、私たちの戦いはこれからですわ」

そして、三人はデパートの中へと奏羅を追っていったのだった。

「・・・なんで奏羅の尾行なのにこんな感じになってるのよ？」

「鈴、俺たちも中に入ろうぜ。水着買いに来たんだし」

「そうね・・・。ていうか、続くのよねこの話」

「何のことだ？」

「あ、いや、なんでもないわよ」

第30話 〱奏羅追跡隊〱（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最初に言った話ですが、まるで季節はずれな内容のゲームを体験版として、一人のヒロインだけ公開しております。

←がうちのサークルブログです。

<http://blog.livedoor.jp/orugore/archives/3229021.html>

一応あらすじやヒロイン紹介なども載っているので、一度眺めてみてください。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第31話 く水着セレクションく（前書き）

引き続き宣伝です。

私が所属しているサークルのノベルゲーム第一号が完成しました。

詳しくは活動報告や、前の話のあとがきなどにありますので、ぜひぜひ御覧ください。

では本編をどうぞ。

第31話 く水着セレクションく

「奏君はデパートで何買うの？」

デパートに入るなり、旭が俺に質問をしてくる。

「まあ旅行に使う生活用品とかだな。新しい下着とか、海の近くだから水着もいるな」

「なんだ、奏君も水着を買いに来たんだ。私も水着を買いに来たんだよ」

「お前も・・・？ まさか俺を連れてきた理由って――」

「そ。奏君に水着選んでもらおうと思って」

ケラケラと笑う旭。あんまり俺のセンスをあてにしないで欲しいんだがな。

「お前もどっか旅行かなんかに行くのか？」

「えっ、あー、その、撮影・・・でね・・・？」

怪しい。幼なじみの直感が言っている、明らかに何か隠してると。

「へー、そうなのか」

「う、うん、そうだよ。・・・もう、そのジト目を辞めてってばあ！」

べしっと俺の肩を叩く旭。まったく、なんなんだよ・・・？

「・・・あれ？」

ふと旭が声を上げて周りを見渡す。

「どうした？」

「なんだか、さっきから誰かに見られてるような気がする・・・」

「それって、気づかれたってことか？」

旭はこれでも今一番有名なアイドルだ。今は変装しているが、もしかしたらどこかでバレてしまったのかもしれない。

「まずいな。とりあえずどこかに・・・」

隠れよう。そう思ったが、周りを見渡すかぎり隠れることができるようなところがない。

「奏君、こっちいこ」

旭に手を引かれ、女性用の水着売り場へ。考えすぎかもしれないが、用心するに越したことはない。

「とりあえずここに入ろ！」

とっさに俺達はそのなかの試着室へと身を隠した。って、ここって女性用の売り場の試着室だよな？

「焦ってたとはいえなんでここに入ったんだよ!？」

「ちょっと、奏君黙ってよ!」

旭の手のひらに口を塞がれてしまった。まあ確かに喋ると店員にも見つかってしまうので、それだけは避けたい。

「どうだ？ それっぽい人見つかったか？」

できるだけ、小声で旭に話しかける。

「うーん、それらしい人はいないみたい。一夏くんとツインテールの女の子ならいるけど」

「・・・へ？」

旭が覗いているカーテンの隙間から俺も外を覗くと、そこには水着を選ぶ一夏と鈴の姿が。

「あいつらが犯人ってことはないよなあ・・・」

「あれ？ あの時の教師さんもいるよ。確か、一夏くんのお姉さんだっけ？」

「えっ、織斑先生!？」

「ほら、あそこ」

旭が指さす先には織斑先生と山田先生の二人が。一体このデパート

どんだけ俺の知り合いがたむろしてるんだよ。

「まずいぞ、旭」

「なんで？」

「いや、織斑先生は変に感が鋭いから下手したら俺達が――」

「・・・天加瀬、貴様ここで何をしている」

シャッとカーテンが開く。そこには鬼の形相をした我らが担任織斑先生と、軽くパニックに陥って悲鳴をあげる山田先生の姿があった。



「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室に異性であるお二人で入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「す、すみませんでした・・・」

ぺこりと二人で山田先生に謝る俺たち。どうやら、横にいるのがアイドルの塚乃旭だと気づかれてはいないようだ。

「まったく、何やってんだよ奏羅。それにしてもつかさ、久しぶり

だな」

「ああ、一夏君。久しぶり」

騒ぎを聞きつけた一夏、鈴の二人も俺達のもとに集まっていた。

「一夏、こいつのことなんだけど・・・」

「ああ、大丈夫だ。アイドルってことは黙ってるよ」

「すまん。助かる」

一夏と小声で根回しをしておく。一回一夏は俺たちと行動してる時に、テレビに出ている旭を見たことがある。こいつは鈍いので一応釘を差しておこうと思ったが、どうやらその心配は無駄だったようだ。こいつも空気くらい読めるらしい。

「ところで山田先生と織斑先生はどうしてここに？」

鈴が先生方に疑問をぶつける。たしかに二人がここにいるのは俺もびっくりした。

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

しかし、そうは言っても二人は俺の中では先生だ。そう呼ばないとしっくりこない。第一、先生って呼ばなかったらなんて呼べばいいんだろうか。山田さん、とか？ いや、違和感がある気がする。

「そういえば、さっきセシリアとシャルロットとラウラを入り口で

見たんだよ」

「へ？」

一夏の言葉にあっけにとられる。その言葉を聞いて、織斑先生が何かを納得したような顔をしていた。

「なるほどな。・・・そろそろ出てきたほうがいいんじゃないか？」

織斑先生が周りに聞こえるように大きめの声をあげる。

「そ、そろそろ出ていこうと思ってたんです」

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

柱の陰から、まるで旭が変装に使うようなサングラスをしたセシリアとシャルロットが出てきた。

「なにをこそこそしているのかと思って、ずっと気になっていたんだがな」

「えっと、その・・・ですね・・・」

「ま、まあ、女の子には色いろあるんですよ」

あはは、うふふと愛想笑いをする二人。もしかしたらこの二人が俺達の後をつけてたのかもしれない。

「あれ、ラウラは？」

一夏がこの場にいないもう一人の名前を上げる。そういえば、入り口でラウラも見たと言っていたな。

「わからない。織斑先生に声をかけられる前にどこかに行っちゃった」

「さて、私たちはさっさと買い物を済ませて退散するでしょう」

ふう、とため息をつく織斑先生。手に持っているのは水着で、どうやら俺達と同じく、土壇場で準備しているのだろう。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーっと、場所がわからないので天加瀬くんとその友達さん、凰さんとオルコットさんにデュノアさんもついてきてください」

山田先生は何かを閃いた顔をして有無をいわず俺たちを連れていってしまった。

「え、えーっと、山田先生？」

俺が疑問を投げかけると山田先生はニコニコしながら、

「姉弟水入らずってやつですよ」

と答えた。



「奏君、どっちがいいかな？」

結局、俺たちは違う水着売り場で品定めをしていた。ちなみに鈴と山田先生は買い物が済んでいるので、他の売り場で時間を潰している。

「うーん、旭には緑が似合うと思うんだが・・・」

「こっちのセパレートかぁ・・・。わたし上下に分かれてるのなら来たことあるけど、さらに左右にも分かれてるのは初めてなんだよねえ・・・」

「あー、いやならそっちの赤でいいぞ」

「・・・ううん、せっかく奏君が選んでくれたんだし、こっち買ってくるよ」

そう言って旭はパタパタとレジへとかけて行った。

「そ、奏羅さん、あの方とはどんな関係で？」

セシリアが俺と旭の関係を問い詰めてくる。どうやら、シャルロットも気になるようだ。

「いや、ただの幼なじみの友達だよ」

「と、友達・・・？　ほ、本当！？」

俺の言葉に真剣な顔をする二人。そんな顔をされても無いものは無いんだが。

「あ、ああ。そうだけど・・・」

「な、なーんだ」

「友達でしたの・・・」

ほっと一息つく二人。なにを心配していたのか。

「お待たせ奏君。えっと、そっちの二人は・・・？」

「ああ、こいつらは俺のクラスメイトだ」

「はじめまして、セシリア・オルコットです」

「僕はシャルロット・デュノア。よろしくね」

「うん、よろしくね。私の名前はつか――」

「つかさ、な」

自分の本名をいいそうになる旭の代わりに簡単に作った偽名を先に述べておく。こいつは俺が止めるとわかっててやってるのだろう。まあ、俺なら隠してくれると信頼されてるからなんだろう。

「ふーん、ほうほう。なるほどお」

二人をジロジロ見ながら何かを納得したように旭が頷く。

「奏君もやるねえ。こんな可愛い子たちに囲まれるなんて」

「なにをやるんだよ・・・」

「いやいや、ねえ・・・」

ちらりと旭が二人の方をみると、二人は少し顔を逸らしながら、

「べ、別に、そんなのじゃありませんわ!」

「そ、そうだよ、うん」

と答えた。なにかはわからないが、女の子同士のなんとやらというやつだろうか。

「そういえば、もう一人のラウラって子はどうなの? その子も二人と同じくらいに可愛い?」

「なんでそんな事聞くんだよ?」

「だってー、その子も奏君の友達なんだろうし、気になるじゃない?」

「気になるって、お前なあ・・・」

しかし、ラウラかあ……。最近のアイツを見ている限りでは・・・

「・・・まあ、ラウラは可愛いんじゃないかな」

「そ、奏羅さん!？」

「そ、奏羅!？」

何故か金髪コンビに怒鳴られてしまった。俺はなにか悪いこと言ったのだろうか？

「ま、奏君にはわからないだろうねえ・・・」

「なにがだよ？」

「なんでもないよ。じゃ、奏君の水着選んじゃおっか」

「わ、わたくしも参加させてください!!」

「ぼ、僕も!!」

「じゃ、三人で選んじゃおっか」

そう言ってサングラスをした三人は並んで男用の水着売り場へと進んでいってしまった。待て待て、俺の自由意志とかはないんだろうか・・・？



時間は十分ほど前。セシリア、シャルロット、ラウラの三人ではじまった追跡トリオの中で、唯一織斑千冬に先に気づいたラウラは、奏羅にバレる前に早めに二人の元を離れて、色とりどりの水着が並び売り場へと移動していた。

（ふむ、そういえば私も水着を持っていなかったな）

学校指定のものがあるから別にいいかと考えるラウラ。ちなみに、IS学園の指定水着は紺色のスクール水着。ちなみに、『らうら・ぼーでうゝいっひ』という名札付き。

（まあ、泳げればなんでもいいだろう。あの水着は機能的に優れている。代わりのものは必要ないな）

そう思い、冷めた瞳で水着の列を眺めるラウラだったが、次の瞬間に聞こえてきた言葉に、頬が赤く染まった。

「まあ、ラウラは可愛いんじゃないかな」

いきなり奏羅の声が聞こえたのだった。どうやら、先程まで一緒にいた人物との会話らしいが、頭には入ってきてはいない。

褒めるがいいと、なんとも言っていたラウラだったが、実際に褒められたことはない。そこでこの不意打ちである。取り乱すのは無理もない。

（か、可愛い・・・？ 私が、可愛い・・・。可愛い・・・）

意味もなくキヨロキヨロ周りを見渡すと、コールする番号をなんども間違えながら、ラウラはISのプライベート・チャンネルを開いた。

『――受諾。クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

「わ、私だ・・・」

自分の部下、ラウラが隊長を務めるIS配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』――通称『黒ウサギ隊』の副隊長へと連絡を入れる。本来ならば名前と階級を言わなければならないのだが、ラウラは奏羅の言葉に動揺し、いい忘れてしまっていた。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長、なにか問題が起きたのですか？』

「あ、ああ・・・。重大な問題が発生している・・・」

『――部隊を向かわせますか？』

「い、いや、部隊は必要ない。軍事的な問題では、ない・・・」

『では？』

「クラリツサ。その、だな。わ、わ、私は可愛い・・・らしい、ぞ」

『はい？』

「そ、奏羅が、そう、言っていて、だな・・・」

『ああ、隊長が好意を寄せているという彼ですか』

「う、うむ……。ど、どうしたらいい、クラリツサ？　こういう場合は、どうすべきなのだ？」

『そうですね……。まずは状況把握を。直接言われたのですか？』

「い、いや。向こうはこちらが聞いているとは思っていないだろう」

『――最高ですね』

「そ、そうなのか？」

『はい。本人のいない場所でされる褒め言葉に嘘はありません』

「そ、そうか……」

その言葉に、ラウラの機嫌は有頂天になる。奏羅は嘘を言っていない。それを聞いただけで顔が自然にほころんでしまう。

「そ、それで、だな。今、その、水着売場なのだが……」

『ほう、水着！　そういえば来週は臨海学校でしたね。隊長はどのような水着を？』

「う、うん？　学校指定の水着だが――」

『何を馬鹿な事を！』

「!?!」

『確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くはない。』

悪くはないでしょう。男子が少なからず持つというマニア心をくすぐるでしょう。だがしかし、それでは――』

「そ、それでは・・・？」

ごくり、とラウラがつばを飲む。

『色物の域をでない！』

「なっ・・・！？」

『隊長はたしかに豊満なボディで男を籠絡するというタイプではありません。ですが、そこでキワモノに逃げるようでは『気になるアイツ』から前には進まないのです！』

ガンとラウラに衝撃が走る。自分はもう少しで過ちを犯すところだった。しかし、その過ちを正すすべがない。

「な、ならば・・・どうする？」

『フツ、私に秘策があります』

プライベート・チャネル越しに、クラリッサの不敵の笑みが聞こえた。

ちなみに、ラウラに間違った知識を植えつけているのは、このクラリッサだったりする。



「ちなみに、奏羅はラウラがどんな水着着てくると思う？」

シャルロットがなんとなしに俺に聞いてくる。ラウラの水着かぁ・・・。

「スクール水着じゃないかな？」

「奏君って、スクール水着が好きだったりするよね」

「ちよっ、お前っ!？」

「そ、奏羅さん・・・?」

「い、いや、セシリア。こいつの冗談だから!　って、ふたりともそんな目で俺を見るなよ!？」

いや、たしかにスクール水着も悪くないけど・・・って、いやいやいや、気のせいだって、俺。

第31話 く水着セレクションく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

前書きに書きたいこと書きちゃったんでここで書くことがない・・・。
とりあえず、プレイした方、感想を何処かしらに書いてくれると嬉しい限りです。

ご意見ご感想をお待ちしてます。

第32話 〽海とウサ耳〽 (前書き)

テストが近いので再来週くらいは更新が遅くなるかも・・・

では本編をどうぞ。

第32話　く海とウサ耳く

「海っ！　みえたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が歓声を上げる。

臨海学校初日は天候にも恵まれ、海も穏やか、絶好の海水浴日和だ。

「海かぁ……。さすがにこの歳にもなつてとか思ってたけど、やつぱりわくわくするな」

「ふふっ、そうだねえ」

隣の窓際の席にはシャルロットが座っている。しかし、映像と違って生で見るオーシャンビューはとても素晴らしい眺めだ。

「綺麗だな……」

「えっ！？　そ、そんな奏羅ったらいきなり……」

「いきなりって、さっきから見えてるじゃないか、海」

「あ……。ああ、そうだね。綺麗だね、海」

シャルロットも窓から海を眺める。シャルロットも海を見てテンションが上がってるのか、外を眺めながらはぁ……。と、ため息を吐いていた。

（いきなり言われるからびっくりしたけど、僕じゃなくて僕の向こうに広がってる海だったのかぁ……。でも――）

「・・・えへへへ」

「ん？ どうしたシャルロット？」

「へっ！？ あー、えっと、思い出し笑いだよ」

思い出し笑いを他人に見られたのが恥ずかしかったのか、シャルロットは話題を変え始めた。

「そ、そういえば、ほら。デパートで一緒だったつかさって子、あれ名前なの？ せっかく仲良くなったのに、僕フルネーム知らないから」

「あゝ、えーつとだな、つかさってのはあだ名なんだけど・・・」

「あれ、あだ名だったの？ てっきり名前だと思ってたよ。奏羅がつけたの？」

「まあ、な」

アイドルである旭の名前を人前で呼ばないためにつけたあだ名だけどな。と心のなかで補足しておく。

「で、本名は？」

「ああ、あいつ曰く、『本名は語らない、その方が謎があってカッコイイ』だそうだ。だから言わない」

「な、何その理由・・・」

「知らないよ。あいつに聞いてくれ」

ちなみに先程の迷言は、旭が本名を聞かれたときに答えてくれと言っていた言葉だ。これを言っておけば通用するとか言っていたが、正直混乱を招くだけだと思う。

「あ、あのさ、僕にもあだ名つけてよ」

今の話を聞いてあだ名が羨ましくなったのか、期待を込めたまなざしでこっちを見てくるシャルロット。

「いいけど、センス無いぞ」

「うん、大丈夫だよ。せっかく奏羅が付けてくれるんだし、あまりにもひどくないと文句は言わないよ」

「そうか？　じゃあ・・・」

シャルロットかぁ・・・。あだ名なんだからとりあえず縮めて呼びやすい呼び方だと・・・。

「シャル、でどうかな？」

「シャル・・・。うん、とってもいいよ！　ありがと奏羅！」

「そ、そこまで喜んでくれるとつけたかいがあるってもんだな・・・」

あだ名をつけてもらったのがよっぽど嬉しかったのか、シャルは「

シャル……。シャルかぁ……。」とニコニコしながらつぶやいていた。

「まったく、シャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

通路を挟んだ向こう側、セシリアはシャルとは正反対の顔で言うてくる。

「うん。そうだね。ごめんね。えへへ……」

セシリアの嫌味とも取れる言葉を物ともせずにシャルロットは笑顔で返す。たしかに、物凄くテンションが高いな。

「あー、もう！ 奏羅さん、私のもあだ名をつけてください！」

「せっしー」

「……。はい？」

「前に布仏さんがあだ名付けてくれてたじゃないか。せっしーって」

「……。やっぱり遠慮しておきます。奏羅さんにまでそのあだ名で呼ばれたくはないのですので」

「そうか？」

せっしー、俺はいいと思うんだけどなぁ……。少なくとも俺のあだ名のまかせーよりはそれっぽいし。

「……。……」

それにしても、不思議なのはセシリアの横でおとなしくしているラウラだった。時折挙動不審になって周囲をキョロキョロ見渡している。

「ラウラ、大丈夫か？ 昨日俺達と合流してからずっとそんな感じだけど、どうかしたのか？」

「・・・・・・」

シカトされてしまった。普段ならすぐ返事をするんだが、やっぱりどこか変だな。

「ラウラ、おい、ラウラ」

「!？ な、なんだ、どうした!？」

「いや、ぼーっとしてるから調子でも悪いのかなと」

「い、いや、大丈夫だ。問題ないぞ」

「そ、そうか？ ならいいんだが・・・」

ふと後ろの席から一夏と箒の声が聞こえてくる。

「向こうに着いたら泳ごうぜ。箒、泳ぐの得意だったよな」

「そ、そう、だな。ああ。昔はよく遠泳したものだな」

どうやら、箒も様子がおかしいようだ。

先行き不安だな、まったく。



「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いしまーす」」」

目的地に到着すると、IS学園一年生全員で、これからお世話になる旅館の女将さんに挨拶をした。

「はい、こちらこそ。今年の一年も元気があってよろしいですね」
さすが、女将さんということもあって、しっかりとした雰囲気が出ている女性だ。

「あら、こちらが噂の・・・？」

「ええ、まあ。今年は男子が二人いるせいで浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子たちじゃありませんか。

しっかりとしてそんな感じを受けますよ」

「感じがするだけです。挨拶をしろ、馬鹿者ども」

「お、織斑一夏です。よろしく願います」

「天加瀬奏羅です。よろしく願います」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

そういつて、丁寧にお辞儀をする女将さん。職業柄なのかもしれないが、すごく気品がある。

「それじゃあみなさん、お部屋の方へどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってください。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし」

生徒一同は、はいと返事をする、すぐさま旅館の中へと向かう。俺もなにかをするにしても、とりあえず荷物を置きたい。

ちなみに初日は終日自由時間。食事も旅館の食堂で各自取るようにとの事だ。

「ね、ね、ねー。まかせ」

後ろからのほほんとした声が俺を呼んでいる。俺のことを変なあだ名で呼ぶこの声の主は布仏さんだ。

「まかせーって部屋どこ？ おりむーもだけど一欄に書いてなかったー。遊びに行くから教えて」

その言葉に一斉に周りが静かになる。まさかこの人数が俺の部屋に押し付けてくるとかないよな？　しかし、根本的な問題がひとつある。

「いや、俺も知らないんだよ。一切知らされてない」

「そうなんだ。じゃあどこの部屋なんだろうね」

山田先生曰く、女子と寝泊まりさせるわけにはいかないということで、俺と一夏の部屋はどこか別の部屋が用意されているらしい。が、未だ知らされていないのはどういったことなのだろうか。

「織斑、天加瀬、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」

俺と一夏に織斑先生からお呼びがかかる。待たせてしまったてはまた厄介なことになりそうなので、布仏さんに「またあとで」と言うと、足早に先生のもとへと向かった。

「えーっと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

一夏の質問は一蹴され、もはやどこに連れていかれるのかはわからないが、旅館のなかはかなり豪華で、エアコンも適度に効いてとても居心地はいい。

「いっこだ」

「え？　ここって・・・」

一夏が疑問の声を上げる。それもそのはず、連れてこられたのは『教員室』と書いてある紙がはられた部屋だった。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視した女子が押しかけるだろうということになってだな」

はあ、とため息をついた織斑先生が続ける。

「結果、織斑は私と同室、天加瀬は山田先生と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

「いや、そうですけど、一夏は織斑先生の家族だからいいとしても、俺はさすがに・・・」

さすがに年頃の男子が教員とはいえ、女の人と一緒にの部屋はまずい気がする。

「お前を一人部屋にしたところで同じことだ。ひとつの部屋に大量の人間が押しかけて、旅館の方に迷惑を掛けるわけにはいかん」

しかし、山田先生と同室とは、厄除けとしてはものすごく心もとない。ほんとうに大丈夫だろうか？

「本来なら私が貴様らの面倒をみるつもりだったのだが、二人は大変だろうという山田先生のご好意だ。まあ、他にも理由はありそうだがな」

そういえばデパートでも同じようなことがあったな。あの時と同様に姉弟水入らずと、織斑先生に気を使っているのだろう。

「山田先生の部屋は私の部屋の二つ隣だ。すでに部屋に入っているだろうから、ノックを忘れるなよ」

「わかりました」

そこで織斑姉弟と別れると、二つ隣の部屋の前まで行き、ドアをノックすると中から「どうぞー」と声が聞こえた。

「失礼します、天加瀬です。これから三日間お世話になります」

「いえいえ、そんなにかしこまらないでください。こちらこそ、よろしく願いますね」

しかし、他の部屋はわからないが、この部屋は相当豪華だ。広い間取りに加え、バルコニーまで付いている。窓越しからバルコニーをまたいで見えるオーシャンビューも絶景だ。

「天加瀬くんは泳ぎに行くんですか？」

「ええ、まあ。せっかく水着も買ったことですしね」

「私は今から先生方と連絡等があるので鍵を渡しておきますね。じゃあ、楽しんでください」

そういつて、資料等を持って山田先生はどこかへと行ってしまった。多分、織斑先生の部屋だろう。

「さて、泳ぎにでも行きますか」

俺はボストンバックから、水着とタオルを数枚とりだすと、それを小さめのかばんに詰めて海へと向かった。



「おっ、セシリア」

「あら、奏羅さん」

廊下をでて別館へと進んでいると、バツタリとセシリアに出くわした。

「奏羅さんも海へ？」

「ああ、せっかく買った新しい水着なんだ。使わないと勿体無いしな」

「わたくしも海へ行くところですよ。そ、それで、ですね・・・」
セシリアはこほん、とひとつ咳払いをすると、口を開いた。

「わたくしの背中にサンオイルを塗っていただけませんか？ 背中
は手が届かないので・・・」

「いや、なんで俺なんだよ。友達にでも頼んだらいいじゃないか」

「い、いや、その、出来れば奏羅さんに塗っていただけたらなと・・・」

そんなに俺に塗って欲しいのか・・・？ いや、もしかしたら、俺しか塗ってくれそうな人がいないとか？

「・・・セシリアってさ、俺以外に友達いないの？」

「し、失礼ですわね！？ ちゃんといますわ！」

大声で怒られてしまった。半分は冗談のつもりだったんだがなあ。

「悪かった、俺でいいなら塗ってやるよ」

「・・・目が哀れんで見えるのですが、気のせいですわよね」

そんなことを話しながらふと前をみると、ひとりの女の人が目についた。明らかに感じる何かしらの違和感。その人の着ている服や頭に生えているウサギの耳などの格好もそうだが、存在そのものが異質な感じを放っている。

「あんな人いたっけ・・・？」

「さあ・・・？」

その人はすぐに視界から消えてしまったが、その後に続いて、一夏が視界へと入ってきた。

「おっ、奏羅にセシリア。今から海に行くのか？」

「ああ。しかし、今変な人がいたんだよ。この学園の人でもなさそうだし、お前見てないか？」

「もしかして、頭にウサ耳がついてた？」

「ああ、ついてたな」

「ああ、その人は東さんだ。箒の姉さん」

「えっ・・・？ えええええっ！？ 今の方が、あの篠ノ乃博士ですか！？ 現在、行方不明で各国が捜し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ乃東さん」

セシリアが誰に説明しているかは置いて、あれが篠ノ乃博士か・・・。滅多に人前に出ることはない聞いていたけど、こんなところで会えるとは思っていなかったな。しかし――

（そんな人がこの旅館に、しかもIS学園一年生の生徒がいるなかでなんのようなんだ・・・？）

この前の無人機の件といいたまた何かしらあるんじゃないだろうか？ いろいろ考えていると、足が止まっていたのか、セシリアに声をかけられた。

「奏羅さん、行かないのですか？」

「えっ？ ああ、悪い」

まあ、俺が気にしてもなにかなるわけじゃないし、今は海を楽しむことにしようか。

第32話　く海とウサ耳く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

・・・書くことがない・・・だと・・・？

ご意見ご感想をお待ちしております。

第33話 くらぶるビーチ (前書き)

夏なのに私の部屋にはクーラーがありません。

執筆のモチベーションはいつも最低ラインを限界突破しております。

では本編をどうぞ。

第33話 くらぶるビーチ

「あ、織斑くん到天加瀬くんだ！」

浜辺に出てすぐに、ちょうどとなりの更衣室から出てきた女子数人と出会った。各人、可愛い水着を身につけており、そこそこの露出度だったので、少し照れてしまう。

「う、嘘っ！ わ、わたしの水着変じゃないよね！？ 大丈夫だよね！？」

「わ、わ。織斑くん体かっこい。鍛えてるね」

「天加瀬くんTシャツ脱がないの？」

もやし体型なのであまり見られたくないからシャツを着ているのに脱げと申すのかこの娘は。

「ふたりともあとでビーチバレーしようよ」

「おう、時間があればいいぜ。奏羅は？」

「そうだな。その時になったら参加するか」

女子達と別れると、砂浜に向けて一歩踏み出した一夏が砂浜のあまりの熱さに悲鳴を上げた。

「あつつっ！ 奏羅も気をつけ・・・って、お前サンダル履いてんのか！？」

「・・・まあ、基本だしな」

漫才をしながら波打ち際まで向かう。ビーチはすでに多くの女子生徒で溢れかえっており、その人数分のいろんな色の水着でとてもカラフルになっている。

「じゃ、泳ごうかな、っと」

とりあえず準備運動を始める一夏。俺は・・・どうしようかな・・・？

「い、ち、か~~~~~~~~っ！」

丁度良く背筋を伸ばしている一夏に鈴がダイブすると、そのまま一夏にしがみついた。ちなみに着ているのはタンクビキニで、オレンジと白のストライプのセパレートしているタイプだ。

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わったんなら泳ぐわよ」

「こらこら、お前もちゃんと準備運動しろって。溺れても知らねえぞ」

「あたしが溺れたことなんかないわよ。前世は人魚ね、たぶん」

そんなコト言いながら一夏の体を登っていき、肩車の体制になる。これじゃ前世は人魚じゃなくて猿だな・・・。

「おー高い高い。遠くまで良く見えていいわ。ちょっとした監視塔

になれるわね、一夏」

「監視員じゃなくて監視塔かよ」

「いいじゃん。人の役に立つじゃん」

「誰が乗るんだよ・・・」

「んー・・・あたし？」

・・・何だこいつらは。正直見せつけられているようにしか感じられないんだが。

「あ、あなた達、何をしていますの・・・？」

そこにセシリアも登場。手には簡単なビーチパラソルとシート、それにサンオイルを持っている。

ちなみにセシリアの水着は専用機よろしく鮮やかな青で、腰に巻かれたパレオが優雅さをだしていた。

「何って、肩車。あるいは移動監視塔ごっこ」

「まったく、子供ですわね・・・」

セシリアは今の言葉に少し呆れながらもざくっ！と音がするくらいしっかりとパラソルを砂浜に刺した。

「あー！ 織斑くんが肩車してる！」

突然発せられた言葉。誰が言ったかは分からないが、その一言に周

りが騒ぎ始める。

「ええっ！ いいなあっ、いいなあっ〜！」

「きつと交代制よ！」

「そして早い者勝ちよ！」

勝手な妄想が付け加えられていき、あっという間に一夏に詰めかけてきた。

「り、鈴。降りろ。誤解が広まる」

「ん。まあ、仕方ないわねえ」

鈴は一夏から飛び降りると、器用に受身をとって前転して起立。まるで新体操の選手だな。

鈴が降りると、一夏はそのまま周りに集まってきた女の子に「そんなサービスはしていません」と説明をしていた。

「奏羅さん。ではサンオイルを塗っていただけませんか？」

「あー、まあ、約束だからなあ」

その瞬間、一夏に説明を受けていた女子たちが反応する。

「私サンオイル取ってくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「じゃあ、私はサンオイルを落としてくる！」

いや、塗ってあるなら別にいいだろう——って、もう海に飛び込んで
いってる……。

「コホン。それではお願いしますわね」

しゅるりとパレオを脱ぐセシリア。その仕草はどこか色っぽい

「で、どこを塗るんだ？」

「そ、奏羅さんのお好きなところを……」

「じゃあ背中です」

「……あ、はい」

少し残念そうなセシリアは首の後で結んでいた上の水着のひもを解
くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべった。

「さ、さあ、どうぞ？」

「……わかったよ」

俺はサンオイルを手の上にだすと、少し温めてからセシリアの背中
に塗っていく。

「手馴れてますわね……」

「ああ、昔塗ったことがあるしな。あと、サンオイルの瓶に書いてあるぞ、使用方法」

「そ、そうだったんですね。頼んでよかったですわ……。はぁ・
・」

しかし、セシリアの肌ってすべすべしてるよなあ……。やっぱり美容に気を使っているんだろうか。

「ん……。いい感じですよ。奏羅さん、もっと下の方も」

「背中しか塗らないぞ？」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。脚と、その、お尻も」

「……。はい？」

いやいやいや、さすがにサンオイルを塗るだけとはいえお尻を触るのはまずいだろう。

「ふふん。悩んでるねえ、奏君」

「な、何言ってるんだ旭！　悩んでるわけ——って、あれ……。？」

俺、今なんて言った……。？　確か旭って……。ま、まさか……。

「昨日ぶりだね、奏君」

「あさ——じゃない、つかさ！　なんでここにいるんだよ！」

そう、俺の後ろにはここに絶対にいる事のできるはずがない人物がそこにいた。

「えええええええっ！？　つかささん！？」

そう、俺の幼なじみ、つかさ——もとい、塚乃旭。その顔には相変わらずのサングラスに、髪の色がピン・・・ク・・・？

「あ、ちよっとセシリア——」

驚いたセシリアが旭の姿を見ようと体を起こした瞬間、体についていなかった水着がそのまま下へと落ちていった。

「あ」

「ありゃ・・・」

「きゃああああああああっ！」

運良く(?) 大事なところは見えなかったが、セシリアは真っ赤になってうずくまった。

「あー、セシリア、その何だ……。見えてはないぞ」

「な・・・」

「と、とりあえず、向こう行くか、つかさ」

「そ、そだね・・・」

再び真っ赤になるセシリアの顔に少し危機を感じ、俺達はそそくさと海の方へと向かった。

◇

「しかし、お前なんでここにいるんだ？」

俺は、ここにいるはずのない人物である旭に問いかける。もともと、この臨海学校は部外者は絶対に知ることもなく、参加することもできない。俺も「臨海学校へ行く」とは言っていたが、どこへ向かうとは言っていない。

「えーっと、いろいろあるんだけど・・・」

「・・・まあ、お前がデパートの時に隠していたことがわかったよ」

つまり、こいつはあの時からすでにこの臨海学校に参加すると決まっていたことになる。それを俺に黙っていたのだらう。

あの時買った緑の水着を、旭はしっかりと身につけている。

「ひとつわからないんだが、なんで参加できたんだ？」

「それはね――」

「あたしが教えてあげよう」

また、俺の知り合いの声をする。それは専門学校時代によく聞いていた声だ。振り向くと、これまた水着姿の知り合いが立っていた。

「お前も来てたのかよ、リリィ」

「まあね。ま、このリリィちゃんがないと色々出来ないことがあるからね」

そんなことは今重要じゃないんだがなあ・・・。

「わかってる、わかってる。そんな顔しなくても教えるって」

リリィはあはは、と笑うと事情を説明し始めた。



「なるほど、理由はわかった」

「そ。この臨海学校に参加するために新型のISの情報を公開するってわけ」

しかし、こんなことになるうとはなあ・・・。

「旭はそれでいいのか？」

「まあ、しょうがないからね。必要なことなんだから」

「そうは言われてもなあ・・・。お前・・・」

「この話はおしまい。もういいでしょ、参加しちゃってるんだし」

リリィになだめられて旭に追求するのは諦めたが、やっぱり引っかかってしまう。

「じゃあ、あたしはこれから先生方に話があるから、旭のことよろしくね」

「お、おい・・・」

リリィはそう一言告げると、さっさと旅館の方へと戻っていった。まった。

（しかし、大変なことになってきたぞ・・・）

果たしてあの新型を公開してもいいのだろうか？ あんなものを公開して、苦情とか来ないかな・・・。

「あ、奏羅。ここにいたんだ——って、その人誰？」

またしても声に呼ばれて振り向くと、そこにはシャルと——

「いやこいつは——って、なんだ、そのバスタオル？」

よくわからない存在がそこにいた。バスタオル数枚で、まるでミノムシのように全身を頭の上から膝の下まで包んでいる。

「やっほー、昨日ぶりだね。シャルロットちゃん」

「つ、つかさ！？ その頭どうしたの——じゃない、なんでここに！？」

「ここにいることにはいろいろあるんだけど……。ま、頭の方は染めたっていうか」

「そ、そうなんだ……」

昨日の今日で髪の色の変わり様だ。まあ、普通驚くよな。

「次は俺の質問に応えてくれるとありがたいんだが……」

「ああ、ちょっと待って。ほら、出てきなれば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める」

そのバスタオルのミノムシからラウラの声が聞こえる。どうやらこの珍生物の正体はラウラのようなだが、さっきからバスタオルをとろうとしない。シャルが必死に説得を試みているが、ラウラは一向に聞き入れる様子がないようだ。

「な、なんなんだ、一体……？」

「どうやら、奏君に水着を見られるのが恥ずかしいんじゃないかな？」

「いやいや、恥ずかしいって、どんな水着着てるんだよ？」

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、奏羅に見てもらわないと」

「ま、待て、私にも心の準備というものがあってだな・・・」

「もー、そんな事言ってるけどさっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし、見る権利はあるとおもうんだけどなあ」

「そういえば、この二人はルームメイトになったんだったな。先月は敵として戦ったのに、いまではこんなにも仲がいいとは、昨日の敵はなんとやらということわざは正しいみたいだ。」

「うーん。ラウラがでてこないんなら僕も奏羅とあそびにいいかなあ」

「な、なに！？」

「うん、そうしよう。奏羅、行こっ」

「そう言うなり俺の手を取り波打ち際まで引っ張っていいこうとするシヤル。」

「ま、待て。わ、私も行こう」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

挑発に乗ったラウラがバスタオルをかなぐり捨てて、水着があらわになる。その水着というのが――

「わ、笑いたければ笑うがいい・・・」

予想していたスクール水着とは違い、黒の水着、しかもレースをふんだんにあしらった、オトナっぽい印象をうける水着で、髪の毛は左右で一對のアップテールでまとめている。その姿で少しもじもじとしているラウラは、なかなか可愛かった。

「おかしなところなんて無いよね、奏羅？」

「お、おう。似合ってると思うぞ」

「なっ・・・！」

俺の言葉が予想外だったのか、ラウラは一瞬たじろいだあと、真っ赤に赤面した。

しかし、そんな中、俺の中でひとつの疑問が沸き起こる。

（なんで、俺は今、残念な気持ちなんだ・・・？）

いや、たしかに似合ってるし、可愛い、と思う。だが、なぜ・・・？

「この子がラウラちゃん？」

「あ、ああ。そうだけど」

「なるほど……。奏君、今少し残念でしょ？」

「え、えっ！？　な、なんでだよ！？」

「私幼なじみだから知ってるけど、奏君スクール水着が好きだもんねえ」

その瞬間、ラウラが固まった。シャルも、「ああっ！　そういえば！　」っと驚いている。

「い、いやまで、俺がスクール水着好きだといつ言ったんだよ。お前がデパートの時に周りに言いふらしてたけど俺は絶対にそんなこと無いぞ、ほんとだぞ」

「でも嫌いじゃないんでしょ？」

「いや、まあ、嫌いじゃない……。けど……」

「じゃあ、ラウラちゃんのスクール水着を想像してみなよ」

そう言われた瞬間、反射的にさっきのもしもししていたラウラがスクール水着をきている姿がフラッシュバックのように頭に浮かぶ。

「奏君、顔真っ赤」

「……。うるさい」

と、とりあえず……

「ら、ラウラ、お前は十分その水着で・・・」

「・・・ったな・・・さ・・・」

「へ？」

「はかったな、クラリツサあああああああつ！！」

「ら、ラウラっ！？」

誰かの名前を大声で叫びながら、ラウラはどこかへと走り去ってしまった。

理由はわからないが、ラウラは誰かの計略にはまったらしい。しかし――

「わ、私スクール水着取ってくる！」

「わ、私も！」

「私は買ってくる！！」

「じゃあ、私は家まで取ってくる！」

今の話を皮切りに、女子達が一斉に行動を起こそうと騒ぎ始めた。周りにスク水フェチと認識されてしまった俺も、どこかへと走り去りたい気分だった。

第33話 くらぶるビーチ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

とりあえず三巻の内容で地味に立てていたフラグをそこそこ回収していかうかなと思っています。

いや、恋愛のフラグではないんですけどね。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第34話 く君への想いく(前書き)

テストが迫っております。

このままだと日曜の更新はおやすみしそうです。

では本編をどうぞ。

第34話　く君への想いく

楽しい海水浴の時間も終わり、現在午後七時半。大広間を三つも使った大宴会場で、俺達は夕食をとっていた。そう、俺達は。

「すごいよ奏君！　これ活造りだよ！　しかも鯛！」

「あー、はいはい、そうだな」

そう、突然の来訪者である俺の幼なじみの、塚乃旭ことつかさも一緒にそこでご飯を食べている。ちなみに、俺の右隣。

「学校の学食とかも結構豪華なんだよ。ほんと、IS学園は羽振りがいいよ」

解説を入れるのはさらに旭の対面の席にいるシャル。二人が話しているとおおり、目の前の膳に並んでいる料理は、海鮮鍋に茶碗蒸し、お吸い物にご飯と付け合せ。そしてテーブルの真ん中にはみんなですべて食べるのだろう、船のような木製の皿の上に鯛の活造りが乗っている。

「つかさ、これなに？」

シャルが指差す先には、ある植物の加工される前の状態のものが。

「これ？　これはわさびだよ」

「わさびって、お刺身とかに付いてるやつだよ？　僕食べたこと無いんだ」

「あれは市販のはいろんなモノを混ぜて加工した物らしいんだけど、これは本わさびって言って、市販のわさびとかと違うやつなんだよ」

「へー……。そうなんだ」

「まず、この道具でこうやってすり下ろして――」

旭と一緒にしていた鮫皮おろしを使ってわさびをすって見せようとする前に、シャルはあろうことか、わさび自体にバリバリとかぶりついていた。

「っ~~~~~」
「~~~~~!」

「じゃ、シャルロットちゃん、それ相当キツイんじゃない」

「ら、らいひょうふ、らいひょうふ」

なんとか笑顔を浮かべようとするシャルだったが、その顔は笑顔になっっていると言いがたい。

「ど、独特の……。けほっ、風味があって、んんっ……。とつても、おいしいよ……」

「そ、そう、ならいいんだけど……」

強がってもバレバレだぞシャル……。

「う……。っ……」

さつきから左横から聞こえるうめき声。俺の左にいるセシリアはどうやら正座が苦手らしい。、痛みに耐えつつなので、一向に食事が進んでいない。

「・・・セシリア大丈夫か？ 顔色よくないぞ？」

「だ・・・よう・・・ですわ・・・」

セシリアも強がっているのがバレバレだ。しかし、プライドの高い彼女のこと。平静を装って箸を手にした。

「い・・・ただき・・・ます・・・」

頑張って料理を口に運んでいるのだが、いかんせんぎこちない。このIS学園は、世界中から入学希望者がやってくるので、生徒・教師共に多国籍で、正座に慣れてない、出来ない人も多い。そういう人たちのためにテーブル席が用意してあるのだが、セシリアは頑として動こうとはしない。

「セシリア、無理して正座しながら御飯食べても美味しくないだろう？ 我慢せずにテーブル席の方に移ったらどうだ？」

「へ、平気ですわ・・・。この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい・・・」

席を獲得って、この席入ってきた順に座っていったハズなんだが・・・。

「奏羅、女の子には色々あるんだよ」

「・・・そうなのか？」

「そうなんだよ」

シャルに説明されたがいまいちよくわからない。

「しかし、これくらいの痛みにも耐えられないとは貴様もまだまだだな」

俺の対面に座っているラウラがセシリアに話しかける。ラウラはシャルと同じく正座は特に苦ではないらしい。理由は・・・多分きかなくてもわかる。どう考えても拷問的な何かに耐える訓練をしたからとかだろう。

「ううつ・・・」

「セシリア、我慢せずに――」

「移動は、しません」

言い切られてしまった。

「じゃあ、奏君が食べさせてあげたらいいんじゃない？」

突然の旭の言葉。いや、別に食べさせてもいいんだが、お前のニヤニヤした顔がものすごく怪しい。

「・・・えーっと、どうするセシリア？」

「ぜ、ぜひお願いします！ 料理が冷めたらシェフに申し訳が立ちませんし！」

ものすごい剣幕に一瞬ひるんでしまう。まあ、料理が冷めるのは英国貴族の行動としては、はしたないのかもしれない。

「わかったよ。じゃあ何が食べたい？」

「お、お刺身をお願いします」

「わさびはいるか？」

「・・・少量」

俺は注文通りわさびを少しすった後、それを鯛の上に少し乗せて醤油をつけて差し出した。

「これくらいでいいか？」

「は、はい。じゃあ、あーん」

ぱくり、と一口。美味しいようなのだが、足の痛みも混じっているのだろう、実に微妙な表情をしている。

「で、他には？」

「そ、その、お鍋の具をお願いします」

今度は眼の前で煮えている鍋に入っている魚の身を小皿にとると、ひとくちサイズにほぐして差し出した。

「あ、あの、よければ少し冷ましていただけませんか？」

「ん？ ああ、そうだな。悪い」

たしかに、ここであつあつの料理を口に突っ込むのはテレビで出てくるバラエティだ。

俺は適当に息を吹きかけて冷ますと、またセシリアに向けて料理を差し出す。

「ほい、これでいいか」

「は、はい！　じゃあ、あー・・・」

と言おうとしたとき、問題が発生した。

「ああーっ！　ずるいセシリア！　なにしてるのよ！」

「天加瀬くんに食べさせてもらってる！　しかも、あろうことかふーふーまでしてもらってるし！」

「ズルイ！　インチキ！　イカサマ！」

と、他の女の子たちが騒ぎ始める。いや、この人数に食べさせてたら日が暮れるぞ。いや、今は夜なので正しくは朝日が昇るか。

「ずるくありませんわ！　席がとなりの特権です！」

「それがずるいって言ってるの！」

俺の横でぎゃあぎゃああと女子数人対セシリアの言い合いが始まった中、なんの前触れもなくラウラが俺の方へ向けて料理をさし出してきた。

「さあ、あーんしろ」

「な、なぜ・・・？」

「いや、お前がセシリアに食べさせていたら、今度はお前の料理が冷めてしまうからな。なに私の心配はするな、軍事訓練などで携帯食料みたいな特に味の無い料理も食べ慣れている。冷めた料理くらい普通だ」

な、なんか嫌な過去が聞こえた気がするが、気のせいにしておこう。

「ほらほら奏君、ここで食べないと男がすたるよ？」

「お前、明らかにこの状況を楽しんでるよな？」

さあねー、とニコニコしながらはぐらかすと、旭は自分の料理をぱくつき始めた。くっ、もとはお前がこの騒動の元凶じゃないか・・・。

「食べてくれないのか・・・？」

「うっ・・・」

そう言った少し悲しそうなラウラの表情に言葉が詰まってしまおう。どうも本能的に男は女の子のこんな表情に弱いんじゃないだろうか？

「わかった、食べる、食べるよ」

「ほ、本当か！　じゃ、じゃあ・・・」

ラウラの差し出した刺身を口で受け取る。やっぱり、活きが良いのか身がコリコリして非常に美味しい。

「どうだ、うまいか？」

「ああ、美味しいよ」

「そ、そうか！　じゃあ次は——」

そこで再び言葉が遮られる。

「あああっ！　ラウラさん、なにをやっているんですの！
？」

こっちの様子に気づいたセシリアが大声を上げる。

「なにして、私が奏羅に食べさせているんだ。問題はないだろう？」

「問題大有りです！　だいたいあなたは——」

「お前たちは静かに食事することができんのか？」

突然発せられた声にその場にいた全員が凍りついた。

「お、織斑先生・・・」

「どうにも、体力が有り余っているようだな。よからう、それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は・・・そうだな、50キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！　とんでもないです！　おとなしく食事をします！」

そういうながら各々自分の席へと戻って行く。

「天加瀬、あまり騒ぎを起こすな。鎮めるのが厄介だ」

「はい、すみません・・・」

俺まで怒られてしまった。俺の右横にいる元凶はというと、

「あー、このお吸い物美味しい。奏君食べないなら食べちゃうよ？」

のんきに食事を続けていやがった。ちくしょう。



「さて、厄介払いも済んだことだし、そろそろ本題に入ろうか」

食事の後から睡眠までの自由時間、織斑姉弟の部屋には、篠ノ乃箒、

セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒが勢ぞろいしていた。
各々浴場から出てきたばかりなのか、髪がぬれている。

「厄介払い・・・？」

「ああ、あいつがいると話すに話せないだろうからな」

あいつというのは千冬と同室している彼女の弟、一夏のことだ。彼は千冬の命令で浴場へと向かっており、しばらくは帰ってこない。

「とりあえずは飲み物でも飲むか。ほれ、ラムネ、オレンジ、スポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいい奴は各人で交換しろ」

しかし、それぞれ渡されたもので満足なのか、飲み物の移動はしなかった。

「い、いただきます」

全員が同じ言葉を発して、飲み物に口を付ける。その様子を見て千冬はニヤリと笑い、ビールを取り出すと、遠慮無く開けてごくごくと飲み干した。

その様子に、いつもなら規律や規則に厳しい千冬の意外な行動を目にした女子たちは、全員がぼかんとしている。ラウラにいたってはなんども目を瞬いていた。

「おかしい顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらい飲むさ。それとも何か？ 私は作業用オイルでも飲む物体にでも思っていたか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……?」

「固いこと言うな。それに口止め料は払ったさ」

その言葉に全員が「あっ」と声を漏らす。そう、先程の飲み物が口止め料だったのだ。

「では、話に入るとするか。……篠ノ乃に凰、貴様らは私の弟のどこが いいんだ?」

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あ、あたしは腐れ縁なだけだし……」

「ほう、なるほどな。ではそう一夏に伝えておこう」

「「伝えなくていいです!」」

しれっとそんなことを言う千冬に二人は慌てて反応した。そのような心底面白そうに笑うと、また口を開いた。

「次に、オルコットにデュノア、それにボーデヴィツヒ。貴様らは天加瀬のどこが好きなんだ?」

「わたくしは、その、夢に向かってまっすぐなところでしょうか・
・」

少し悩んでセシリアが答える。

「なるほど……。デュノアは？」

「僕——いえ、私は……。優しいところです……」

「ほう、学校にいるのを見る限りでは、うちの弟同様だれにでも優しいと思うがな。ま、口は天加瀬のほうが数段悪いがな」

「そう……。ですね、そこがちょっと悔しいですね……」

「で、ボーデヴィツヒは？」

「つ、強いところでしょうか……」

「まあ、たしかに筋は悪くないが……」

「いえ、強いです。天加瀬奏羅も、織斑一夏も、少なくとも私よりかは」

ふむ、と一言つぶやくと、千冬は二本目のビールを開けた。

「まあ、あの二人は婿としては優秀かもしれんな。うちの弟は家事全般ができるし、天加瀬は将来開発者として安定した収入も得られるだろう」

千冬は再びビールに口をつけると、今度は最後まで一気に飲み干した。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「くれるんですか？」

「やるか馬鹿。それにその三人、私は天加瀬の保護者じゃないから決められんぞ」

全員が心のなかで「ええ」とつぶやく。

「女ならな、奪うくらいのが概で行かなくてどうする。まあ、せいぜい自分を磨くことだな、ガキども」

そう言って三本目のビールを開ける千冬の顔は、本当に楽しそうだった。



ほぼ貸しきり状態の浴場を堪能した後、俺は旭の部屋を訪ねていた。

「お前、明日の実践演習にでるのか？」

「まあ、一応ね。実際には話聞いてるだけだけど」

都合により部屋の風呂を使用した旭の声が洗面所から聞こえてくる。ベッドの上にはあいつのサングラスと、先程まで付けていたピンクの髪の毛のカツラが放置されている。

「着替え完了！ はい、じゃあ次はリリィちゃんの番ね」

洗面所から浴衣を来た旭がでてくる。やっぱり変装してないこいつは、見慣れてるせいかなんとかなく安心する。

「じゃあ、あたしも入ってきますか。・・・覗くなよ〜奏羅」

「覗かないよ」

軽く冗談を交わした後、旭と入れ替わりでリリィがバスルームへと入っていった。

「それにしても、奏君モテるんだね。やっぱり女子校マジック？」

「知らないよ。それに騒いでるのも珍しいからだろ」

「そうかなあ？ 私はそうは思わないんだけどなあ・・・」

そうは思わないって、どう思ってるんだよ・・・。

「奏君さ、好きな人いないの？」

突然、旭がそんなことを聞いてくる。

「・・・いるよ」

「誰？　IS学園の子？」

「・・・違う。学園の子じゃない」

それを聞いた旭が、思いっきりため息を吐く。

「・・・その子が誰か、考えるまでもないよ、私には」

「そうか、それなら説明しなくていいから楽だな」

「奏君、いい加減居なくなった人のことばかり考えるのやめなよ。いくら思^みつたって、未来^{みく}ちゃんはもう、いないんだよ・・・。新しく好きな子見つけて、その子と――」

「悪い旭。俺には、俺の考えがあるんだ・・・」

「奏君・・・」

「えっと、明日、何やるか教えとこうか？　それなら話聞くだけでも大分違うだろうし」

「・・・そうだね、教えといってもらふことにするよ」

それからしばらく旭と授業の話をして、俺は自分の部屋に戻った。でも、さっき何を話したかほとんど頭に残っていなかった。

第34話　く君への想いく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

絵を描きたい！

無性にそんな気分です。ていうか、書きかけの魔理沙を早いところ仕上げないと・・・。

っと、まるで小説に関係ない話になってしまいましたね。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第35話　＼訪問者と襲撃者＼（前書き）

皆さんお久しぶりです。やっとこさ更新しました。

ちなみに来週の木曜日にもテストがあります。

そうです、日曜の夜までまたお休みです。

では本編をどうぞ。

第35話 〈訪問者と襲撃者〉

合宿二日目。今日は午前中から日が暮れるまで、丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

「それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

一年生全員がハイイと返事をする。現在地はIS試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれており、ちょっとした秘密基地みたいだ。

ここに搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的である。当然全員がISスーツを着用しているのだが、周りが海のようなものなので水着に見えて仕方ない。

「天加瀬、貴様はそのゲストの面倒も見ろ。お前の所属する機関の人間だろう」

「はい、わかりました」

もちろんゲストというのは旭のことである。薄々予想はついていたがやはり俺が面倒みることになった。

「ああ、それと篠ノ之。お前はちよつとこっちに來い」

俺の用事が終わると、織斑先生はそれまで打鉄の装備を運んでいた箒を入れ替わりに呼び出した。少し気になったが、織斑先生におこられそうなのでそのまま旭のところへと向かった。

「いや、奏君直々に教えてもらえるなんてありがたいよね」

「まあ、こちらとしてはお前の正体バレづらくなっているありがたいよ」

今日も今日とて変装をしている旭に向かってため息をはく。今日はいつものサングラスはかけておらず、ピンクのカツラにISスーツを着ていた。

「しかし、装備はなにか持ってきたのか？」

今度はリリィに話しかける。リリィはいつもどおりの歳相応のラフな格好の上から白衣を着ている。

「あるわけ無いだろ。プラチナのフレームはアンタが4つ全部持ってたんだから。今回持ってきたのはアイリスの調整で使うものだけ」

「なるほど。その調整を俺に手伝わせようってわけか」

「そういうこと。相変わらず空気だけは読めるんだな」

これは褒められているんだろうか。正直素直に喜べない。

「まあ、とりあえずプラチナの調整から――」

「ちーちゃ~~~~~~~~~ん!!」

突然の大声にリリィの声が止まる。その声の方を見ると、昨日見かけたウサギの耳が付いた女性、篠ノ之束だった。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめーぶへっ」

織斑先生は飛びかかってきた篠ノ之博士の顔面を片手でつかんだ。しかもおもいきり指が食い込んでいるところをみると、本気でやっているらしい。ていうかちーちゃんって、鬼教官もかたなしのあだ名で呼ばれているんだな・・・。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬぬ・・・相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

織斑先生のアイアンクローをスルリと抜けると、今度は箒に向かつて声をかけた。

「やあ！」

「・・・どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかな。おつきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

その一言に箒の手が即座に動き、持っていた日本刀の鞘が篠ノ之博士の頭に叩きつけていた。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ・・・。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ ひどい！ 箒ちゃんひどい！」

そんな二人の様子に俺たちはまるでついていけない。そんな中この状況を変えようと声を上げた勇者が一人、それは山田先生だった。

「え、えつと、この合宿では関係者以外――」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えつ、あつ、はいっ。そ、そうですね・・・」

あえなく轟沈。屁理屈で丸め込まれていた。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束ねさんだよ、はろー。終わり」

そういつてくるりとその場で一回転してみせる。ぽかんとしていた一同も、やっとそこで目の前の人物がISの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気づいたらしく、一斉に騒ぎ始める。

「はぁ・・・。もう少しまともに出来んのか、お前は。そら一年、手が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなあ、らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

たしか、一夏から聞いた話だとこの二人は幼馴染らしい。まあ、一

夏と箒が幼馴染という点を踏まえればわからなくもないが。

「それで、頼んでおいたものは・・・？」

ややためらいがちに箒が尋ねる。

「うっふっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空を
ご覧あれ！」

篠ノ之博士が直上を指さす。それにつられて、その場にいた全員が
宇宙を見上げる。

空中で何かがキラリと光ったと思うと、それが重力に任せて砂浜に
すごい音と衝撃を伴って落下してきた。銀色の箱のようなそれは、
次の瞬間正面の壁がバタリと倒れてその中身を俺たちへと見せた。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全ての
スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲が施されたその機体が動作アームによって外へと出てく
る。しかし博士の言ったとおりだとすれば、これは最新鋭機かつ最
高性能機ということになる。正直、頭がついていけない。

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをは
じめようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん」

「・・・それでは、頼みます」

箒が紅椿に乗り込むと、篠ノ之博士はコンソールと開いて微調整を
行っていく。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。あとは自動支援装備もつけておいたからね！ お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

姉妹だというのに箒の態度はそっけない。入学当時、あまり姉のことを聞かれたくはないようだったし、何かしら確執でもあるのだろうか？

「んー、ふ、ふ、ふふー。箒ちゃん、また剣の腕前が上がったねえ。筋肉の付き方をみればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「・・・・・・・・」

「えへへ、無視されちった。はい、フィッティング終了」。超速いね。さすが私」

ふざけていても才能はたしか。やはり天才と言われるだけはあるのだろう。しかし――

（どこことなくだが、白式に似てるな。雰囲気だけだけど）

自動支援装備がどうのって言うていたところをみると、BT兵器みたいなものがあるのかもしれない。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの・・・？ 身内ってだけで」

「だよねえ。なんかずるいよねえ」

ふと周りからそんな声が聞こえた。それに最も早く反応したのは篠ノ之博士だった。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？　有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

なんとも、厳しいいいようである。確かに今の世の中女尊男卑という不平等な世の中だけに文句は言えない。

「あとは自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いっくん、白式見せて。東さんは興味津々なのだよ」

紅椿の調整を終えると、今度は一夏の白式をいじり始めた。

「ねえねえ、奏君」

ふと、旭に声をかけられる。

「あの人がISを開発した偉い人なの？」

「ああ、そうだよ」

こいつは産まれてからここ最近までISについてまるで興味を持っていなかったから篠ノ之束の名前を知らないのも無理は無い。ていうか、この合宿にゲストとして存在している事自体が奇跡のようなものなのだ。そんなこいつが一言、

「私、あの人好きになれそうにない」

と言って、俺は驚いて旭の顔を見た。こいつが人を嫌うということ
はめったに、というか万が一にもないと思っていたのだが、旭の顔
をみると冗談というわけでもないようだった。

「なんで？」

「わかんないけど、なんとなく」

そう言ってまた篠ノ之博士へと視線を向ける旭。それにつられて俺
も視線を戻すと、博士は楽しそうに一夏と会話をしている。そんな
最中、一人の女の子が声をかけた。

「あ、あのっ！ 篠ノ之東博士のご高名はかねがね承っております
っ。もしよければ私のISを見ていただけないでしょうか！？」

その女子はセシリアだった。有名人である博士を前に興奮して、目
がキラキラと輝いている。しかし――

「はあ？ 誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そも
そも今は箒ちゃんとちーちゃんといっくんと数年ぶりの再会なんだ
よ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て
来てるのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」

いきなり冷たい言葉を浴びせられるセシリア。言葉だけでなく、視
線も口調もかなり冷たい。

「え、あの・・・」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う……」

明確に拒絶を示されて、さすがのセシリアもしょんぼりと引き下がった。いきなりの態度の違いに驚くまもなく追いつかれたのか、ちよつと涙目になっている。

「ふー、へんな金髪だった。外国人は凶々しくて嫌いだよ。やっぱ日本人だよ。日本人さいこー。まあ、日本人でもどうでもいいんだけどね。箒ちゃんとかーちゃんといっくん以外は」

そう言ってまた作業に戻る篠ノ之博士。

（……マリア先生がこの人嫌いなのがよく分かるよ）

一度だけ、この人がどんな人なのかマリア先生に尋ねたことがある。ISの創始者として興味があつたからだ。しかしマリア先生は、

『一度だけ会ったことがある。たしかにアレは天才だろう。しかし私はあいつにもう二度と会いたくはない』

と語っていた。嫌いなのは常識はずれなところなのか、取り付く島もないところなのかはわからないが、多分旭と同じ、なんとなくというやつに近いと思う。人間的にもウマが合わないとかいうやつだ。ウマが合うほど話ができるかは別としてだが。

そうこうしているうちに紅椿のパーソナライズは終わったようで、どうやら今から試運転をするようだった。ケーブル類が外れ、それから箒が意識を集中させると、次の瞬間に紅椿はものすごい速度で飛翔した。

(さすが、全スペックが現行ISを超えてるというだけあるな、あれ・・・)

すると、オープンチャネルから篠ノ之博士の声が響き渡る。

「親切丁寧なおねーちゃんの解説付き」。雨月は対単一使用の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵をハチの巣に！ する武器だよ。射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」

通信を聞く限りではどうやら武器も試験も兼ねているようで、箒は腰についていた二本の日本刀型近接ブレードを抜くと、春頃に剣道場でよく見た構えから突きを放つ。それと同時に周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球状で現れると、漂っていた雲を穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団使用の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれを撃ち落としてみてね、ほーいっと」

言うなり、篠ノ之博士は十六連装ミサイルポッドを呼び出し、光の粒子が形をなすとすぐに一斉射撃を行った。

「――やれる！ この紅椿なら！」

その言葉道理に、箒は右脇下に構えた空裂を一回転するように振るうと、先ほどのレーザーが帯状になって広がり、十六発のミサイル

を全て撃墜した。

その場にいた全員が圧倒的スペックに驚愕し、魅了され、言葉を失っている。そんな光景を、篠ノ之博士は満足そうに眺めていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

しかし、そんな博士を鋭い目で見つめる人物が二人。それは旭と篠ノ之博士の幼馴染でもある織斑先生。

（旭はともかく、織斑先生まで……。しかも敵でも見てるかのよう——）

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

いきなりの山田先生の声に織斑先生は鋭い視線をやめて向き直る。いつも慌てているイメージがある山田先生だが、今回はその様子が尋常じゃない。

「どうした？」

「こ、こっ、これをっ！」

差し出された小型端末をみて、織斑先生の表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた——」

「しっ、機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ・・・」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

なにやら小声でやり取りしているが、数人の生徒の視線に気づいたのか、なんと手話で話し始めた。

（あれって、軍事関係者だけが把握できる暗号手話だよな・・・。そんなにも大変なことが起こってるのか・・・？）

俺がいる研究所でも実際に暗号手話が使われているくらいだ。この機密満載のIS学園で使われていてもおかしくはない。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。――全員注目！」

山田先生が走り去ったあと、織斑先生は手を叩いて生徒全員の注意を集めた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館へもどれ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え・・・？」

「ちゅ、中止？　なんで？　特殊任務行動って・・・」

「状況が全然わかんないんだけど・・・」

不測の事態に女子一同がざわざわと騒がしくなる。しかし、それを織斑先生が一喝した。

「とっとと戻れ！　以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな！！」

「「「は、はいっ！！」」」

全員が慌てて動き始める。その姿は今まで見たことのない怒号に怯えているようにも見えた。

「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、天加瀬、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！——それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

織斑先生の招集に返事をする。専用機持ちを集めるということとはひとつしか無いだろう。

「奏君！」

心配そうな顔した旭に呼び止められる。こいつもただ事じゃないということがわかってるのだろう。

「大丈夫、そんな心配することじゃないって。ちょっと行ってくる」

一言そう告げると、俺は織斑先生のもとへとかけ出した。なんとなく、これから起こることに嫌な予感を感じながら。

第35話 訪問者と襲撃者（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最近、所属サークルブログでお題日記を書き始めました。
メンバーがしりとりでお題を決めていき、その話題について語ると
いう日記です。

基本ネタなので暇つぶしにでも読んでみてください（笑）
URLは私の活動報告の方にありますので。

ご意見ご感想をお待ちしております。

C a f e b r e a k t i m e v e r . R a

「あー、くそ。やっぱり10kmが限界かなあ・・・」

天気の良い日曜日、俺は朝から体力づくりのランニングをやっていた。

I S学園に入学してからというもの、操縦者を務めるには体力が必須ということが文字通り体で思い知ったので、こうして時間の開いた休日ではできるだけ早朝ランニングをするように心がけていた。

「・・・しかし、距離は伸ばせてもタイムは縮めれないっていうのはもどかしいもんだな」

土手に座り込んで顔についた汗をタオルで拭きながら、ストップウォッチ替わりに使っていたデジタル式の腕時計を覗く。画面は一週間前と変わらず同じようなタイムを示している。むしろ、前より5秒くらい遅い。

（喉が乾いた・・・）

しかし、今日に限って財布を忘れてきてしまった。もしかしたら、そう思ってポケットを漁ってみるが、小銭が出てくるわけもない。

（こりゃ、寮に帰るまでおあずけだな）

諦めて立ち上がろうとしたとき、

「それくらいでバテたのか。仕方ないやつだな」

と後ろから話しかけられた。その声は普段からよく聞き慣れている声。

「ラウラ？」

振り向くと、俺の予想通りの人物。白いワンピースを来て、片手にコンビニのビニール袋を持っている同級生、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「なんでここに？」

「いや、なに。頑張っている嫁を労いにきてやった。喜ぶといい」

そう言ってラウラは俺の横に座ると、スポーツドリンクを差し出して来た。理由や言い回しははいかんともしがたいが、ありがたいのは事実だ。素直に受け取っておいた。

「まあ、ありがとな」

「うむ。お前が望むなら口移しでも――」

「それは遠慮しとく」

「むう・・・」

少し不服そうだが、公共の場でそう軽々と口移しできるほど俺の心臓は丈夫にできていない。

いや、別に口移しを望んでいるわけではないのだが。

「おお、そういえばアレがあるのを忘れていた」

そう言って、ラウラは自分の持ってきていた袋を漁りだす。

「これだ、これをお前と食べようと思ってたんだ」

ラウラが差し出したのは、子供の頃よく食べた、2つに割れるソーダ味のアイスだった。

「へえ、懐かしいな」

袋から取り出し、真ん中で2つに割ると、片方をラウラへと差し出す。

「おお、上手いな」

「こんなのにも上手いもへタもないだろ」

ラウラの言葉に少し苦笑してしまう。まあ、たまに変な割れ方をするのだが、今回はうまく割れたようだなによりだ。

「じゃ、食べるか」

「うむ」

昼が近づき、気温も上がっている。早く食べないと溶けてしまう。実際、買って少し時間が経っているせいも、もう溶け始めていた。

「なかなか美味しいな・・・」

予想外だったのか、少し目を丸くするラウラ。俺にとっては昔から慣れ親しんだなんでもない味なのだが、彼女にとっては初めての味。だが、美味しいと感じてくれて何よりである。

「もうすぐ昼か・・・」

ふと時計を見ると、正午までだいたい40分といったところか。

「さて、これ食べたら帰るか」

「そうだな」

アイスの残りを口の中に入れ、棒を眺める。どうやら、ハズレのようだ。もう一本は期待できない。

「ラウラ、棒になにか書いてないか？」

「む？ ちょっと待て」

いままでペロペロとなめているだけだったラウラは、棒の先端のところまでかぶりついた。

「おお、あたりと書いてあるぞ」

「やったな。買った店でもう一本もらえるぞ」

「ふむ。では、また半分こだな」

「食べ過ぎると腹壊すぞ？」

「この程度は問題ない。帰りにコンビニに寄ろう」

まったく、もう一つはルームメイトのお土産にしておいてやればいいのに、どうやらもう一本も俺と食べる気らしい。

「アイス食べ終わったらまた暑くなってきたな・・・」

ぼうっと空を見上げると、相変わらず雲ひとつない快晴。容赦なく太陽は俺たちを照らしている。

「夏だな・・・」

「ああ、そうだな・・・」

それは合宿に行く一週間前のことだった。

> i 2 8 6 5 3 — 3 0 5 1 <

C a f e b r e a k t i m e v e r . R a (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

えっと、本編にまるで関係ない短編です。

前々からラウラは描いてみたいと思ってたのですが、ぱっと絵を描いてこの話が思い浮かんだので上げてみました。

絵の適当な背景がひどいですがwww

イメージは夏です。

表現できてない？ 気のせいです。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第36話　く堕ちる白く（前書き）

前回の短編に挿絵を掲載させて頂きました。

それを携帯から自分で確認したのですが、携帯だと画質が相当に悪くなってますねこれ。全体的に色が濃くなってるし、なんか荒いし・・。

なので、できるだけパソコンで見ただけだと、綺麗な画像が見れると思います。

では本編をどうぞ。

第36話　く墮ちる白く

「では現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の座敷・風花の間では、俺達専用機持ち全員と教師陣が集められた。

空中投影型のディスプレイを使うため、室内は照明を落としてかなり薄暗い。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

今回俺たちが集められたのは、どうやらこのISをどうにかしなければならぬかららしい。一夏や筈は少しぼかんとしているようだが、他のメンバーはこういった訓練を受けているのだろう、厳しい顔つきになっている。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過する事がわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することになった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

・・・なんてこった、暴走した軍用ISを俺たちで止めることになるとは。とんだ臨海学校になったもんだ。

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように」

「はい」

早速、セシリアが手を挙げた。

「目標 I S の詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要事項だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

データが開示され、モニターに福音のスペックデータが現れる。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型・・・わたくしの I S と同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうのほうが有利・・・」

「この特殊武装がクセモノって感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速 2450 km を超えるとある。アプローチは一回が限界だろ

う」

セシリア、鈴、シャル、ラウラは真剣に意見を交わし合っている。俺はこういった場にはあまり来たことがないので、意見を出しづらい。

「奏羅さん、あなたはこの機体についてどう思いますか？」

突然、セシリアが俺に意見を求めてくる。

「そうだな、IS開発者を指すものからの意見は参考になるだろう」

ぐう、織斑先生まで……。仕方ない、的外れにならないように喋らなければ。

「スペックデータを見る限りだと、鈴が言ったとおり攻撃と機動に特化した機体のようですね。なら、その攻撃力、機動性を出すために装甲はそこまで厚くは無いはず……。というのが開発者観点からの意見ですかね」

「一回きりのチャンス……。それに天加瀬君の意見を総合すると、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が一夏のほうを見る。もちろん、俺も。

「え……。？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！　お、俺が行くのか！？」

「「「当然」」」」

俺を含む五人の声が見事に重なる。

「織斑、これは訓練ではない。実践だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

自分の姉に叱咤され奮い立ったのか、一夏の顔つきが変わる。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

パッケージとは単純な武器ではなく、追加アーマーや増設スラスターなど装備一式を指し、その種類は豊富で多岐に渡る。中には専用

機だけの機能特化専用パッケージ『オートクチュール』というのが存在する。俺のプラチナのフレームは、オートクチュールの理論を元に、ISに後付装備として登録できるように改良したものと言ったほうがはやい。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「二十時間です」

「ふむ、それなら適任——」

織斑先生の言葉を、いきなり底抜けに明るい声が遮った。

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ！」

その声の発生源は天井から。全員が見上げると、部屋のどまんなかの天井から篠ノ之博士の首が逆さに生えていた。

「・・・山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？ は、はい。あの、篠ノ之博士、とりあえずおりてきてください・・・」

「とうっ！」

クルリンと空中で一回転して着地。まるでサーカスのようなアクロバットで降りてきた。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の中にナウ・プリンティング！」

「・・・出て行け」

頭を押さえる織斑先生。山田先生も言われたとおりに室外に連れていこうとするが、するりとかわされてしまう。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！　紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ほら！　これでスピードはばっちり！」

博士が織斑先生の横で説明し始めると、メインディスプレイを乗っ取ったのか福音のデータは紅椿のデータへと変わっている。

「説明しましよーそうしましよー。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型のISの装備なんだよ！」

・・・今この人なんて言った？

「はい、ここで心優しい束さんの解説開始。いっくんのためにね。へへん、嬉しいかい？　まず、第一世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付武装による多様化』――これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェースを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にBT兵器あとはAICとか色々だね。・・・で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できましたか？　先生は優秀な子が大好

きです」

「は、はぁ……。え、いや、えーっと……。？」

まあ、一夏の混乱もわかる。世間では未だ第3世代機の試作が出てきている段階だ。

「ちゅちゅちゅ。東さんはそんじょそこの天才じゃないんだよ。これくらいは3時のおやつ前なのさ」

この人の軽い物言いに少し呆れてしまう。周りは織斑先生以外いまいち事の重大さを理解していないようだが、俺は開発者を目指している端くれだからこれがどれほどのことか理解してしまった。

「具体的には白式の『雪片式型』に使用されてます。試しに私が突っ込んだんだ」

「「「え？」」」

つまり、篠ノ之博士の言葉通りなら、『白式』も第4世代機とも言えることになる。

「それで、うまくいったのでなんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ！」

「ちよっ、ちよっと、ちよっと待ってください。え？ 全身？ 全身が、雪片式型と同じ？ それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言うとな最強だね」

ここにいる全員、織斑先生をのぞいてだが、全員があっけに取られている。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代機の目標である即時万能対応機リアルタイム・マルチロール・アクトレスつてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

篠ノ之博士の様子とは全く別のベクトルのテンションで、周りは一んと静まり返っている。

「はにゃ？ あれ？ なんでみんなお通夜みたいな顔してるの？ 誰か死んだ？ 変なの」

この人はわかってふざけているのだろうか？

各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てをつぎ込んで競っている第三世代型ISの開発。その、途方も無い努力がまったくの無意味と言っているのにも等しいのだから。こんな、こんな馬鹿な話はない。

「――束、言っただけだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？ えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

織斑先生に言われてやっと黙り込んでいる理由を理解したようだ。

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくん。いっくんが暗いと束さんはいたずらしたくなっちゃうよん」

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいは夕食前だよ」

もはや、なにも言う気になれない。正直、付き合っていられないというのが本音である。

「それにしてもアレだね。海で暴走って言うと、十年前の白騎士事件を思い出すね」

博士の言葉に織斑先生がはっとする。『白騎士事件』、おそらくこの名前を知らない人間は世界にいないだろう。十年前、篠ノ之束博士が発表したISは、当初その成果を認められていなかった。『現行兵器全てを凌駕する』という篠ノ之博士の言葉を誰も信じていなかったのだ。

「いやー、世界があんなに馬鹿だとは思わなかったね。うふふ、私の才能を信じないくせに神様を信じてるなんて、偶像崇拜もいいところだよ。東さんは実像なのにね」

IS発表から一ヶ月後、事件が起きた。日本を攻撃可能な各国のミサイル2341発、それらが一斉にハッキングされ、制御不能に陥り、発射された。誰もが混乱と絶望の中、さっそうと現れたのが白銀のISを纏った一人の女性だった。

「ぶった斬ったんだよねえ。ミサイルの約半数1221発を。あれはかつこよかったなあ」

その女性は超音速で飛翔し、手にしていた剣でミサイルを撃墜。離

れているものは、当時試作型だった大型荷電粒子砲を空中に召喚して撃ち落としたのだ。世界はこの驚異にして脅威に対し、国際条約など無視して偵察機を飛ばした。彼らの任務は『目標の分析。可能であれば捕獲。無理ならば――撃滅』。当時最新鋭の機体も投入されたらしいが、まったく歯が立たなかった。

「バルカンだろうがミサイルだろうが、ISの装甲に傷ひとつつかないよん。エネルギーシールドもあるしね」

たった一機でミサイル2341発、戦闘207機、巡洋艦七隻、空母五隻、監視衛星八基を撃破、あるいは無力化した『究極の機動兵器』としてISは一夜にして世界中の人々が知るところとなった。

「とまあ、こうして私のらぶりいISはあつという間に広まっていたんだよね。女性優遇は、まあ、どうでもいいんだけどね。私はねー。でも隙あれば誘拐・暗殺っていう状況はなかなかエキゾチックだったよ。うふふ。しかし、それにしてもううふふ。白騎士ってのは誰だったんだろうね。ね？　ね、ちーちゃん？」

「知らん」

「うむん。私の予想ではバスト88センチの――」

ごすん、と鈍い音が響く。出席簿ではなく、情報端末が篠ノ之博士の頭へと突き刺さった。

「ひ、ひどい、ちーちゃん。束さんの脳は左右に割れたよ!？」

「そうか、よかったな。これからは左右の脳で交代に考え事ができるぞ」

「おお！ そっかぁ！ ちーちゃん、頭いい〜！」

なお、白騎士は現在も正体不明なのだが――

「あの事件ではすごい活躍だったね、ちーちゃん！」

「そうだな。白騎士が、活躍したな」

・・・多分、織斑先生なんだろうな、白騎士。

「話を戻すぞ。・・・束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

「お、織斑先生！？」

セシリアが驚いた声を上げる。当然、作戦に参加できると思っていたためだろう。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズならば必ず成功してみせますわ！」

「そのパッケージはインストールしてあるのか？」

「そ、それは・・・まだですが・・・」

痛いところをつかれたのか、セシリアが口ごもる。

「ちなみに紅椿の調整時間は七分もあれば余裕だね」

「よし。では本作戦は織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃破を目的とする。作戦開始は三十分後。各員、直ちに準備にかかれ」

織斑先生がぼん、と手を叩くと、それを皮切りに教師陣はバックアップに必要な機材の設営をはじめた。

「一夏、お前のISのチェック手伝うよ。セツトアップとかちゃんとやらないとな」

「お、おう」

緊張してるのか、どこことなく頼りない返事を聞いて、俺はこれから
のことが少し心配になってきた。

「そういえば、高速戦闘なんてやったこと無いよな、お前」

「あ、ああ。まったくもってやってないな」

「ならセシリアにレクチャーしてもらっておこうか」

あたりを見渡してセシリアを探す。近くで機材を運搬していたが、
ものすごい落ち込んでいた。

「うう・・・篠ノ之博士には嫌われますし、作戦要員から外されま
すし、さんざんですわ・・・」

「おい、セシリア。一夏に高速戦闘のレクチャーを・・・って、聞
いてるのか？」

「はい・・・？　って、きゃあっ!？」

顔を覗き込まれていたことにびっくりしたのか、セシリアは小さく飛び上がった。

「ど、ど、どうなさいました？ わ、わたくしに用かしら・・・？」

「ああ、一夏が高速戦闘やったこと無いし、レクチャーでも、ってな」

「そ、そうですか」

こほん、と一つ咳払いをすると、セシリアが説明を始めた。

「それでは高速戦闘のアドバイスをします。一夏さん、超高感度ハイパーセンサーを使用したことは？」

「いや、ない」

「そうですか。ではまずその注意から。高速戦闘用に調整された超高感度ハイパーセンサーというのは――」

「使うと世界がスローモーションに感じるのよ。ま、最初だけだけどね」

「鈴さん！？ わたくしが説明してる途中ですわよ。大体、高速戦闘の訓練はされているんですの？」

「十二時間ほどね。ま、セシリアほどじゃないけど」

返事が予想外だったのか、若干セシリアがひるむ。しかしすぐに気

を取り直すと、説明を再開した。

「そ、それではどうしてスローモーションになるかというところ――」

「ハイパーセンサーが操縦者に対して詳細な情報を送るために、感度を鋭敏化させるんだよ。だから、逆に世界が遅くなったように感じるって仕組みね。でも、最初だけだよ。すぐになれるから」

「じゃ、シャルロットさん……？ わたくしの説明の途中で――」

「それよりも注意するべきはブーストの残量だな。特に一夏は瞬時加速を多用する癖があるから、一層気を配るべきだ。高速戦闘状態ではブースト残量は普段の倍近い速度で減っていくぞ」

「ら、ラウラ、さん？ わたくし――」

「あとは通常時よりも相対的な速度があがっているために、射撃武器のダメージが大きいんですよ。あたりどころが悪いと、一発でアーマーブレイクになったりしますから、気をつけてください」

「山田先生まで！ ああもうっ、どうして皆さんわたくしの邪魔をしますの！？」

ついにセシリアが怒った。まあ、あれだけ横入りされたらいい気はしないだろうな。実際、セシリアはなにも説明してないし。

「……セシリア、元氣出せ」

「うう、奏羅さん……」

相当堪えていたのか、セシリアは少し涙目になっている。

「あー、俺も高速戦闘やったこと無いから、レクチャーしてくれないかな？」

「えっ・・・？ あ、は、はい！ 喜んで！」

どうやら、機嫌はなおったみたいだ。まったく世話がやけるよ、ほんとに。



時刻は昼の十一時半。それでもかという快晴の下、砂浜に一夏と簞がわずかに距離をおいて立っていた。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身が光りに包まれISアーマーが構築される。

「じゃあ、簞。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回

だけは特別だぞ」

作戦の性質上、移動の全ては箒にかかっている。つまり、一夏が箒の背中に乗っかるという形になるのだ。それを最初に聞いた箒は早速イヤそうなことをいつていたが、今は妙に機嫌がいいように見える。

（しかし、大丈夫なんだろうか・・・？）

箒の専用機は、使い始めてまだ一日も経っていない。

（何かあったら俺がフォローしないとな）

そう思い、一夏は気を引き締めた。

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろうか？」

「ああ、そうだな。でも箒、先生たちも言っていたけど、これは訓練じゃないんだ。実践ではなにが起きるかわからない。十分注意して――」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？ 怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒――」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「・・・・・・」

箒はさっきからこの調子だった。専用機が手に入って嬉しいのだろう、若干浮かれている。一夏は、そんな箒に若干の不安を感じながらも、紅椿の背部へと乗った。

『織斑、篠ノ之、聞こえるか？』

ISのオープンチャネルから千冬の声が響く。一夏と箒は頷いて返事をした。

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。ワンアブローチ・ワンダウン短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実践経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない』

「わかりました。出来る範囲で支援をします」

箒の口調は、一見落ち着いているようだが、やはり喜色に弾んでおり、一夏はどこか浮ついた印象を受けていた。

『——織斑』

「は、はい」

今度は千冬から一夏にプライベートチャンネルで連絡が入る。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かし損じるやもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました。ちゃんと意識しておきます」

『頼むぞ』

それからまたオープンチャンネルに切り替えると、千冬は号令をかけた。

『では、はじめ！』



「はあ、そろそろ一夏と筭が発進したところか・・・」

今まで機材の設置、設定を手伝っていた俺は、作業がひと通り終わると風花の間から出てすぐのソファで一息ついていた。

「お疲れ様、奏羅。はいこれ」

そこへシャルが飲み物を持ってやってきた。わざわざ自販機からコ

ーヒーを買って持ってきてくれたらしい。

「ありがとな。あとでお金払うよ」

「ううん、気にしないで。頑張ってた奏羅へご褒美だよ」

「じゃあ、ありがたういただこうかな」

シャルも横に座り、二人で並んでコーヒーを飲む。

「頭を使ってるみたいだったから甘いのを買ったんだけど、どうかな？」

「気が利くなあ、いいお嫁さんになれるんじゃないか？」

「お、お嫁さん・・・」

お嫁さんと聞いて、びっくりしたのかシャルは黙りこんでしまった。

「わ、悪い、褒めたつもりだったんだけど・・・」

「えっ？ い、いや、そんなじゃないよ、ちょっと驚いただけ」

「そうか？ ならいいんだけど」

まあ、いきなりお嫁さんとか言われ手も実感わかないよな、普通。

「しかし、ほんとに大丈夫だったのかな。一夏と箒を行かせて」

「まあ、箒は紅椿を動かして30分ってところだからね。不安にな

るのも無理ないよ」

そう、いくら天才科学者である篠ノ之博士が作成、パーソナライズを行ったと言っても、操縦する筈の経験不足が不安である。

「でも、俺たちにできることって言えば、アイツらを信じる事くらいだからな」

「そうだね・・・」

海の上で頑張っているであろう二人を思い浮かべる。まあ、アイツらなら大丈夫だろう。

「ねえ、奏羅。もし、もしも、だよ。もし僕がこんな感じで作戦に出ていったとき、奏羅は僕の事心配してくれる？」

いきなり真剣な様子で話しかけられる。シャルの顔は、なんとなく聞くのが怖そうで、それでも答えを欲しがっているようだった。

「何言ってるんだよ。友達の心配しない奴なんていないさ」

「そう、だよね・・・。あ、あはは、変なこと言ってごめんね」

やっぱり、訓練じゃなくて実践という所が、シャルに変な緊張をもたらしているのかもしれない。シャルはどこか落ち着きがなかった。

「シャル——」

シャルを落ち着かせようと話しかけた、その時だった。

『箒、そんな——そんな寂しいこと言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて・・・どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ』

『わ、私、は・・・』

突然、一夏と箒の声が頭に響いてきた。

「奏羅？　どうしたの？」

シャルが俺に話しかけてくるが、それどころではない。

（なっ・・・？　これって、ラウラの時と同じ・・・？）

そして、その声は俺に理解する暇もなく、大変な光景を見せてきた。

『箒いいいいいい！！』

そこにはエネルギー切れを起こした紅椿が消え、落下する箒と、それを追いかける一夏の姿が。

（頼む！　間に合ってくれ！　頼む！　頼む、白式！　頼む！）

願うような一夏の思いの後、アイツは福音と箒の間に割って入った。

『ぐあああああっ！』

箒をかばうように抱きしめた後、一夏に福音からの光弾が降り注ぐ。

（ああ・・・無事か・・・。よかった・・・。はは、何を泣きそう

な顔をしてるんだよ・・・らしくねえなあ。あ、リボン焼き切られちまってるな・・・。ふーん、髪をおろしたのも悪くねえじゃん・・・。

『一夏っ、一夏っ、一夏あっ!』

そのまま、二人は海へと落下して、そして・・・。

「途切れた? アイツらは!」

「そ、奏羅? 何が途切れたの?」

シャルの声で現実に戻る。俺は今まで幻覚を見ていたようだったが――

「一夏が・・・堕ちた・・・」

「えっ、どういうこと? って、奏羅!」

俺はシャルの静止も聞かずに風花の間へと飛び込んだ。幻覚なのかもしれない、だけど、本当のことだと俺には自信があった。

「織斑先生! 一夏は!」

突然入ってきた俺に織斑先生は少し驚いたようだったが、すぐいつもの調子に戻ると淡々と、しかしどこか苦々しく状況を告げた。

「先程から白式との連絡がつかない。どうやら、作戦は失敗したようだ・・・」

織斑先生の言葉。それは確信していた事実、でも一番聞きたくなかった事実だった。

第36話 〈墮ちる白〉（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

とりあえず三巻が終わったあたりで、オリジナルキャラ紹介とオリジナルIS紹介でもしていこうかなと考えております。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第37話 く立ち上がる紅く（前書き）

最近、タイトルで悩みます。

どういうタイトルにしようかとか、浮かぶ時と浮かばない時の差が
激しいんですよえ・・・。

では本編をどうぞ。

第37話　く立ち上がる紅く

「・・・・・・・・」

旅館の一室。壁の時計はもう夕方の四時前を指している。ベッドで横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないうままだった。そして、そのかたわらに付き添っている箒は、ずっとうなだれたままにいる。

（私のせいだ・・・）

あの時、箒をかばって攻撃を受けた一夏は、ISの絶対防御機能を貫通して人体にまで届いた熱波に焼かれ、体の至る所に包帯が巻いてあった。

（私が、しっかりとしないから、一夏がこんな目に――！）

海から引き上げられ、どうにか旅館に戻った箒に千冬が言い放った言葉は、『作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ』とのことだった。千冬は一夏の手当の指示をすると、すぐにまた作戦室へと向かう。箒は、責められないことがまた一層辛かった。

（私は・・・どうして、いつも・・・）

いつも、力を手に入れるとそれに流されてしまう。それを使いたくて仕方がない。

（何のために修行をして・・・）

箒にとって剣術は己を鍛えるためではなく、律するためだった。自分の暴力的衝動を抑えこむための抑止力。しかし、今回の一件でそれはひじょうに危うい境界線なのだと思い知った。

（私はもう・・・ISには・・・）

ひとつの決心をつけようとしたときに、部屋のドアが乱暴に開いた。その音に一瞬驚いたが、その方向に視線を向ける気力はない。

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

遠慮なく入ってきた女子は、動かない箒の隣までやってくる。その声は、鈴だった。

「・・・・・・・・」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、箒は答えない、いや、答えることが出来なかった。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんですよ？」

ISの操縦者絶対防御、その致命領域対応によって一夏は昏睡状態になっている。すべてのエネルギーを防御に回し、操縦者の命を守るこの状態は、同時にISの補助を深く受けた状態になる。それ故、ISのエネルギーが回復するまで、操縦者は目を覚まさなくなってしまうのだ。

「・・・・・・・・」

「で、落ち込んでますってポーズ？　——っざけんじゃないわよ！」
箒の態度に怒りを顕にした鈴は、その胸ぐらをつかんで無理やり立たせる。

「やるべきことがあるんでしようが！　今！　戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私・・・は、もうISは・・・使わない・・・」

「っ——！！！」

バシンッ！　つと、鈴が一発箒の頬を叩く。その衝撃で床に倒れた箒を、鈴は再度締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ・・・。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは、戦うべきに戦えない、臆病者！？」

「——ど・・・どうしろと言うんだ！　もう敵の居所もわからない！　戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意志で立ち上がった箒の様子をみて、鈴はふうっとため息をついた。

「やっとやる気になったわね。・・・あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが――」

言葉の途中でちょうどドアが開く。そこに立っていたのは、真っ黒な軍服に身を包んだラウラだった。

「出たぞ。ここから30キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

ブック型端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを、鈴はにやりとした顔で迎える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら――」

「たった今完了しましたわ」

「準備オッケーだよ。いつでもいける」

二人が部屋へと入ってくる。そして、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの？」

「私・・・私は――」

ぎゅっと拳を握り締める。それは後悔とは違う、決意の表れだった。

「戦う・・・戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふん、と腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、奏羅を交えて作戦会議よ。今度こそ確実に堕とすわ」

「ああ！」



「作戦は・・・大体これでいいな」

みんなが箒を奮い立たせに行っている間、俺は今ある福音のデータで作戦を考えていた。

（しかし、機体の分析ができるからといって俺を作戦参謀みたい
に扱わないでほしんだけど・・・）

作戦は古人が兵法として記したように、いわば一つの型がある。それに合わせていかにこちらのペースに持ち込むか、失敗した時のフォローはどうするか、などを考えなくてはならない。そこらへんは経験で補っていくべきなのだが、俺にはそれはない。

（うーん、一回ラウラに見てもらったほうがいいのかな・・・？）

色々な戦い方、連携モーションなどを考えていると、部屋のドアが開いた。

「どう、奏羅？ 作戦決まった？」

入ってきたのは、鈴を先頭とする一夏を除く専用機持ちの面々。

「ああ、大体はな。ラウラ、軍経験者の意見を頼む」

俺は一緒に入ってきたラウラへ、作戦を説明する。

「ほう、いいと思うぞ。ただ、中々遠距離サポートとしてお前とセシリアとあるが、プラチナはどのフレームで出るんだ？」

「俺はエアリアルフレームで行く。何だったら近距離もできるようなと思って」

「ふむ、フォローのフォローというわけか。ならばそれでいこう。さて、では各々――」

「いや、みんなちょっと待ってよ」

ラウラがみんなに号令をかけようとしたとき、シャルが一旦話を止

めた。

「織斑先生、気づいてないかな・・・？」

「確かにそうですわね・・・。織斑先生、わたくしたちの心を簡単に読んできますもの・・・」

シャルの言葉にセシリアも同意する。確かに、出発しようとして部屋を開けたら織斑先生とかは洒落にならない。

「教官の意識を私たちから一時的にでもそらさないといけない・・・」

その問題にこの場にいる全員が頭を抱え始める。

「織斑先生を気を引く方法・・・」

腕を組みながら箒が言った。

「できるだけ予想していないことがいいですわね・・・」

セシリアが顎に指を当てて考える。

「それに、派手な方が気を引けるわよね・・・」

鈴がブツブツとつぶやく。

「しかも、できるだけ長く時間を稼げるような・・・」

シャルが頭に手を当てて悩む。

「私たち以外でそれが可能となると・・・」

ラウラが目を瞑りながら唸る。

（俺たち以外で、派手で、長く時間を稼いで織斑先生が予想もしていない出来事が起こせる人物・・・）

俺はこの状況でそれが出来る人物が、一人だけ思いついた。

「いた・・・」

「「「「えっ？」」」」」

みんながあっけにと取られて俺の方を見る。

「一人だけ、俺達以外で、派手に行動できて、長く時間を稼げて、織斑先生が予想してないことが起こせる人物がいる！」

「そ、それは誰なんですの!？」

セシリアが急かすように俺に聞いてくる。

「それは――」



(しかし、厄介な状況になったものだな・・・)

作戦室、織斑千冬はこれからのことについて他の教員と話し合っていた。当初は専用機持ちを全機出撃、連携で福音を撃破するとの案もあったが、それは千冬が却下した。今学園が保有するISで、最高の攻撃力を持つ白式と最高のスペックを持つ紅椿で作戦をこなせなかった以上、現時点でのISでは、福音の広域特殊射撃に対しわざわざ全機を向かわせる訳にはいかない。

「織斑先生、コーヒーはいかがですか？」

真耶が千冬に気を使い、コーヒーを持ってくる。千冬は「ありがとう」と一言告げると、コーヒーを受け取り口をつけた。

「山田先生、各専用機持ちはどうしている？」

「指示されたとおり、各員同じ部屋で待機してます。あ、篠ノ之さんも一緒でしたよ」

「そうか・・・。アイツらが命令違反をしないように見はっておいてください」

「そう・・・ですね・・・。織斑くん、あの子たちと仲いいですから、無茶しちやいそうですし・・・」

「ああ、ここで貴重な戦力を減らすわけにはいかん」

そう言って、再度福音のデータをにらみ始める。今ある相手の情報で、こちらの戦力をいかに使って作戦を完遂させるか、千冬は再び考え始めた。

（一夏が回復するのを待つか・・・？ それでは逃げられる・・・か？ しかし、これだけ時間が経っているのに福音はまるで動きを見せていない。まるで何かを待っているかのように――）

千冬がひとつの仮定を建てようとした、その時だった。

『~~~~♪~~~~♪』

突然、旅館の外から、大音量でポップスのイントロが流れ始めた。

「っ!?! いったい何事だ!?!」

千冬はそばにいる教員に問いかける。

「わ、わかりません! 外に巨大な音源が設置されたと考えるしか・・・」

「くっ……。山田先生! 専用機持ちの様子を――」

「こ、この曲・・・」

真耶は外から流れてくる音楽、そして声に驚愕した。

「山田先生? もしかして、この曲を知っているんですか!?!」

千冬の怒鳴るような言葉に真耶は我に返ると、コクコクと首を縦に

振った。

「は、はい！　こ、これ、今話題のアイドルの生歌なんです！」

「あ、アイドルだと!？」

千冬は真耶の話を総合すると、どうやら野外ライブが行われている可能性があるらしい。しかし、あ書にはIS学園の生徒しかない。そんな人物IS学園に入学していたら大騒ぎになっているはずだ。

（一体どうやってIS学園の臨海学校に・・・？　いや、待て。そのアイドルとは――）



「やつほー、奏君。呼んだ？」

俺は専用機持ちの待機している部屋へ、つかさとリリィを呼び出した。

「誰にも見つかってないか？」

「ああ、バッチリさ。この格好見ればわかるだろ？」

今二人が見にまよっているのは、この旅館の従業員の服。確かに、これならあまり違和感なく行動できる。

「えっと、奏羅さん・・・？　なぜこのお二人のですか・・・？」

セシリアが意味が分からないという声を上げる。

「そ、そうよ！　あんたこんな時にふざけてんの！？」

「まあセシリアに鈴、待てって・・・リリイ、理由はプライベート・チャネルでさっき話したとおりだ」

「で、あたしたちの出番と？」

「ああ、そうだ。どうせお披露目するなら盛大な方がいいしな。・・・アイリスの調整は？」

「出来てる。ま、あたしたちは昼時は暇だったから時間はたっぷりあったし」

「そ、奏羅、いい加減どうやって織斑先生の気を引くのか教えてよ・・・」

「あ、ああ、悪い。そうだな」

シャルに急かされ、俺は意味が分からないという顔をしたみんなに向き直ると、つかさに指をさしながら告げる。

「今からこいつが歌を唄って生徒を焚きつけて騒がせる。その対応に教員が追われているうちに俺たちは出発する。それが作戦だ」

俺の作戦を聞いたみんなはキョトンとしていた。まあ、意味が分からないだろうな。

「あ、あんたねえ……。みんなでカラオケ大会でも開こうっていうの……。？」

「そ、そうですわ！ 大体そんなことで気を引けるのでしたらわたくしだって出来ます！」

「ああそうだ。俺達の中で誰が唄ってもみんなは騒ぎ立てないだろうな。でも、こいつならできる」

そういつて俺はつかさの方を向いた。

「やってくれるよな、旭」

「ふふふつ……。いいよ、いつも私のワガママ聞いてもらってるし、私一肌脱いじゃうよ」

そう言って、旭は今までかぶっていたピンクのカツラ、大きめのサングラスを取ると、その素顔をみんなの前に晒した。

「あ、あんた……。街中のポスターでよく見たことある……」

「わ、わたくしも、ファッション雑誌で……」

「ぼ、僕も食堂のテレビで……」

鈴、セシリア、シャルが驚愕の声を上げる。

「な、なんだ？
 どういうことだ？」

「貴様らは一体何に驚いているんだ……？」

箒とラウラは、まあそういうことに興味はなさそうだからわからないのは仕方ないだろうな・・・。

「どうも、はじめまして。私、奏君の幼馴染の塚乃旭です。職業でアイドルをやらせていただいています。みんな、改めてよろしくね」

「元」

「え？」

[illegible]

俺の目の前にいるみんながみんな、よくわからない声を上げる。多分、これは最近で聞いた中で一番の叫び声だった。

第37話　く立ち上がる紅く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

さあ、いよいよ次回『アイリス』のお披露目です。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第38話 く虹色の幻想く（前書き）

夏休み入ったからといって暇じゃなかったぜ！

むしろ同人活動で忙しくなったような・・・。

なのでしばらく不定期更新かもしれません。

では本編をどうぞ。

第38話　虹色の幻想

（ふう……。とりあえずみんなこっちを見てくれてるみたいだね・
・・）

客室全ての窓から見る事ができる別館の屋上、そこに備え付けられた簡易的なお立ち台の上に、つかさこと塚乃旭は立っていた。奏羅の作戦通り、IS学園の生徒は見る限りではすべての部屋の窓から顔を出して歓声を上げている。

（さて、そろそろ私のところに先生たちがやってくる頃かな……。奏君たち、見つからないといいけど）

教師陣の動きにある程度予測をたてると、旭はマイクを握り直して叫んだ。

「みんな、拍手ありがとー！！　続いて2曲目いっちゃうよー！！」

旭の言葉に再び歓声が上がる。それに合わせて、二曲目のイントロが流れ始めた。



作戦本部・風花の間では、突然の、それも予想外の乱入者に大混乱になっていた。

「生徒たちの様子は怎么样了！？」

その中でも、中心となって指揮をとっていた織斑千冬が、先程外の様子を見てきた山田先生に尋ねた。

「大騒ぎですよ！ あそこにいるのは今一番有名なアイドル、塚乃旭ちゃんなんです！ その旭ちゃんが突然現れてゲリラライブを行っているんです、騒がないはありますがせん！」

厄介なことになった——千冬は頭を抱えた。福音は機密重要事項でおいそれと外に出せるような情報ではない。情報漏洩、生徒の安全確保のために旅館の部屋で待機にしたのだ。しかし、この騒がしい状況になってしまったては福音の対策どころではない。万が一だが、ここを指して福音が移動するかもしれない。

「何とかして止めなければ……。そのアイドルはどこに？」

「全ての部屋の窓から見える別館の屋上です。マイクやスピーカーなどの機器、曲の音源もそこにあるのではないかと……」

「なら、私と山田先生他数名で対象を確保、事態の鎮圧を」

「了解しました」

そういつて千冬と真耶、他の先生達は風花の間を後にした。先ほどは福音を映していたブック型端末は、いまは外の旭を映している。その映像を眺めながら、千冬はこの状況が腑に落ちていなかった。

（今一番の可能性として仮定できるのは、あれはゲストで呼ばれていた機関の人間……。しかし、このような茶番をすると連絡も入っていない。福音の情報は漏らしてはいたのでタイミングは偶然なのかもしれないが、なぜ今こんなことを……。？）



二曲目のAメロが終わりBメロに差し掛かったとき、屋上のドアが開き、千冬率いる教師陣が現れた。

（よし、取り押さえに来てくれたみたいだね……。）

その様子を確認しながら、しっかりと歌を唄う旭。作戦の殆どはこれで成功したも同然だ。

「私が取り押さえます！ みなさんは音源の処理を！」

千冬は他の教師に指示を出し、自らは旭の確保へとかけ出した。

（さて、まだ捕まる訳にはいかないんだよねっ！）

千冬が自分に向かって近づいてくるのを確認すると、旭はくるりと向きを変え、千冬の方へと向き直った。

（ふふっ。じゃあ旭ちゃんのショーの始まりだねっ！）

旭は千冬に向かって微笑みながら手を振ると、屋上の端へと向かって駆け出し、そして――

「なっ・・・!？」

屋上のフェンスを乗り越え飛び降りたのだ。それは音源が止められるのと同時に、音楽が切れた静けさの中、歓声は悲鳴に変わる。

「馬鹿なっ!!！」

千冬が焦ってフェンスに駆け寄り下を見る。旭の体は地面に激突するまであと5m――

――アナタハテンシノユメヲミル――

旭がつぶやくように唄った瞬間、旭の体は地面から1mのところで止まり、上へと上昇し宙を舞った。

「I・・・S・・・だと・・・？」

千冬が驚愕の声を上げる。それもそのはず、目の前のアイドルが可

愛らしくかつ派手な衣装を纏ってISに乗り、歌を唄っているのだから。あつという間に千冬の頭上を追い越すと、旭のISから4機の影が飛び出す。スピーカービット——それが一定の間隔、位置で止まるとそこから先ほど教師陣に止められた音楽の続きが流れ始める。

「ば、馬鹿な……。自立機動兵器ではなく、スピーカー……！
？ そんなISなど聞いたことも見たことも——」

そのISは、旭が奏羅に願った力、人々を魅了し、励まし、喜ばせる力——

（『インフイニット Infinite ストラトス Stratos』アイドル っていう兵器なんかじゃない、みんなに笑顔を与える『オンザステイ Idol on the Stage』ブリリアント・アイリス。私だけのIS……。やろう、『七色の輝き』！ 私の歌が、みんなに届くように！）



旭が旅館で頑張っている最中、俺たちは出撃の準備を整えて海辺に集まっていた。

「すごいな……」

「そうですわね……。見事としか言葉が出ませんわ……」

ラウラとセシリアが感嘆の声を上げる。言葉こそでないものの、ブック型端末から旭のステージを見ていたみんなは映像で流れる旭に見とれていた。

「おいおい、見とれてる場合じゃないぞ。俺たちは福音目指して出発だ」

みんなを現実に戻すために声をかける。少し名残惜しそうだったが、どうやら戻ってきてくれたみたいだ。

「みんな準備はできたか？　ここで出来てなかったらやられて帰ってることになるぞ？」

リリイの言葉にみんなが頷く。もちろん俺も頷いた。

「では、これより作戦を開始する。オーダーはアプローチ・アンド・デストロイ……。必ず叩くぞ」

ラウラの号令に頷くと、それぞれが空へと舞い上がる。

「リリイ、ナビゲートよろしくな」

「任せとけ、しっかりサポートしてやるよ」

ニヤリと笑うリリイに、こちらも頬が緩んでしまう。

「じゃ、行ってくる」

「馬鹿、行って帰ってくるって言えよ。こういうのって、気持ちだからさ」

「ああ、そうだな。行って、帰ってくるよ」

「おう、帰ってこい。旭も私も待っててやるよ」

リリィの叱咤激励を受け、俺もみんなに続いて空へと飛び上がった。



目の前に起こっている事態に、千冬はただただ、驚くしかなかった。アイドルがISに乗って歌を唄っている。しかもそのISは、見る限りでは武器になるようなものを所持していない。目の前で人々を魅了しているISは、現在のISを根本から覆す存在だった。

「お、織斑先生大変です！」

横から真耶に話しかけられ、千冬はハッとなって横を見た。認めたくはないが、目の前で繰り広げられるアイドルのステージに目を奪われていたらしい。

「どうしました？」

「そ、それが・・・専用機持ちの生徒たちが、どこにも見当たりま

せん・・・」

それを聞いた瞬間、二人の様子を見ていた旭が背中の翼状に連結していたビット―スポットライトビットを展開させ、千冬と真耶をその光で照らし、二人の注意を引いた。

――アクマハテンシノウソヲツク――

怪しく微笑みながら唄う旭を見て、千冬の中で全てがつながり、同時に頭を抱えた。

（なるほど、そういうことか。ゲストは天加瀬の所属する研究所からだったな……。つまり、この騒動はアイツらが出撃するのを悟られないため・・・）

「ど、どうしましょう・・・」

「この様子だと今から追っても遅いでしょう……。アイツらが、無事に帰ってくるのを祈りましょう」

ため息を吐きながら千冬は真耶に言う。と旭の方を見上げた。三曲目が終わり、アサヒはみんなの声援に答えている。

「・・・みんな、聞いてくれるかな？ 次のナンバーは遠くで頑張

ってる大切な人たちのために唄おうと思うんだ。だから、みんなも、みんなの大切な人を思い浮かべながら一緒に唄ってくれると嬉しいな。じゃあ四曲目いくよ！ 『Platinum Wind』！」

旭の呼びかけにみんなが答える。それを見て千冬はふっと笑った。

（どうやら、天下の歌姫も応援してくれるらしい……。全員揃って帰ってこいよ……。）

心のなかでそうつぶやくと、千冬は屋上を後にした。

第38話 く虹色の幻想く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

最後に出てきた曲名、自分で適当に考えたんですけど何かしら言わないか超心配です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第39話 く届く想いく (前書き)

最近個人ブログ始めました。

興味がある人は私のページから是非訪れてみてください。

では本編をどうぞ。

第39話 く届く想いく

(ここは・・・?)

遠くから聞こえる波の音に誘われるがまま、一夏はどこかもわからない砂浜の上を一人で歩いていった。

ここがどこで、今がいつなのかもわからない。なぜか一夏は制服を着ていて、そのズボンを折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。

「――。――♪　く♪」

ふと彼の耳に歌声が聞こえた。一夏は無性に気になって、声の方へと歩を進める。

「ラ、ラく♪　ラララ♪」

少女が、そこにいた。

波打ち際、その子は踊るように歌い、謳うように踊る。そのたびに揺れる白い髪。輝き、まばゆいほどの白。

(ふむ・・・)

一夏は声をかけようとはせず、近くにあった流木へと腰を下ろす。そしてそのままぼうつと少女を見つめた。一夏は今まで考えていたことも忘れ、ただぼんやりと目の前の光景を眺めていた。



海上二百メートル。そこで静止していた『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルは、まるで胎児のようにうずくまっていた。

――？

不意に、福音が顔を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初段命中。続けて砲撃を行う！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるIS『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るより早く次弾を発射した。

砲撃専用パッケージ『パンツァー・カノーニア』を装備。その姿は通常装備とは大きく異なり、八十口径レールガン『ブリッツ』を二門、左右それぞれの肩に装備している。さらに遠距離からの砲撃、狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っている。

（敵機接近まで・・・4000・・・3000――くっ！ 予想よりも速い！）

あっという間に距離が1000メートルを切り、福音がラウラへと迫る。迎撃の砲撃は行っているが、それは福音の翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を撃ち落されていた。

「ちいっ！」

距離を詰められ、福音の右手がラウラへと迫る。今からでは回避は間に合わない。

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「――セシリア、奏羅！！」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。青一色の機体、そして白金の機体――ブルー・ティアーズとプラチナによるステルスモードからの強襲だった。

六機のビットは通常と異なり、そのすべてがスカート状の腰部に接続されている。その砲口は全て閉じられており、スラスターとして用いられている。さらに手にしているのはいつものライフルとは違い、更に大型のB Tレーザーライフル『スターダスト・シューター』でビットを機動力に回している分の火力を補っている。

強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備しているセシリアと、空戦特化フレーム『エアリアル・フレーム』を装備した奏羅が福音を挟み込んだ。

「当てるなよセシリア！」

「そんなことはいたしません！ 狙いは完璧ですから！」

エアリアルフレームの特性でもある三次元的機動により福音を翻弄しながら『ソニック・ブレイズ』のライフルモードで福音を狙う。しかし、あくまでこれは牽制。簡単に避けられてしまうが、奏羅の攻撃の対処に福音が追われているその隙をついてセシリアが福音を狙い撃った。

『敵機B、及び敵機Cを確認。排除行動へと移る』

セシリアの射撃を紙一重で避けると、セシリアと奏羅の排除へと行動を移す。

「遅いよ」

そこを福音の真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の突撃時、セシリアの背中に乗っていた、ステルスモードのシャルロットだった。

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は体制を崩す。しかし、それも一瞬のこと。すぐさま三機目の敵機に対して、『銀^{シルバー}の鐘』による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御用パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。そのシルエットはカスタム前のリヴァイヴに近く、二枚の実体シールド、同じく二枚のエネルギーシールドがカーテンのように前面を遮っていた。

防御の間もシャルロットの特技、『高速^{ラビット・スイッチ}切替』によりアサルトカーテンを呼び出し、タイミングを測って反撃を開始する。

加えて、高速機動射撃を行うセシリア、奏羅の二人と、距離をおいての砲撃を再開するラウラ。四方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始める。

『……優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先』

全方向にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間に全てのスラスタ
ーを開いて強行突破を計る。

「させるかあっ!!」

その瞬間、海面から真紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲
龍』が飛び出した。

「離脱する前にたたき落とす！」

福音へと迫る紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パッ
ージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。

両肩の衝撃砲が開くのに合わせ、増設された二つの砲口がその姿を
現す。計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『!!!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱、その後ろから衝撃砲による赤い炎
の弾丸が一斉に降り注ぐ。それは不可視の弾丸ではなく、威力を増
幅させた衝撃砲、熱殻拡散衝撃砲と呼べるものであった。

「やりましたの!?!」

「――まだよ!」

これほどの攻撃を受けてなお、福音はその機能を停止させていなか
った。

『銀の鐘^{シルバー・ベル}最大稼働、開始』

両腕を左右いっぱいに広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。――刹那、エネルギー弾による一斉射撃が始まった。

「くっ!!」

「箒! 僕の後ろに!」

前回の戦闘の失敗をふまえ、箒の紅椿は機能限定状態にある。展開装甲の多様によるエネルギー切れを防ぐため、現在は防御時に自発作動しないように設定しなおしてある。

もちろん、そう設定しなおしたのは、防御をシャルロットに任せられるからである。集団戦闘の利点を生かした役割分担である。

「それにしても・・・これはちよつと、きついね」

防御用のパッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受けることはやはり危うかった。

そうこうしているあいだにも物理シールドが一枚、完全に破壊される。

「奏羅! ラウラ! セシリア! お願い!」

「ああ!」

「言われずとも!」

「お任せになって!」

交代するシャルロットと入れ替わりに奏羅、ラウラ、セシリアによる十字砲火。それぞれ、空戦性能、高機動、砲撃仕様による特性を

生かしながら弾幕を張る。

「足が止まればこっちのもんよ！」

直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃から、至近距離での拡散
衝撃砲を浴びせる。狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター『
銀の鐘』シルバー・ベル。

「もらったああああああっ！」

エネルギー弾を全身に浴びながらも、鈴の突撃は止まらない。
同じく拡散衝撃砲の弾雨をふらせ、互いにダメージを受けながら、
ついにその斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ・・・！ どうよ——ぐっ！？」

片側の翼になりながらも、福音は姿勢をすぐに立て直し、鈴の左腕
へと回し蹴りを叩き込む。脚部スラスターによる加速も加わり、一
撃で鈴の腕部装甲を破壊し、海へと叩き落とした。

「鈴！ おのれっ！！」

箒は両手に刀を持ち、福音へと斬りかかる。

その急加速に一瞬反応を失った福音の右肩へと刃が食い込んだ。

（獲った——！）

そう思った瞬間、福音は左右両方の刃を手のひらで握り締める。

「なっ！？」

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるが、お構いなしに福音は両腕を広げる。

刀が引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。そしてそこに、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた。

「箒！ 武器を捨てて回避しろ！」

しかし、箒は武器を手放そうとはしなかった。

（ここで引いて、何のための・・・）

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

（何のための力かつ！！）

エネルギー弾が触れる寸前に、紅椿は一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意思にこたえるように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たあああああつ！」

かかと落としのような一撃により、エネルギー刃の斬撃が、福音のう片方の翼へと決まる。

ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと落ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ・・・！」

「無事か!？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は呼吸をゆっくりと落ちて着けていく。

「私は・・・大丈夫だ。それより福音は――」

私たちの勝ちだ――誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ。

「!？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが自らを抱くかのようにうずくまっている。

「これは・・・!？ 一体、何が起きているんだ・・・？」

「この反応――!？ まずい！ これは『第二形態移行』だ！」

奏羅が叫んだ瞬間、福音が顔を向ける。無機質なバイザーに覆われ、表情はわからない。しかし、そこから確かな敵を感じ、各ISは操縦者へと警鐘を鳴らす。しかし、遅かった。

『キアアアアアアアア・・・!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる。

「なにっ!？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。
そして切断された頭部から、ゆっくりとエネルギーの翼が生えた。

「ラウラ！！」

「ラウラを離せェっ！」

奏羅が叫ぶと同時に、シャルロットがすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。

しかし、その刃は空いた方の手で受け止められた。

「よせ！ 逃げろ！ こいつは――」

その言葉は最期まで続かず、ラウラはその眩いほどの輝きと美しさを併せ持った翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギーの雨をゼロ距離で受け、全身をズタズタにされてラウラは海へと堕ちた。

「ラウラ！ よくもっ・・・！」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンを呼び出し、福音の顔面へ銃口を当て、引き金を引いた。

ドンッ、という爆音が響くが、それはショットガンのものではなく、福音からしたものだった。

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギーの翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした。

「な、なんですの！？ この性能・・・軍用とはいえ、あまりに異

常な——」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。『イクニッション・ブースト瞬時加速』——それも、両手両足の計四カ所同時着火による爆発加速だった。

「くっ!？」

接近されライフルの狙いが付けられない。距離をとって銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう。そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃ができず、セシリアは海へと沈められた。

「私の仲間を——よくも!」

「おい、無茶はよせ箒!・・・くそっ!」

奏羅の静止も聞かず、箒は福音に向かって突進する。これ以上仲間を危険な目に合わせるわけにはいけない、そう思った奏羅も箒の援護するためそれに合わせて突っ込んだ。

展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる。奏羅も箒の行動に合わせて『ソニック・ブレイズ』のブレード・モードとライフル・モードを使い分けながら福音を追い詰める。

「うおおおおおっ!!」

「はあああああっ!!」

双方回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。二体一の状態、そして

徐々に出力を上げていく紅椿に、福音が押され始める。

（いける！　これならっ——）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし——

キュウウン……。

「なっ！　また、エネルギー切れたと!？」

その隙を逃さず、福音の右腕が箒の首へと伸びた。

「おおおおおっ!!」

首に届くと思われた瞬間、箒の体を奏羅が吹き飛ばす。そして、福音の右腕が奏羅の首をつかんだ。

「奏……羅……?」

目の前の出来事に箒は唾然とする。

「I Sのエネルギー切れたんだろ……?　そんな状態だと、攻撃受けられないからな……」

「だからって……」

箒が言いかけたとき、ゆっくりと福音の翼が奏羅を包み込んでいく。

「奏羅!!」

「あとは、よろしくな——」



「奏……君……?」

自分に向けられる声援の最中、旭は今まで感じたことがなかった嫌な予感を感じていた。

（なんだろう、これ……? アイリスから感じる、嫌な感じ。しかも——）

明らかに、これから奏羅になにかが起こる。その予感だけは確信していた。

しかし、自分は戦いに関しては何も出来ない。ブリリアント・アイリスには人を魅了する力はあっても、戦う力はない。

（私には、奏君を助ける力はない。でも、歌うことで、勇気づけることはできるかもしれない）

歌声は奏羅には聞こえない、それはわかっている。でも、そうせずにはいられなかった。

「みんな、じゃあ最後の曲いくよ!」

自分の想いを、歌に込めて――

「ラストナンバー、『Brilliant Wish』」



さざ波の音を聞きながら、一夏は飽きもせず女の子を眺めていた。
その歌は、その踊りは、なぜだか彼をひどく懐かしい気持ちにさせる。

（・・・あれ？）

ところが、ふと気づくと少女の歌は終わっていた。
踊りをやめ、少女は空を見つめている。

一夏は不思議に思い、少女の隣へと向かう。

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女は空を見つめたまま動かない。
つられて一夏もながめると、ふと、少女の声が耳に響いた。

「呼んでる・・・行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこには少女の姿はなかった。

（――あれ？）

一夏はキョロキョロとあたりを見回すが、もう人影は見当たらない。歌も、聞こえない。

「うーん・・・」

仕方なく元の位置に戻ろうと体を反転させると、背中に声をかけられた。

「力を欲しますか・・・？」

「え・・・」

急いで振り向くと、波の中、ひざ下まで海に沈めた女性が立っていた。

その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか・・・？ 何のために・・・」

「ん？ んー・・・難しいこと訊くなあ」

一夏は少し悩んだ後、口を開いた。

「・・・そうだな。友達を――いや、仲間を守るためかな」

「仲間を・・・」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？ 単純な腕力だけじゃなくて、いろんなことでさ」

一夏は自分の中でもまとまっていけないのにスラスラと語っていた。話しながら、自分で自分の考えていたことに驚きながら。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理の無い暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う——仲間を」

「そう・・・」

女性は、静かに答えて頷いた。

「だったら、行かなきゃね」

「え？」

また後ろから声をかけられる。

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じいっと一夏を見つめている。すると――

「なんだ・・・？ 歌・・・？」

再び、歌が聞こえてくる。しかし、今度はここにいる二人が歌っているわけではない。まるで、この世界に響いてくるように聞こえていた。

「“現在”^{いま}があなたを呼んでる」

「えっ・・・？」

少女の言葉に疑問を浮かべるが、一夏はなんとなくそれが本当だと感じていた。

「行こう、あなたの“現在”^{いま}へ。そしてあなたが“未来”^{あき}を目指す力を。ね？」

一夏の手を取り、少女が微笑む。一夏は照れくさい気持ちになりながらも、

「ああ」

とうなずいた。すると、この世界に突然変化が訪れた。

「な、なんだ？」

空が、世界が、眩いほどの輝きに照らされる。その色は、虹色の輝き――

その輝きと、そこから聞こえる歌に導かれながら、一夏の目の前の光景が徐々に遠くにぼやけていく。

夢の終わり、なんとなくそんな言葉がふいに一夏の頭に浮かんだ。

（ああ、そういえば・・・）

あの女性は、誰かに似ていた。

白い——騎士の女性。



「ぐっ・・・くっ・・・」

奏羅の首はギリギリと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。

福音の手は緩むことなく、さらにはエネルギー状に進化した『銀の鐘^{・ベル}』がプラチナを包んでいた。

（私は・・・なんて無力なんだ・・・）

友人が目の前で苦しんでいる姿を見ながら、箒は自分の力のなさを悔やんでいた。

翼が光を増していく中、箒の頭の中にはただひとつのことだけが浮かんでいた。

——助けて。いつか、お前がそうしてくれたように。

「いち、か・・・助けて・・・」

箒が強く願った、その瞬間だった。

『!?!』

突然、福音が奏羅を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している箒と奏羅が、瞳を開けたときに見たのは荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった。

（な、何が起きて――）

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願い思ってたやまない声だった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！」

二人の視線の先には、白く、輝きを放つその機体。

「あ・・・あ、あっ・・・」

じわりと、箒の目尻に涙が浮かぶ。

わずかに潤んだ視界に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った一夏だった。

第39話 く届く想いく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

まえがきでも話したブログですが、ホント始めたばっかなのであんまり記事がないですが・・・。

まあ、同人活動の宣伝にということなので、所属するサークルブログにも訪れてみてください。

私たちが頑張って作ったノベルゲーがあります。

選択肢無いので電脳紙芝居ですが・・・。

いちおうURLをば・・・

<http://ukimotero.exblog.jp/>

ご意見ご感想をお待ちしております。

第40話　くオワリノハジマリく（前書き）

ISとまるで関係ないですけど、まどマギの一番くじでC賞のママさんとD賞のさやかを当てました。

杏子のでかいのがあったらよかったのになあ・・・。

ちっちゃい杏子はちゃんと当てましたから問題はないんですけどね。ほむほむがほしかった・・・。

では本編をどうぞ。

第40話 くオワリノハジマリく

「一夏っ、一夏なのだな！？ 体は、傷はっ・・・！」

慌てて声をつまらせる箒の元へと飛んで、一夏は答える。

「よう、待たせたな」

「よかった・・・よかった・・・本当に・・・」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「泣いてなどいないっ！」

強がり言いながら目元を拭う箒の頭を、一夏は優しく撫でた。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ・・・」

ふと、一夏は強がりばかりがでてる様子の箒の頭を見る。いつもとは違い、ポニーテールではないその髪型に一夏はなんとなく気になった。

「ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え・・・？」

一夏は持ってきたものを箒に渡す。

「り、リボン・・・？」

「誕生日、おめでとな」

「あっ・・・」

七月七日、それが箒の誕生日。

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ・・・」

そう言いながら、もらったばかりのリボンを眺めると、箒は改めて照れくさくなってしまった。

「あー、ちょっといいか。お二人さん」

二人が声のする方へ向くと、そこには少し蚊帳の外だった奏羅の姿が。

「いちゃつくのは後でもできるだろう？　まずはアレをなんとかしないと」

「ば、馬鹿！！　誰がいちゃついてるなど――」

「それもそうだな。ゆっくり話すのは帰ってからでもできるからな」
そういうと、一夏は福音の方へと向き直った。

「奏羅、箒を頼む」

一夏の言葉に奏羅は頷く。

「ああ、任せろ。――行って、帰って来い」

「ああ」

そう言うなり、一夏は向かってきていた福音へと急加速、正面からぶつかった。

「再戦といくか!」

『雪片式型』を右手だけで構え、斬りかかる。それをのけぞって避けた福音を、左手の新しい兵器『雪羅』で追った。

第二形態に移行したことで現れたこの武器は、状況に応じて幾つかのタイプへと切り替えられる。一夏のイメージに因應するように、その指先からエネルギー刃のクローが出現する。

「逃さねえ!」

1メートル以上に伸びたクローが福音の装甲を切り裂く。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

各部エネルギー翼が大きく広がる。そして回避の後、福音の掃射攻撃が始まった。

「そう何度も食らうかよ!」

一夏は避けようとせず、左手を構えて前へと飛ぶ。

——『雪羅』、シールドモードへと切り替え。相殺防御開始。

左腕の『雪羅』が変形、そこから光の膜が広がり、福音の弾雨を消していく。

「うおおおおおおおっ！」

強化され、大型四気のウイングスラスターが備わった白式・雪羅は、ダブル・イグニッション二段階瞬時加速を可能にしている。それにより複雑な動きをする福音を追い詰めていく。

『状況変化。最大攻撃を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、翼を自身へと巻きつけ始める。それはすぐに球状になって、エネルギーの繭にくるまれた状態へと変わった。

（まずい、嫌な予感がする）

一夏の予想は、最悪なことに的中した。

翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの雨を降らせる。それは、ダメージを回復しきってない鈴たちにも攻撃が及ぶということだった。

（くっ！ 守りきれるか——！？）

一夏はすぐさま仲間の盾に走ろうとするが、それを怒鳴り声によっ

て蹴飛ばされた。

「なにやってんのよ！ あたしたちは腐っても代表候補生よ？ 余計な心配してないで、さっさと片付けちゃいなさいよ！！」

「鈴・・・わかった！」

仲間を信じる。今の一夏にはそれしかできない。一夏はどこまでも信じきる決意を固めると、右手の雪片と左手の雪羅、その両方から零落白夜の光刃を作り出し、再度福音へと飛び込んだ。



（一夏が駆けつけてくれた・・・）

それはもう、嬉しいを飛び越えている。

そして戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願った。

（私は、共に戦いたい。あの背中を守りたい！）

そう強く願った。

そしてその願いに応えるように、紅椿の展開装甲から、赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

「箒、それ——って、なんだ・・・これ・・・」

近くにいた奏羅が驚きの声を上げる。なぜなら、彼のI Sのエネルギーが回復していたのだから。

「これは・・・!？」

——『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築・・・完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティーの文字。

（まだ、戦えるのだな？　なら——）

箒は、一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締める。

「行くのか？」

「ああ、奏羅はどうする？」

「俺はもともと体力がないんだ、遠慮しとくよ」

手をひらひらさせながら奏羅が答える。

「——さっさといってやれ。お前が一夏を助けるんだ」

「ああ、わかってる——行くぞ、紅椿！」

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮れの空を裂くように駆けた。

(まったく、キューピット役も気が気じゃないな……。ま、頑張っ
てこいよ……)

◇

「ぜらあああああっ!!」

零落白夜の光刃がエネルギーの翼を断つ。

しかし、両方の翼を切るのは至難の業。二撃目を回避されてしまう。
そうしている間に失われた翼は再度構築されて、一夏へと強力無比
な連続射撃を行っていく。

「くっ!」

——エネルギー残量20%。予測稼働時間、三分。

(くそっ! このままじゃ……)

リミッターなしの軍用ISがどれほどのエネルギーをもっているの
か一夏には見当もつかない。対して、自分の機体は可動限界が近づ
いている。

「一夏!」

「箒!? お前、ダメージは——」

「大丈夫だ! それよりも、これを受け取れ!」

箒の、紅椿の手が白式へと触れる。

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走る。

「な、なんだ・・・? エネルギーが回復!? 箒、これは——」

「今は考えるな! 行くぞ、一夏!」

「お、おう!」

一夏は意識を集中させ、雪片式型のエネルギー刃を最大出力まで高める。

「うおおおおっ!」

福音は一夏の横薙ぎを回避、再び視界に捉えると同時に、光の翼を向けてくる。

「箒!?」

「任せろ!」

その攻撃はトラップ、その翼を一夏に向けさせることにあった。
一夏の方に向けられた翼を、紅椿の二刀が並び、一断の斬撃で断ち切る。

「逃がすかああっ！」

さらに脚部展開装甲を開放、急加速の勢いを載せた回し蹴りが福音の本体へと入った。

予想外の攻撃に大きく姿勢を崩した福音を、一夏は下から上へと返す刃で残りの光翼もかき消す。

そして、最後の一突きを繰り返そうとする一夏に、福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行った。

（ここまで来たら、もう引かねえ！！）

全身にエネルギー弾を浴びながら、一夏は福音の胴体へと零落白夜の刃を突き立てた。

「おおおおっ！」

エネルギー刃特有の手応えを感じながら、さらに全ブースターを最大出力まで上げる。

押されながらも、一夏の首へと手を伸ばす福音。その指先が喉元に食い込んだところで、銀色のISはやっと動きを停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ——！？」

「——ったく、ツメが甘いよ、ツメが」

「はあ……。これでかつこ良さ半減だぞ、お前」

ようやくダメージから回復した鈴と奏羅が海面接触ギリギリで操縦者をキャッチした。同じく、セシリア、シャル、ラウラも無傷とはいかないが無事のようなのだ。

「終わったな」

「ああ……。やっと、な」

一夏と箒は肩を並べて空を見た。
海のような青さを誇った空はもうすでになく、夕闇の朱色に世界は優しく包まれていた。



「まったく、ひどい一日でしたわ……」

見事福音を倒した俺達は、旅館への帰路についていた。

「残念だけど、まだひどい一日は続くぞ」

残念そうにため息を吐くセシリアに、俺は話しかける。

「・・・どうしてですか？」

「俺たちは命令違反をしたんだからな。多分、これから織斑先生の説教タイムだ」

はは、とカラ笑いをしながら俺もため息を吐く。どう考えてもこれからお説教のフルコースだ。きっとオードブルからデザートまで、最高の時間が楽しめるだろう。

「千冬姉の説教、相当怖いからなあ・・・」

「うわ、あたし帰りたくなってきた」

「ぼ、僕も・・・」

一夏、鈴、シャルの三人も、もう嫌だといった様子だ。箒、ラウラも黙っているが、内心戦々恐々としてるに違いない。

「残念だが、もう旅館の海岸は見えている」

ラウラが指を指す方向、もう夕暮れを通り越して薄暗いが確かに俺たちが出発した海岸が見える。

『おーい、みんなー』

海岸が見えた直後、オープンチャネルから旭の声が響いた。ハイパーセンサーを望遠モードにして海岸沿いを見ると、海岸には旭、リイ、織斑先生、山田先生の姿が。

『こっちだよー』

旭がブリリアント・アイリスからスポットライト・ビットを飛ばして、灯台のように光で俺たちに場所を知らせている。

「どうやら、海岸で織斑先生たちがおまぢかねのようだ」

俺の言葉にみんなため息をはく。ま、見えてる危険に向かってるよ
うなもんだからな。

「ま、いいじゃねえか。俺たち七人、ちゃんとみんなそろって千冬
姉に怒られるんだからさ」

一夏の言葉にみんなが微笑む。

「そうよね……。あたし達、誰も欠けてないんだし」

「じゃ、僕達みんなで怒られよっか」

「そうだな」

今ここにみんながいる。俺はそれがとても喜ばしいことだと、改め
て思った。



「――準備は？」

『出来てます』

「フフフ、そうか。では、はじめよう。終幕の始まり、その第一章を――」

『了解。作戦名「ラインの黄金」、開始』



『私とリリイちゃんの約束守ったね。奏君えらいえらい』

「お前な、子供じゃないんだから・・・」

『あんまり文句言うなよ。こっちはそれ以上に心配してやったんだからな』

「リリイさん、あんまり心配してなかったように聞こえるんですが、気のせいですよね」

『気のせい』

プライベート・チャネルを使って旭とリリイと談笑する。海岸まで

あと800メートル――

――戦闘待機状態のISの空間転移反応確認。警戒モードへと移行します。操縦者無し。ISネーム該当なし。

「!?!」

プラチナが今までにない警告を告げる。周りのみんなを見るが何事もないように談笑を続けている。

（センサー系の故障・・・? いや、そんなはずはない。さっきまでは正常だったしな。いや、まてよ、今空間転移って――）

――空間転移位置確認。ここより南東の方向300メートル地点。

（南東って・・・俺達の進んでる方向――）

そこまで考えた瞬間、俺は体がすでに動いていた。

「みんな散らばれっ!!」

俺の声に全員があっけにとられる。それを尻目に俺はみんなの前へと飛び出した。

――ISの空間転移。警告! ISが射撃耐性へと移行。

プラチナの警告を聞くと同時に、シールド代わりにシューティングフレームとストライクフレームを待機状態で呼び出す。

その瞬間、目の前の何もなかったところに、一機のISが現れた。みんなのISがそれぞれの操縦者に警告を告げるがもう遅い。

「キキイイイアアアアアアッ！」

けたたましい機械の咆哮と共にエネルギーの弾雨が俺たちに降り注いだ。

「ぐあああああっ！！」

俺はみんなを守るために壁となってそのすべてを受ける。それは数秒のことなのだろうが、俺には何時間もかかったように思えた。

（みんな・・・なは・・・？）

弾雨が止み、プラチナの絶対防御が幾度と無く発動して意識が朦朧となりながら、後ろを見る。フレームを盾にしたことで、みんなに被害はっていないようだ。

「よか・・・た・・・」

俺の目の前は、そこでテレビのスイッチを切るように真っ暗になった。

第40話 くオワリノハジマリく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

うああああ、三巻終わらねー。

まあ終わりまで一応流れは作ってあるんでがんばりますけどね、うん。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第41話 く白金の戦乙女く（前書き）

頑張って2日続けての連続投稿しました。
疲れた・・・。

では本編をどうぞ。

第41話　　＼白金の戦乙女＼

一夏は眼の前で起こったことが信じられなかった。さっきまで笑い合っていた友人が、突如現れたISによって撃墜された、その現実を信じる事が出来なかった。

「奏羅さん!？」

セシリアの悲鳴とも取れる叫びが響き渡る。

（なんで・・・俺たち、みんな揃って帰ってきてたはずじゃないか・
・・・なのに・・・）

一夏は眼前に現れた敵へと目を向ける。そして、奏羅を撃墜したISの姿に驚愕した。

「嘘だろ・・・」

「あれって・・・」

「黒い・・・福音・・・」

その場にいた誰もが目を疑う。なぜなら、そこには色や形がところどころ違えど先程一夏と筈が倒したIS『銀の福音』、その第二形態が佇んでいるのだから。

『全機、今から私の指示に従え!』

オーブン・チャネルから織斑千冬の声が響く。奏羅が撃墜される様

は、海岸からでも容易に確認することができた。そして、撃墜したのが『銀の福音』に似た機体ということも。

『所属不明機を敵機と断定！ 仮名称を『黒の福音』としこれより戦闘を行う！ 凰は福音の操縦者をこちらへ！ オルコットとデュノアで天加瀬を回収！ 織斑と篠ノ之で『黒の福音』に近接戦闘をしながらの攪乱、その援護をボーデヴィツヒで行え！ その後準備ができ次第教師陣で戦闘を行う！』

千冬の声に全員が我に返ると、指示の通り動き始めた。

「箒！」

「わかってる！」

一夏と箒はそれぞれ刀を抜き、突如現れたISに向かって斬りかかる。黒い福音はそれを回避すると、翼によるエネルギー弾での攻撃を始める。

「今のうちにっ！」

「目標、ロック。砲撃を開始する！」

一夏と箒が射線上からすぐさま退避すると同時に、鈴が戦線離脱、ラウラがブリッツによる砲撃を始める。

黒い福音はそれを回避しながら『銀の鐘』を使い、エネルギー弾による弾幕を張って一夏と箒を近づけさせなかった。

「くそっ・・・、うまく回避と攻撃を組み合わせてやがるっ！ 隙がねえ・・・」

「セシリア、シャル！ 奏羅は！？」

ラウラが黒い福音を狙い撃ちながら奏羅の安否を気遣う。

「見つけましたわ……。絶対防御によって息はあるみたいですが、意識が……」

「全部のフレームを待機状態にしてシールド替わりに使ったからこの程度で済んでるけど、それでもこのままじゃ……。すぐに手当てしないと！」

「なら急いで海岸へ運んでくれ！ 福音はこっちで——」

引きつける、箒がそう言おうとした瞬間、攻撃を回避するだけだった黒い福音は奏羅を抱えた二人へと進路を変えた。

「なっ……。！」

「セシリア、シャル！」

黒い福音が射撃体勢へと移行する前に、シャルが射線上へと躍り出て、ガーデンカーテンを呼び出す。先の戦闘で物理シールドを一枚やられているが、今は人命救助のための時間稼ぎにはなる。

「セシリア、早く！」

「わかってますわ！」

シャルに怒鳴るように急かされ、セシリアがストライクガンナーの

ブーストを使おうとしたその時だった。

「そ、そんな・・・」

セシリアの目の前には黒い福音の姿があった。先ほどの射撃体勢はフェイク。移行すると見せかけたのちの瞬時加速により、セシリアの行く手を阻んでいたのだ。

そして目の前で『銀の鐘』が発動、翼に光が収束する。加速する体制に入っていたセシリアに回避は不可能。

（避けられない――）

せめてこの人だけは。そう思いセシリアは奏羅の体を抱きしめ、自分の体で覆う。

（奏羅さん、あなたの命だけは私が守ってみせます・・・）

しかし、攻撃をすべて受ける覚悟を決めたセシリアだったが、黒い福音の射撃は飛んで来ることはなかった。なぜなら――

「大丈夫、セシリアちゃん！」

目の前には黒い福音の代わりに、ブリリアント・アイリスを纏った旭の姿があった。

「旭さん・・・なんで・・・？」

「武器はないけど、体当たりくらいならできるからね。それよりも――」

旭は黒い福音の方をみる。体勢を立て直した福音から、機械音声での言葉が聞こえた。

『敵対ISの中に『ヴェルザンディ』を確認。これより『ヴェルザンディ』の撃墜を優先する。『ファーレン・システム』起動、『イヴィル・サーヴァント』を生成』

その瞬間、黒い福音の翼が黒く染まる。そして、その翼が独立し、変形。ひとつの形をなした。

「なんだよ・・・あれ・・・」

一夏がつぶやく。その形はまるで物語に出てくるような悪魔。それが五体も現れたのだから。

誰もが目の前の異形に驚愕し、恐怖する。しかし、その中でただ一人だけ、戦意を失っていない者がいた。

「みんな、しっかりして。今みんなが戦わないで、誰が戦うの？」

その声は、戦うことに一切触れたことのないアイドル、塚乃旭の声。

「私は戦う力はない。だけど、みんなみたいに諦めてないよ」

「旭さん・・・」

旭は怯えたようなセシリアに笑いかける。

「奏君、守るんだよね？」

「あ・・・」

セシリアの腕の中には、傷ついた奏羅の姿。それを見て、みんなが自分を奮い立たせた。

「そうだ、まだみんな揃って千冬姉にしかられてねえ。帰ってちゃんと叱られないとな」

一夏の言葉にみんなが頷く。

「いこう、みんな！」

そんな六人の様子を見て旭が微笑む。

（みんないい友だちだね、奏君。みんな奏君のために戦ってくれる・・・）

旭も幼馴染のために、みんなのために、自分のできることをする決意をした。それはたったひとつだけしかない、自分にできること――

「お願い、ブリリアント・アイリス。私の歌をみんなの力に――」

旭の願いに応えるように、ブリリアント・アイリスから七色の輝きが発せられる。

そして、ブリリアント・アイリスのハイパーセンサーに『ワンオフ唯一使用の特殊能力』の文字が浮かび上がった。

「アイリス、私の歌を届けて――」おもい『グロリー・オペラ栄光歌劇曲』」

旭の言葉と共にブリリアント・アイリスから七色の光の粒が発せられ、一夏たちのISがそれに囲まれる。

「なんですよ、これ・・・？」

「七色の・・・雪・・・？」

「見て、あたしたちのISの性能が上がってる！」

「これが・・・旭の、ブリリアント・アイリスの力・・・？」

セシリア、ラウラ、鈴、シャルがそれぞれ驚愕の声を上げる。

——『零落白夜』発動。

——『絢爛舞踏』発動。

「なっ・・・？」

「ワンオフ・アビリティが勝手に・・・？」

白式、紅椿のワンオフ・アビリティが二人の意図とは別に自動的に発動する。『零落白夜』はこれまでにない輝きを帯び、『絢爛舞踏』はその場にいるすべてのISにエネルギーを与える。それにより、すべてのISが最高の状態で戦闘態勢へと入れる状態になった。それはまさしく、歌姫が整えた歌劇。オペラそして、旭は正体不明の敵を前にいつもステージの上に立っているように微笑んだ。

「——それじゃあいくよみんな、アンコール・ナンバー『STAR LIGHT ORBITAL』！」



「ここは——」

俺は、ずっと前に何回か訪れたことがある向日葵の花畑の真ん中に立っていた。

「またここか……。一体ここってどこなんだよ……。？」

「ここは、約束の地。いずれ収束する物語の終わりの果て」

後ろから誰かに話しかけられる。でも、この声を俺は知っていた。ずっと聞きたかった、アイツの——

「やっと会えたね、奏羅」

「まさか、未来——」

俺は目の前の光景が信じられなかった。ずっと前に死んだと思っていた、もう会えることがないと思っていた、俺の大切な人が立っていたのだから。

「お前、なんで——待て、お前と一緒に俺がここにいてことは、俺は死んだのか……。？」
つまり、ここはあの世……。？」

「ふふっ。大丈夫、奏羅は生きてるよ」

「そ、そうか。俺はまだ死んでないのか……。な、なら、それは、つまり、お、お前は生きてるのか!？」

俺は必死になって未来に尋ねる。そうだ、俺は死んでないんだからもしかしたらこいつだって――

「半分、はね」

「半……分……?」

「プラチナが暴走したあの時、『ニーヴェルン・システム』によって私の体は粒子化され、精神はプラチナのコアと一体化したの。つまり――」

「未来が、プラチナだったのか……?」

俺は言っていることが信じられなかった。だって、現にこいつは目の前にいる。こんな元気な姿で――

「ねえ、奏羅。奏羅はなんで操縦者になったの?」

「えっ……?」

唐突に未来が俺に質問する。

「奏羅は開発者になりたいんでしょう? なら、なんでISを操縦してるの?」

「それは、操縦することで得たデータを――」

「違う。それは本当の思いじゃないでしょ」

「・・・・・・・・」

「本当のことを言って、奏羅」

「お、俺は・・・」

俺が、ISを操縦するほんとうの理由――

「俺は、お前の代わりに、夢を叶えてやりたかった。お前がいなくなって、俺がISを使えるって聞いたとき、思ったんだ。『いなくなった未来の代わりに、俺が未来の夢をかなえてやろう』って。だから、俺はずっとISを操縦してた」

それを聞いて、未来が悲しそうにうつむく。

「ごめん、色々と背負わせちゃって……。私のせいだね・・・」

「な、何言って――」

「だって、そうでしょ？　今もISを操縦したことで奏羅が傷ついてる。奏羅の今の夢だって、私が勝手に決めたんだよ？」

「そ、それは・・・」

「だから私を気にせずに生きていいんだよ、奏羅。いなくなった私

なんかに振り回されなくていいから」

昔、一緒にいた頃は見たこと無いくらい悲しそうな未来。全部、自分のせいだと背負い込んで――

「俺さ、お前に感謝してるんだ」

もう、我慢できなかった。小さい頃から一緒にいてずっと言えなかったことを伝えようと思った。

「感謝・・・？」

「ああ。俺、ちっさい頃妙に冷めててさ、夢なんて歳相応の事考えたこともなかったんだ。そんな時、未来が現れて俺に夢を語ってくれた。子供ながらに衝撃だったよ、『この娘は俺がどう頑張ってもかなわないくらいすごい』って」

未来は黙ったまま俺の話を聞いている。俺も、もうこの話をやめようとは思わなかった。

「俺も自分の夢とか考えたけど、全然思いつかない。お先真っ暗さ。でもそんなとき光が差したんだ。お前が、くれた夢で」

「奏羅・・・」

「だから、俺は後悔なんてしてない。お前に振り回されてよかったって思ってる。お前に振り回されたおかげで、IS学園に入って最高の友達もできたしな。だから、これから俺を振り回してくれ」

俺の言葉を黙って聞いていた未来の顔に涙が溢れていく。しかし泣

くわけではなく、涙を目尻に溜めながら未来は昔と同じ笑顔で笑った。

「ふふっ、馬鹿だね。ほんとに馬鹿だよ・・・」

「ああ、よく言われるよ」

「旭ちゃんとかリリィちゃん？ それともI S学園の友達？」

「どっちも、だよ」

「じゃあ、こんなコトしてる場合じゃないね」

未来が俺の手を取る。

「いこう、奏羅の、私の、みんなの未来ゆめを守るために」

「ああ、そうだな」

その瞬間、世界に歌が響き、眩いほどの七色の輝きが降り注ぐ。

「旭ちゃんだね・・・」

「早く来いって急かしてるな」

「ふふっ、そうみたいだね」

「なあ、最後にひとつ聞いてもいいか？」

「いいよ」

「これって、現実なのか？　それとも俺が見てる夢？」

俺の言葉に未来が微笑む。

「それはね、奏羅が決めることだよ」

その瞬間、世界が七色の光に包まれた。



「くっ・・・無駄に厄介ねこいつら・・・」

鈴が面倒くさそうに声を荒げる。さきほどからイヴィル・サーヴァントを倒し続けているのだが、黒い福音から次々と生成されている。

「しかし、個体数には限りがあるようだ。なんとか隙をつければ・・・」

近づいてきたサーヴァント一匹を、ラウラが後ろへブーストをかけながら『ブリッツ』により撃破する。しかし、また次のサーヴァントが横から攻撃を仕掛けてくるので、黒い福音へと近づくことができない。

「まずいね・・・このままじゃ、ジワジワと追いつめられてく・・・」

「セシリア、奏羅は？」

「大丈夫ですわ。しかし、送り届ける事はできない限り安全の保証はありません！」

セシリアはスターダスト・シューターにより一匹を撃破。その後、迫ってきたもう一匹の体当たりを回避し、その頭を打ち抜いた。

「もう、これじゃあキリが——」

「セシリア！ 後ろ！」

セシリアはシャルの声で反射的に回避体勢に入るが、黒い何かに左足を掴まれてしまう。

「なっ・・・！？」

セシリアの脚をつかんだのは黒い福音の翼。形状変化したそれは、まるで腕のようにセシリアの脚に絡みついている。

「くっ・・・何とかして抜けないと——」

もがくセシリアだったが、黒い福音が残りの翼が形を変え、ひとつの巨大な剣に変化した。

「そん・・・な・・・」

振り下ろされるそれはもう避けることはできない――

「セシリアっ！」

一夏が零落白夜で受け止めようとするが間にあう距離ではない。

（せめて、奏羅さんだけでも・・・）

セシリアは抱えていた奏羅を安全な方向へと放り投げた。

「奏羅さん、どうかご無事で」

奏羅の無事を祈るようにセシリアは目を閉じた。

「セシリア ああああ ああっ！」

「セシリア、人を軽々しく放り投げるんじゃないよ、まったく・・・」

「えっ・・・？」

セシリアは自分にかけられた言葉にはっとして目を開ける。彼女の目の前には――

「奏・・・羅・・・さん・・・？」

「誰だと思ったんだ？」

黒い福音の剣をソニック・ブレイズで受け止めている奏羅の姿があった。



（なんとか、間に合ったみたいだな）

目を覚ましてみれば、俺は空中でセシリアに放り投げられてたところだった。しかも、もう少しで死ぬところだったとか、タイミング

がいいにもほどがある。

「はあっ！」

目の前のＩＳの剣を弾くと、セシリアを掴んでいる腕のようなものを切り裂き、セシリアを抱きかかえてその場から離れる。

「焦ったぞ、目を覚ましたら死にそうとか心臓に悪いよ」

「奏・・・羅・・・さん・・・」

セシリアの目からボロボロと涙が出てくる。

「よしよし、怖かったんだな。もう大丈夫だ」

「はい・・・」

軽くセシリアの頭を撫でてやると、どうやら落ち着いたようだ。

「奏君！」

「奏羅！」

みんなが俺のもとに集まってくる。

「悪い、みんな。心配かけた」

「まったく、少しはこっちの身にもなれよなあ。俺たちがどれくらい心配したと思ってんだ」

一夏が口を尖らせて文句を言う。

「はは、まったくです・・・」

「で、セシリアはいつまでそうしてるのかな？」

シャルの少し怒ったような言葉に腕の中から「うっ」と声がする。そういえば、セシリアを抱えっぱなしだった。

「まあまあ、死にそうだったんだし、いいじゃないの」

「鈴、甘いぞ。戦場はいつも死と隣り合わせだ」

「ラウラ、サラリと現実味のある軍人トークするのやめてくれ・・・」

ラウラの指摘に筈がつっこむ。なんだか、学校にいる気分になってきた。

「そー君」

横からにゅっと出てきた旭がにっこりと微笑む。

「旭、まだ歌えるか？」

「もちろんだよ！」

「じゃあ、歌ってくれ。みんなが無事に帰れるように」

「――うん、わかった」

旭が頷くのを見て、俺は黒いISの方へと目を向ける。

「悪いな、俺の、俺達の未来^{ゆめ}にお前は邪魔なんだ。だから――」

――操縦者、天加瀬奏羅からの承認を確認。セーフティ解除。

「お前を倒すよ。俺と、未来の二人で。俺たちの、始まりの力で」



――プラチナはさ、元々フレームを使う予定はなかったんだ。

――なんで？

――今の状態は元にあった武装をオミットしたものなんだ。二度と、あんなことが無いように。

――暴走、か。

――そう。だから、前のようなシステムを使った即時戦局対応へのアプローチじゃなく、今のフレームシステムを使ったアプローチにしたんだ。

「じゃあ、もう使わないのか？　せつかくフレームとして使えるようにしてあるのに。」

「わからない。でも、使うとしたら――」

「使うとしたら？」

「何かに命をかける時かな。」

目の前に広がった光景を見て、リリィは少し前に奏羅が言っていた言葉を思い出していた。

「・・・奏羅、使うんだね。プラチナの本来の姿を――」



「――ヴァルキュリア・フレーム！」

奏羅は、もう使うことがないと思っていたフレームの名をコールする。彼の呼びかけに応え、光の粒子が集まり形をなす。

『呼んでくれたんだね、私のこと』

粒子は形をなし、奏羅の大切な人、遥流華^{はるか} 未来^{みく}の姿へと変わった。

「ああ、俺に力を貸してくれ」

『うん！』

未来が奏羅の手を取ると、奏羅は光の珠に包まれた。

光のなかで、ヴァルキュリア・フレームがドッキングし、プラチナは元の姿を取り戻していく。

——操縦者の変更を確認しました。操縦者、天加瀬奏羅及び、操縦者、遥流華未来。

「俺の夢も、君の夢も、決して終わらせはしない——」

——遥流華未来の承認を確認。ワンオフ・アビリティ 単一特殊能力発動。

『私たちの想いを重ねて……。』ソウル・シンフォニア 『恋夢交響曲』！』

ワンオフ・アビリティの発動と共に光の珠が割れ、そこから一機の白金のISが飛び出した。

「――プラチナ・ヴァルキュリア、
“未来”^{みらい}を……切り開く!!」

第41話　＼白金の戦乙女＼（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

いやーフラグを立てては回収の連続な気がしますね。

今回出てきた旭の曲「STARLIGHT ORBITAL」はISのOPをイメージしてたりします。なのでISのOPでも聞きながら読んでください（笑）

ご意見ご感想をお待ちしております。

第42話 く決着と日常とく（前書き）

明後日から旅行という名の合宿へといってしまうので更新ができません。

では本編をどうぞ。

第42話 決着と日常と

「プラチナ・・・ヴァルキュリア・・・？」

一夏たちの目の前に現れたのは闇夜をも照らす白金の戦乙女。それは、奏羅のIS、プラチナの本来の姿であり、最強のフレイムを装備した姿――

「なにあれ・・・光る雪・・・？」

「わかりません。でも、とても綺麗ですわ・・・」

鈴とセシリアが声をあげる。プラチナの背部、天使の翼のような形をしたウイングスラストから出てくる白く光る粒子、『エーテル・スノウ』に、そこにいる全員が見惚れていた。

『――未確認ISを『スクルド』と断定。これより、優先的に排除する』

そんな中、黒い福音が改めてプラチナ・ヴァルキュリアを認識。『イヴィル・サーヴァント』を従えて奏羅に向かって突撃してくる。

「一夏！」

「お、おう！」

「この黒いISは俺が相手をする。その間みんなを！」

「わ、わかった！」

一夏にオープンチャネルで指示を飛ばすと、奏羅は突撃してきた黒い福音を上昇しながら回避する。しかし、別方向からサーヴァントが襲いかかってきた。

「未来、ニーヴェルン・システムは？」

『大丈夫だよ！ 一人では暴走^{ダメ}だったけど、奏羅と私の二人でなら！』

プラチナ・ヴァルキュリアのハイパーセンサーにニーヴェルン・システムが起動したサインを確認すると、奏羅は武装をコールした。

「『ストライク・クロス』と『レーヴァテイン』を！」

『わかった——ニーヴェルン・システム、起動。コールされた武装を生成します』

未来がニーヴェルン・システムが起動させ、奏羅の頭の上に天使の輪のようなものが現れる。それと同時に奏羅の目の前に、ウイングスラスターから排出されていた『エーテル・スノウ』が集まり、遠隔操作型支援兵装『強襲^{ストライク・クロス}する十字架』二機と、IS専用銃複合対IS大型剣『焼き払う存在^{レーヴァテイン}』として形をなした。

「——はあっ！」

奏羅はすぐさま、生成されたレーヴァテインを手にとると横薙ぎにふるい、前から迫る二体のイヴィル・サーヴァントを切り裂く。

——後方より敵機接近。

「未来！」

『任せて！』

プラチナ・ヴァルキュリアから警告が入ると同時に、未来がストライク・クロスを操作し、背後から迫るイヴィル・サーヴァントを対処。その後、レーヴァテインを射撃形態に変形させると、近づいてきた残りのイヴィル・サーヴァントを一蹴した。

「残りは――」

『あの無人機！』

奏羅が黒い福音の方を見ると、黒い福音は体中の『銀の鐘』を最大展開させており、すぐさま攻撃へと移れる状態になっていた。

『敵ISを攻撃レベルAで処理。『銀の鐘』を全方位展開』

黒い福音がつぶやくと同時に、周囲に莫大な量、密度のエネルギー弾が降り注がれる。

「奏羅！」

一夏が叫ぶが、すでに奏羅は黒い福音の射程圏内であり、離脱することは不可能。

「未来、『ソウル・シンフォニア恋夢交響曲』を！」

『わかった！』

奏羅はワンオフ・アビリティ『ソウル・シンフォニア恋夢交響曲』発動させ、粒子収束型自動展開防壁『レディアント・ヴェール光輝く障壁』で最低限の被弾を防ぎながらエネルギー弾を回避、黒い福音へと接近していく。

「馬鹿な・・・あの弾幕を最小限の防御だけで・・・!?」

ラウラが奏羅の異常なまでの回避力に驚愕の声を上げる。

ワンオフ・アビリティ『ソウル・シンフォニア恋夢交響曲』は、奏羅と未来、その他の対象の思念を共有、共鳴により増幅させ、想いの力をエネルギーに変えるプラチナ・ヴァルキュリアの出力を向上させると共に、数秒、一瞬、刹那の後の自分との思念共有、いわゆる“未来予知”ともいえる能力がある。それにより、プラチナ・ヴァルキュリアは現ISの中で異常な程の命中、回避率を誇る機体と言える。

『これでっ!』

奏羅はレーヴァテインをふるい、『銀の鐘』を切り裂く。そしてそのまま剣戟形態による連撃、そして射撃形態へと切り替えながら回し蹴りを腹部に決め、黒い福音を吹き飛ばした。

「その身に刻め!」

黒い福音に向けて、変形させたレーヴァテインで銃弾を打ち込む。打ち出された銃弾が空中で『エーテル・スノウ』を纏い剣に変化、それと同時に未来がストライク・クロスを後ろに回り込ませ、黒い福音をストライク・クロスにはりつける。

「コード・VA!」

そして、ウイングスラスターから溢れ出す『エーテル・スノウ』が天使の翼のように広がり、レーヴァテインを核に奏羅の手の中で巨大な槍を創りだした。

『神技——』ヴァルキュリア・ジャッジメント『戦乙女の断罪』！』

各部に貯蔵した莫大な粒子の一斉排出、さらにはウイングスラスターの瞬時加速も合わせ、爆発的なスピードで接近し黒の福音へと槍を突き刺す。加速による勢いも加わって深々と突き刺さったそれを離し、奏羅はその場から離脱。その瞬間、形成されていた槍が『エーテル・スノウ』に戻ると共に拡散、大爆発を起こした。全てを終わらせたその光を見ながら、奏羅は一言つぶやく。

「——なんだよ、今の」

『いやー、決め技には名前がないとね！』

「・・・さいですか」

奏羅は未来の言葉にやれやれとため息を吐く。

「でも——」

『でも？』

「みんなを守れてよかったよ」

近づいてくる一夏たちをみて、奏羅はふっと微笑んだ。



「あー、疲れた・・・」

お説教のフルコースの後、怪我などの診察を受けてようやく解放された俺達は、昨日と同じく他の生徒と一緒に夕食を食べていた。なんだかんだで一件落着というわけだ。しかし――

「ね、ね、ふたりともいい加減教えてよ」

「・・・ダメ。機密だから」

まわりはゆつくりと夕食を食べさせてはくれないみたいで、俺と右隣に座っているシャルに数名の女子が群がってあれこれと質問をしってくる。まあ、俺たち二人は人当たりが良くてとっつきやすいから訊けると思ってるんだろう。まあ、俺もシャルも責任感があるので喋ったりはしないが。

「ちえー、ふたりともお固いなあ」

「あのねえ、聞いたら制約つくんだよ？ いいの？」

「あー・・・それは困るかなあ」

「だったら、はい。この話はこれでおしまい。もう何も答えないよ」

「ぶーぶー」

いや、制約つくは困るのに答えないといってブーイングするのはちよっとおかしいような……。まあ、気になっても俺はツツコミを入れないわけですが。

「そういえば、旭はどうしたの？」

シャルがぼそぼそと小声で俺に質問してくる。ちなみに旭も俺達と一緒に織斑先生にこっぴどく叱られていた。

「あー、俺たちと一緒にお叱りを食らった後に部屋に戻ってそこでご飯食べてるよ。みんなに顔を晒したから変装してもできるだけ接触しないほうがいいって」

「まあ、そうだよねえ……」

しかし、俺たちが帰ってきた後もみんなの話題は旭のライブの話だったのには驚いた。あいつのアイドルとしての求心力はよっぽどのものらしいな。

「あー、二人して内緒話？」

俺たちの様子を見ていたのであろうさっきの女子たちがニヤニヤしながら話しかけてくる。

「その話聞かせてくれたらさっきの話は聞かないよ」

「な、なにいつてるの!？」

その時、一人の女の子がシャルロットの耳元に。

「シャルロット浴衣の胸元緩んでるよ」

「へっ!？」

小声で聞こえなかったが、ぼそぼそとつぶやかれた瞬間、まるでトマトの成長をハイスピードで見ているようにシャルの顔が真っ赤になっていく。

「ぼ、僕は別に誘惑とかそんなこと考えてなんて――」

「私、誘惑だなんていつてないよ? それに、浴衣は緩んでません」

「!!!」

再び囁かれた言葉にすでに真っ赤な顔が更に真っ赤になる。内容はわからないが、これがガールズストークというやつなのだろうか……?

「それにしても、シャルロットってば、えっちなあ」

「ち、違うよ!?僕は、その、ねっ?」

「いや、俺に同意を求められても困るんだけど……」

全く話しについていけないが、どうやらシャルはえっちらしい。まあ、シャルがエッチということがわかったくらいで、いまいち流れ

が理解出来ないので、会話には入らないようにしよう。

「ふむ・・・誘惑か・・・」

誘惑という言葉に反応する俺の左隣の女の子、というかラウラ。

「奏羅はどんな誘惑をされたい？」

「・・・なにをいつてるんだよ？」

突然過ぎて質問を質問で返してしまう。いや、そりゃそうだろう。飯時になんて質問しやがるんだこの子は。

「最近私がお前の布団に裸で入っていてもなんの反応もしくなっただじゃないか」

「あゝ、なんかもう慣れたから・・・」

改めて思うが、自分の順応力にもびっくりするな。むしろ、最近ではちょっとした抱き枕状態な気がする、ていうかもう抱きまくラウだ。・・・同級生を安眠グッズ呼ばわりするのはどうかと思うけど。

「そういえば、奏羅はスク水ふえちというやつだったな」

「へっ？」

「なら、こんどスクール水着を着て忍び込んでおいてやろう」

「いやいやいやいや、それ予告しちゃいみないでしょ!?!? ていう

か、やっぱり忍びこむのね・・・」

「ああ、裸は飽きたのだろう？」

「ちよつ、あのね、まわりに誤解を招く言い方はやめてくださいませんか・・・？」

「？」

「キョトンとするなよ・・・」

なんか、あまりにも学園の日常すぎてさっきまでの作戦が夢みたいな気がしてきたよ・・・。

（まあ、いつもの日常に越したことはないよな）

いつもどおりの空気に囲まれながら、俺は今眠っている未来へと心のなかでつぶやいた。

第42話　く決着と日常とく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

すげー中途半端なところで終わったなあ・・・。
色々忙しいのでご勘弁お願いいたします。

あと、ブログ更新しました。

しょうもない話題語ってますがみてくださるとありがたいです。

ご意見ご感想をお待ちしております。

第43話 く君の笑顔く（前書き）

えー、更新再開です。

今回の話は本来なら前の話に入っている予定だったのですが、まあ都合というやつです。なので少し短めです。

では本編をどうぞ。

第43話　君の笑顔

夕食の後、俺は一人で旅館の屋上に来ていた。今日はいろんなことがあって、長かったような短かったような、そんな変な感覚を感じながらぼうつと海を眺めていた。

「何黄昏てるの？」

不意に、後ろから声をかけられる。その声の主は俺のよく知った人物。

「別に黄昏てなんか無いですよ、旭さん」

そう、幼馴染の塚乃旭。

「まあ黄昏てる云々は置いといて、良い事はあったみたいだね」

「なんでそう思う？」

「うーん・・・幼馴染の勘、かな？」

そう言いながらケラケラと笑う旭。付き合いの長さは伊達じゃないようだ。

「そういえば、今回のゲリラライブの件はなんて言われた？」

俺は少し心配になっていたことを聞いた。

先生たちを引きつけるためとはいえ、今回の事件に関わってしまったことには代わりはないのだ。

「福音のことは口止めされたよ。ライブは、まあタイミングがいつであれ、この臨海学校でIS学園の人たちにアイリスの発表はする予定だったし、お披露目扱いということでお咎めはなし。本当は生徒達に見せるつもりはなかったんだけどねえ・・・」

「ってことはつまり——」

「メディアに発表するにしてもいい話題になるんじゃないかな？」

『IS学園に突然の乱入者！ その正体は新型ISに乗ったアイドル！』」

「・・・のんきなもんだな」

「IS学園の人たちはちょうどいいと思ったみたいだね。暴走したISをメディアに知られる前に、私の乱入を代わりに発表すれば——ってね」

「なんというか、誤魔化すのには絶好の話題なのかもしれないけど・・・。」

「お前はそれでいいのか？」

「うん、私だって事情はわかってるよ。それに——」

「それに？」

「アイドルの仕事はみんなを笑顔にすること。この嘘で誰かが笑顔になるんだったら、私は喜んで嘘をつくよ」

誤魔化すために嘘をつく、それがわかっているはずなのに旭はいつもどおりの笑顔でそう言った。

「なんかすごいな、お前」

「すごくなんで無いよ。みんな、嘘を付く責任とか、罪悪感が怖くてしようとしただけだよ」

「その心構えがすごいって言ってるんだよ」

さも当たり前のような口調の旭を見て、素直な感想が出てしまう。毎回のことだがこいつには驚かされてばかりのような気がするな。

「さて、じゃあ私は部屋に帰ろうかな」

「そうか？　なら、部屋まで送るよ」

「そんな子供じゃないんだから大丈夫。あと、これもあの子の笑顔の為だしね」

「どういうことだ？」

「あ、いや、なんでもないよ。それじゃ！」

意味深な言葉を残して小走りで走り去っていく旭を見送った後、旭の言った言葉を思い出していた。

「仕事・・・笑顔にする・・・か・・・」

すると、後ろから足音が聞こえてくる。旭がなにか忘れたのだろう

か？

「どうした？ 忘れ物か？」

「あっ・・・」

しかし、そこにいたのは俺が予想していた旭野姿はなく、代わりにセシリアの姿があった。



「・・・」

「・・・」

俺とセシリアは二人並んで屋上のフェンスのそばに立って海を眺めながら終始無言だった。なにか話せばよかったんだろうが、なんとなくか、雰囲気の話しかけちゃいけないような気がしたのでずっと黙ったままだった。

「あ、あのさ」

しかし、この空気にいたたまれなくなった俺が口を開く。

「さつきはありがとう。セシリアが俺を庇いながら戦ってくれたんだよな」

「・・・・・・・・」

話しかけてはみたが、無言で返される。なんだかセシリアの様子が少しおかしい。

「あー、えっと・・・・」

こういう時旭がいたら空気が変わるんだろうが、さつき帰ってしまったから俺が何とかしないといけない。どんな話題がいいか色々と思案していると、セシリアが口を開いた。

「わたくしは代表候補生失格かもしれません・・・・」

「・・・・・・・・え？」

いつも自信満々のセシリアの口から思いがけない言葉が出てくる。

「奏羅さんを、何度も危険な目にあわせてしまいました・・・・。いつも、あんなに大きな事を言っておきながら、あなたを満足に守ることすら出来なかった・・・・」

セシリアの目に涙が光る。どうやら、相当思いつめてるみたいだった。

「もし、もしも、わたくしではなく、あなたが死んでいたらと思うと、わたくしは・・・・わたくしは・・・・」

「あのさ、俺は感謝してるって言ってるんだ。謝られるいわれはないぞ？」

「でも——」

「でも何も無いよ。過程がどうであっても、俺を守ってくれた事実は変わらない。結果的に俺は助かった、それはセシリアのおかげだよ」

「奏羅さん……」

「なんだ、未だ不安なのか？　なんだったら心臓の音でも聞いてみるか？」

「っ！？　け、結構です！」

顔を真っ赤にさせてそっぽ向くセシリアの様子をみて、俺は少し安堵した。なんとか慰めにはなったみたいだ。

「ん？　あれ……」

ふと海岸沿いを見ると、箒の手を引いた一夏が、鈴に追いかけられている。

「まったく、あいつらは……」

「懲りませんわね」

一夏たちの様子を見ながら、俺とセシリアは顔を見合わせて笑いあった。

「セシリア、助けてくれてありがとな」

「下々を守るのは貴族のつとめ、当然のことをしたままですわ」

第43話 君の笑顔 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

気力があればまた明日にでも更新しようかなと考えております。

ご意見ご感想をお待ちしております。

Another side story Chapter 2

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めて42%かあ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながらその女性、篠ノ之束は無邪気に微笑んだ。

鼻歌を歌いながら、今度は別のディスプレイを呼び出す。そこには白式第二形態の戦闘映像が流れていた。

「はー。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「――まるで『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を表す。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

二人は互いの方を見ない。背中を向けたままだったが、そこには相手がどんな顔をしているのか手に取るようにわかる、確かな信頼関係があった。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこへ行ったのでしょうか？」

「・・・白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん、さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしていただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれていた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。例えばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんの一歩目の機体『白騎士』と二歩目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「・・・・・・・・」

「それにしても不思議だよねえ。確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議なこともあるものだな」

それについてはわからないというのが本当のところである。それは束も同じ。

しかし、束はわからなくても問題はない。

「・・・そうだな、私もひとつたえ話をしよう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることができるとする。そこで使われるISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えるはずのないISが使える。ということになるな」

「んー？ でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前はそこまで長い間同じものに手を加える事はしないからな。それにもう一人の男子の例もある」

「えへへ。そうだよねえ」

「・・・で、どうなんだ？ とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わっていないはずなのにね」

「それは天加瀬も同様、か・・・まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「うふふ、違うないね」

「さて、とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そしてどこかのISの暴走事件だ」

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、十二カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

千冬の言葉に束は何も答えない。

「――しかし、そのデビューすらも霞んでしまうほどの衝撃的なISを、今日私は見たんだがな」

「・・・・・・」

「瞬間移動とも言える力で突如現れた福音に似た謎の無人機、ISの兵器としての定義を覆した『ブリリアント・アイリス』、そして透き通るような白い粒子を様々な形に変えて戦う『プラチナ・ヴァルキュリア』。これらについて、お前はなにか知っているのか？」

「・・・私から言えることは何も無いよ」

束は一呼吸おいて、再び口を開く。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ。私はね――」

一陣の風が強くうなりをあげる。その風の中、何かをつぶやいて・
・束は消えた。

「・・・・・・・・」

千冬は息を吐き出して木に寄りかかる。その口元から漏れる声は、
潮風に流れて消えた。



「・・・・以上が戦闘の記録」

モニターが並ぶ部屋の中、一人の少女がつぶやくように言った。

「作戦は成功だな・・・・。『ヴェルダンディ』、『スクルド』共に
まだ力を出し切れていないとはいえ覚醒したと言える」

声の主の口元が愉悦で歪む。

「でも、こちらの損害もある・・・・」

「構わないさ、所詮、『ファーレン・ゴスベル堕ちた福音』は使い捨て。搭載してある空間転移装置も一回きりの不完全なもの。『ファーレン・システム』に至っては『ニーヴェルン・システム』に遠く及ばない」

「・・・・・・・・」

「『ウルズ過去』、『ヴェルダンディ現在』、そして『スクルド未来』。神を含め、ありとあらゆる万物の運命を司る三姉妹。全知全能の神『ヴォータン』ですら逃れられなかった運命を決め、世界を破滅へと導いた存在」

「・・・・・・・・」

少女はまるで興味がないうようにその言葉を目を瞑りながら聞いている。

「神の運命すらも決定する力、いずれ我が手に――」

A n o t h e r s i d e s t o r y C a p t e r 2 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

えー、地味に伏線云々の話です。

ああ、一応ブログ更新しました。気になる方は私のマイページからお越してください。

ものすっごいどうでもいい日記書いてます。しかも短い。

ご意見ご感想をお待ちしております。

キャラ紹介 遙流華 未来

名前…遙流華 未来 （はるか みく）

以下外見イメージ

>i32262—3051<

プロフィール

日本人だが、綺麗なプラチナブロンドの髪をしているのは、クォーターであるため。

小学校の頃、奏羅と出会って以来、彼の人生に影響を与えている女の子。

奏羅と共に自らの夢である「世界一のISの操縦者になる」を叶えるため、代表候補生を目指してISの操縦について勉強、その努力の結果『GV計画』でのテストパイロットに選ばれた。

中学三年生の時、計画の集大成ともいえるIS『プラチナ』の起動実験時に物質構成粒子『エーテル・スノウ』の生成を行う『ニーヴェルン・システム』の暴走事故に巻き込まれ、彼女の肉体は『エーテル・スノウ』に分解されたが、彼女の精神、意識、記憶はプラチナのコア、コードネーム『スクルド』と一体化。

暴走事故の時、崩れ行く研究所から奏羅を脱出させると、そのまま暫くの間眠りについていた。

限定的であるが『プラチナ』を起動させたときに目覚めた状態になっており、奏羅に訪れた窮地を救っている。

福音の事件で完全に覚醒し、『プラチナ』の『ヴァルキュリア・フレーム』を使用した時のみ、もう一人のパイロットとして『プラチナ・ヴァルキュリア』の制御を行う。

『プラチナ』のワンオフ・アビリティである『ソウル・シンフォニア恋夢交響曲』は、彼

女の許可で発動している。

作者コメント

この物語の重要人物。ISと一体化した彼女が色々と今後の展開に関係してたり・・・。名前の由来は「はるかみらい」という言葉をまんま名前にしました。

キャラ紹介　リリツィア・ティナーク

名前…リリツィア・ティナーク

愛称…リリィ

以下外見イメージ

>i32261—3051<

プロフィール

奏羅の中学校時代の悪友。日本生まれのアメリカ人。

儉約家という名のドケチで、よく奏羅に難癖つけてはご飯を奢らせている。

奏羅とは当初あまり面識がなかったが、マリア・レイン博士のところで偶然に出会ったことで仲良くなった。

「IS関係の勉強が将来は安泰」と思い、専門学校に入ったが、そこで出会った現在の師であるマリア・レイン博士に憧れてこの道を選ぶことにした。

よくハッキングを使ってテスト問題を盗み見たりなど、コンピュータに関する知識は豊富。

現在は『ブリリアント・アイリス』の調整のメカニック兼マネージャーとして、旭と一緒に行動している。

作者コメント

いわゆる主人公の友達ポジション。毎回喋り方どうしようか悩んでしまう娘。あとこの子も後々関わってくる主要キャラの一人です。名前の由来は某バナーでよく見てた「リリィ」という単語が使いたいなあというのがあったのと、せっかく外国っぽい名前をつけるんだから愛称で「リリィ」がいいなと思ったから。

全体的な名前は某軽音部の部長から拝借しました。

オリジナルIS紹介その1 ※ネタバレあり

・プラチナ

IS名…プラチナ (白金)

区分…第3世代機

開発ネーム…スクールド

パーソナル・カラー…白金、浅葱

・プロファイル

3つのコアを所有していた『GV計画』の集大成として作られたIS。本来はフレーム換装をしないIS、それも第四世代機として開発されたが、暴走事故を引き起こした。その後奏羅の手で競合案であったフレーム換装システムが搭載され、第三世代機としてロールアウトされた。本来の名前は『プラチナ・ヴァルキュリア』。使用する専用装備に容量を使わず、後付武装に容量を割くことでフレームを多く登録している。フレームには空戦専用中距離型フレーム『エアリアル・フレーム』、銃撃戦専用遠距離型フレーム『シューティング・フレーム』、格闘戦専用近距離型フレーム『ストライク・フレーム』、そして性能を最大限に使用する事ができる『ヴァルキュリア・フレーム』の4つがある。

・主な武装

通常装備

可変型銃複合剣『ソニック・ブレイズ』

接近戦闘用高振動ナイフ『フェザー・ダガー』

対ビームコーティングシールド

エアリアル・フレーム

エネルギー・パイルバンカー『フラッシュ・ドライバ』

可変型ウイングスラスター『エアリアル・ウイング』

シューティング・フレーム

遠距離狙撃用ロングレンジライフル『シューティング・ブレイズ』
中々遠距離戦用レールガン『ライトニング』

ストライクフレーム

近距離用ショットガン『アヴァランチ』

対IS用大型ブレード『ストライク・ブレイズ』

ワイヤーアンカー『ハイウインド』

・プラチナ・ヴァルキリア（白金の戦乙女）

『ヴァルキリア・フレーム』を装着した、開発当初のプラチナの姿。暴走を引き起こした原因である物質構成粒子『エーテル・スノウ』の生成機関『ニーヴェルン・システム』を搭載している。武器登録が必要ではなく、『エーテル・スノウ』で操縦者の望んだ武装を自ら作り出すことができる。この特性から『プラチナ・ヴァルキリア』は第四世代型のISと区分できる。操縦者自身が武器の構造を把握していないと思い通りの武装が作り出せないという欠点もあるが、奏羅が使いこなせているのはISの開発者を目指しているという立場からの知識があるため。

・ニーヴェルン・システム

『プラチナ・ヴァルキリア』の最も重要な機関。操縦者の想い、念ともいえるものによりタービンを回してエネルギーを得るシステム

ム。そのエネルギーを『エーテル・スノウ』の生成や、機体のエネルギーとして使用している。

過去に一回暴走しており、このシステムごと奏羅の手によってヴァルキュリア・フレームとして封印されていたが、福音の事件の折に改めて使用した。その時は未来と奏羅の二人でこのシステムを制御している為、暴走することなく運用することが可能になった。

・ワンオフ・アビリティ 『恋夢交響曲』（ソウル・シンフォニア）

遙流華未来の意思でのみ使用可能なプラチナのワンオフ・アビリティ。操縦者と他の人物との意識の共有、共鳴により、ニーヴェルン・システムの性能を飛躍的に高めると共に、操縦者の未来の意識を共有させることにより選択した未来を過去にする力、いわゆる未来予知が可能である。このことから、現ISで異常なまでの命中・回避率を誇る。

『恋夢交響曲』はプラチナ・ヴァルキュリアの状態でなくても発動はできるが性能がおちる。実際、ラウラとの戦いで使用し、取り込まれた彼女の意識を取り戻した。

・コードVA 『ヴァルキュリア・ジャッジメント』

プラチナ・ヴァルキュリアの必殺技とも言える戦闘パターン。もともとはコードVAという名前のみだったが、未来により『ヴァルキュリア・ジャッジメント』と命名された。

体術と剣技による連続攻撃を叩き込んだ後、撃ち込んだ銃弾に『エーテル・スノウ』を纏わせることで剣に替え、対象を磔にし、生成した槍を突き刺し爆散させる連続攻撃。

その威力は凄まじく、エネルギーシールドを吹き飛ばすこの攻撃はまさに必殺技といえる。

・ブリリアント・アイリス

IS名…ブリリアント・アイリス（七色の輝き）

区分…該当なし

開発ネーム…ヴェルダンディ

パーソナル・カラー…山吹色、蒼穹

・プロフィール

『GV計画』の機体の一つを使い、旭の案を元に奏羅、リリイ、マリア等を含めたミッドガルズ研究所で作成したIS。兵器ではなく、アイドルのステージとして作られており、攻撃に関する武装はひとつもない。

旭いわく、このISは『INFINITE・STRATOS』ではなく『IDOL・ON・THE・STAGE』と定義されているため、ISとしての世代区分はされていない。

・主な武装

マイク

スピーカー・ビット
スポットライト・ビット
遠隔操作型機動音響機器『エンジェル・ヴォイス』

遠隔操作型機動光源『フェアリー・ライト』

投影型光学機器『ミラージュ・ヴェール』

・ワンオフ・アビリティ『栄光歌劇曲』（グローリー・オペラ）

旭の意思によって発動する『ブリリアント・アイリス』のワンオフ・アビリティ。操縦者、及び対象となった他の人物の想いを高めると共に、現在の力を極限までに引き上げ、未来へとつなげる力がある。現在の力を極限までに引き上げるので、現在の時間を引き伸ばしての高速移動もできるが、これは『ブリリアント・アイリス』のみが使用でき、なおかつ旭は今のところこれを使用しようとは思っていない。

第44話 〽それぞれの帰路〽（前書き）

みなさん、お久しぶりです。

そろそろ本気だそうと考えたらもうすぐ文化祭でした。

・・・いや、絵を描くね。てか、描かないといけないね。

え？ 話を進めろ？ すみません、頑張ります。

では本編をどうぞ。

第44話　それぞれの帰路

翌朝、朝食を終えてIS及び専用装備の撤去を行った後、俺たちはこの旅館から学園に帰るバスに乗り込んでいた。

「あゝ・・・」

隣の席で死にそうな声をあげる一夏。昨日は一時間近く追い回された挙句、旅館を抜けたことがバレて織斑先生に大目玉を食らったらしい。そのおかげで睡眠時間が三時間くらいだったらしく、その後の重労働もあっていわゆるグロッキーといった感じだ。

「すまん・・・箒、ちょっと飲み物を――」

「な、なにを見ているか!」

一夏が箒に視線を向けた瞬間、箒の顔がボツと赤くなり、いきなり一夏にチョップをしていた。どうやら飲み物をあげる気はないらしい。

（自業自得なんだろうけど・・・）

なんだかかわいそうな気がする。

「一夏、俺の飲みかけのサイダーでいいならやるけど・・・」

「おお、ありがとう奏羅! やっぱ持つべきものは友達だなあ!」

俺が飲み物を渡したその瞬間、目の前に4つの影が並び立った。

「い、一夏さん！ そんな飲みかけじゃなくてここに新品の紅茶がありますわ！ 疲れていらっしやるようですし、そんな炭酸飲料よりはリラックスできるはずですよ！ これと交換して差し上げますわね！」

「いやいや、セシリア。こっちのミネラル満点のスポーツドリンクのほうがいいよ！ それに僕サイダーちょうど飲みたいと思ってたんだ！ ほら一夏、これと交換しようよ」

「ふたりともなにを言っているか、こっちの天然水のほうがいいに決まっている。一夏、そのサイダーを私によこせ！」

「三人とも落ち着け！ ここは私の持っている日本茶をやろう。だから一夏、それは奏羅に返してやれ！」

なぜか必死な様子の四人。てか、箸はさっき飲み物をあげない素振りを見せてなかったか？

あーでもない、こーでもない四人が言い合いを続けている中、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」

俺たちは一番前の席にいたので一夏がそのまま反応した。

その女性は大体二十歳くらいで、鮮やかな金髪。格好はおしゃれなブルーのサマースーツで同じくスーツを着ている織斑先生とはまた違った雰囲気の人だった。

「君がそうなんだ。へえ……。じゃあ、君が天加瀬奏羅くんね？」
とりあえずうなずいておく。するとこの女性はサングラスを傾けると観察するように俺達を眺めてきた。

「あ、あの、あなたは・・・？」

視線に耐えられなくなったのか一夏が質問をする。

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの操縦者よ」

「え——」

予想外の言葉に一夏と俺は困惑していると、ナターシャさんはいきなり一夏の頬にキスをしていた。

「これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う」

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はい・・・」

そう言ってバスから降りるナターシャさん。一夏はそのままぼーっと手を振っていたが、俺は気になることがあって彼女の後を追いかけた。

「あ、あの！」

「何？ 君もキスして欲しかった？」

「え？ いやいやいや、そうじゃなくてですね……。あの、助けられなくてすみませんでした」

「……私は助かってるわよ？」

「いえ、『シルバリオ・ゴスペル銀の福音』を、です」

俺の言葉にナターシャさんがハツとする。そして、少し悲しそうに微笑みながら、

「ふふっ、そう言ってくれるとあの子も報われるわ。……。ありがとう」

そう言って俺の頬にキスをした。

「え、あ、えっと、どう、いたしまして……」

「……それじゃあね、天使さん。また会いましょう」

ナターシャさんを見送りながら頬に残る余韻になんとなくすぐつたい気持ちになってしまう。イカンイカンと気持ちを落ち着けながらバスに戻ると、

「……しばらく見ないうちにボロボロになったな」

「ホント、なんでだろうね……」

先程よりも死にそうになっている一夏の姿があった。



バスから降りたナターシャは目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そうやってきたのは千冬だった。

「思ったより素敵な人たちだったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。——私は、あの子に守られていましたから」

ここで言う『あの子』というのは、暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指していた。

「——やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと見を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断・・・あの子は私のために自分の世界を捨てた」

言葉が続けるナターシャは、先ほどの陽気な様子など微塵も残してはいなかった。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのISを敵に見せかけた元凶を――必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事だったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。

「・・・なにより飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？　しばらくはおとなしくしといたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

「アドバイスさ。ただのな」

『ブリュンヒルデ』と呼ばれるのが嫌いな千冬は、すこし眉を寄せながら応えた。

「――ひとつ、聞いておきたいことがある」

「なんででしょう？」

「『銀の福音』、それに兄弟機と言える似たような黒い機体はあるか？」

「・・・いえ、そんなものは存在しませんが？」

「そうか、ならいい。すまなかったな」

「そうですか。では、忠告通りおとなしくしていきましょう。・・・しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線をかわした二人は、互いの帰路に就く。

（また――）

（――いずれ）

そんな言葉が二人の背中にあつた。



日本、とある空港。様々な人が行き来する玄関口とも言える場所に、一人の女の子が降り立った。

「うん、ちょうど着いたところ。大丈夫、わかってるって」

携帯電話で話しながら、空港から出るために少女は歩を進めていく。

「もー、いつつもそればっか。大丈夫だから。うん、やることはちやんとやるよ！ わかった、わかったから。うん、切るよ。じゃあね」

半ば強引に話を終わらせて通話を切ると、少女は大きく伸びをした。

「あー、疲れたー。飛行機って座ってばっかで何も無いから嫌いなんだよねえ・・・」

タクシー乗り場に向かいながらブツブツとひとりごとをつぶやく。薄い金色に輝く綺麗な髪が、歩くたびに揺れていた。

（たくさんやることあるけど・・・まあ、まずは憂さ晴らしに――）

少女が近寄るとタクシーのドアが開く。彼女は乗り込みながら運転手に行き先を伝えた。

「すみません、ここから一番大きなゲームセンターまで！」

第44話 くそれぞれの帰路く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

あいも変わらずブログを更新しております。気になった方は私のページからどうぞ。

TOP画も加わりちょっと豪華に・・・え？ ブログが見にくい？

ご意見ご感想をお待ちしております。

第45話 〈名無しの彼女〉（前書き）

どうも、私です。

今日はじめてAGEを見ました。

「エリンがティファっぽくて可愛い」

「まあ、悪くないストーリー。拳銃じゃなくてショックガンとか子供向けな所がしっかりしてるからいいと思う」
てのが私の感想ですかね。

え？ 誰も聞いてない？ すいません。

では本編をどうぞ。

第45話　く名無しの彼女く

夏休みに入る前、日曜日の昼前のことだった。

「・・・あれ、これ財布だよな？」

俺は道端で財布を拾った。可愛らしい装飾のそれは、明らかに女の子のもの。どうしたものかと少し考えていると、

「あゝ！　それ！」

と、いきなり大声を上げてコチラに走ってくる女の子がいた。その女の子はどうやら日本人では無く、薄い金髪の髪で、青みがかった緑色の目をしていた。

「はあ、はあ、そ、それ、わ、わた」

「わ、わかったから落ち着いて！」

ぜえぜえと息をしながら今にも死にそうな彼女に財布を渡す。

「あ、あり、あ・・・と・・・ね・・・」

「う、うん・・・」

放って置くのもなんだか心配になったのでしばらく様子を見ていると、どうやら女の子は回復したらしく、ふうっとひとつため息を吐くとチラリとこちらを見た。目が合うと今までのことを思い出したのか、頬を掻きながら顔を真っ赤にしていた。

「ご、ごめんね、変なところ見せちゃって」

「え？ あ、いえ、全然謝ることではないですよ」

「ちょっと遊びに行こうと思って外に出たらお財布を落としてるんだもん、焦っちゃって」

確かに、尋常じゃない焦り具合だったのだろう。絶対に気づいたところから全力疾走したに違いない。

「あ、あのさ、君、これから予定ある？」

「いや、生活用品とか買いに行くところなんですけど・・・」

「じゃあ、時間あるね！」

「え、ちよっ、だから今から買い物に行くって——」

俺の言い分も聞かずに女の子は俺の手を取ると、街の方へと歩き始めた。わけも分からず言いなりになっている俺に彼女は、

「財布拾ってくれたお礼に、ご飯おごってあげるよ」

満面の笑みでそう言った。



「ごめんね、こんなのしかおごれないけど」

「いえ、お構いなく・・・」

流されるままについできたのは財布を拾った場所から一番近い、奇妙なピエロが目印のハンバーガーのチェーン店。女の子は何でも食べていいと言っていたのだが、普通に一番安いハンバーガーのセットにしておいた。最初は単品で頼もうとしたのだが、女の子が最低でもセットを頼みなさいと断れないオーダーを出しながら言ってきたので少しはお言葉に甘えることにした。決して脅されたわけじゃないはずだ、うん。

「じゃ、いただきますーす」

元気よく手を合わせると、女の子は自分の買った魚のハンバーガーの包みを取りかぶりついた。

「うん、おいしい！ あ、ほら、君も食べて食べて」

彼女に急かされて俺も包みを開け、食べ始める。

「やっぱり、こういうとこって一人で来るより誰かと来たほうがいいよね」

「ええ、まあ・・・」

いわゆるマシンガンのように話す彼女に日本語うまいなあとか考えながら相づちをうつ。初対面のはずなのに友達としゃべるような彼女の様子を見ていると、不思議と面倒ではなかった。

「あ、これ2つに分けてあげる」

そう言って、女の子はセットとは別に買っていたアップルパイを俺に差し出す。

「はい、あーん」

「い、いいですって！ 自分で食べれますって！」

予想外の行動に慌てた俺は、彼女の手からアップルパイを取って自分の手で食べた。

「むゝ、つれないなあ。それに敬語だし」

「いや、初めて会った人に許しもなくタメ口はちよつと・・・」

俺の態度がどうやら気に入らないらしい。もっと馴れ馴れしくするのは無茶があるような・・・。

「君、何歳？」

「えっ？ えっと、今年で16歳ですけど・・・」

「じゃあ、同い年だ！ ということで、敬語禁止ね！」

「どういふことなんですか!？」

「まだ敬語つかうんだ？　じゃあつぎ敬語使ったら痴漢として君を処理します、これ決定ね」

「そんな理不尽な・・・」

「ほらまた敬語。じゃあ早速――」

「あ、ああもう、わかった、わかったよ！　敬語使わない！　使わないからやめろって！」

「うん、よく出来ました」

そう言って嬉しそうに頭を撫でてくる女の子。ホント、財布なんて拾うんじゃないかった。



（で、なんでこうなってるんだ・・・）

気づけばまたなすがまま、俺は女の子に連れられて近くの大きなゲームセンターの中にいた。

「ふふーん、これで13連勝！　どう、すごい？」

当の本人は豆腐屋がモチーフの対戦レースゲームで無双していた。先程からICカードを作ってやりこんでいる猛者であろう人たちを、ICカードすら作っていない初めての（※本人談）プレイヤーがバツバツサと倒している。

「なんというか、すごいとかいうレベルじゃない気がする・・・」

「よし、これも飽きちゃったし次のにいこう！」

そう言ってまた俺の手を引いてその場を去る女の子。なんかすいません、ベテランの方たち・・・。

「じゃあ、次はこれにしよ。一緒にできるし」

次に彼女が選んだのはゾンビ相手にサブマシンガンをぶっ放すシューティングゲーム。彼女は2P用のコントローラを差し出すと、二人分のお金を入れた。

ゲームが始まると共に的確に銃を乱射していく彼女に対し、いつも使っているISの武器の癖でトリガーを押しっぱなしにせずに一回一回引いてしまう俺。それでも弱点とされている頭に当たってはい

「おー、すごいすごい。効率的ね」

「そりゃどうも・・・」

そうこうしているうちに最終ステージもクリアし、ゲーム内ランキング一位を見事獲得してしまった。

「やっぱ、こういうゲームって頼りになる相棒がいてこそね」

「ま、まあこれくらいなら――」

「お陰で200円で相当楽しめたし」

「お金の問題ですか・・・」

「一人じゃ対処に限界があるからね。あ、次はどうしようかな・・・」

彼女はキョロキョロとまわりを見渡すと、今度はクレーンゲームに目をつけて、またもや俺を引っ張っていく。

「このぬいぐるみほしいなあ・・・よし！」

そう言ってお金を突っ込んでクレーンを動かすが、なかなか動かない。

「ん、難しいなあ・・・」

「クレーンゲームは得意じゃないのか？」

「うん、いまいちコツが分からないんだよね・・・」

そう言ってまたお金をつぎ込んでいく。このままだと散財するな、この子。

「まず端っこの方を引っ掛けてみたらいいんじゃないか？」

「え？　こう？」

女の子は俺のアドバイス通りにアームを動かすと、ぬいぐるみに引っ掛ける。そのぬいぐるみは先程よりも大きく動いた。

「で、真ん中の方を押してみて」

「えっと、真ん中・・・あ！」

アームに押されてぬいぐるみを取り出し口へと落ちる。

「やった、すごいすごい！」

手を叩いて喜ぶ女の子を見ると、俺はなんだかとても微笑ましい気分になった。



最後にひとつだけ、彼女がついてきて欲しいといった場所に俺たちは向かっていた。俺もここまで来たなら最期まで付きあおうと決心して彼女についていった。

「よ・・・っと」

「ちよつ、危ないって!？」

「へーき、へーき」

女の子は俺にぬいぐるみの入った袋を持たせたまま、先程から白線の上だけを歩いている。小学校の頃よくやった覚えがあるな、白線の上だけを歩く遊び。

「で、ついてきて欲しいところって？」

「えーっとね、もうすぐ階段が――ひゃっ!？」

「え!？」

その時、俺に話しかけるために後ろを向いた女の子がよろけた。白線の上だけ歩いていたのでバランスが崩れたのだ。

俺はとっさに手をつかんで引き寄せて、なんとか転ぶ前に女の子を受け止めた。

「はぁ、ギリギリだった。だから危な・・・って・・・」

腕の中にいる女の子に今更ながらドキツとする。お互いの顔の距離は約20cm――って、なんで冷静に距離なんて考えてんだ。

「い、ごめん・・・」

「う、ううん。ありがと・・・」

とっさに離れるが、気まずい雰囲気になってしまった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い一言も喋らずに歩いて行くと、

「あ、こ、ここだよ、ここ」

彼女が指さしたのは、丘の上にある公園に行く階段だった。



「ふぁゝ、風がきもちいいゝ」

公園につくと、俺たちは展望台のフェンスから丘の下に広がる街を眺めていた。

「ここ、お気に入りなんだ。街を探検しながら歩き回ってたら見つけたの」

そう言って嬉しそうに話す女の子。確かに、ここから眺める光景はなにか心に来るものがある。

「・・・今日はありがとう。楽しかったよ」

「え？」

突然、彼女が真剣な顔になる。

「わたしさ、ここに来てそんなに立ってないから、知り合いとか、友達とかいなくて寂しかったの。家族もないしね」

「えっと・・・それって・・・」

「え？ ああ、そういうんじゃないよ、一人暮らしってだけ」

「そ、そうか。ならよかった」

でも、一人暮らしとかやっぱ大変だよな。俺自身一人暮らしだったからわかるけど。

「それにしても君、変な人だね」

「へ？」

「だって、見ず知らずの私にここまで付き合ってくれるなんて、よっぽどの変人よ」

「それって、褒めてられてるのか、褒められていないのか・・・」

「さあ、どっちかな？」

からかうように微笑む女の子。その時、午後6時を告げる音楽が公園に流れ始める。

「あ・・・悪い、俺行かないと」

「門限？」

「寮生活だからな。結構厳しいんだ」

「じゃあ急がないといけないね」

「ああ。じゃあ、俺も今日は楽しかったよ！」

「ま、待って！」

慌ててかけ出そうとした俺の手を取ると、彼女は紙を握らせた。

「これ、メールアドレスが書いてあるから・・・ご飯食べてた時に書いたの」

紙を見ると、いかにも女の子な感じの字でアドレスが書いてあった。

「8月は忙しくて遊べないけど、9月に入ったら落ち着くから・・・また、一緒に出かけてくれる・・・？」

「わかった、また一緒に遊ぼう」

「約束だよ？」

「うん・・・って、まずい！　じゃ、じゃあまた！」

「うん、またね・・・約束だよ！」

帰り道を急ぐ俺に彼女は大声で言った。俺はそれに手を振って応える。

（あれ・・・、そういえば・・・）

階段を下りながら一つ重要なことに気がついた。

「あの子の名前、聞いてなかったな・・・」

第45話　く名無しの彼女く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

気づいたらアクセス数、PVとかユニークとかが結構な数字になっておりました。これも皆様のお陰です。てことで記念にイラストを書いて見ました。

>i33104—3051<

えー、リっちゃ（ryすいません、リリイです。

これからも頑張って行きますので、皆様よろしくお願いします。

さて、私のブログを見た方はわかると思うんですが、最近Twitterを始めました。

私をフォローしてやろうという方はマイページにはっつけてあるブログからリンクをたどってください。

目印はゆっこです。

あと、ブログも地味に更新中ですので読んでいってください。

ええ、以上はあとがきでも何でもない　宣伝　ですね、すいませんでした。

ご意見ご感想をおまちしております。

では本編をどうぞ。

第45. 5話 くとある作者のストレス発散く

ものすごい轟音と共にあたりに煙が舞い上がる。強大な力を持つ化物、その攻撃により、あたり一面焼け野原と化していた。

「あやや、大丈夫ですか？」

「・・・間一髪だな、助かった」

烏天狗の少女に抱えられた青年が礼を言うと、少女は「いえいえ」と言って青年を地上へと下ろした。

「一緒にいたら危ないぞ。今のうちにここを離れて――」

「いやです、離れません！」

青年の申し出を、少女は一切受け入れようとはしなかった。

「面白い新聞を書こうとヴァルさんにくっついてきて、ここまで10以上の世界と一緒に旅してきたんです。最後まで付き合いますよ」

「ふっ、言ったな。じゃあ、絶対に離れるなよ」

「はい！」

ヴァルの言葉に少女は元気よく頷いた。

『なぜだ・・・なぜ――』

「――そうまでして戦える、かい？」

『貴様……』

そこへ銃を持った青年が現れ、彼らの横へと並ぶ。

「カイル……お前……」

「君の物語は僕の物語でもあるんだ」

カイルはそう言って微笑んだ。

『圧倒的な力の差！ 他の世界の仲間もない！ しかし、なぜ貴様らは希望を失わない！』

「諦めませんよ！ たとえカメラや写真が失われたって！」

「僕たちの中には、世界を旅した記憶と！」

「あいつらとの、絆がある！」

その時だった。空間が歪み、世界をつなぐ扉が現れ、そこから9つの影が飛び出してきた。

「助けに来てあげたわよ。あとでお賽銭をたんまりいただくから覚悟しなさい」

「大丈夫ですか？」

敵の力によって世界の扉は閉ざされていた。しかし、再び世界がつ

ながり仲間が現れたことにヴァルは驚いていた。

「お前ら・・・なんで・・・？」

「あなたにはあの子を救う手伝いをしてもらった。ただそれだけの理由よ、ヴァリエル・ガーラント」

「私は、あなたが友達だから、だよ」

そう、それは世界を超えた絆――

「相棒を助けてもらった、その借りを今返させてくれ」

「僕も頑張るのです！」

「さって、覚悟するんだぜ化物！」

「ぼっこぼこにして、ローラーで潰してやるから！」

「アンタ強そうだね。俺と勝負してよ」

ヴァルが世界を旅し、共に戦った仲間達だった。

『理解出来ない・・・一体貴様らなんだというのだ！？』

その言葉を聞き、ヴァルが笑う。

「覚えておけ。俺は・・・俺達はただの通りすがり。通りすがりのお前の敵だ！」

最初は受け売りだった。でも、幾度の世界でこの言葉を言うに連れ、自然と自分の言葉になっていた。共に乗り越えてきた仲間によって

「行くわよみんな！」

それぞれが力を合わせ巨大な敵へと向かっていく。しかし相手の防御力に加え、サイズの違いがあり決定的なダメージが与えられない。そこへ広範囲を薙ぎ払う攻撃により、全員が吹き飛ばされてしまった。

『思いしったであろう！ 貴様らではこの世界を救うことすらできないと！』

12人の攻撃ですら敵に傷つけることのできない。それでも、諦めるものはいなかった。

『おいヴァル、ここで諦めるタマじゃないよな』

世界の狭間にいる青年がヴァルへと声をかける。

「ああ！ まだこの物語を・・・俺の物語を終わらせはしない！」

『なら、今こそ俺と、俺の仲間たち10人の力をお前に貸してやる。受け取れ！』

その言葉にヴァルが手をかざすと、10枚のカードが集まり一つのカードを創り出した。そしてそれをヴァルは持っていたツールへと差し込む。その瞬間、集まった9人の仲間の前に光り輝くカードが現れた。

『完璧なる超越――』
パーフェクト・ハイパー

『永遠の輝き――』
エターナル・シャイニング

『加速する咆哮――』
アクセル・ブラスター

『聖域の守護者――』
ガーディアン・アームド

『最後の勝利者――』
ラスト・サヴァイヴ

『決闘の王者――』
デュエル・キング

『究極昇陽――』
ライジング・アルティメット

『侍の血統――』
クール・エンペラー

『最大最高潮――』
スーパードライマックス

それぞれに仲間の最強の姿が描かれたカードの力が解放されていく。

『FINAL KAMEN RIDE DECADE――』
ワールド・コンプリート物語を繋ぐもの――』

ツールは歴史刻む大剣へと変わり、それをヴァルは振りかざした。
ヒストリー・プレート
それと同時に仲間たちの姿もカードに描かれた姿へと変わっていく。

『さあ、行け!』

その声と同時に全員が最大攻撃の体勢へと入る。

「みんな、終わらせるぞ！」

——『FINAL ATTACK RIDE DECADE | DIMENSION SLASH』

「あなたの取材はここまでにさせてもらいますよ」

——『幻想風靡』

「君の物語はここで終了さ」

——『FINAL ATTACK RIDE DEEND | DIMENSION SHOOT』

「痛いわよ、覚悟しなさい」

——『夢想天生・極陽』

「せめて安らかな眠りを・・・」

——『シャイニング・エクスカリバー』

「あの子が望んだ世界、それを守るためにも・・・」

——『エンドレス・サヴァイヴ』

「私の友達を・・・守る！」

——『ブラスター・ザンバーブレイカー』

「貴様の歴史もここまでだ！」

——『キング・オブ・バーニング』

「鬼の力、とくと思ひしれ・・・」

——『アームド・レクイエム』

「これで塵になるといいぜ！」

——『ハイパー・ファイナルマスタースパーク』

「あたしの、あたしたちの必殺技！」

——『クライマックス・ステージ』

「This is final shot・・・」

——『エンペラー・ドライブ』

全員の一齐攻撃が敵を貫く。しかし、その凄まじい威力を食らいながら、それでもなお敵は形を保っていた。

『まだだ・・・まだ・・・貴様らの物語は——』

「——そう、俺たちの物語は・・・ここから始まるんだ！」

ヴァルの叫びと共に10人が一齐に地を蹴る。一步目で爆発的に加速し、二歩目で摩擦熱で赤熱、三歩目で音速を超え、四歩目で地を

蹴^{げき}る意味を失う、彼らに力を与えた者たちの最大・最速・最強の
蹴^い。_ち

――『FINAL ATTACK RIDE DECADE
COMPLTE OF THE WORLD――』――
――DE



「いやー、なかなか面白かったなあ。奏羅もそう思うだろう？」

映画館からでた一夏が満足したように笑った。

「元ネタが二次創作だったからどうかと思ってたけど、案外悪くなかったな」

俺たちは夏休みということで映画館に来ていた。今回旭がこの映画の主題歌を歌っているとのことで、アイツからチケットが送られてきたのだ。まあご丁寧に六枚も。

ちなみに今回映画に来たのは帰国したセシリアを除く六人。あれ、なんでチケットの数あってるんだ？

「へー、これ二次創作だったんだ」

シャルが興味津々とばかりに聞いてくる。

「ああ、それに目をつけた元々の話の監督が映画化させたらしい」

「それはすごいですね・・・」

確かにシャルの言うとおり、二次創作なのに映画化するのはすごいよなあ。てか、なんで映画化したんだろう。気の迷いかな。

「しかし、日本の映像技術のレベルはすごいな。私は映画自体初体験だが、思わず見入ってしまったぞ」

「映像技術は日本の誇れる文化の一つだからな」

「じゃあ他の映画もすごいのか……。奏羅、今度また連れてきてくれ」

「えっ!？　　ぼ、僕も行っていかな?」

「ああ、いいよ。時間があれば――」

「では奏羅、明日いこう」

「え!?」

どうやらこのままだと夏休みが映画で消費されそうな気がしてきた・
・。

「まったく騒がしいわね、アイツら。・・・いや、あたしも同類みたいなものか。それにしても箒はどうしたのよ?」

そういえばさっきから箒が少しぼーっとしている。

「おい、箒どうしたんだ?」

一夏が箒に話しかけると、はっと我に返ってこう言った。

「一夏。私、飛び蹴りの練習しようと思う」

「え？ まあ、いいんじゃないか？」

「手伝ってくれ！」

「お、おう」

あとから聞いた話だが、その時みんな思っていたことは同じだったようだ。

（あ、これって）

（多分、的にされる・・・）

（かわいそうな一夏・・・）

（私もしょうかな・・・？）

その日、剣道場で一夏の悲鳴が響いたのは言うまでもない。それと、

（とっても・・・面白かった・・・）

映画に来ていた彼女とあうのはまだ先の話である。

第45・5話　くある作者のストレス発散く（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

さて、このキチ○イについてこれた方はさすがですね。

このネタは、わかる人にはわかると思いますが仮面ライダーです。二次創作でこの恋夢交響曲を考える結構前から考えてたやつですけど、なんか文章にしづらいというか絵にしづらいというかなんと言うか、そういう理由でやってかったのでこういった感じで文章にして、

非常に自己満足しました。

ちなみにディケイドっぽい人とディエンドっぽい人は中学のそれも二年生の頃考えたオリジナルキャラです。今更だけど使ってみました。

他の登場人物はみんな版權キャラです。しかも有名だともいます。さて、何人わかるかな？

すみません、はしぎすぎしました。もう二度としません。ゆるしてくださいごめんなさい。

ご意見ご感想・・・お待ちしているのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6201s/>

IS -インフィニット・ストラトス- 恋夢交響曲

2011年10月20日04時09分発行